

建築と社会

Architecture and Society



特集 第73回 青年技術者

2026 07

vol.107 No.1252

日本建築協会

一般社団法人日本建築協会

◆ 一般社団法人日本建築協会の概要

日本建築協会は、大正6年（1917）3月に、関西財界の重鎮でもあった建築家片岡安氏主唱のもとに創立され、建設省所管の公益法人の中では最古の歴史をもっている団体であり、建築設計事務所、建設業をはじめ建築材料、建築設備、機器メーカー、官公庁・教育機関等建築関係の各分野から参加する幅広い会員の連携協力によって、建築に関する学術、技術、事業の進歩発展を図るとともに、建築を通じて『広く社会に貢献すること』を目的としている一般社団法人です。

【個人会員】 693名（2026年4月30日現在）

【団体会員】 232社（下記（同上））

● 設計事務所

㈱IAO 竹田設計
㈱市浦ハウジング&プランニング
㈱伊藤建築設計事務所
㈱浦辺設計
㈱エム・ケイ設計事務所
㈱小笠原設計
関西ビジネスインフォメーション㈱ KBI 計画・設計事務所
㈱KIREI
㈱教育施設研究所大阪事務所
㈱久米設計 大阪支店
㈱佐藤総合計画 関西オフィス
ジェイアール西日本コンサルタンツ㈱
㈱昭和設計
㈱総合設備コンサルタント 大阪事務所
㈱双星設計
㈱大建設
㈱地域計画建築研究所 大阪事務所
東西建築サービス㈱
㈱東畑建築事務所
㈱東畑建築事務所 名古屋オフィス
㈱十方設計
㈱内藤建築事務所
㈱日建設
㈱日建設 名古屋オフィス
㈱日積サーベイ
㈱日本設計 関西支店
㈱ニュージェック
阪急設計コンサルタント㈱
㈱Bright
有松村構造計画
㈱三菱地所設計 関西支店
㈱安井建築設計事務所

● 建設会社

アイサワ工業㈱
㈱浅沼組
㈱新井組
㈱安藤・間 大阪支店
㈱安藤・間 名古屋支店
㈱大林組 大阪本店
㈱大林組 名古屋支店
㈱大林組 広島支店
㈱奥村組
㈱笠谷工務店
鹿島建設㈱関西支店
㈱金山工務店
㈱KANSO テクノス
㈱熊谷組 関西支店
㈱熊谷組 名古屋支店
㈱鴻池組
㈱鴻池組 名古屋支店
コーナン建設㈱
五洋建設㈱大阪支店
清水建設㈱関西支店
清水建設㈱広島支店
下岸建設㈱
正田建設㈱
大成建設㈱関西支店
大鉄工業㈱
大和ハウス工業㈱
㈱竹中工務店
㈱竹中工務店 名古屋支店
田中建設㈱
㈱千代田組 中部支店
鉄建建設㈱大阪支店
東急建設㈱関西支店
戸田建設㈱大阪支店
戸田建設㈱名古屋支店
㈱中道組
㈱中村組 名古屋支店
生川建設㈱
南海辰村建設㈱
西松建設㈱西日本支社
日愛工業㈱
㈱日東建設
野村建設工業㈱
藤井建設㈱
㈱藤木工務店
㈱フジタ 広島支店
藤原工業㈱
前田建設工業㈱関西支店
㈱増岡組
㈱松村組

三井住友建設㈱
望月建設㈱
山岡建設㈱

● 設備工事会社

㈱朝日工業社 大阪支店
㈱朝日工業社 名古屋支店
浅海電気㈱
㈱大阪城口研究所
川北電気工業㈱
㈱クラフティア 関西支店
㈱きんでん
㈱きんでん 京都支店
㈱きんでん 神戸支店
㈱きんでん 中部支店
栗原工業㈱
栗原工業㈱中国支店
三機工業㈱関西支店
㈱三晃空調
三宝電機㈱
山陽工業㈱
三和電気土木工事㈱
新日本空調㈱大阪支店
須賀工業㈱
須賀工業㈱名古屋支店
住友建設㈱
㈱精研
大成温調㈱大阪支店
タイタン㈱
高砂熱学工業㈱大阪支店
㈱中電工
朝陽電気㈱
㈱テクノ菱和 大阪支店
東光電気工事㈱関西支店
㈱トーエネック 大阪本部
日本電設工業㈱大阪支店
野里電気工業㈱
不二熱学工業㈱
㈱前田商会
八千代電設工業㈱

● その他工事会社

植彌加藤造園㈱
有エイチ・アール
㈱サンゼオン
東洋テクノ㈱大阪支店
ネオライフ㈱
㈱ハーテック
浜宗産業㈱
丸五基礎工業㈱
㈱マルホウ
㈱安井奎工務店

● メーカー

アイカ工業㈱
アーキヤマデ㈱
アイエム㈱
㈱アクアテック
アズビル㈱ビルシステムカンパニー関西支社
アスワン㈱
㈱イトーキ
㈱イトーキ 中日本支社
㈱内田洋行
エスケー化研㈱
王建工業㈱
オーケーレックス㈱
大塚オーミ陶業㈱
㈱オカムラ 市場開発部
ガムスター㈱
㈱川島織物セルコン
元旦ビューティ工業㈱
キムラ硝子建材㈱
㈱クトクコーポレーション
㈱国代耐火工業所
コクヨマーケティング㈱中部支店
小松ウォール工業㈱ 名古屋支店
DAIKEN ㈱
三協立山㈱三協アルミ社 東海ビル建材支店
㈱サンゲツ 西日本ビジネスユニット
サンセイ㈱
㈱山陽瓦
三和シャッター工業㈱ 中部・関西営業推進部
大建工業㈱ 開発営業部
太陽工業㈱

◆ 会員の特典

- ・協会誌「建築と社会」、1917年（大正6年）から100年以上継続している月刊誌をお送りします。またすべてのバックナンバー（アーカイブ資料）がWEBで閲覧できます。
- ・協会誌「建築と社会」にproject、研究報告、レポート、ニュース等を投稿できます。
- ・話題の建築物、一般には非公開の施設の見学会や、著名な講師の講演会・講習会に優先的に会員価格でご参加いただけます。
- ・建築関連の優れた業績を挙げた青年技術者(35歳以下)の顕彰事業に応募できます。
- ・技能の向上、研鑽はもとより、情報交換・社外交流の場としてご利用いただけます。

太陽工業㈱ 名古屋支店
タキヤ㈱
田島ルーフィング㈱大阪支店
辰馬商建㈱
Dassogroup
電気硝子建材㈱
東芝エレベータ㈱中部支店
東リ㈱西日本営業開発部
TOTO ㈱
TOTO ㈱中部支店
豊島㈱
ナブコドア㈱
㈱ナルックス
日新工業㈱ 大阪支店
パナソニック㈱ エレクトリック・システム・ライティング 事業部 大阪エンジニアリング 部
㈱日立ビルシステム 中部支店
日之出水道機器㈱
㈱平田タイル
フジモリ産業㈱建材事業部西日本営業統括部
文化シャッター㈱関西支店
三菱電機ビルソリューションズ㈱関西支店
美和ロック㈱中部支店
森村金属㈱
八木惣㈱
㈱ユニオン
㈱LIXIL
YKK AP ㈱
YKK AP ㈱ 中部支店

● 教育関係

明石工業高等専門学校
足利大学附属高等学校
大阪工業技術専門学校
大阪大学 大学院工学研究科（建築都市計画論領域）
大阪大学 大学院工学研究科（建築都市人間工学領域）
学校法人大牟田学園大牟田高等学校
岡山科学技術専門学校
開新高等学校
京都建築専門学校
京都市立京都工芸専門学校
㈱建築資料研究社（日建学院）
修成建設専門学校
学校法人常翔学園常翔歴史館
摂南大学図書館
㈱総合資格 関西本部
㈱総合資格 広島支店
学校法人中央工学校 中央工学校 OSAKA
東海工業専門学校金山校
学校法人江崎学園 北陵高等学校
日本工業大学 建築学部 建築学科
福岡大学工学部 建築学科

● その他団体等

（一社）大阪電業協会
大阪府建築家協同組合
（公財）大阪府都市整備推進センター
京都府建築工業協同組合
（一財）住総研
（独）都市再生機構 西日本支社
西日本建設業保証㈱
（一社）日本建築材料協会
（一財）日本建築総合試験所

● その他

㈱アスウェル
㈱エスエス 名古屋支店
大阪ガス㈱
㈱カワサキライフコーポレーション
関西電力㈱土木建築室
関電不動産開発㈱
㈱シフタニ
ダイビル㈱
日刊建設工業新聞社
㈱日刊建設通信新聞社関西支店
日新工業㈱大阪支店
日本E R I ㈱
阪和興業㈱
ヒロセ㈱大阪本店
㈱マイダスアイティジャパン
名鉄協商㈱
㈱プラネット
㈱ヤマナ
有柳々堂



建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2026 07

Vol.107 No.1252

■特集予告

- 8月号/時を紡ぎ価値を編む再生建物の現在地
- 9月号/受け継ぎ、つなぎ、未来へ引き継ぐ

ひと・まち・建築

gallery

14



471 670
構造の頁 法令コーナー
71 72

ご意見ご要望は
こちらから



2026年度 年間特集テーマ「再生」

特集 第73回 青年技術者

22

■設計・計画部門

赤池 伸吉	●岩谷産業研修施設 (-2023)/ヒロセ関西工場 (-2021)	24
浅沼 拓也	●みとら京都・大正大学京都アカデミア/パークタワー あすと長町	25
石川 真吾	●OKI本庄工場H1棟 地域と共にあり続ける工場/ KINOSHITA Fe26 木下工業株式会社新工場・新事務棟/サーパス工業㈱ PLOJECT BLOOM	26
市川 雅也	●茨木市文化・子育て複合施設 おにクル/武庫川女子大学公記記念館/ 神戸学院大学有瀬キャンパス1号館	27
大屋 泰輝	●大林組 大阪本店/忍ヶ丘の家 改修	28
影山 真平	●東京避雷針工業 横浜支店/大阪避雷針工業 広島支店/ NEI IKEBUKURO/MARO OMOTESANDO ONE	29
笠井 洗	●東海理化 音羽寮・体育館 一 企業と地域、みんなでシェアする社員寮	30
金井田雄介	●龍谷大学 大宮キャンパス 東翼/淀屋橋ゲートタワー/	31
倉知 寛之	●文教大学東京あだちキャンパス/日本建築協会事務所改修	32
坂井 章	●JR三ノ宮新駅ビル/仙台中央卸売市場再整備基本計画	33
境 祥平	●世界水泳選手権2023福岡大会/世界マスターズ水泳選手権2023九州大会会場整備/ 大分県宮野野住宅建替事業	34
銭亀 夏彦	●豊田市若園交流館・豊田市立若園中学校技術科棟/ 大阪公立大学イノベーションアカデミースマートエネルギー棟/ 名古屋大学オウム工作機械工学館/高浜町地域福祉総合センターいぶき	35
滝口 恵美	●コンドレック大阪本ビル/天王寺動物園 ペンギンパーク&アシカワーフ/ (旧姓 久保田) 守口市立寺方南小学校/京都府立井手やまぶき支援学校/小平市新ごみ処理施設	36
中原 大貴	●象印ユーザーサービス本社/ヤンマーシナジーズスクエア/ダイハツ工業(株)岡京	37
浪川 稜馬	●岐阜県 本巣市庁舎/千葉県 印西市複合施設 PFI	38
畑 雄人	●兵神装備株式会社 横浜プロモーションセンター/多治見警察署 (本庁舎)	39
花岡 航	●2025年日本国際博覧会 GW (グリーンワールド) 工区	40
廣澤 克典	●関西将棋会館/EMITS	41
古田 大介	●神戸旧居留地91番館/大阪国際大学中学校高等学校/ 西脇カントリークラブ クラブハウス 改修	42
法山 千穂	●協和キリン株式会社宇都工部工場 新管理棟/ 広島駅 南口ビル (ホテルグランヴィア広島サウスゲート)	43
南 明日香	●須磨海浜水族園・海浜公園再整備事業/名古屋瑞穂公園園上競技場等事業/ 当社活用計画 (計画中)	44
吉井 大貴	●健都イノベーションパークNKビル/能勢町旧庁舎周辺整備基本計画	45
■構造部門		
岡 遼悟	●鉄と膜による比類なき造形一飯田グループホールディングス×大阪公立大学共同出展館一	46
北村 和哉	●KBM治験薬棟	47
悠矢 悠矢	●名古屋国際展示場第1展示館 (愛称: ポートメッセなごや)	48
野田 友輝	●クリエイティブな空間を生む構造デザイン一大阪府立水都国際中学校・高等学校一	49
濱田 幸崇	●N-FOREST新築工事 一作る人の安心を形にする一	50
藤田 尚大	●京都の裾野に連なる和風建築群一山荘 京大和・パーク ハイアット 京都一/ 鉄の魅力を追求した新たなオフィス一IHインフラスクエア堺新事務所一	51
古田 馨梨	●大地震に耐える免震構造の地域病院一富田林病院一	52
的場 弘晃	●近畿大学おおさかメディカルキャンパス 診療棟 一災害拠点病院の構造設計一	53
和田 拓也	●御堂筋の玄関口に建つオフィスビルの構造設計一淀屋橋ゲートタワー一	54
■設備部門		
青木 一晃	●浜松いわた信用金庫本部・本店 「省エネ」「ウェルネスオフィス」「SDGs」及び 「BCP」に配慮した先進的建築・設備計画	55
井上 友理	●某製薬工場 工場棟の設備計画 一品質確保と機能性の両立を目指して一/ 東京農業大学 農大サイエンスポートにおける設備計画	56
添原 洋平	●某工場新築工事への取り組み	57
田中 健資	●病院機能を継続しながらの大規模改修 一筑波大学附属病院病棟B免震レトロフィット他設備全面改修一	58
多良 俊宏	●Kurita Innovation Hub 既存の研究所にとわれない空間構成と確実な安全性の両立	59
昂平	●2025年日本国際博覧会パビリオン バナソニックグループ「ノモの国」 一 正解のないパビリオン建築 一	60
三原 裕貴	●スケルトンで竣工する工場新築における将来実装を見据えた設備計画の立案	61
村上奈々子	●大阪けいさつ病院における設備計画	62
安井 洋之	●nonowa国立SOUTH 一共創によるものづくりの実践一	63
山形 弥里	●2025年大阪・関西万博 大屋根リングにおける照明計画/ 飯田グループ×大阪公立大学共同出展館の照明計画	64
■施工部門		
岡本 大地	●狭隘敷地におけるSRC造躯体と天然木外装仕上げの施工計画	65
金田 成晃	●同志社大学今出川校地新図書館建設工事における挑戦と成果	66
品川翔一郎	●複合スポーツ施設におけるアリーナ大空間の構築	67
瀬下 寛史	●サイトPCa化工法による生産性向上の実現・点群モデルを活用した 新たな施工管理手法の実践	68
西尾 萌	●業務効率化とICTツール導入への挑戦	69

project	帝国ホテル 京都 (旧弥栄会館)	2
gallery	空間と会話する●大井田茂夫	14
会告	未来創生プロジェクト 2040委員会 第4回オープン委員会 東海支部主催 海外視察『シンガポール・クアラルンプールの建築をめぐる旅』	15
	第45回大阪都市景観建築賞 (愛称 大阪まちなみ賞) 募集要項	16
	『建築と社会』2027年2月号『第33回 会員特集』原稿募集中	17
	2026年度 第72回工高生デザインコンクール設計課題『「はじまり」を灯す空間一いのちを迎え、共に育む「建築」の器』	18
	第10回日本建築協会論考コンクール 片岡安賞 募集要項	19
追悼	本多友常さんを悼む●中井 進	20
構造の頁	カーボンニュートラルを表現した構造計画 一岩谷産業神戸研究所一●薬科 誠	21
法令コーナー	弥栄会館から帝国ホテルへ 一祇園町南側のまちなみの継承一●糸織円路	71
	同時代の「建築と社会」 大林組設計部 プレモダンの群像 一「おおばやしむら」と大林組本店ビル西館 ●石田潤一郎	72
	大林組設計部の歴史と実績を巡って 本店ビル西館で試された新時代の建築部材と工法	74
建築と社会を考える	まちとまちなみの公共性一眺めながら考える●佐々木葉	78
再読 関西の建築	大阪市長公館 (現 ザ・ガーデンオリエンタル・大阪) ●山形政昭	80
Member's Forum	CCCフォーラム主催 第12回青年技術者交流会レポート	82
information	版画家レムブラント 挑戦、継承、インパクト/フォンタネーグーイ タリアの光・心の風景/ジブリパーク展/特別展「ゴルドマンコレクション 河鍋晩斎の世界」	86
	招待券 プレゼント!	90
月間の動き	2026年 5月	98
		100

記憶の継承

祇園甲部歌舞練場に隣接する弥栄会館は、1936年に竣工した劇場で、国の登録有形文化財である。今回、外壁および躯体の一部を保存しつつ増改築を行い、ラグジュアリーホテルとして再構築することで保存・活用が図られた。計画開始から8年余りを経て、本年春にホテルとして再生を遂げた。

〔大林組・意匠設計〕

井上雅祐（いのうえ まさひろ）
伊藤直幸（いとう なおゆき）
林 明（はやし あきら）
岩垂 誠（いわだれ まこと）
堀池隆弥（ほりいけ たかや）
糸嶺円路（いとみね えんじ）



1998年神戸大学
自然科学研究科建設
学修了/同新井
組入社/2008年大
林組入社/現在同
社設計本部エクス
パート

藤枝大樹（ふじえだ たいぎ）



2018年名古屋大学
大学院環境学研究
科修了/同年大林組
入社/現在同社建築
設計部主任（伝統
建築・ヘリテージプ
ロジェクトチーム兼
務）

〔大林組・構造設計〕

藤井彰人（ふじい あきひと）
野口梯子（のぐち ていこ）



2009年Durham
University, Master
of Engineering課
程修了/2010年大
林組入社/2016～
2017年タイ大林出
向/現在大林組構
造設計部エクス
パート

〔大林組・施工〕

芝田徹司（しばた てつじ）



2010年関西大学工
学部建築学科卒業
/同年大林組入社/
現在同社京都支店
工事部工事課長

〔新素材研究所〕

榎田倫之（さかきだ ともゆき）

帝国ホテル 京都（旧弥栄会館）

建 築 主 帝国ホテル
設計・監理 大林組、榎田倫之、新素材研究所（内装設計）
施 工 大林組

所 在 地 京都市東山区
敷地面積 3,623㎡
建築面積 1,904㎡
延床面積 10,407㎡
構 造 RC造 一部SRC造及びS造
規 模 地上7階、地下2階、塔屋1階
工 期 2022年4月～2025年12月
撮 影 森 政俊



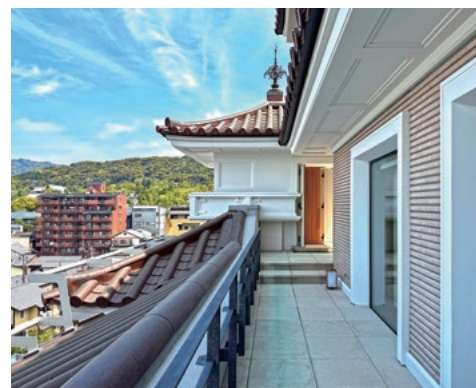
付加したエントランス底上裏意匠は劇場上部の麻の葉文様を踏襲。



1F宿泊者ラウンジ



南立面（1936年）。劇場の為開口部は少ない。



6F客室バルコニー



南西側夜景。祇園町の色温度や照度に馴染ませつつ、弥栄会館の特徴的な
庇の連なりが美しくライトアップされるよう計画した。



3Fバルコニー

躯体と外壁が保存される南西面は特徴的な弥栄会館の意匠を象徴するため、元の姿を継承することを念頭に、保存、復原、変更、付加の在り方を模索した。タイルやレリーフは可能な限り再利用を行い、窓が少ない劇場部外壁にはホテル客室のための新たな開口を、玄関にはホテルに相応しい構えを付加した。経年で失われた煙突屋根や西面装飾バルコニーは忠実に復原し創建時の姿を取戻した。

裏方意匠かつ、劇場のボリュームを内包していた北東面は、一旦解体の上、記憶の継承を念頭にシルエットやタイル貼り外壁を復元した。北面は新たに祇園の町と対峙することになるため、外側にガラスカーテンウォールを付加し、祇園町との緩衝空間とすると同時に“客室の縁側空間”として設える事で、ホテルとしての弥栄会館と町との新たな関係を生み出した。

設計施工延べ8年をかけ、長らく地域に親しまれてきた風景を後世に引き継ぐことが実現した。これらの努力が認められ弥栄会館は文化財登録が継続されることとなった。

(糸嶺円路、藤枝大樹／大林組)



3Fコーナー客室

本計画は既存躯体を一部保存する「残す解体」であり、解体工事最大の難点であった。工事中に大地震が来ても倒壊しない状態を常に保ちながら解体を進めるため、構造設計者と密に連携を取り合いながら仮設補強を状況に合わせて施し安全性を確保した。外装材の既存再利用についてはタイル、テラコッタタイル、建具枠などを生け取りし、再利用するための工法決定にあたり様々な試験施工を実施しながら進めた。

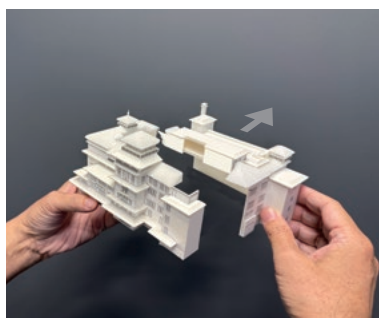
増築エリアにおいては、既存庇の形状を復元するため細かな装飾形状を成形する必要があり、高精度な形状確保と工程遅延回避のためPC化を図った。解体工事の進捗に合わせて実施した事前調査により、既存屋根下地鉄骨を再利用可能と判断出来た範囲においてはGRCを採用し、既存庇を精度良く再現した。

(芝田徹司／大林組)



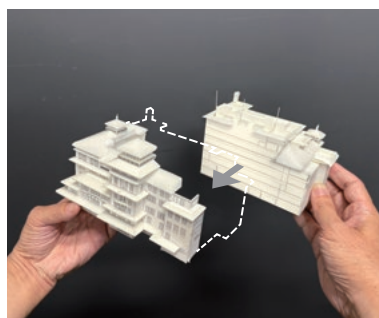
1936-2019

弥栄会館（劇場）



2019-2022

保存・解体



2022-2025

躯体補強・復原・更新・付加



2025-

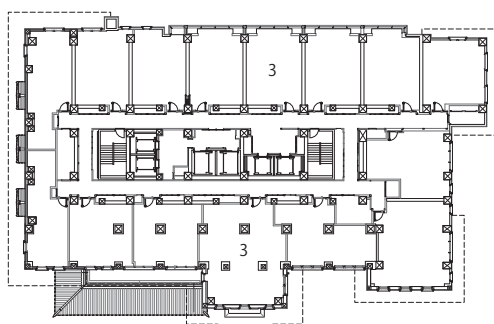
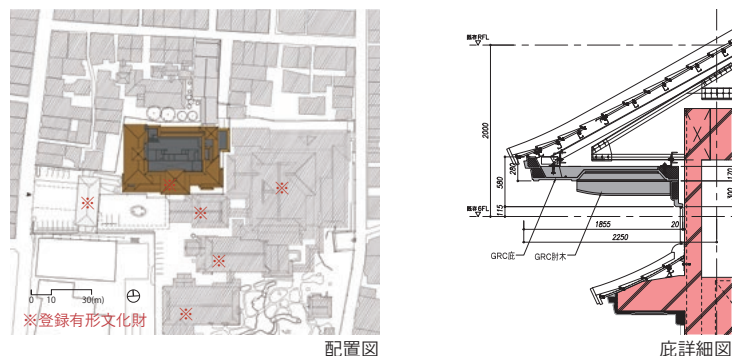
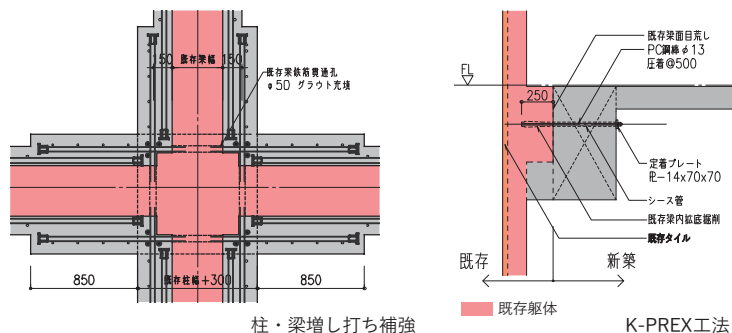
帝国ホテル 京都

既存躯体と一体化した増築計画であるため、既存躯体についても現行建築基準法の構造計算規定を満足させる必要があった。このため、新築範囲に耐震壁を可能な限り配置し、既存躯体の負担地震力の低減を図ったが、なお過半の既存柱および大梁に対して増し打ち補強が必要となった。補強にあたっては、法的制約によりあと施工アンカーが使用できないため、既存躯体に貫通孔を設けて鉄筋を定着させる工法を基本とし、前例のない納まりを構築した。施工方法についても現場と一体となって検討・調整を行い、実現に至った。

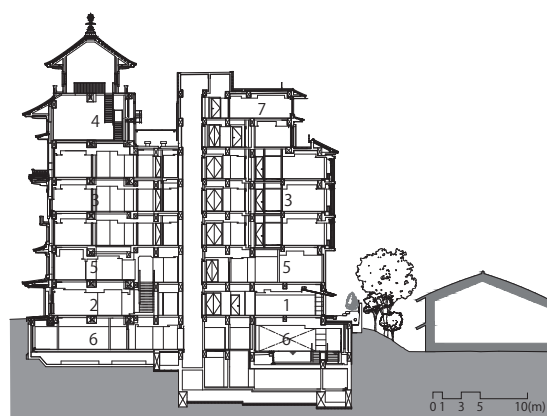
通常の新築工事とは異なり、解体から補強に至る既存躯体の施工中の安全性確保にも十分配慮した。既存西側壁の転倒防止策としては、北側既存躯体の解体時期を調整することで、既存躯体を有効活用した安定形状を確保し、仮設補強を必要最小限に抑える工夫をした。

さらに、外壁タイル保存範囲の補強には、建築分野では適用例の少ないK-PREX工法を採用した。本工法は壁面を貫通することなく既存躯体と新設躯体の一体化が可能であり、土木分野での実績を建築工事に応用したものである。これにより、保存対象である外装タイルを損傷することなく補強を実施することができた。

(野口梯子／大林組)

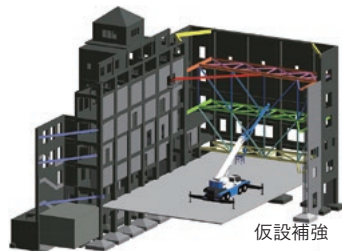
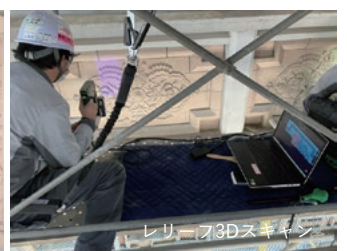


基準階平面図



断面図

- 1- 宿泊者ラウンジ
- 2- ロビー
- 3- 客室
- 4- 保管庫
- 5- レストラン
- 6- スパ/トリートメント
- 7- バー



伝統と格式の統合、石材構成による空間価値の深化



三輪勝美
矢橋大理石株式会社
大阪支店長

本館保存部のファサード外壁は、岡山県北木島の花崗岩で設えられており、エントランス部は迎賓施設の赤壁を想起する大理石（ロッソマニャボスキスクーロ）で仕上げられていた。インテリアの設計方針は、水平方向への広がりを感じるシーン展開によりお客様をお迎えする演出。保存部分から新設の範囲まで、場所毎に相応しい石材が選定された。国産の石材（花崗岩、凝灰岩、大理石等）を中心に海外産の大理石を含め、多様な使い分けが必要になった。館内の随所で使用した大谷石（軽石凝灰岩）は、既に閉山した当時露天掘りで採石された、白く硬い、旧帝国ホテルライト館（1923年竣工）で使用した材料と同じ物性の保存材を集めて仕上げた。宿泊ラウンジは、弥栄会館（1936年竣工）の内装表現を象徴するレリーフの一部を構成していた田皆石（沖永良部島産石灰岩_昭和40年代閉山）を全数敷並べて、適切に割付けた。こうした一つ一つの積重ねが、伝統的建築の継承と国内を代表するホテルの格調と風格の形成の一助となることを願っている。

(岩垂誠/大林組)



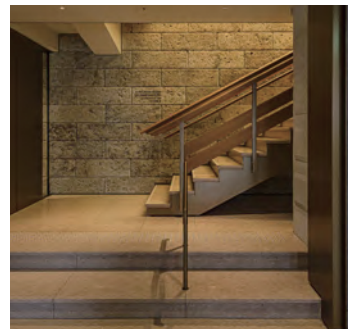
宿泊ラウンジ_田皆石



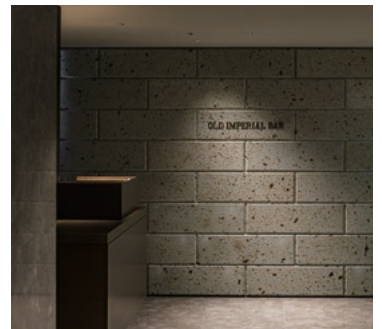
1階宿泊EV_田皆石



B1階カウンター_万成石、勝連トラパーチン



1階大階段_大谷石、ジュラブラウン



7階EVホール_大谷石、シェロフォスコ



エントランスファサード_北木石、ロッソマニャボスキスクーロ

SINCE 1901
YABASHI
矢橋大理石株式会社

矢橋大理石株式会社

採用製品：
田皆石・黄華・加茂更紗・大谷石・暁・勝連トラパーチン・
秋保石・万成・ノーブルページ・ジュラブラウン・
ヴェルデオンデジャート・スターゲートほか



1901年創業の当社は日本の近代建築史とともに歩んできました。自然がつくり出す豊かな色彩や模様を有し、気品ある輝きを放つ石材の世界はどこまでも奥深く、他とは一線を画しています。

当社は125年を超える経験と優れた加工技術により、石材の魅力を存分に活かした施工を行っています。また、近年ではセラミックタイルやクォーツストーンを使用したキッチンカウンターをはじめ、「より軽く・より早く・より安全に・よりサステナブルに」が特徴の天然石をアルミハニカムに接着した複合パネル『ユニマープルパネル』を開発。多様化するニーズに応えるべく、新たな価値を創出する製品としてリリースいたしました。

一枚一枚、手仕事で継がれ、
紡がれる弥栄会館の記憶



谷山辰広
株式会社平田タイル
本店タイル工務部

弥栄会館外壁は、テーパの取られた220mm×45mmの淡褐色タイルが、横15mm×縦5mmの目地幅で貼られており、庇とともに水平基調意匠を構成する主要要素であった。既存タイルの記録は残っておらず、成分分析による製法や釉薬の調査を行った。

外壁と躯体を残している南西面は、可能な限り多くのタイルを再利用することが第一義であった。しかし、既存タイルは経年劣化によるひび割れや剥離が目立った為、引張試験を行い残置方法の検討を行った。最終的には、構造補強を外側から行わない正面塔屋と西側外壁の大部分はピンディングによる残置を行い、その他南西面は優先順位をつけ、生捕りタイルを再設置する方針とした。生捕りにあたってはカッター入れののち、一枚一枚手作業でモルタル撤去・清掃を行い、全体総数の1割程度である16387枚の生捕りを行った。

(糸嶺円路・藤枝大樹/大林組)



ピンディング 再利用率



南西4階バルコニーから見る塔屋のピンディングされたタイル



付着しているモルタルを除去



モルタル除去後の生け捕りタイル



ランク別(破損の程度)に引張試験を実施。再利用可能と判断



全体総数の1割程度の生け捕りを行った



ピンディングの作業状況



株式会社平田タイル

事業概要: 内装・外装タイル・国内海外オリジナルタイル・石材・
木質建材・システムキッチン・ユニットバス・洗面台・トイレ・
給湯器などの建築資材の施工および販売を行う総合企業。

採用製品:

外装 生け捕り再利用タイル、既存合わせ特注タイル 乾式・湿式
内装 緑釉・白釉特注ボーダータイル、600角タイル

創意・情熱・技術で建築文化に貢献する企業で、人々が暮らすさまざまな空間に新しいデザイン、機能、快適性を加え、驚きや喜び、そこから生まれる人の輪を創り上げる。そんな空間へのイノベーションを追求しています。長年培ってきた幅広い商材知識と、常にデザイン感性を磨き、工事と設計をご提供しています。『新たな価値を提供し、ともに成長するエキスパート集団になる』を経営ビジョンとして平田タイルグループホールディング株式会社は前進して行きます。

今から90年前の外装タイルを再生させていただきました。

タイル、モルタル成分調査から始まり、足掛け5年で無事完成となりました。既存タイルの色は綺麗な桜色で、まるで舞妓さんの頬紅のような美しい色です。何度も何度も見本焼きを行い、やっと納得の行く本製作となりました。『温故知新』古きを愛し、新しきを知るの大切さを教えて頂いたような心に残る工事でした。これから生け捕り再生タイル工法が増えていくと思いますので、より満足していただけるよう前進し続けて行きます。

現代技法による復刻タイルへの挑戦 -湿式での試み-



河原輝雄
都窯業株式会社
代表取締役

弥栄会館の外壁から生け捕りされたオリジナルタイルだけでは外壁全体を賄うことができず、改築後の外壁の約73%を新規製作のタイルで補う必要が生じた。オリジナルタイルは二丁掛サイズ・四辺の面取り・淡い桜色の釉薬が施されている点が特徴である。その復元のため、土と釉薬の成分分析を行い、得られたデータを基に複数のメーカーへ試作を依頼した。製法の記録は現存しなかったが、湿式押出成形・プレス成型・鑄込成型など様々な方法を検討し、当時の乾式製法で製作された、と仮定した。試作を重ねた結果、2社のタイルが採用された。共に、オリジナルタイルの材料と成型のいずれかを継承する形となった。特に西面・南面には、現代の湿式押出成形による炻器質タイルを採用。オリジナルは坏土を型に入れて一発成型したと推察されるが、現代では押出成形後に短辺の面取りを加える手間をかけ、より忠実に意匠を再現した。また、同じ湿式材料を使用することで釉薬の表情もオリジナルに近づけている。こうした工程を経て、新旧のタイルが一体となった外壁が実現した。(井上雅祐/大林組)



西面の過半と南正面タワー部のタイルはオリジナルのタイルをピンニングにより存置。5階西南面コーナーからタワーまでとタワーから東側を湿式タイルを採用。



花見小路に面する西面の大半は既存タイルを存置



オリジナルタイルと湿式タイルが混在する



南東コーナーで湿式タイルと乾式タイルが切り替わる



夢のレンガを積みあげよう

都窯業株式会社

都窯業株式会社

事業概要: 国産レンガ、輸入レンガ
レンガタイル、石

採用製品: 特注施釉タイル 220×45×t20



レンガとタイルは建築材料として人類最古の歴史を持ち、日本の近代化に貢献してきました。今も多くの建造物に使われ、晴れた日や、夜や、雨の日などで表情が変化し、やきもの特有の温かさと安らぎを生み出しています。今回、90年前の色と雰囲気を再現するため、「湿式押出し成形施釉タイル」の手法で挑戦しました。湿式は1枚ごとに微妙な色ムラや寸法差を生み、やきものならではの魅力があります。工場では何度も試作を重ね、2年余りの歳月を経てオリジナルに限りなく近い製品が完成しました。私たちは土から生まれるレンガとタイルの無限の可能性を信じて今後も新しい価値を提案して参ります。

現代技法による復刻タイルへの挑戦 -乾式での試み-



長谷禎久
織部製陶株式会社
取締役営業部長

東面・北面には現代の乾式製法タイルを採用し、粒状の坯土を金型に充填し高圧プレス成型を行った。金型のエッジを柔らかく仕上げるなど、面取りの表情をオリジナルに近づける工夫も加え、さらに窯内の焼成時の温度差を調整することで、オリジナルタイルの肌感の再現を目指した。また、オリジナルタイルは製品ごとに微妙な色の違いがあり、長大な壁面に陰影と立体感をもたらしていた。この特徴を新規タイルにも反映させるため、湿式では濃中淡3種、乾式では濃淡2種の色調で貼り分けを実施した。さらに、同一の科学的成分組成でも材料や製法の違いで表情が異なるため、2社のメーカーが釉薬の調整や面取りの仕上げ、成型方法の最適化など、細部にわたる工夫を重ね、オリジナルに近い外観を追求した。新規タイル裏面には「2025」と刻印し、50年後の改修時に製作時期が分かるよう配慮した。これは、歴史的な経緯を残すとともに、次世代の保存・改修計画に資する情報管理の取り組みでもある。

(藤枝大樹/大林組)



北面からの眺め。西面はオリジナルタイル、北面はガラスカーテンウォールの内部を含めて現代の乾式製法タイル。



再構築された北側外壁面は現代の乾式製法タイルを採用



北と東の外壁は元の壁位置でタイル壁を再現



頂部の金物を含め忠実に煙突を再現



2025年の刻印で製作年を表示



織部製陶株式会社

事業概要: タイル、レンガ、レリーフの製造販売
採用製品: 特注施釉タイル 220×45×t20



織部製陶はオーダーメイドのタイルブランドです。

色・サイズ・質感など、お客さまの要望に応じて焼き上げるタイルには、一枚一枚表情が微妙に異なる味わいがあります。製作している製品には、タイルやレンガのように四角い形状のものもあれば、彫刻のように粘土を彫って形作るものや、焼き上がり後に表面に凹凸を付け様々な表情をつけることもあります。それらの作業を一つずつ、丹念に手作業で行っているのが織部の製品です。

オーダーメイドタイルに加え、ストックしている既製タイルのご用意もございます。さらに、復元や改修、既存建物のリノベーションにおいても、既存タイルに合わせた質感や色調の再現は、私たちオーダーメイドメーカーの得意とするところです。タイルサンプルや資料のご請求、プロジェクトのご相談などお気軽にお問い合わせください。

時を刻む銅板屋根の再生



萩田宗太郎
C Nexsus株式会社
代表取締役社長



田中毅
株式会社田中金屋製作所
代表取締役社長

弥栄会館の外観を特徴づけているのは、幾層にも重なりながら水平に伸びる深い庇の連なりである。庇上には銅板瓦葺の屋根が架けられていたが、経年劣化や度重なる台風被害により各所で剥落が生じ、漏水も確認されていた。そのため今回の増改築にあわせ、屋根を全面的に更新することとした。

かつての屋根は美しい緑青に覆われており、同色塗装を施した硫化銅や薬品処理による緑青銅を用いる選択肢もあった。しかし本計画ではあえて生銅を採用し、銅色から濃茶色、そして緑青へと移り変わる経年変化を含め、これを継承することとした。

銅板の厚さは0.4mmとし、旧屋根に近い仕様を採用することで往年の表情を踏襲した。一方、当初の木下地は腐朽や劣化が著しかったため、耐久性を考慮して現代工法による金属下地へと更新している。軒先の巴瓦は既存意匠を型取りし、この地に建つ祇園甲部歌舞練場にちなむ「歌」の文字を刻むことで、地域の記憶と文化財の継承を図った。

(伊藤直幸/大林組)



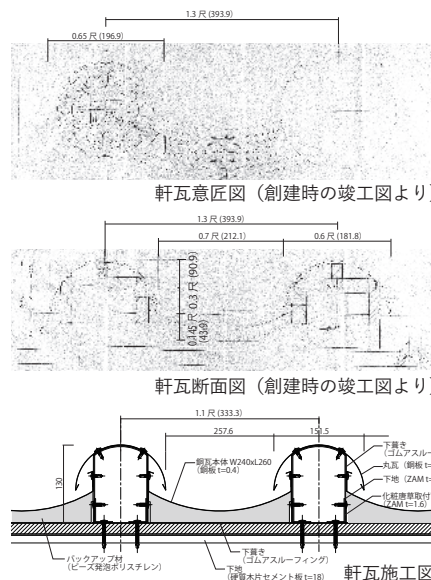
建物コーナーの屋根の連なりを臨む



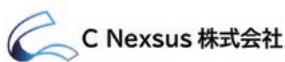
7Fより南面の屋根の連なりを臨む



「歌」の文字を刻んだ巴瓦



一部飛散し老朽化した屋根
(施工前の状況)



C Nexsus株式会社
事業概要: 金属建築外装事業
採用製品: 銅板瓦



当社C Nexsusは、建築外装事業・建築リニューアル事業を通じて建物を雨風から守り、安全で快適な環境づくりに貢献しています。建物の機能性だけでなく、意匠性や品質にもこだわり、社会や地域に長く価値を提供できる施工を目指しています。また、私たちは「絆」を大切にし、地域社会や企業様との信頼関係を築きながら、日々誠実なもののづくりに取り組んでいます。



株式会社田中金屋製作所
事業概要: 金属屋根用部品製造販売
折板屋根壁材・金型販売
採用製品: 銅板瓦



創業50年を超える田中金屋製作所は、設計から配送まで一括管理する金属屋根部品メーカーです。金型の企画制作を含む自社一貫体制により、多品種小ロットや別注品へも柔軟に対応し、低コストと短納期を実現します。第三者機関の試験データに基づく製品は、空港やテーマパーク等の大規模建築にも多数採用され、高い信頼性を誇ります。安心なもののづくりを通じ未来へ豊かな地球環境を繋ぎます。

新しくも懐かしい、素朴であり上品
祇園町南側の新たな屋根の景



大栄窯業株式会社
代表取締役
道上大輔

帝国ホテル京都は保存活用する本棟と新たに増築する北棟から成る。北棟は祇園町南側の青柳小路に面し、伝統的な「お茶屋形式」の意匠を纏っている。北棟では軒庇の高さや外壁の色味を周囲のお茶屋建築と合わせることで、町並みと調和するよう工夫し、建物ボリューム（大きさ）を分節して本棟に接続することで、低層の町並みへの圧迫感を低減した。

北棟の屋根瓦には、マットな質感と控えめないぶし色が特徴の「銀古美」を採用した。既存の祇園町の屋根瓦に見られる新旧混交による風合いや色むらの違いを意識しつつも、この瓦は焼き物本来の自然な濃淡のグラデーションと安定した落ち着いた表情を持ち、エイジングを待たずに葺いた直後から町並みに自然にとけ込む力があるため、景観保全と美しさの両立を意図して選定された。

本棟北面に設けられた「縁側空間」からは、祇園町の屋根が連なる美しい風景を一望できる。新たに加わった北棟は、伝統と現代性が融和する景観を創り出し、静かに時を刻みだす。（井上雅祐/大林組）



北棟を青柳小路より臨む



北棟を本棟バルコニーより臨む



北棟を本棟客室より臨む

DAIEI
CERAMIC
INDUSTRY

大栄窯業株式会社

大栄窯業株式会社
事業内容:和瓦製造業
採用製品:古代いぶし瓦「銀古美(ぎんふるび)」



創業以来60年以上にわたりいぶし銀の伝統的瓦の製造販売を続けるなか、10年前から本来の焼き物としての瓦のあり方を再考して脱工業製品化を標榜し、日本に瓦づくりが伝来した1,400年前から続く一枚一枚表情が豊かな本来の瓦らしさを取り戻すことを追求し、このたびご採用いただいた「銀古美」の開発に至る。近代設備が生み出した単調ないぶし銀の瓦では描けない、素朴でビンテージな質感の銀古美が古都京都 祇園の風景に馴染みます。またこの焼成術を活かした瓦づくりは屋根だけではなく壁や床へと続き、常識にとらわれない表現で社寺建築から近代建築とジャンルを問わず伝統素材である瓦の可能性に挑戦し続け、その先で瓦が織りなす美しい日本景を取り戻すことを夢に持ち、瓦作りと瓦の未来創りに汗を流しています。

悠久の歴史にとけこむ 古くて新しい客室の創造



秋重誠
株式会社築柴
営業工事部部长

全55室の客室は3室のスイートルームを含め、各々に広さや間取りの異なる特徴的な構成で、本館南側の保存エリア、北側の改修エリア、祇園町側に増床した北棟に配置されている。造作材は国産ケヤキの柾目材を柿渋で淡く染めた材料を基調としており、既存建築物の伝統的な風格を疎外しないように、創建時の背景にあったアールデコと民芸を現代のホテル客室に再構築し、素朴な素材で格調高い空間表現を目指す内装設計の趣旨に沿ってつくり込んでいる。北棟は周辺の茶屋様式の町家と軒を連ねる帝国ホテル初の和風様式の客室。床材はミズメの甲板、クリのナグリ板、畳等の肌で直に質感を感じられる素材となっており、京錆土、織物、和紙等の壁、へぎ板の掛込み天井で構成し、この町の景色と連続した設えとしている。ホテルの歴史やこの場所が積重ねた悠久の歳月を感じさせる銘木、造作台（ジンダイケヤキ）、シャレ木（クリ）、床板（トチ）、等を適所に眺え、新たな価値の創出を目指した。広縁でのくつろぎの時間に、外からは祇園の街音が心地いい。

(岩垂誠/大林組)



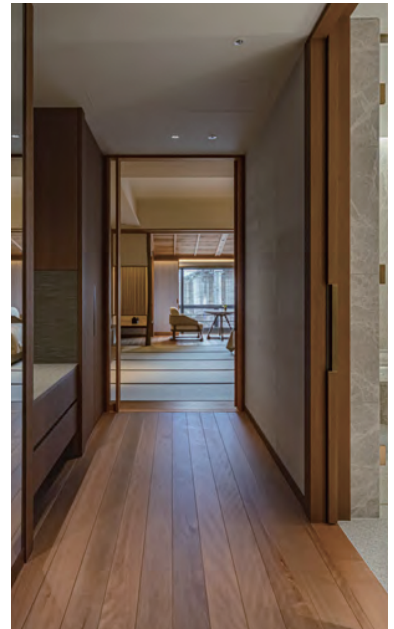
北棟客室



本館客室



客室 ベシン台



北棟客室 廊下



株式会社築柴

事業概要: 各種建築木工造作工事の材料製作及び施工

特注インテリア家具類及び木製建具の製造

施工内容: 本棟/客室、共用廊下、木造作、木製建具、

造付家具

北棟/外部木造作、客室、共用廊下、木造作

木製建具、造付家具

建具商「戸徳商店」として、1884年12月に創業し、時代の変化に対応しながら、特注家具や木工製品の製造・施工、木質内装仕上げ工事を手掛ける企業として、成長し培った「匠の技」をこれからも活かし、「製造力・技術力・人間力」にさらに磨きをかけ、「確かな品質」を皆様方にお届けできるよう成長してまいります。

工芸ガラスと陶による空間演出 と記憶の継承



斎藤明美
株式会社 陶額堂
デザイナー

オールデイダイニングの芭蕉レリーフは、弥栄会館の貴賓室に取付られており、創建当時の後期アールデコと民芸運動の時代背景を映すこの建物の象徴であった。民芸運動を展開した柳宗悦が、沖縄の民芸品を本土に紹介し始めたころ、そうした時流の影響を受けて、寒さの厳しい京都の建物の貴賓室に南方の暖かさを感じられるレリーフを飾った、といった当時の情景が推察される。工芸ガラスはエントランスの光天井部にも組込まれ、館内の重要な構成要素となっていた。大切なレリーフを帝国ホテル京都に継承するために、損傷具合を調査し、オリジナルの印象を損わないように、丁寧に修繕、補填して、新たな建築の表徴として設えた。

ルーフトッパー（7階）の陶レリーフは、旧帝国ホテルライト館のイメージを尊重し、新たな帝国ホテル京都のインテリアとの調和の視点から、弥栄会館の十字窓を想起する紋様に深い緑の透明釉で表情をつけた。幾何学模様の陶レリーフは、祇園町の波瓦が折重なる屋根並みを借景に、オールドインペリアルバーの景色をつくっている。

(岩垂誠/大林組)



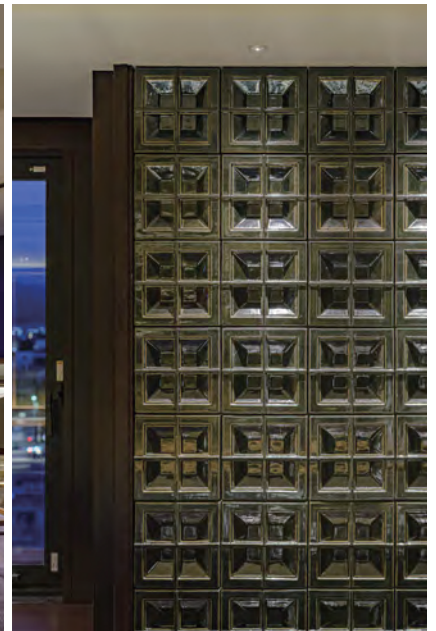
1階風除室ガラス天井 飛散防止加工の上、再設置（一部復原）



オールデイダイニング 芭蕉レリーフ



7階ルーフトッパー



陶レリーフ



株式会社陶額堂

事業内容: 陶とガラスを基調とした建築空間に関わる
美術・工芸のデザイン・制作

採用製品: 陶レリーフ

既存ガラスのクリーニング・再設置・一部復元制作

陶額堂は、京都の計画室と滋賀県長浜市の工房からなります。京都では歴史に裏打ちされた価値観と、現代の芸術的感性を関係させ空間に最適な解を構想するとともに、相応な性能を担保する施工計画も行います。陶とガラスの工房は、時間に洗練された技術の習得や常識にとらわれない新しい素材感の発見につとめながら構想を咀嚼し、魅力的な表情を纏う造形に変換します。美術館に閉じ込められる以前の芸術がそうであったように、人の営む空間と響き合いながら芸術の力を存分に発揮する作品を作り続けていきたいと考えています。

空間と会話する

[アートディレクター・サインデザイナー]

大井田 茂夫

建築において、サインは決して後から付け足されるものではありません。それは建物の構造や差し込む光、そしてその場を流れる空気と静かに呼応し、まるで最初からそこにあったかのように存在するものです。私たちが理想とするのは、そのような必然性に裏打ちされたデザインです。

建築空間と会話をする。そこにあるのは、記号としての単なる主張ではありません。空間の一部として溶け込んだ「振る舞い」そのものが、案内としての役割を果たします。建築家が描いた動線にそっと寄り添い、訪れる人の無意識に語りかけるような存在でありたいと考えています。

それは、迷いを消すための機能でありながら、同時に空間の質を深めるアートのような側面も持ち合わせています。素材が持つ独特の触感、時間とともに変化する影の落ち方、そして周囲の環境との絶妙な距離感。そのすべてを緻密に計算し、建築のDNAを正しく継承したサインは、もはや単なる情報の提示ではありません。その場所が本来持っている「優しさ」や「おもてなし」の心そのものとなるのです。

デザインと機能が矛盾なく溶け合うとき、サインは建築に新しい命を吹き込みます。探そうとしなくても、必要なときに自然とそこにある安心感。建物の呼吸に合わせて静かに人を導く、そんな「必然の美しさ」を宿したサインのあり方を、これからも追求し続けていきたいと思っています。

大井田 茂夫（おおいだ しげお）
 1977年 群馬県生まれ
 2001年 神奈川大学建築学科卒業
 2009年 株式会社大林デザインパートナーズ入社
 日本サインデザイン賞 銅賞など

<https://www.o-d-p.jp/>

企画編集：伊藤 翔（ひと・まち・建築小委員会）



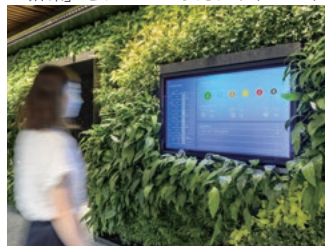
光で「知」る：木/左官/鉄といった無垢素材による物質性を引き立てる、非物質性の光によるサイン



木で「知」る：手に触れるサインは木構造材の端材を利用し、五感を刺激するだけでなく端材利用のストーリーを内包する



アートで「知」る
「循環」をテーマにしたフォトアート



デジタルで「知」る
変化する空間情報を可視化するサイネージ

「知を育む」研修施設、Port Plus。
 日本初の高層純木造耐火建築として、建築の新たな可能性を示します。
 多様な知を生むきっかけとして、人と空間の接点となるサインを計画。
 光、木、デジタル、アートを融合させ、建築と共鳴する導きを形にしています。

未来創生プロジェクト 2040委員会 第4回 オープン委員会



↑
参加申込は
上記QRコードから

日 時 2026年7月27日(月)
17:30 受付
18:00 挨拶・開会・ワークショップ説明
18:20 講演(吉永規夫氏)
18:40 ワークショップ
(テーマ:どのような時代でもしなやかに生きる力(仮))
19:30 懇親会

会 場 株式会社大林組大阪本店 3階 O-cafe
(大阪市中央区北浜3丁目5-29 日本生命淀屋橋ビル3階)

定 員 最大40名(申込者多数の場合は抽選)

参 加 費 ワークショップ参加: 1ドリンク制
(懇親会参加の場合: +2,700円・当日現金支払い)

参加申込 左記QRコードからお申込みください

締 切 日 2026年7月10日(金)

問 合 先 (一社)日本建築協会(担当:井筒)
TEL 06-6946-6981
E-mail hensyu@aaj.or.jp

2040委員会は、【目指すべき2040年の社会像】を模索するため、メンバーで闊達な議論を行なっている委員会です。

VUCA【Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)】と言われる不確定な時代にあって、近い将来さえ見通せない今だからこそ、これからの社会像を語り合い、そのあるべき姿と一緒に模索することは非常に有意義なことだと考えています。

委員会メンバー以外とも一緒に語り合う機会を持ちたい、と考え、このたびオープン委員会を開催することとしました。オープン委員会でみなさんと語り合いたいテーマは【どのような時代でもしなやかに生きる力(仮)】です。

話題提供は2040委員会メンバーの吉永規夫氏。変化の激しい時代の中で、建築家はどのように社会と向き合い、生き抜いていけるのか。吉永氏の実践をもとに、時代を問わず生きるためのヒントを探ります。

「2040年に自分が何をしたいか」
「それを実現するためにはどういう社会である必要があるか」
など、バックグラウンドが異なる仲間とのワークショップを通して、新たな未来への可能性と一緒に探求しましょう!



講演者プロフィール



吉永規夫(建築家)

1980年 大阪府生まれ
2008年 和歌山大学大学院
システム工学研究科
修士課程修了
(本多友常研究室)

2012年- Office for Environment
Architecture 設立
大阪の長屋リノベーションシリーズ
のヨシナガヤを継続中
現在、畿央大学講師
大阪公立大学大学院非常勤講師

東海支部主催

海外視察
『シンガポール・
クアラルンプールの建築をめぐる旅』

日 時

2026年10月30日(金)
～11月3日(火)

10/30(金)

20:30 集合 東京羽田空港 3 階
出発フロア

22:55 東京羽田空港発 SQ635

10/31(土)

5:20 シンガポール空港着
乗り換え

7:05 シンガポール空港発 SQ104

8:15 クアラルンプール空港着
入国・関税審査

<クアラルンプール建築視察>

クアラルンプール国際空港

プトラジャヤ

アップルプラザエクスチェン

ジTRX

国立繊維博物館 など

19:00頃 夕食 クアラルンプール泊
The Majestic Hotel Kuala
Lumpur, Autograph Collection

11/1(日)

8:30 <クアラルンプール建築視察>

バトゥ洞窟

SAMA Square

Onbac KLCC

ペトラス・ツインタワー

など

17:30頃 夕食 クアラルンプール泊
The Majestic Hotel Kuala
Lumpur, Autograph Collection

11/2(月)

5:00 ホテル出発

9:00 クアラルンプール空港発
SQ103

10:15 シンガポール空港着

※荷物は預けたまま

<シンガポール建築視察>

エクスプラネード・シアター

ズ・オン・ザ・ベイ

アートサイエンス・ミュージ

アム

マリーナベイ・サンズ

ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ

など

20:50 シンガポール空港着

出国手続き

ジュエル・チャンギ・エア

ポート自由視察

11/3(火)

1:00 ゲート前集合

1:20 シンガポール空港発 SQ672

8:30 中部国際空港着 解散

※視察先・旅程は変わることがあります。

当支部の主催としては2年ぶりの海外視察です。熱帯環境へ適応し、伝統とモダンが絶妙なバランスで調和しているマレーシアとシンガポールの建築をめぐる旅です。ご家族をはじめ会員以外の方の申込みも可能です。是非ご参加ください。



定 員 15名 要予約ただし定員に達し次第締め切り
※最低催行人数 10名

参 加 費

(専用車移動費・食事代含む

※飲物は別途必要)

会 員 340,000円

(2名1室利用)

(1人部屋希望の場合:

追加33,000円)

非会員 360,000円

(2名1室利用)

(1人部屋希望の場合:

追加33,000円)

※旅行代金は参加人数に

よっては変更される可

能性があります。

登録番号 (T4120005003412)

申込方法 下記QRコードのGoogle
フォームよりお申し込みく
ださい。

①催し名

「東海支部海外視察」

②氏名

③会員・非会員の別

④所属(勤務先等)

⑤連絡先電話番号

⑥連絡先E-mailアドレス

⑦オプション希望の有無

⑧CPD登録希望の方は

CPDID

問い合わせ

(一社)日本建築協会東海支部

TEL: 052-990-6410

FAX: 052-201-3601

E-mail info@aaj-tokai.jp

締 切 2026年7月31日(金)

※申込受付後、申込書を

お送りいたしますので

ご記入いただき提出し

てください。

申込フォーム: <https://forms.gle/6p9tLCtgsU5xTRk87>

HP <http://www.aaj-tokai.jp>

是非ご覧下さい。



CPD単位申請予定

主催：大阪府・大阪市・(公社)
大阪府建築士会・(一社)大阪
府建築士事務所協会・(公社)
日本建築家協会近畿支部大阪
地域会・(一社)日本建築協会

第45回大阪都市 景観建築賞 (愛称 大阪まちなみ賞) 募集要項

すてきな建物・まちなみを
ご推薦ください

■趣旨

美しく、個性と風格のあるまちの景観
づくりを進めていくために、周辺環境
の向上に資し、かつ、景観上優れた建
物やまちなみを表彰します。皆様から
推薦いただいた建物や建物を中心とし
たまちなみについて、審査し、本賞に
ふさわしいものに、以下の賞が与えら
れます。

- 大阪府知事賞
- 大阪市長賞
- 審査員特別賞
- 緑化賞
- 建築サイン・アート賞
- 奨励賞

■推薦方法

大阪まちなみ賞HP(下記QRコード)
から電子推薦してください。
設計者等の自薦の方は、自薦専用書式
をHPよりダウンロードし、必要事項
を記載の上、ご応募ください。



他薦の方はこちら



自薦の方はこちら



大阪まちなみ賞HP
<http://osaka-machinami.jp/>

■対象

大阪府域内の「建物」又は「建物を中心
としたまちなみ」を推薦してください。

建物：令和3年8月1日から令和7
年7月31日までに完成したもの
(※上記期間に改修した物
件も含みます)

建物を中心としたまちなみ：令和7
年7月31日までに完成したも
の

※建築基準法に基づく建築確認申請が
必要な物件については、検査済証が
発行されていない場合、対象外とな
ります。

〔建物〕

1. 将来のまちの景観をリードしてい
くようなもの
ア. 敷地内に、広場などのオープ
ンスペースを適切に配置した
もの
イ. 敷地を共同化してできた建物
で優れた景観を作りあげてい
るもの
ウ. 地域のシンボルとなるような
もの
エ. その他
2. 周辺の建築物等と調和し、美しい
まちなみの形成に役立っているも
の
3. 伝統的なまちなみの維持・向上に
役立っているもの
4. 自然の景観(河川、山並みなど)
と調和しているもの
5. 敷地内や壁面、屋上を緑化するこ
とにより、魅力ある景観に寄与し
ているもの
6. 敷地内や壁面等にデザイン性や
アート性に優れたサイン・壁画・
彫刻・モニュメント等を配置す
ることにより、魅力ある景観に寄与
しているもの
7. その他、この賞の趣旨に沿ったもの

〔建物を中心としたまちなみ〕

1. 総合的な計画、良好な維持管理に
より優れた景観を作りあげている
もの
2. 伝統的なまちなみの維持・向上を
図っているもの
3. 適切な緑化により、魅力あるまち
なみを形成しているもの
4. その他、この賞の趣旨に沿ったもの

■受付期間

2026年7月1日(水)～
7月31日(金)

■審査委員 ※50音順

加藤精一(建築)
(一社)大阪府建築士事務所協会理事
島田 陽(芸術)
京都市立芸術大学教授
武田重昭(造園)
大阪公立大学大学院農学研究科
緑地環境科学専攻教授
橋寺知子(建築)
関西大学環境都市工学部建築学科
准教授
藤田 隆(デザイン)
(一社)総合デザイナー協会理事
前田茂樹(建築)
(公社)日本建築家協会近畿支部大阪
地域会
宮本尚明(新聞)
産経新聞社大阪編集局報道本部部長
若本和仁(都市計画)
大阪大学大学院工学研究科
附属フューチャーイノベーションセ
ンター准教授

■入賞発表

令和8年12月頃入賞作品関係者への
通知をもって入賞発表とします。

■問い合わせ先

○大阪都市景観建築賞運営委員会
〒540-0012 大阪市中央区谷町3-1-17
高田屋大手前ビル5F
(公社)大阪府建築士会
Email: info@aba-osakafu.or.jp
TEL: 06-6947-1961
FAX: 06-6943-7103
○大阪府都市整備部 住宅建築局
建築環境課 住環境推進グループ
TEL: 06-6210-9718
○大阪市計画調整局 計画部
都市計画課(都市景観)
TEL: 06-6208-7887

『建築と社会』 2027年2月号 「第33回 会員特集」 原稿募集中

『建築と社会』2月号では、会員のみなさまの発表の場として「第33回会員特集」を予定しています。会員特集は、年に一度のみなさまの貴重な発表の場です。ぜひご応募ください。

対象は建築、ランドスケープ、インテリア、まちづくり、アート等空間に関わるものの他、建築構造や設備に関する話題、みなさまの様々な活動や思い（心に残るまちなみ、旅行記、仕事以外の趣味の紹介、なにげない日常の風景、日ごろ感じていること…）などを広く募集いたします。自由な切り口での個性あふれる応募をお待ちしております!!

■掲載内容

写真	プリントの場合、サイズはキャビネ判程度。電子データの場合、解像度300dpi以上とする。CGやパース、コンセプト図、スケッチ、イラストも可。
説明文	①ページタイトル：掲載内容を言い表すタイトル（施設名称は不可） ②コメント：掲載内容に対する考え方や説明を300字程度で
建物概要	掲載内容が建築物である場合は、施設名称、所在地、設計者、施工者、建築面積、延床面積、構造規模、工期など

※イラストレーター用の原稿作成フォーマットを用意しています。必要な方は、下の担当までご一報ください。
応募は、レイアウトしていない状態（写真、コメント、建物概要等をバラバラで提供）でも結構です。

■留意事項

1. 応募は、本会会員に限ります。入会は本会のホームページから可能です。（<http://www.aaj.or.jp/>）
2. 応募は1名につき1件までとし、1件につき1頁とします。竣工予定のプロジェクトを掲載希望の場合、写真の提出期日についてご相談ください。
3. 写真の撮影者名は必ず付記願います。図版に著作権等が生じる場合は、応募者にて処理願います。
4. 応募内容について事務局から補足説明をお願いする場合があります。
5. 掲載順は委員会で決定します。また内容によっては掲載できない場合もあります。
6. 出版物への掲載はモノクロとなります。（web版はカラー）
出版物にカラー掲載をご希望の場合はご相談ください（有料となります）。

■申込締切日・原稿送付先

1. 掲載申込締切日 **2026年10月19日（月）**
2. 送付先 （一社）日本建築協会「会員特集号」係
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル 7 階
TEL：06-6946-6981 E-mail：hensyu@aaj.or.jp 担当：井筒

主催 日本建築協会

2026年度 第72回工高生デザインコンクール

設計課題

『「はじまり」を灯す空間
—いのちを迎え、共に育む「建築」の器—』

課題の趣旨

現代の日本において、出生の約99%は病院や診療所であり、助産院等は1%に満たないのが現状です。高度な医療管理による安心がある一方で、かつての日本で「向こう三軒両隣」の人々が新しい命の誕生を共に喜び、見守っていたような、温かな地域との繋がりを実感する機会は少しずつ減っています。

2025年大阪・関西万博が掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」では、一人ひとりのいのちを慈しみ、持続可能な未来を共に創り出すことが提起されました。これからの建築には、誰かが一人で頑張るのではなく、社会全体で優しくいのちを包み込むような「開かれた居場所」としての役割が期待されています。



本課題では、北欧の「ネウボラ」のように妊娠期から子育てまで家族に寄り添い、専門的なサポーターである「ドゥーラ」や「ナニー」が自然に手を差し伸べられる拠りどころを計画してください。それは、「いのちを迎える人々」が、それぞれの形を尊重し合いながら、知恵を寄せ合い健やかに過

せる、光あふれる交流の場です。

自然の摂理を感じながら、多世代が見守るなかで新しいいのちが育まれる「建築」の器。100年後の未来へ繋がる生命の神秘に敬意を払い、人々の記憶に優しく刻まれる「はじまりと継承」の場を提案してください。

設計条件

1. 建物の目的：既成概念にとらわれない『「はじまり」を灯す空間—いのちを迎え、共に育む「建築」の器—』の提案（新築のほか、従来の建物の再利用も可能。）
2. 敷地：敷地の大きさ形状とも自由とし、具体的な敷地を設定する。
3. 規模：延べ面積、構造、階数は自由とする。
4. 所要室：使用方法を想定し、必要と思われるスペースを適宜設ける。

所要図等

（以下の1～8全てを記載することとし、不記載の場合は失格となることがある。）

1. 設計説明：設計意図を表すサブタイトルを必ずつけること。設計趣旨（敷地周囲の状況等についての説明はもちろん、「誰が、どのように、利用する場となるのか」について述べ、そのために設計では何を意図したのかを文章や図で簡潔に表現する）を記入する。
2. 建築概要：必要に応じて敷地面積、建築物の構造、階数、各階床面積および建築面積、延べ床面積などを示す。
3. 敷地周辺図：敷地周辺の環境や状況を示す。縮尺を明示する。
4. 配置図：敷地における建物の位置、道路との関係、方位、縮尺を明示する。
5. 平面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。
6. 立面図：縮尺を明示する。（2面以上）
7. 断面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。（1面以上）
8. 透視図等：設計意図が最も反映するところを表現する。
9. その他：応募図面には氏名学校名、マークなど応募者を特定あるいは類推できる内容は記載しないこと。

応募条件

1. 用紙：用紙は製図用紙A1判（594mm×841mm）1枚を使用し、所要図等をすべて表現すること。また、図面のパネル化等は認めない。
2. 応募資格：2026年4月現在、高等学校在籍もしくは高等専門学校、専修学校の高等課程の生徒で、個人または共同（3人まで）で制作したものとす。

審査員（50音順・敬称略）

審査員長 久保 岳／㈱昭和設計建築設計部部長
 審査員 糸嶺 円路／㈱大林組設計本部建築設計部副部長
 梅田 武宏／ウメダタケヒロ建築設計事務所代表
 惠本涼太郎／㈱日建設計設計部部長
 木内葉津子／nua 主宰

注意事項

1. 作品の意図等を表現する際に、写真や図表等を補足資料として用いることは妨げないが、引用利用する場合には著作権等に十分に考慮すること。

応募方法

1. 応募書類に、学校名、所在地、学年、氏名（ふりがな）を記入の上、封筒に入れ製図用紙の裏に貼りつけること。（応募書類が足りない場合は協会ホームページ（<https://www.aaj.or.jp>）からダウンロードすること。また封筒の貼り付けはテープ止め等で封筒がはがれない程度とすること。図面を破損する恐れがあるので、糊のべた塗りはしないこと。）
2. 応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

2026年9月30日（水）の消印、あるいは受付印のあるものをもって締め切る。

送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMM 7 階
 一般社団法人 日本建築協会 第72回工高生デザインコンクール係
 TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984
 E-mail：jigyoka@aaj.or.jp URL：https://www.aaj.or.jp

入選作品の数および賞

1. 入選作品は10点とする。
 2. 入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点を選び、表彰式にて発表する。
 3. 最優秀賞、優秀賞作品には、賞状および表彰盾を贈り、その他の入選作品には、賞状を贈る。
 4. 応募者全員に参加賞を贈る。
- ※入選作品の著作権は本会に属する。

入選者発表および表彰式

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年1月号に掲載する。なお、表彰式は2026年11月14日（土）に行う。

高田 英治／㈱安井建築設計事務所大阪事務所設計部部長
 多田 正治／多田正治アトリエ主宰・武庫川女子大学 准教授
 根木 和人／㈱東畑建築事務所本社オフィス大阪設計室副室長
 野口 伸／㈱竹中工務店大阪本店設計4部門1グループ長
 柳沢 究／京都大学大学院工学研究科 建築学専攻・准教授

このコンクールは、工高生の設計技能の向上を目的とし、昭和30（1955）年より毎年テーマを変えて開催しています。

第10回 日本建築協会 論考コンクール 片岡安賞 募集要項

日本建築協会は創立100周年を機に、学術論文とは一線を画す「論考」コンクールをスタートさせました。協会創設者・片岡安は建築家・都市計画家であると共に、大阪商工会議所会頭を務めた経済人でもありました。建築を通じて広く社会に貢献した片岡安の名を冠した本コンクールも、第10回を迎えます。第9回では建築以外の分野からも多数の応募がありました。また論題も多種多様です。6月号特集の「審査報告」をご参照ください。



かたおか・やすし
(1876-1946)

■募集テーマ：Re

今回の論考のテーマは「Re」です。

社会や環境が急速に変化し、私たちはこれまで自明とされてきた考え方や仕組み、価値観を見直す局面を迎えている今、この二文字は、私たちの身近な生活から専門的な議論まで、さまざまな領域に共通する思考の手がかりとなります。

「Re」はラテン語に由来する接頭辞ですが、「再び」「戻る」「繰り返す」という本来の意味にとどまらず、立ち止まって考え直す、別の見方で捉え直す、関係や意味を組み替えるなど、多様な意味へと展開していきます。過去をそのまま肯定するのでも、すべてを新しく置き換えるのでもない、その中間にある模索のプロセスもまた、「Re」の重要な側面といえるでしょう。

建築や都市に限らず、社会、文化、技術、あなたの日常の経験や関心事、身の回りのできごとなど、さまざまな対象を「Re」という視点で捉え直した論考をお待ちしております。

■審査委員会

審査委員長：松村秀一（神戸芸術工科大学 学長）

審査委員：岡絵理子（関西大学 教授）

前田昌弘（京都大学 教授）

■審査方法

- ・全審査委員により一次審査を行う。
- ・一次審査通過論考を対象に、オンラインによる公開プレゼンテーションを開催する。
- ・その後最終審査を行い、「片岡安賞」を決定する（該当作なしの場合もある）。

■応募条件

- ・投稿料は無料とする。
- ・応募者の国籍、年齢、所属は問わない。
- ・応募論考は単著、共著を問わない。
- ・応募論考は未発表のものに限る。協会誌『建築と社会』の掲載記事の改稿は可とする。
- ・使用言語は日本語に限る。
- ・質問は受け付けない。
- ・片岡安賞受賞者は本会に入会し3年間以上会員を継続することとする。
- ・Web通信環境が整っている、または整えられることとする。

■執筆要領

- ・文字数は6,000字程度とする。図版・画像も掲載できる。
- ・公平な審査のため、応募原稿には執筆者名等個人を特定できる情報を記載しない。
- ・応募用紙を本会ホームページからダウンロードし、著者名、論題等を記入する。
- ・応募論考は電子データでメール送信またはA4サイズに印刷したものを郵送する。
- ・応募用紙と論考を同時に送信または郵送する。
- ・電子データの場合、文書作成ソフトMicrosoft Word、もしくはそれに類するもので横書き原稿を作成する（Microsoft PowerPointは含まない）。
- ・添付画像は解像度300dpi以上とし、合計10MB以上になる場合は分割して送信する。

■著作権・版権

- ・著作権は応募者に帰属する。
- ・ただし本会にかかわる出版・印刷においては、一般社団法人日本建築協会が自由に使用することができるものとする。

■審査スケジュール

2026年

10月31日 応募締切
(消印有効、電子投稿の場合23時50分)

2027年

1月初旬 一次審査結果決定
3月初～中旬 オンラインによる公開プレゼンテーション
最終審査

■発表と表彰

- ・受賞論考の論題と著者名を協会誌『建築と社会』2027年5月号にて発表し、全文を6月号に掲載する。
 - ・同6月の本会総会にて表彰し、「片岡安賞」受賞論考著者には賞金10万円及び副賞を贈る。
 - ・他の入賞者には副賞を贈る。
- ※後日、受賞論考に基づく講演会・討論会等を開催することがある。

■提出先

一般社団法人 日本建築協会
第10回論考コンクール担当 宛
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 OMMビル7F
電話06-6946-6981 FAX 06-6946-6984
メールアドレス<hensyu2@aaj.or.jp>

主催：一般社団法人 日本建築協会

<http://www.aaj.or.jp>

協賛：学校法人常翔学園

後援：公益社団法人 日本建築士会連合会

公益社団法人 日本建築家協会

一般社団法人 日本建築士事務所協会連合会

一般社団法人 日本建築学会



本多友常さんを悼む

日本建築協会 11代会長

中井 進

本多友常さんが亡くなられた。訃報をお聞きして呆然としている。本多さんと私は、協会活動の中で知りあったのだが、もう40年以上になる。

本多さんは、早稲田大学大学院を修了され、竹中工務店（途中ロンドンA・Aスクール留学）、その後、和歌山大学、摂南大学、並行して本多環境・建築設計事務所と活動されてこられた。論理的で多くの知識を持っておられ、それでも気さくな性格で、私達とは、それぞれが建築設計に関わる違う道を歩きながらも同年代という親しみの中で、お互いに新たな世界を垣間見る思いでお付き合いすることができたと思う。

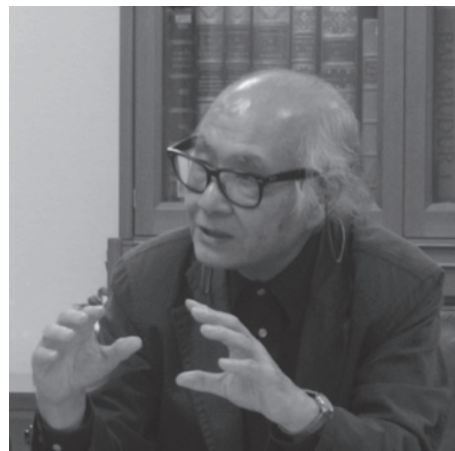
私の知る限り本多さんには4冊の著作がある。うち2冊はおそらく教科書的なものと考えられるが、注目すべき1冊は、1986年学芸出版社刊『ゆらぐ住まいの原型—自然発生的建築を探る』。協会誌『建築と社会』の連載がベースだが、住の原点を考察しながら新しい住の祖型を探ろうとする根源的な論考で、とても優れて興味深い。もう1冊は狩野忠正氏との共著で1992年新建築社刊『建築ノート』。作品選択の的確さと批評・評価の視点がすばらしい。

また、本多さんと建築協会との関りについては、これとは別の2冊の本がとても重要と思われる。建築協会発行の『関西の建築家50』と『関西の建築界/群像』。『関西の建築家50』は、1982から87年まで、協会誌『建築と社会』の連載記事として、設計事務所やゼネコン設計部の若手委員が毎月建築家へのインタビューと写真を1ページ仕立てて構成するものであった。委員には私も本多さんも含めて10数名が選定された。これはうまくできた仕掛けで、普段は自分たちの所属する組織の中でしかない世界を広く大きくしていくことにつながっていった。まさに協会の本来の意味たる、建築に関わる多様な職種・職域が交流することそのものだった。連載は1987年に協会の創立70周年記念『昭和生まれ関西の建築家50』として、記事を補強して、一冊の書籍として発行された。

この時、聞き手として参加された本多さんは、その30年ほど後に、これを引き継ぐ形で協会創立100周年記念誌企画の委員長として、これを担当することになる。20名を超える設計事務所、ゼネコン設計部等の委員インタビュアーが協会誌の毎月の1ページを作成した。これも、70回を超える記事をまとめ、補強した内容を加えたうえで、『関西の建築界/群像』として100周年の2017年に一冊の書籍として発行された。関西を主として活動している協会にとって歴史を形作る画期的な事業としての意義は大きい。

更に、本多さんは設計者としても多くのすぐれた建築作品を残している。竹中時代には担当作品も多数にわたるが、代表作としては1990年のOBPクリスタルタワー、1996年の新日本海フェリーターミナル。いずれもガラスカーテンウォールの端正な表現が素晴らしい。自らの設計事務所・大学時代では2003年和歌山の丘のある家、2003年シクロス九州営業所、2004年大きな庇のある老人デイサービスセンター、2011年高野口小学校校舎改修などが着目される作品だ。

このような活動によって、本多さんは、日本建築協会にとって大きな功績を残し、また、同時期を生きた私達にとっても大きな意味のある出会いを与えてくれた。多くを私達、後輩、教え子達に贈っていただいたのではないと思う。改めて言わなければならない、——ありがとう、本多さん。



本多友常（ほんだ ともつね）氏略歴

1948年1月12日 東京都生まれ
1970年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
1972年 早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了（池原研究室）
1972-98年 竹中工務店入社
1977-79年 Architectural Association School of Architecture卒業
1998-13年 和歌山大学システム工学部教授
2000-22年 本多環境・建築設計事務所
2013年- 和歌山大学システム工学部名誉教授
2013-18年 摂南大学理工学部教授
2026年5月16日 逝去

日本建築協会 役職

1981年11月-1987年1月
『建築と社会』特別企画
『関西の建築家 一設計者のプロフィール』編集企画委員
2009年4月-2016年6月
日本建築協会 特別委員会 100周年関連事業委員会「関西の建築家/群像」委員長
2010年-2018年 日本建築協会 副会長
2015年7月-2017年3月
日本建築協会 創立100周年記念事業委員会 委員
2018年-2020年 日本建築協会 理事

主な著書

ゆらぐ住まいの原型（学芸出版社）1986、建築ノート（新建築社）1992、建築概論（学芸出版社）2003、建築設計学Ⅰ（学芸出版社）2009

主な作品

石崎眼科医院（1984）、吉田眼科医院（1987）、クリスタルタワー（1990）、大和合金神山工場（1993）、アップウェル船場（1994）、新日本海フェリー敦賀ターミナル（1996）、和歌山の丘のある家（2003）、シクロス九州営業所（2003）、大きな庇のある老人デイサービスセンター（2004）、散策デッキをもつ医院（2006）、路地をもつグループホーム（2008）、高野口小学校校舎改修・改築（2011）、和歌山大学観光学部校舎（2011）、大きな三角屋根のあるコテージ（2011）、小さな屋根群の体験交流工房／わらし（2011）、樹林の家（2013）、立ち寄りどころのある複合福祉施設（2016）、地域環境の形成を意図した福祉施設（2020）

主な受賞歴

早稲田大学村野賞（1970）、日本電気硝子設計競技最優秀賞（1970）、ウィーン市再開発国際設計競技3位入選（1972）、パリ新オペラハウス国際設計競技優秀賞（1983）、第4回日本建築士会連合会賞作品奨励賞（1989）、第15回ひろば作品賞（1991）、第2回大阪施設緑化賞優秀賞（1991）、建築士事務所全国大会 建築作品表彰大会会長賞（1992）、第38回大阪建築コンクール作品賞特選（1992）、BCS賞（1992）、第7回日本建築士会連合会賞優秀賞（1992）、インテリジェントアワード賞（1994）、グッドデザイン賞（1994）、1995グッドデザイン賞（1995）、大阪建築コンクール知事賞（1996）、第11回日本建築士会連合会賞作品奨励賞（1996）、グッドデザイン賞（1997）、大阪府北地区国際コンセプトコンペ佳作（2003）、第1回和歌山市優良建築物賞（2003）、グッドデザイン賞（2012）、日本建築学会賞（業績）（2013）、日本建築学会作品選集2013（2013）、JIA優秀建築賞（2015）、第2回きのくに建築賞（きのくに紀州材賞（2017）、グッドデザイン賞（2022）、第6回きのくに建築賞 佳作（2022）

略歴作成：吉永規夫/2008年 和歌山大学大学院システム工学研究科修士課程修了（本多友常研究室）

特集 第73回 青年技術者

【総評】

青年技術者顕彰は、35歳以下の優秀な技術者を顕彰する制度であり、今回で73回目を迎えます。本制度は応募者の業績そのものを評価するだけでなく、取り組み姿勢や業務において果たした具体的な役割を通じて、本人が青年技術者としてふさわしいかを判断するものです。したがって選考にあたっては、関わったプロジェクトの意匠や機能の水準、技術の先進性・独自性に加え、本人のプロジェクトへの関与度や、自身が描く将来のビジョン等を特に重視して評価を行いました。本年も多数の応募があり、厳正な審査を経て46名の方を青年技術者に選出いたしました。

世界的に不安定な社会情勢に加え、働き方改革に伴う執務・現場環境の急激な変化、さらにはAIの急速な普及による建築に関わる職能そのもののあり方など、技術者を取り巻く環境はかつてないほど不確実なものとなっています。応募者のみなさんがそのような状況をどのように捉え、将来を展望しているかについて応募資料から読み解きを試みましたが、一様にこうした時代の波に流されることなく、変化と真摯に向き合いながら「自分はどうあるべきか」を主体的に考えている姿が非常に印象的でした。様々な変化に柔軟に適応しながらも、ものづくりの根幹にある「人間中心であること」や「社会への貢献」といった本質的な問いに対し、それぞれが自分の言葉で思いを表現されており、技術者としての強い意志が非常に頼もしく感じられました。

また、これまでの社会で繰り返されてきた数々の変革期においても、信念と熱意を持った多くの技術者が時代を切り拓いてきたことに改めて思いを馳せ、この歴史ある青年技術者顕彰制度の価値を再認識いたしました。

選出された青年技術者のみなさんが、偉大な諸先輩方に比肩する、あるいはそれを超えるご活躍をされ、今後の建築業界と社会を力強く牽引していただくことを心より期待しております。



選考委員長 三宗知之／
(株)東畑建築事務所
本社オフィス大阪副代表

【設計・計画部門】

建築を取り巻く環境が大きく変化する中で、青年技術者たちは何を考え、何を大切にしながら設計と向き合っているのでしょうか。

寄せられた一つひとつの言葉に触れる中で、これまで積み重ねてきた実践や成果だけではなく、自らの建築観や仕事観を模索し、その実践を通して深めていこうとする姿勢が強く伝わってきました。

多くの方が、建築を単なる空間や建物の実現としてではなく、人や地域、社会との関係性の中で捉えていました。共感や対話、協働といった言葉が多く見られた一方で、その背景には、多様化する価値観や複雑な社会課題に向き合いながら、建築の果たすべき役割を問い続ける真摯な姿勢が感じられました。

AIをはじめとする技術革新が進む時代だからこそ、何を大切に、建築を通して社会に何をもたらすのかを問い続ける姿勢が、より一層求められるのではないのでしょうか。

一人ひとりの歩みや思索に触れ、次代を担う青年技術者の皆さんが、それぞれの立場から建築の未来に向き合い、新たな可能性を切り拓こうとしていることを心強く感じました。選考結果にかかわらず、この挑戦が今後の成長につながることを期待しています。

(駒井陽次)

【構造部門】

構造部門には9名の応募がありました。今年度の応募書類は、技術的水準の高さに加え、応募者の建築への向き合い方、課題解決に向けて如何に貢献してきたかがよく表れた内容となっており、総じて充実した審査となりました。

各資料では、多様な用途・規模・構造種別からなるオリジナリティに富んだプロジェクトが並び、応募者それぞれのアプローチで構造計画を実現していく過程が示されていました。幼少期の原体験や被災経験などを通じて形成された価値観（技術者としての根幹）が語られた資料は特に印象深く、単なる業績紹介を超えて、技術者として積み上げてきた確かな経験と充実感を感じさせるものでした。選考基準のとおり、その時に何を感じ、どう判断したのか、といった技術者としての思考がより明確に表現された方々が、審査員から高い評価を得る結果となりましたが、9名とも入選としました。

今後も向上心を忘れず、プロジェクトの中心となって果敢に挑み、後に続く者たちへ歩むべき道を示してほしいと思います。皆様の益々のご活躍を心より期待しています。

(秋田 智)

第73回青年技術者選考委員（順不同）



駒井陽次／
(株)Style-A
一級建築士事務所
代表取締役



黒川賢一／
(株)竹中工務店
開発計画本部長
(西日本担当)



秋田 智／
(株)安井建築
設計事務所
大阪事務所
構造部長



澤村晋次／
(株)日建設計エンジ
ニアリング部門
電気設備エンジ
ニアリンググループ
副代表



橋本 修／
(株)昭和設計
理事



安福健祐／
大阪大学
D3センター
教授



瀧野敦夫／
大阪大学大学院
工学研究科
地球総合工学専攻
准教授



森田英樹／
清水建設(株)
関西支店設備設計
部部长

【設備部門】

選考では、大規模な有名プロジェクトへの参加だけでなく、本人がそのプロジェクトにどのように業績に貢献したか、思いをもって取り組んだかを評価しました。

近年異常気象・脱炭素など解決すべき社会課題が多く、設備設計者への期待が高まっています。応募内容も同様の課題の解決過程を説明する内容が多く、皆さんが信念を貫いて挑戦し続けている様子がうかがえました。ZEBなどの脱炭素への取組、BCPを中心とした信頼性向上、建築と一体化した照明・空調計画、それらの検討に高度なシミュレーション技術を使うなどレベルが非常に高くなっています。さらにはBIMを活用した設備計画や建築・構造との整合による高度な施工検討など、より良いものをきちんと作ろうとする意気込みが伝わってきました。結果に飽きず、継続した努力をされており、今後の活躍と成長に期待しています。残念ながら選外となった方も十分に実力と経験をお持ちであったことを申しておきます。

設備設計業務の高度化と人材不足で多忙な状況ですが、皆さんの若い力と情熱は業界の明るい未来を予感させるものでした。今後も積極的に業界の発展に貢献していただくとともに、近い将来はリーダーとして業界の刷新をリードしてゆくような技術者になることを期待しております。

(森田英樹)

【施工部門】

今年度の施工部門では、「自身の主体的な取り組み」「課題抽出と実現のための創意工夫」「今後の展望」の3つの観点を出発点として評価しました。各案件はいずれも狭隘敷地、複雑で難易度の高い構造物、建設業に関する人手不足などの難条件をテーマにまとめられたものでした。これに対し仮設計画、施工計画、PC化、点群データ、ICT活用などを通じて、自ら課題を抽出し解決へ導いた点を高く評価しました。また関係者との積極的なコミュニケーション、次代を担う若手技術者の育成、施工環境改善への姿勢も共通して顕著で、それぞれが評価に値するものでした。

従前の古き良き技術伝承の重要性を踏まえこれを維持しつつ、働き方改革など時代に応じた変革を見据える姿勢が共通しており、ものづくりへの真摯な姿勢と将来のリーダーとしての成長が大いに感じられる内容でした。将来、業界を背負うリーダーに成長されることを期待しています。

(湯浅 肇)



青木康造／
大成建設(株)
関西支店建築部
技術室長



湯浅 肇／
(株)大林組大阪本店
建築事業部
生産技術部部長

設計・計画部門 22名

赤池 伸吉	株式会社大林組
浅沼 拓也	株式会社大林組
石川 真吾	大成建設株式会社
市川 雅也	株式会社竹中工務店
大屋 泰輝	株式会社大林組
影山 真平	大成建設株式会社
笠井 洸	株式会社竹中工務店
金井田雄介	株式会社日建設計
倉知 寛之	株式会社日本設計
坂井 章	株式会社安井建築設計事務所
境 祥平	株式会社大建設計
銭亀 夏彦	株式会社東畑建築事務所
滝口 恵美 (旧姓：久保田)	株式会社大建設計
中原 大貴	株式会社東畑建築事務所
浪川 稜馬	株式会社安井建築設計事務所
畑 雄人	株式会社東畑建築事務所
花岡 航	鹿島建設株式会社
廣澤 克典	大成建設株式会社
古田 大介	株式会社安井建築設計事務所
法山 千穂	株式会社大林組
南 明日香	株式会社竹中工務店
吉井 大貴	株式会社昭和設計

構造部門 9名

岡 遼悟	清水建設株式会社
北村 和哉	株式会社大林組
鈴木 悠矢	株式会社竹中工務店
野田 友輝	株式会社昭和設計
濱田 幸崇	株式会社大林組
藤田 尚大	株式会社竹中工務店
古田 馨梨	株式会社大林組
的場 弘晃	株式会社大林組
和田 拓也	株式会社日建設計

設備部門 10名

青木 一晃	株式会社日建設計
井上 友理	株式会社大林組
添原 洋平	株式会社大林組
田中 健資	株式会社大林組
多良 俊宏	株式会社日建設計
原 昂平	株式会社大林組
三原 裕貴	株式会社竹中工務店
村上奈々子	株式会社竹中工務店
安井 洋之	株式会社大林組
山形 弥里	清水建設株式会社

施工部門 5名

岡本 大地	鹿島建設株式会社
金田 成晃	清水建設株式会社
品川翔一郎	大成建設株式会社
瀬下 寛史	株式会社竹中工務店
西尾 萌	鹿島建設株式会社

第73回青年技術者 合計46名



あか いけ しん きち
赤池 伸吉

生 年 月 1992年 9 月東京都生まれ
最終学歴 2017年 芝浦工業大学院
建設工学専攻修了
業務経歴 2017- 株式会社大林組
現在 建築設計第一部
●担当した主なプロジェクト
2021年 ヒロセ関西工場
2023年 岩谷産業研修施設
2023年 ディスコ大阪支店
2024年 五反田JPビルディング

■青年技術者のことば

建築設計に取り組む上で、設計者として大切にしていることがふたつあります。

ひとつは、建築の設計を通じて場所に新たな価値を与えることを一生懸命考えることです。“場所”の魅力を最大化し、未来の風景として引き継いでゆくことが、建築のひとつの役割であると思っています。

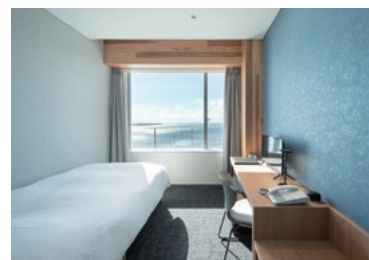
もうひとつは、建築をつくる“ひと”が抱えている課題や問題点を解決する努力を怠らないことです。問題を解決するためには時間をかけた丁寧な検討と対話が不可欠であり、それと共に分野を横断したチームでの思考の深度化や、技術による裏付けが大事だと考えています。

「場所」と「ひと」のための建築。そのふたつが互いにリンクし、共鳴しあうことで、長く愛される“良い建築”になると考えています。

ものづくりの現場を通じて、ものごとに対する新しい視座を得られることが建築の一番の面白さであり、私が建築設計に携わるおおきな原動力になっています。

■すいせん者

白岩宏明
株式会社大林組設計本部
建築設計第九部 部長



岩谷産業研修施設 (-2023)



ヒロセ関西工場 (-2021)



あさ たく や
浅沼 拓也

生 年 月 1990年10月栃木県生まれ
最終学歴 2015年 東北大学大学院
都市・建築学専攻修了
業務経歴 2015年 ㈱大林組入社
現在 本社建築設計部
係長

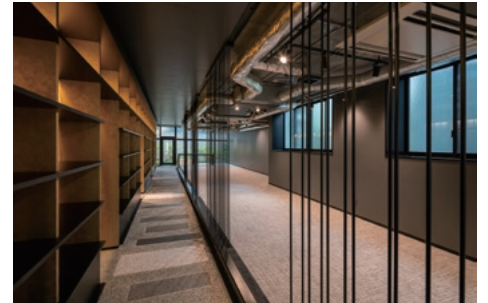
●担当した主なプロジェクト
2019年 パークタワーあすと長町
2019年 大林組東北支店オフィス改修
2023年 みとら京都・大正大学京都
アカデミア

■青年技術者のことば

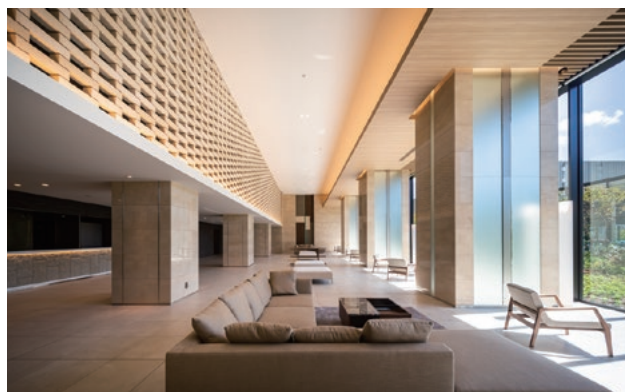
私が建築設計で大切にしているのはルーツを再解釈し未来につながる建築をつくることです。敷地の履歴や周辺環境、地域に蓄積された文化・風景、顧客の価値観や生業、背景にある物語など、ルーツや文脈を集約し、それらを再解釈したコンセプトを構築して新たなかたちに落とし込むことを、常に意識しています。都市と関わる上では、空間と境界のデザインに重きを置いています。建築は、周囲にとって外壁が立ち上がる行為で、基本的には閉じるものです。しかし境界の開き方・閉じ方を操り、建築空間のデザイン手法にまで落とし込むことで、都市や地域との関わりに心地よさを生み出せると考えています。そのように完成した建築が、人々の生活に馴染みながらも新たな刺激を与え、都市や街並みを少しずつ明るくしていくことに貢献できればと思います。また、設計の仕事は必ずしも一人の設計者が一からつくり上げるものではありません。関与の仕方は様々ですが、積み上げられた思いや経緯を尊重しつつ、自身の価値観や視点と融合させてそこでしか生まれない化学反応を楽しみながら、今後多くの良い建築をつくり続けていきたいと考えています。

■すいせん者

上原 耕
株式会社大林組
設計本部 副本部長



みとら京都・大正大学京都アカデミア



パークタワーあすと長町



いし かわ しん ご
石川 真 吾

生 年 月 1990年 9 月香川県生まれ
最終学歴 東京都大学大学院
工学研究科建築学専攻修了
業務経歴 大成建設株式会社
設計本部先端デザイン部
先端デザイン室
プロジェクトアーキテクト
●担当した主なプロジェクト
2019年 博愛会 相良病院 (一期)
2022年 OKI本庄工場H1棟
2023年 大成コーレック株式会社
川越事務所
グリーンリニューアルZEB改修
2023年 木下工業株式会社
新工場棟 新事務所棟
2024年～サーパス工業(株)
PROJECT BLOOM

■青年技術者のことば

私は建築を単なる「機能の器」ではなく、人・地域・社会という分断されがちな要素を編み直す「つながりの触媒」と捉え、設計に取り組んでいます。

特に入社以来設計として取り組んでいる生産施設においては、効率至上の「閉じた空間」を脱し、働く人が主役となり自発的な対話が生まれ、そこから新たな技術やアイデアが生み出される「創造的コミュニティ」への変革を試みています。そのためにユーザーである従業員の方々にもワークショップを通じて設計に参画するプロセスを取り入れ、個々の思いを空間に反映させ愛着のある空間へ昇華しています。

また、地域とのつながりは、その土地の歴史や文脈、植生、気象条件、伝統素材、工法などを丹念に分析し、建築に織り込む工夫を凝らしています。その場所固有の魅力を引き出し「街の誇り」となる佇まいを追求することで、社会との心理的な結びつきを創出したいと考えています。設計者として、対話と分析を積み重ね、建築を通じ、人・地域・社会との豊かな関係性を構築し続けることが私の思いです。

■すいせん者

渡邊智介
大成建設株式会社 設計本部
先端デザイン部 部長

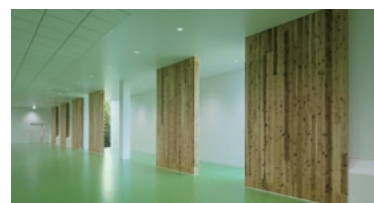
OKI本庄工場H1棟 ―地域と共にあり続ける工場―



木で囲まれたエントランスが来館者を迎える



206立米の秩父杉を活用したエントランス



地場産木材で作られたCLT耐震壁



風荷重を支持する「CLTバックマリオン」

KINOSHITA Fe26 木下工業株式会社 新工場・新事務所



今までの鉄骨加工工場を一新する、社員自らが作り上げた、魅せる鉄骨ファブ工場



組立柱が林立する安全通路



食堂吹抜けに面した耐震棚

サーパス工業(株) PROJECT BLOOM





いち かわ まさ や
市川 雅也

生年月 1991年11月愛知県生まれ
最終学歴 2016年立命館大学大学院
理工学研究科 環境都市
専攻修了

業務経歴 2016年㈱竹中工務店入社
現在大阪本店設計部主任

●担当した主なプロジェクト

2019年 御堂ビル竹中土木改修

2020年 武庫川女子大学公江記念館

2022年 Tallinn Architecture

Biennale 2022 国際アイデア

コンペティション

2023年 茨木市文化・子育て複合施設

おにクル

2025年 日本建築協会事務所改修(*)

2026年 神戸学院大学有瀬キャンパス

1号館

*日本建築協会U35でのプロジェクト

■青年技術者のことば

完成時ではなく、10年・20年後使
い手の日常が積み重なり、その建
築独自の文化が醸成された時の姿
が美しいと感じます。建築とラン
ドスケープの垣根を越えて地域環
境と共に成長し、必ずしも予期し
たものではなく、予想外に生まれ
る豊かさを受け入れるような建築
が私の理想とする建築です。

ランドスケープが時間の流れを捉
えるように、人の動作・音・風や
光など、絶えず動くものたちが交
わる中に居心地の良い環境は生ま
れます。人流や環境データ、音の
伝搬などを「エンジニアリング」
で可視化し、その結果が「一律の
制御」ではなく「人間にとって心
地よい許容範囲」を見つける指標
となるよう「感性」を働かせて検
証することを大切にしています。
人間の複雑で豊かな感覚を尊重し
ながら匠匠・構造・設備を統合す
ることで、人間と環境が有機的に
豊かさを生み出し続ける建築がで
きると信じています。

沢山のひととの対話の中で成長させ
てもらったことを糧に、日々前向
きに取り組んでいきたいと思いま
す。

■すいせん者

國本暁彦

(株)竹中工務店 大阪本店

設計部 設計第3部長



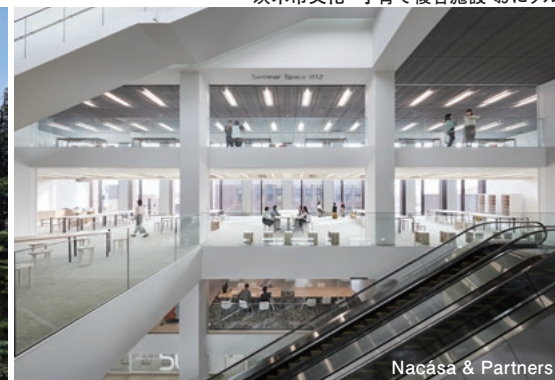
Nacasa & Partners



茨木市文化・子育て複合施設 おにクル

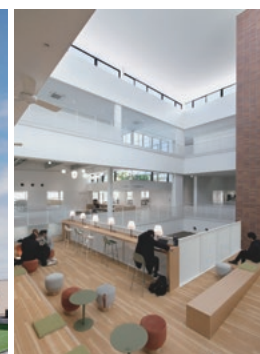


Nacasa & Partners



Nacasa & Partners

武庫川女子大学公江記念館



神戸学院大学有瀬キャンパス1号館



お や たい き
大屋 泰輝

生 年 月 1990年6月静岡県生まれ
最終学歴 早稲田大学大学院

建築学専攻 修了
業務経歴 2016年(株)大林組入社
現在、設計本部大阪
建築設計部

●担当した主なプロジェクト

2018年 大手町プレイス
イーストタワー
2022年 ダイハツ工業株式会社
京都工場 塗装組立検査工場
2023年 ハイウィン株式会社
神戸本社
2023年 日本生命淀屋橋ビル
2023年 大林組 大阪本店
2024年 忍ヶ丘の家 改修 (**)
2024年 2025日本国際博覧会
2025年 日本建築協会事務所改修 (*)
2026年 コベルコ・コンプレッサ
新事務所棟

*日本建築協会U35でのプロジェクト

**個人活動

■青年技術者のことば

私が大切にしているのは、建築の「ものづくり」に真摯に向き合いながら、設計者自らが建築の外側へと関与を広げ、場づくりに介入していく姿勢です。建築は完成して終わるものではなく、時間の中で使われ、変化しながら価値が育っていく存在です。そのため、運用や更新、関係性の変化までを見据え、時間的な変化を内包し、社会にひらかれたかたちで持続的に機能する条件を織り込みたいと考えています。また、建物竣工以降の「建築の人生」に設計者として関わり続けることが重要だと捉えています。そのため、設計以前から竣工後の運用まで、できるだけ長い時間軸の中で建築を取り巻く環境に関与したいと考えています。こうした実践は、利用者や都市に波及するだけでなく、建築そのものの質を高め、次の設計への確かな手がかりとなります。建築の外側に踏み出すことは、建築をより強く、より深いものにする行為であると考えています。

■すいせん者

堀池隆弥
(株)大林組 大阪本店
建築設計部 部長

大林組 大阪本店



撮影 ヴィブラフォト 浅田 美浩

忍ヶ丘の家 改修



撮影 大竹 央祐



かげ やま しん ぺい
影山 真平

生 年 月 1992年 4月 埼玉県生まれ
最終学歴 2017年 東京理科大学大学院
理工学研究科 建築学専攻
修了

業務経歴 2017年 大成建設(株)入社
現在 本社建築設計第一部

●担当した主なプロジェクト

2017年 NEI IKEBUKURO

2018年 MARQ OMOTESANDO ONE

2020年 東京避雷針工業横浜支店

2022年 大通西4南地区

第一種市街地再開発事業

2022年 大阪避雷針工業広島支店

(基本設計)

2025年 大成建設 総合窓口

リニューアル計画

■青年技術者のことば

私は、建築を単体で完結するものではなく、まちや人、時間などの多様な事柄の関係性によってかたちになるものと捉えています。敷地条件や施主の要望に応えるだけでなく、その場所が持つ空気感や、そこで過ごす人の振る舞いに目を向け、空間につながる小さな手がかりをすくい上げることが大切にしてきました。

東京避雷針工業横浜支店では、土地区画整理事業で変わりゆくまちの中に、施主がこの地で過ごしてきた時間を重ねることを考えました。その場所ならではの空間のあり方、素材の選定を通して、建築計画の背景にある多様なコンテキストを空間に落とし込むことを試みました。

大阪避雷針工業広島支店では、河川とともにある広島の大らかな風景と、敷地周辺のヒューマンスケールな空間を重ね合わせ、地域に静かに馴染みながら、豊かな内部空間のつながりを持つ建築を目指しました。

いずれの計画でも、対話を重ね、スケッチを描きながら、関係者の想いを受け取り、建築の輪郭を探してきました。一つの建築だけでは、社会の大きな課題を解くことはできないかもしれません。それでも、その場所ですごす人にとって心地よい場をつくり、周囲にも小さな良い変化をもたらすことはできると考えています。これからも、一つひとつの建築に誠実に向き合い、その場所にふさわしく、時間とともに魅力が増していく建築をつくっていきたいと思います。

■すいせん者

渡邊岳彦

大成建設(株) 設計本部

建築設計第一部 部長



東京避雷針工業 横浜支店



大阪避雷針工業 広島支店



NEI IKEBUKURO



MARQ OMOTESANDO ONE



か さい こう
井 洸

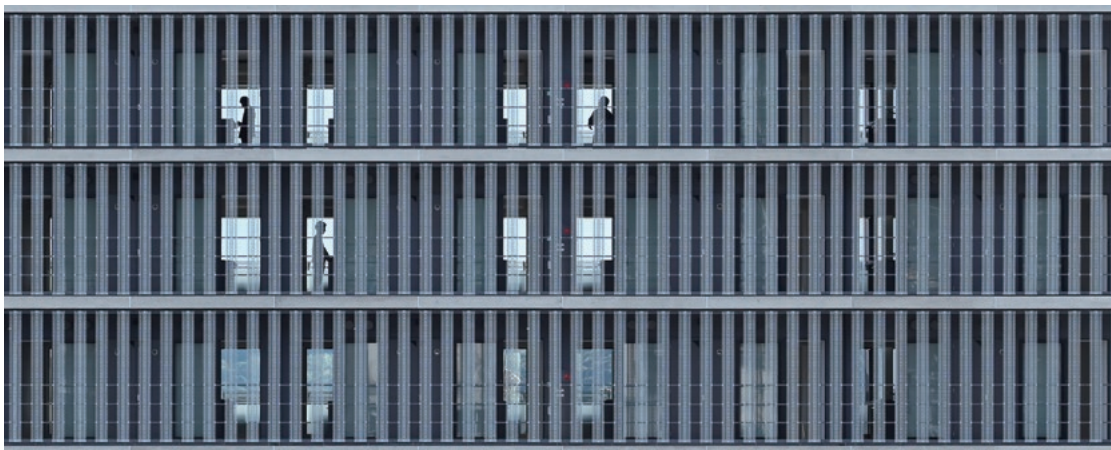
生 年 月 1991年7月秋田県生まれ
最終学歴 2016年豊橋技術科学大学
修士課程
業務経歴 2016年㈱竹中工務店入社
一名古屋支店設計部主任
●担当した主なプロジェクト
2018年 ピーチバレー屋内練習所(作)
2019年 愛知製鋼 厚生会館
2020年 愛知製鋼 保安棟
2024年 某技術研究所改修
2025年 東海理化 音羽寮・体育館

■青年技術者のことば

建築は心身の健康に関する芸術という言葉が心に残っている。そんな芸術をつくりたいという気持ちで建築設計に向き合っている。建築は、人や土地、環境とのつながりを切り離すことはできない。その場所特有の条件を読み取り、必然性の延長線上で一つのかたちに落とし込む。そこに唯一の価値と美しさが生まれると考える。一方で、建築作品のあるべき姿は、美しさだけの造形、合理性を求めた技術的解決、そのどちらでもないと思う。建築設計者は、デザインとエンジニアリングの間に立つバランス感覚が大切だと感じている。建築における豊かさの本質はいつの時代も同じで、これからも変わらない。けれども時代によって求められる価値観や感性、空間やディテールは変わり続けている。変わりゆく世界の中で必要なこと、求められていることを考えていきたい。

■すいせん者

水谷考治
㈱竹中工務店
名古屋支店設計部 設計部長



東海理化 音羽寮・体育館 — 企業と地域、みんなでシェアする社員寮

自動車部品メーカーの社員寮建替。隣接敷地にある工場の社員、職業訓練校の学生、社会人公式野球部員が住む社員寮と、地域開放も想定した体育館を一体的に計画した。アプローチ側には食堂・体育館・桜並木のパブリックガーデンを配置し、70mの軒下空間によってひとつながりとなるオープンエンドな構成とした。軒下空間を抜けた先にはかつての寮の基礎・擁壁をアップサイクルした寮生専用屋外スペース・菜園を設けた。企業と地域の新たな関係性が生まれ、開かれた社員寮のおおらかな風景が広がる。



かない ゆうすけ
金井 雄介

生 年 月 1991年12月兵庫県生まれ
最終学歴 2010年兵庫県立尼崎工業
高等学校卒業
業務経歴 2011年株式会社大阪日建
設計入社
2014年株式会社日建設計
転籍
現在 同社設計部門設計
グループ アソシエイト
●担当した主なプロジェクト
2015年 ダイキン工業 テクノロ
ジー・イノベーションセンター
2016年 城東区複合施設
2018年 龍谷大学 大宮キャンパス
東翼
2025年 淀屋橋ゲートタワー

■青年技術者のことば

私にとって建築とは、場所と時代
の中で立ち現れる存在です。敷
地の風土や歴史、社会や技術の背
景を読み取りながら、建築のあり
方を考えることを大切にしていま
す。

また、クライアントの要望や敷地
条件などの与条件を設計の手がかり
として捉え、現地・現物に学び
ながら計画を深めてきました。
建築は多くの人との対話によって
実現されるものであり、その過程
で得られる気づきが建築の質を高
めると考えています。

今後もディテールへの探求を重ね
ながら、場所や社会と長く関係を
結ぶ建築を目指していきたいと思
います。

■すいせん者

岡田泰典
株式会社日建設計
設計部門設計グループ 部長



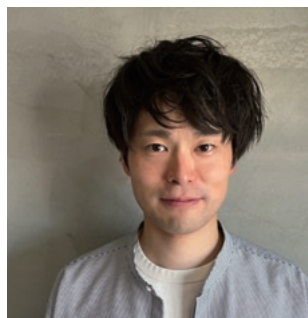
龍谷大学 大宮キャンパス 東翼

※ 撮影：岡本公ニ [テクニ・スタッフ]



淀屋橋ゲートタワー

撮影：伊藤 彰 [アイフォト]



くら ち ひろ ゆき
倉 知 寛 之

生 年 月 1990年 8 月 愛知県生まれ
最終学歴 2016年

京都工芸繊維大学大学院
建築設計学専攻 修了

業務経歴 2016年
株式会社日本設計 入社
現在 関西支社建築設計部

●担当した主なプロジェクト

2021年 文教大学東京あだちキャンパス
2025年 日本建築協会事務所改修 (*)

*日本建築協会U35でのプロジェクト

■青年技術者のことば

そこから何が見えるか。
それだけのことで、人は今いる場所を超えた広がりを感じたり、見えないものまで想像することがあります。

線、面、プロポーション、大きさ、配置、リズム、対称性、距離感、重力、光と影、幾何学、色彩、時間。建築固有の自律的な要素が人間と交感するとき、その想像力や感性が呼び覚まされる。「建築の聖性」とはそのような力のことだと思います。

人間は、建築の聖性によって、今・この場所を越え、遠く・大きな何かを想像できる。そうして建築は常に人間の思考や認識、身体感覚に揺さぶりをかけています。

一方で建築は、経済性、事業性、制度、基準、性能、時勢、環境、価値観など、建築にとって本来他律的でありながら実務上不可避な条件の中で成立するものです。

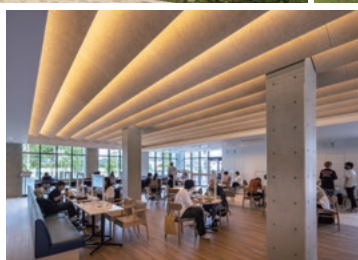
多様な条件を把握し、それらに応えることが「建築の社会性」へ繋がるのだと思います。

建築の聖性と社会性。その間を往復しながら、今・ここを越えた広がりを獲得すること。建築はそのためにあるような気がします。

人間と都市、社会のために。建築のアイデアを考え続けていきたいと思います。

■すいせん者

垣口知久
株式会社日本設計
執行役員関西支社長



文教大学東京あだちキャンパス 鳥瞰写真(2段目右): 野口毅、他写真: 川澄・小林研二写真事務所



日本建築協会事務所改修(*) (*日本建築協会U35でのプロジェクト) 写真: 大竹央祐



さか い あきら
坂 井 章

生 年 月 1991年 7月 大阪府生まれ
最終学歴 2018年 3月 関西学院大学大
学院総合政策研究科修了
業務経歴 2018年 4月
(株)安井建築設計事務所入社
現在大阪事務所
都市デザイン部主査
●担当した主なプロジェクト
2019年 JR三ノ宮新駅ビル
2020年 京都市中央卸売市場
第一市場新青果棟
2022年 某大学キャンパス
マスタープラン
2023年 金沢市中央卸売市場
2024年 仙台市中央卸売市場

■青年技術者のことば

私はチャレンジすることで社会に
対し新しい価値を生み出すこと
に仕事へのやりがいを感じていま
す。これまでのプロジェクトを通
して、以下に留意しながら日々の
業務に取り組んでいます。

①前例のないことへチャレンジ
し、新しい事例をつくる仕事を
すること

②他領域・異分野とのコラボレ
ーションを大切に複雑化・高度化
するまち・国の課題解決に寄与
すること

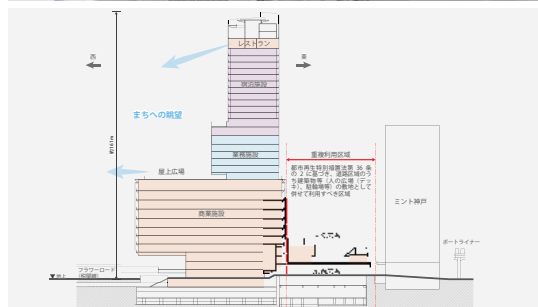
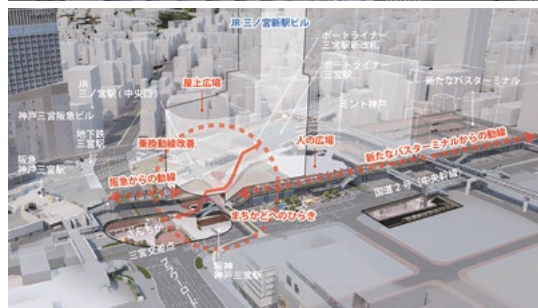
③業務内外を問わず、全てのチャ
ンスを逃さないこと、全てをチャ
ンスと思うこと

私がこれまでに携わってきたプロ
ジェクトは5年、10年、もしくは
数十年先にならないと完成しない
ものが大半です。日々変化の激し
い社会において、このような長期
プロジェクトをリードするには、
常にビジョン・目標を持つこと、
あるいはそれらを探し続け、実現
に向けて粘り強くチャレンジする
しかありません。発注者、プロ
ジェクト関係者と一枚岩になり、
こういったプロセスや仕事に取り
組む姿勢をこれからも大切にしたい
と考えています。このような行
為の積み重ねが、新しい都市の
風景を更新するのです。

■すいせん者

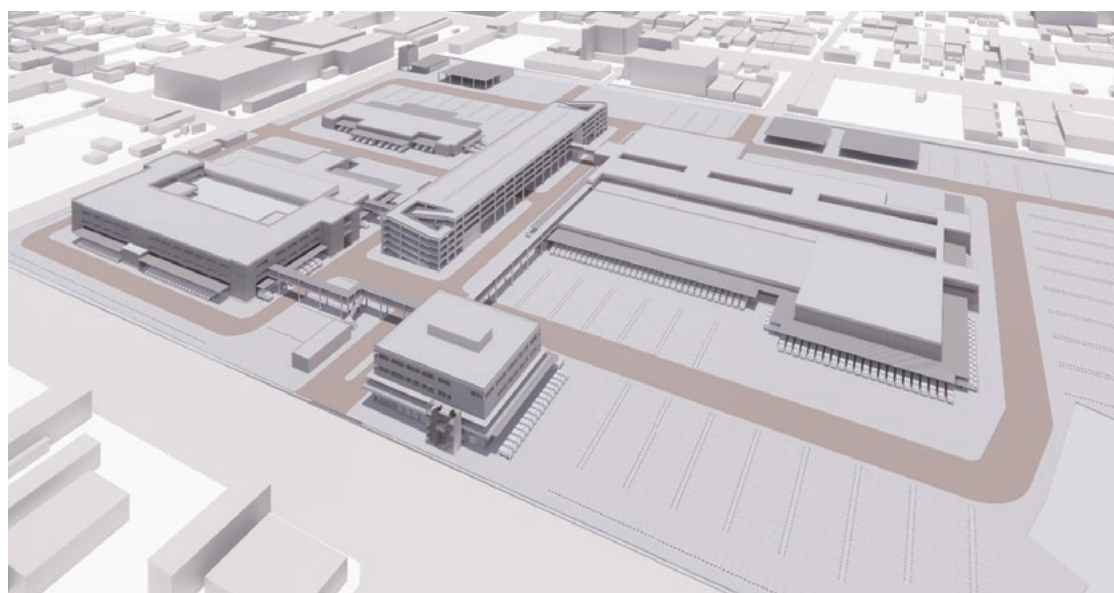
杉野卓史
(株)安井建築設計事務所
大阪事務所
都市デザイン部 部長 部門統括
国際部 部長 運営補佐
プロジェクト・マネジメント部
部長 運営補佐

JR三ノ宮新駅ビル



※パースは基本設計時点のものであり、最新の計画ではありません。

仙台市中央卸売市場再整備基本計画



※今後の協議等により変更する場合があります。



さかい しょう へい
境 祥 平

生 年 月 1990年11月福岡県生まれ
最終学歴 2015年九州大学大学院

人間環境学府
空間システム専攻修了
業務経歴 2015年(株)大建設計 入社
現在 九州事務所設計室
アシスタントマネジャー

●担当した主なプロジェクト

2016年 国立病院機構菊池病院
2017年 RWC2019福岡会場改修
2018年 福岡赤坂・東比恵ホテル
2019年 世界水泳2023会場整備
2022年 岡山市可燃ごみ広域処理施設
2023年 大分県営明野住宅
2024年 菊陽杉並木公園拡張整備
2026年 長崎市・長与町新浄水場

■青年技術者のことば

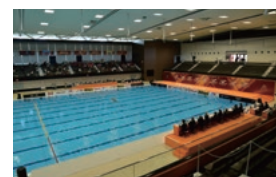
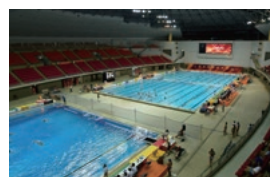
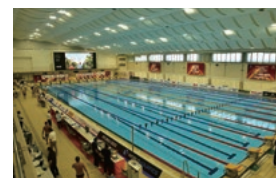
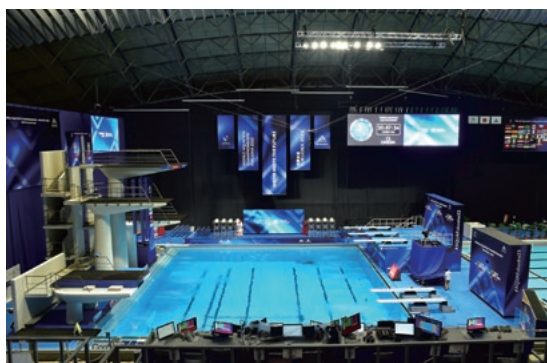
私は建築物を設計するとき、佇まいそのものの価値だけでなく、建物が使われることによって生まれる価値、文化や風景の一部として受け入れられる地域性といった要素が共鳴しあうようなものを常に目指してきました。それぞれの要素の重みは施設用途や建築主・利用者のニーズによって異なりますが、そのバランスをいかに保つかが重要だと感じています。

よりよい設計を進めるためには、建築主はもちろん設計チームや施工者、プロジェクト関係者の全員が目指すべき空間像を共有すること、その目標に向け綿密な対話を繰り返すことが必要だと考えています。そのために、社会情勢や経済状況を敏感に収集し不確実性に対するリスクを理解すること、そして建築主、利用者の要望を潜在的な部分まで掘り取り具体化することを、拙くとも誠実に示し続けることを心がけています。

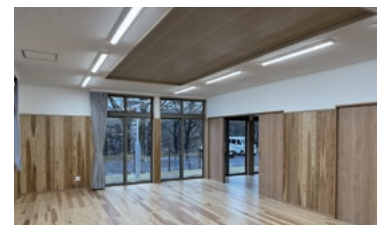
これまで非常に幅広い用途の設計に関わる機会をいただき、貴重な経験を数多くさせていただきました。これらの機会が決して当たり前ではないことを胸に刻み、今後も設計者としての重い責務と楽しさを感じつつ、けれども決して驕らず、日々精進したいと考えています。

■すいせん者

湯原洋史
(株)大建設計
上席執行役員
企画戦略本部長 兼 九州事務所長



世界水泳選手権2023福岡大会／世界マスターズ水泳選手権2023九州大会会場整備



大分県営明野住宅建替事業



ぜん がめ なつ ひこ
銭 亀 夏 彦

生 年 月 1991年6月愛知県生まれ
最終学歴 2016年名古屋大学大学院
環境学研究科都市環境学
専攻修了
業務学歴 2016年㈱東畑建築事務所
入社
現在、名古屋オフィス設
計室

●担当した主なプロジェクト
2016年 三交イン大阪淀屋橋
2017年 大阪市北部こども相談セン
ター
2018年 名古屋大学オークマ工作機械
工学館
2019年 豊田市若園交流館・豊田市立
若園中学校技術科棟
2021年 高浜町地域福祉総合センター
いぶき
2023年 大阪公立大学イノベーション
アカデミースマートエネルギー棟

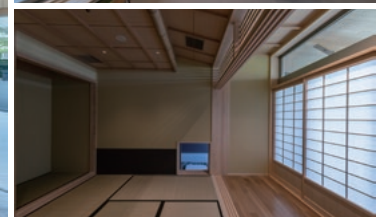
■青年技術者のことば

設計業務に従事し10年経過した今の自分を振り返ると、私の志す設計者像は学生時代の憧れだけで形づくられたものでは決してなく、社会に出て、クライアントの皆さまをはじめ、プロジェクト関係者の皆さま、利用者の皆さま、そして設計チームの皆さまとの出会いや経験を通じて育てていただいたものである、と実感するようになりました。これまで培ってきた多くの方々との関係性を大切にしながら次の10年、その先へと邁進していきたいです。

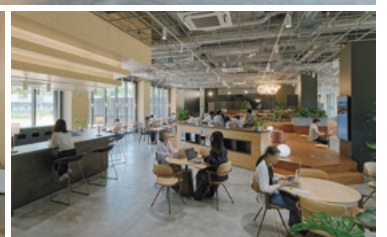
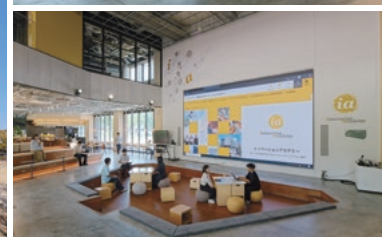
建築設計者はワークショップなどの手段を通じ、計画に携わる全ての人が主役であると実感してもらうために多様な価値観と向き合い続け、それぞれの想いをかたちに翻訳しながら社会へ発信していく役割を担っています。そのためには常に相手の立場や気持ちに寄り添いながら、最適な糸口を探り続けることが大切です。「建築設計という行為は設計者の頭でするものではなく、心でするものである。」このような姿勢をこれからも持ち続けられる設計者でありたいです。

■すいせん者

笹村 欽也
(株)東畑建築事務所
常務執行役員 名古屋オフィス代表



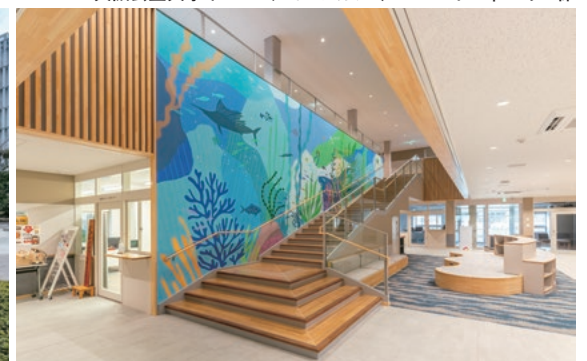
豊田市若園交流館・豊田市立若園中学校技術科棟



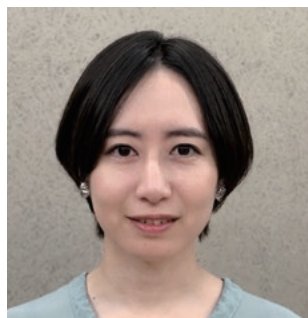
大阪公立大学イノベーションアカデミースマートエネルギー棟



名古屋大学オークマ工作機械工学館



高浜町地域福祉総合センターいぶき



たき ぐち めぐ み
滝口 恵美 (旧姓：久保田)

生年月 1990年5月大阪府生まれ
最終学歴 京都工芸繊維大学大学院
建築設計学専攻 修了
業務経歴 2015年㈱大建設計入社
●担当した主なプロジェクト
2015年 守口市立寺方南小学校
2016年 京都府立井手やまぶき支援
学校
長浜伊香ツインアリーナ
2019年 天王寺動物園ペンギンパーク
& アシカワーフ
2020年 小平市新ごみ処理施設
2023年 コンドーテック 大阪本社ビル

■青年技術者のことば

私は建築を、人々の居場所であり
抛り所と捉えています。設計者
は、その場で過ごす人々の姿を思
い描き、施主や利用者との対話を
通して思いを建築として実現する
役割を担っています。

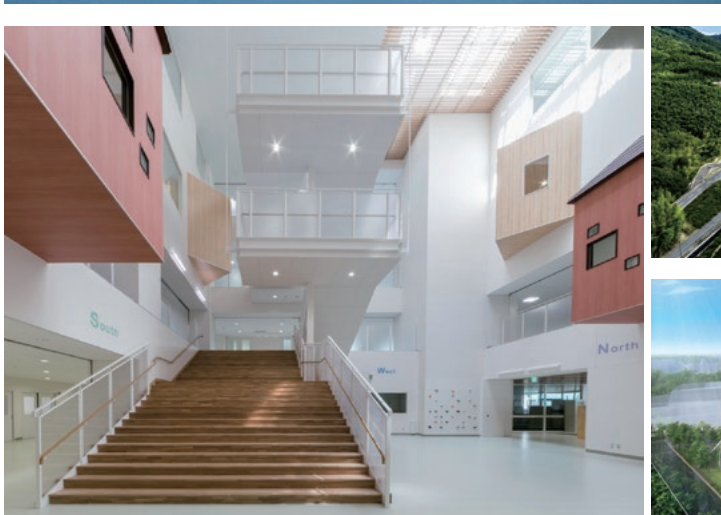
空間の豊かさとは、利用者が思い
通りに過ごし、それぞれの営み
が緩やかにつながりながら共存す
ることと考えています。学校や動
物園、オフィスなどの設計を通し
て、学習や交流、生物の健やかな
暮らし、仕事や休息など、多様な
営みを支える居場所づくりに取り
組んできました。

こうした経験を通して、柔軟に使
われる場を内包し、人の気配や活
気が外へにじみ出ること、人と
街、自然をやわらかくつなぐ「や
わらかな建築」を志すようになり
ました。その実現に向け、施主
との対話を重ねて要望の背景や潜
在的なニーズを汲み取り、思いを
期待以上の価値として形にするこ
と、周辺環境や土地の背景を読み
解き、その場所固有の魅力を引き
出すことを大切にしています。

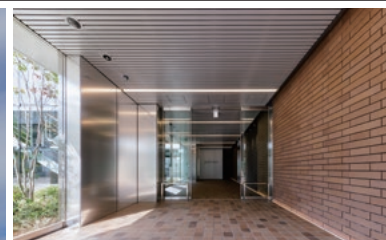
これまでご縁をいただいたお施主
様、関係者の皆様に深く感謝する
とともに、今後も一つひとつの建
築に丁寧に向き合い、人々に愛着
を持たれ、風景や暮らしに溶け込
みながら、長く受け継がれる建築
を目指していきたいと考えていま
す。

■すいせん者

衛藤年幸
(株)大建設 大阪事務所
第三設計室 室長



守口市立寺方南小学校



コンドーテック大阪本社ビル



天王寺動物園 ペンギンパーク&アシカワーフ



京都府立井手やまぶき支援学校



小平市新ごみ処理施設



なか はら たき
中原 大貴

生 年 月 1991年12月大阪府生まれ
最終学歴 2016年大阪工業大学大学院
空間デザイン学専攻 修了
業務経歴 2016年㈱東畑建築事務所
入社
設計室 技師

●担当した主なプロジェクト

2017年 DBC本社ビル
2017年 堺市原池公園野球場
2018年 ヤンマーシナジースクエア
2019年 ダイハツ工業㈱長岡京寮
2020年 高知市上下水道局庁舎
2021年 象印マホービンキッチンスタジオ
2021年 象印マホービン関東支店
2022年 中村区名駅南二丁目オフィス
2023年 象印ユーザーサービス本社

■青年技術者のことば

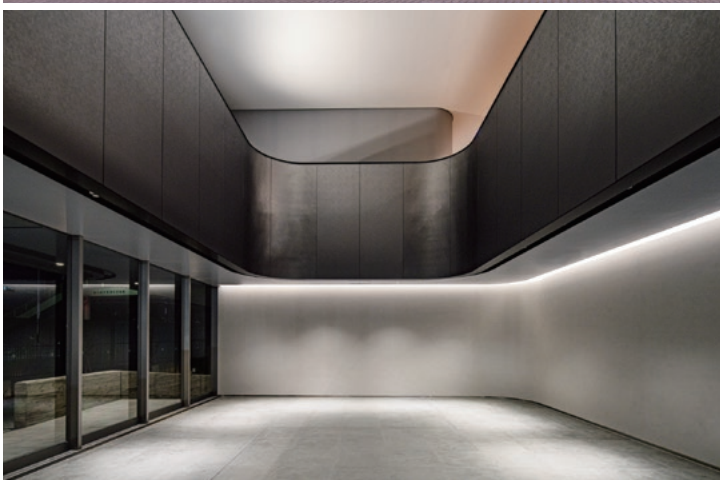
私は学生時代、建築の形や空間そのものが持つ魅力に強く惹かれていた。人がその場に立ったときに感じる驚きや感動こそが建築の価値だと盲信していた。しかし実務に携わる中で、建築は用途や機能、法規・環境条件そして建築主や使い手の思いがあって初めて成立することを実感した。同時に多様な条件や要望にただ応答するだけでは建築の質は生まれないことも学んだ。

その中で私が大切にしているのが純化という考え方である。多様な制約や与条件の中から本質的な要素を抽出して、それらを明快な空間構成へと再構築し、そのプロジェクトにおいて目指すべき在り方を明確に導き出すことで、建築の質を高めようとする試みである。またその過程では建築主や使い手との対話を重ねることを大切にしている。建築には唯一の正解がないからこそ、対話を通じて価値観や思いを共有し、そのプロジェクトにとってのより良い答えを探していきたいと考えている。今後も対話を大切にしながら、人と人、人と場所との関係をつなぎ直す建築を目指し、設計を通じて社会に新たな価値を生み出していきたい。

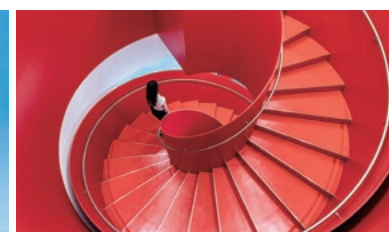
■すいせん者

根木和人
㈱東畑建築事務所
設計室 副室長

象印ユーザーサービス本社



ヤンマーシナジースクエア



ダイハツ工業㈱長岡京寮





なみ かわ りょう ま
浪川 稜馬

生 年 月 1992年12月神奈川県生まれ
最終学歴 2017年東京都市大学大学院
工学研究科建築学専攻修了

業務経歴 2017年
(株)安井建築設計事務所入社
現在東京事務所設計部主査

●担当した主なプロジェクト

2017年 エービーシー商会本社ビル
2018年 静岡県下田市庁舎
2019年 岐阜県本巣市庁舎
2022年 千葉県印西市複合施設 PFI
2023年 ポートレース場スタンド
2023年 神奈川県二宮町役場
2024年 ポートレース場競 整備棟
2025年 S社テナントビル

■青年技術者のことば

私は設計を行う上で、「問いを見つけ続けること」と「多様な視点をつなぐこと」を大切にしています。

与えられた条件だけでなく、その背景にある課題や可能性を読み解くために、敷地や地域、使い手の中に潜む疑問や違和感を見逃さず、その問いに向き合うことで、新たな提案や価値の創出につなげたいと考えています。

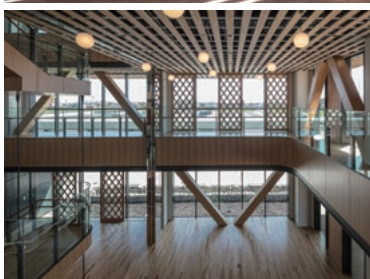
また、建築は都市や地域との関係性の中で成立するだけでなく、一人ひとりの行動や体験に寄り添うことが重要であると考えています。

そのため、都市から建物、人の行動まで多様なスケールを何度も往復しながら設計を進めることを心掛けています。

これまでの設計の中で、発注者や利用者、施工者、構造・設備設計者など、多くの人々との対話を重ね、目標や考え方を共有しながら、多様な視点を束ねることで、一人ではたどり着けない建築を実現していく楽しさを学びました。私の考えは今なお検証と更新の途中にありますが、今回の受賞を励みとしながら問い続ける姿勢を大切にし、人々の暮らしや地域に新たな価値を生み出す設計者を目指して、今後も研鑽を重ねていきたいと思っています。

■すいせん者

中原岳夫
(株)安井建築設計事務所
東京事務所副所長 兼 設計部長



【岐阜県 本巣市庁舎】



【千葉県 印西市複合施設 PFI】



はた ゆう と
畑 雄 人

生 年 月 1992年 3月神奈川県生まれ
最終学歴 2016年 東京都市大学大学院工学研究科建築学専攻修了

業務経歴 2016年 (株)東畑建築事務所入社
現在、第1設計室 主任技師

●担当した主なプロジェクト

2019年 志村警察署
2021年 パルテノン多摩
2023年 兵神装備株式会社
横浜プロモーションセンター
2024年 多治見警察署 (本庁舎)
2026年 北青山三丁目地区 再開発
2027年 鳥取地家簡裁庁舎
多治見警察署 (車庫棟)

■青年技術者のことば

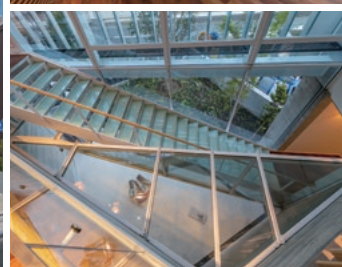
この度は青年技術者に選定いただき、誠にありがとうございます。私は、建築設計とは「強さ」と「優しさ」の両立が求められる仕事だと考えています。設計は、社会的な責任が伴う選択の積み重ねであり、決断と逡巡を繰り返す強さが必要とされます。同時に「ひと・まち・社会」への思いやりを意匠や性能として具現化する優しさも欠かせません。

これまで刑事施設の設計などを通して、直接は声を聞くことのできない利用者の方々に対しても想像力を働かせ、本質的な課題を探るように努めてきました。また、独りよがりな提案に陥らないように社内外を問わない関係者の方々との対話を重ね、多様な価値観を調停しながら設計を進めてきました。

AIの進歩をはじめ、社会が大きく変化する時代となりますが、人が人のために建築をつくる営みの中心には、人間の感覚や倫理、人同士の共同体が必要であり続けると信じています。その信念のもと、これからも謙虚で誠実な技術者として社会と向き合い、建築を通じた思いやりを「ひと・まち・社会」に届け続けたいです。

■すいせん者

阿蘇品尚士
(株)東畑建築事務所
常務執行役員
本社オフィス東京代表



兵神装備株式会社 横浜プロモーションセンター



多治見警察署 (本庁舎)



はな おか わたる
花岡 航

生 年 月 1991年 7月 三重県生まれ
最終学歴 神戸大学大学院
工学研究科建築学専攻修了
業務経歴 鹿島建設入社
現在、関西支店建築設計部
●担当した主なプロジェクト
2016年 西武ドーム大規模改修工事
2021年 某製薬工場改修工事
2021年 Aホテル
2022年 2025年日本国際博覧会
協会 施設整備事業 GW
工区
2024年 S社事務所

■青年技術者のことば

敷地の条件やクライアントの要求を読み取りながら線を引き、その線が人の手を介して空間として立ち上がり、誰かの経験となっていく、その一連のプロセスに設計者として関わることに喜びを感じます。

建築や空間、街の魅力を高める事が建築設計者の役割だと思い、多くの課題と制約に直面する中で、丁寧な設計を心掛けてきました。細部まで気を配り、利用される姿に思いを巡らせることが、多くの人にとって心地よく感じられる空間づくりにつながると考えています。

建築は、クライアントの要望に応えるだけでなく、社会から求められる条件にも誠実に向き合うことで、より強い訴求力を持ち得ると考えています。そうして生まれた建築が、社会やまちの人々の日常を少しでも豊かにできると信じ、私は設計に取り組んでいます。自らの設計が人々の暮らしを支え、社会に貢献できることを喜びとし、学びと挑戦を怠らず、社会に求められる建築設計者として成長し続けたいと思います。

■すいせん者

松島茂樹
鹿島建設(株)関西支店
建築設計部 部長



2025年日本国際博覧会 GW(グリーンワールド) 工区 提供:(公社)2025年日本国際博覧会協会 ©エスエス



ひろ ざわ かつ のり
廣 澤 克 典

生 年 月 1991年 6 月岐阜県生まれ
最終学歴 名古屋工業大学大学院
社会学専攻 修了
業務経歴 2016年大成建設㈱入社
現在関西支店設計部
●担当した主なプロジェクト
2016年 東京国際空港P4駐車場増築
2019年 EMITS
2021年 Creative Media Office
2022年 関西将棋会館
2024年 西兵庫プロジェクト

■青年技術者のことば

「ゆらぎを受け止める

器を目指して。」
私は建築を単なる機能の器ではなく、人と社会の関係を再構築する存在だと考えています。高度化・複雑化する社会では合理性が求められますが、その骨格の中に人の活動を解き放つ余白を織り込むことが設計者の役割だと考えています。機能を整理した先に、偶発的な出会いや創造性生まれる環境をつくりたいと思っています。

また、建築は都市・自然・歴史といった文脈の中にあり、外部の喧騒を受け止めつつ内部に静けさを宿し、閉じながらもまちとつながる関係性を大切にしてきました。断絶と接続、集中と交流、伝統と革新といった相反する価値を統合し、人が主体的に居場所を選べる空間を目指しています。

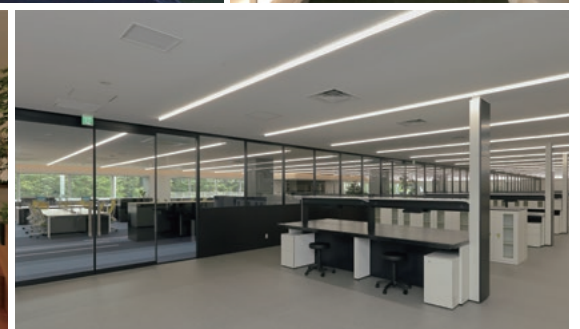
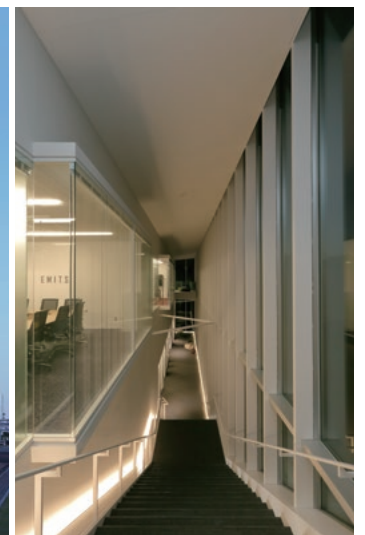
さらに、建築は完成で終わるものではなく、使い手とともに変化し続ける「未完の器」であるべきだと考えています。社会や技術が大きく変化する時代だからこそ、更新性や柔軟性を備えながら、人間の感性や文化の本質を見失わない建築が重要だと考えています。感性と合理性を往復しながら、複雑さを受け止め、未来への希望を静かに支える建築を創り続けていきたいと考えています。

■すいせん者

小林 浩
大成建設㈱
関西支店設計部部長



関西将棋会館



EMITS



ふる た だい すけ
古田 大介

生年月 1992年6月岐阜県生まれ
最終学歴 2017年名古屋大学大学院
環境学研究科都市環境学
専攻修了

業務経歴 2017年(株)安井建築設計事
務所入社
現在大阪事務所設計部
主査

●担当した主なプロジェクト

2017年 平群町総合文化センター

2018年 タイガー魔法瓶本社

オフィス棟

2019年 大阪国際学園中学校高等学校

サロンプラスアリーナ

2020年 西脇カントリークラブ

クラブハウス改修

2022年 神戸旧居留地91番館

2023年 白鶴酒造新醸造工場

2024年 太子町文化会館・歴史資料館

改修

2025年 某ホテル計画

■青年技術者のことば

単に美しい作品を世に送り出すだけでなく、建築を通じて「これまでにない解決策」を提示し、人々の思いをかたちにすること、それが私の目標だと考えています。

設計に取り組む際、建築主からどのような部屋や機能が欲しいのかリストをいただくことがあります。しかし、単にその要求を満たせば良い建築となるわけでは当然ありません。私たちの職責は、建築主がどうなりたいのか、その将来を描いて、建築に具現化することだと思っています。そして、その結果として生まれた空間や課題解決の技術が人々に共有されることで、建築家として社会に貢献をしたいと考えています。

■すいせん者

森 雅章

(株)安井建築設計事務所

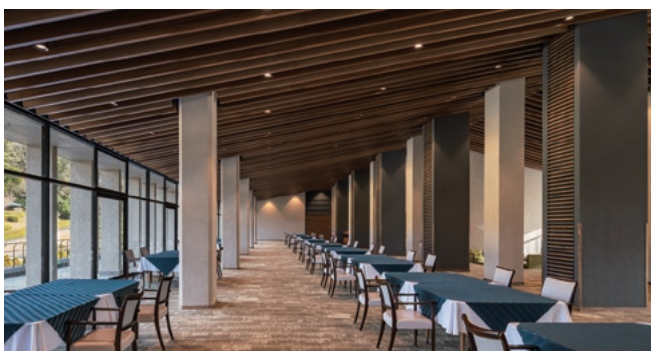
大阪事務所 理事 設計部長



神戸旧居留地91番館



大阪国際学園中学校高等学校



西脇カントリークラブ クラブハウス 改修



ほう やま ち ほ
法山千穂

生年月 1991年10月大阪府生まれ
最終学歴 2016年大阪市立大学大学院
工学研究科都市系専攻終了
業務経歴 株式会社大林組
広島建築設計部 主任
●担当した主なプロジェクト
2019年 東京農業大学
サイエンスポート
2020年 ミヤリサン製薬(株)坂城工場
動物用医薬品工場
2021年 ミヤリサン製薬(株)坂城工場
厚生棟
2023年 協和キリン(株)宇部工場
新管理棟
2025年 広島駅南口ビル

■青年技術者のことば

私は“ひと”の心を動かす「場」
をつくることを意識しています。

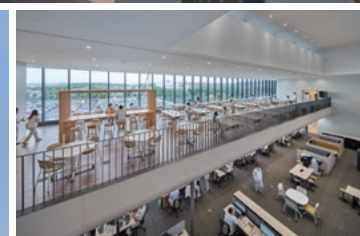
“つかうひと”のニーズを受け止めるだけでなく、その人々の特性や過ごし方、周辺環境まで丁寧に読み解くことで、“つかうひと”が、空間を通して新しい発見や行動のきっかけを得られるような建築をつくりたいです。心地よい居場所の発見や、既存概念にとられない多様な使い方の誘発、環境への意識向上など、その場で過ごす時間が豊かになることを目指しています。

また私はプロジェクトに関わったすべての“つくるひと”が、誇りを持つことのできる建築をつくりたいです。異なる知識や視点を持ち寄り、最適な形を探っていく過程はとても楽しく、その協働こそが“つくるひと”の想いを育て、建築に深みを与えると感じています。そのためには、最適解へ導く技術力だけでなく、仲間が意見を交わせる場づくりも、設計者として大切だと考えています。

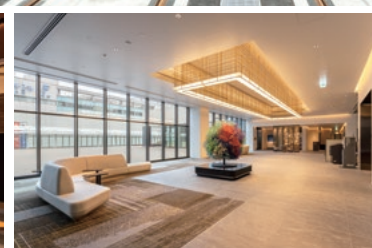
“つかうひと”の可能性を拓ける深い洞察力と想像力に豊む人間性を磨くこと、“つくるひと”の協働を引き出す技術力やマネジメント力を培うことを継続的に取り組み、ひとの心を動かす建築を実現できる設計者でありたいです。

■すいせん者

棕梨幾雄
(株)大林組
建築設計部 部長



協和キリン株式会社宇部工場 新管理棟



広島駅 南口ビル (ホテルグランヴィア広島サウスゲート)

生年月	1990年10月大阪府生まれ
最終学歴	2016年京都大学大学院 工学研究科建築学専攻修士
業務経歴	2016年(株)竹中工務店入社 2017年～開発計画本部 現在 開発事業本部主任
●担当した主なプロジェクト	
2018年	中村区役所等複合庁舎等整備 事業
2019年	須磨海浜水族園・海浜公園 再整備事業
2020年	名古屋市瑞穂公園陸上競技場 等事業
2024年	当社寮活用計画

私は多様な人間の活動を内包する都市の実現を目指しています。多様な人間の活動とは、都市を構成する最小単位である「個人」が、単なる「消費者」にならず「表現者」として振舞えることだと捉えています。そのような活動を生み出すために、私は次の視点を大切にしています。

①そこを訪れる人の属性や役割を固定化しない《受容度の高い場づくり》：敷地や建物の“内と外”や異なる性質の“領域間”をシームレスにつなぐなど、“境界”をばやかすことで多様なアクティビティを柔軟かく受け入れられる場をつくります。

②一定エリア内の地域資源の再編集による《群としての魅力づくり》：人口減少・経済縮小が進む日本で、都市が人を集めるためには、均質化・没個性化しない都市固有の文化やアイデンティティの醸成が重要です。これらは建築単体では実現しないため、敷地を超えた地域資源の循環を念頭に置いて取り組みます。

これかも私はこれらのアプローチを
実践しながら、また自分自身が
都市を楽しむ一個人としての感覚
も研ぎ澄ませながら、多様な人間
の活動を内包し、出会い・発見・
創造・交流の機会を生み出すこと
で、多くの人に愛される都市の実
現に貢献したいと思います。

栗原智一
(株)竹中工務店 開発計画本部
西日本3グループ長

公募提案時は施設配置や動線計画、コンセプトメイクを担当し、パーク（地域）とリゾート（観光）の調和づくりを目指した。推進段階は交通協議を担当し、駐車台数・配置や車両誘導の適正化によってエリア全体を安全に回遊できる計画実現に貢献した。



有料ゾーンをなるべくコンパクトにして歴史ある松林を保存しながら、一般利用可能エリアを最大化。また安心・安全に公園を回遊できる動線計画としている。



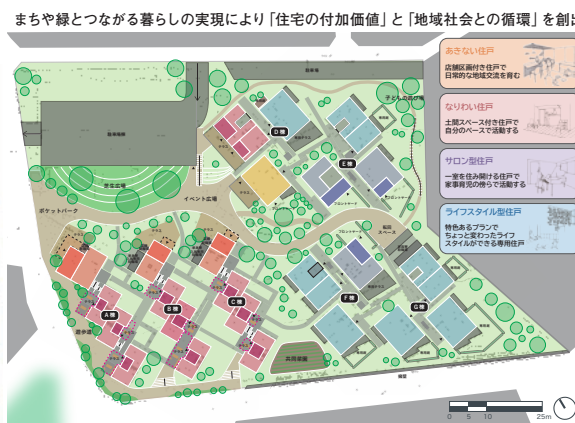
公募提案時のコンセプトメイクやゾーニング・動線計画を担当し、公園とスポーツ集客施設の融合を目指した。



住宅街と近接する運動公園において“市民にとってスポーツをもっと身近に”をビジョンに計画を行った。



寮機能停止に伴う賃貸住宅への改修について、初期の事業企画・コンセプト立案から、現在は設計段階においてプロジェクトマネジメントを担当。





よし い だい き
吉井 大 貴

生 年 月 1992年 4月愛知県生まれ
最終学歴 2018年名古屋大学大学院
環境学研究科都市環境学
専攻修了

業務経歴 2018年(株)昭和設計入社
2024年~2025年
某金融機関出向
現在、PM部主任

●担当した主なプロジェクト

2022年 健都イノベーションパークNKビル

2022年 枚方駅前再開発大阪府民セ
ンター

2023年 能勢町旧庁舎周辺整備基本
計画

2024年 曽根崎新地2丁目計画

2026年 某温泉入浴等施設

■青年技術者のことば

そこで過ごす人々の活動や賑わい
が生まれ、街の風景となり、やが
て思い出の場所となっていく、そ
んな建築の実現を目指して日々の
業務に取り組んでいます。

私の部署では基本構想・基本計画
段階から実施設計まで長いスパン
をかけて建築に必要な機能や使わ
れ方、時には敷地の場所を検討し
ます。設計の前段階から建築に関
われるからこそ、利用者や近隣住
民にとって居心地の良さや賑わい
をもたらす機能・仕様と経済的・
法的・施工的な実現性のバランス
のとれた方針を提案できると考え
ます。

設計者として携わる際も建築を使
う人や住民の使い勝手や居心地の
良さを想像し、数々の諸課題をク
リアしながら細部の納まりまでこ
だわった、永く愛される計画を目
指しています。

好立地の開発案件が次々と白紙と
なるような建設市況において、計
画の初期段階から携わる設計者
として豊かな建築を実現に導く仕事
に社会的意義を感じています。そ
の責務を果たせるよう、初心を忘
れず時代の変化を前向きに取り入
れていきたいと思っています。

■すいせん者

松下典央

(株)昭和設計

プロジェクトマネジメント部

執行役員

健都イノベーションパークNKビル



能勢町旧庁舎周辺整備基本計画





おか りょうご
岡 遼 悟

生年月 1993年1月岡山県生まれ
最終学歴 京都大学大学院工学研究科
建築学専攻修了
業務経歴 2017年清水建設(株)入社
2017年本社構造設計部
2023年関西支店構造設計部
●担当した主なプロジェクト
2018年 北久里浜たくちクリニック
2019年 大阪医科薬科大学新本館
2020年 神宮前二丁目PJ
2023年 飯田グループホールディングス
×大阪公立大学共同出展館
2023年 滝川中学校・高等学校
2024年 ST計画レストハウス

■青年技術者のことば

私は構造設計者には、安全性を第一としながらも、力学に基づいた高度な工学的判断を駆使し、その土地の条件や顧客のニーズ、意匠といった建築的要求との「最適解」を導き出す力が必要であると考えています。

私が構造設計を志した原点は、東日本大震災を機に抱いた「人々に安心と安全を提供したい」という思いです。しかし実務を重ねる中で、建物はただ頑丈に作ればよいのではなく、顧客の要望や予算、意匠といった建築的要求と安全性の「最適解（バランス）」を導き出すことが重要であると感じました。それは決して安全性を妥協することではなく、エンジニアとしての引き出しを増やし、技術力で課題を突破していくという、より高い次元への挑戦でした。これまででも、そしてこれからも、この最適解を模索する姿勢が変わることはありません。自らの技術力と判断力をさらに磨き、実務で培ってきた経験を糧に、建物を使うすべての人に安心を届けながら、人々の心を動かす「より良い建築」を創り上げていくことが、構造設計者としての私の目標です。

■すいせん者

小倉賢人
清水建設(株) 関西支店
構造設計部 主席設計長

鉄と膜による比類なき造形 ー飯田グループホールディングス×大阪公立大学共同出展館ー

■建築概要

本建物は、大阪・関西万博において、未来の都市や住宅の展示を行う、飯田グループホールディングスの民間パビリオンである。この建築「サステナブル・メビウス」は、万博のテーマである「いのち」への想いや希望を「メビウス」のかたちに託し、世界で初めて西陣織を纏わせるという、建築家・高松伸氏の壮大なコンセプトを具現化したものである。

■構造計画

不整形な3次元曲面の膜を支持する「斜めアーチ千本格子」は、その名の通り、京町家に見られる千本格子を傾斜させて、膜の曲面に合わせて形成した構造である。各部材には振りモーメントを含む3次元の応力に対応し、さ

らに膜形状に沿った骨組を形成して展示空間を最大化するため、曲げ鋼管を採用している。

千本格子に相当するサブアーチは主に、①膜の耐風性確保、②傾斜したメインアーチの倒れ止め、③耐震性能の向上という3つの役割を担っている。下に凸のサブアーチで結ばれた12本の上に凸のメインアーチ端部には、スラストを効率よく受けるためトプリングとボトムリングを配置し、斜めアーチ千本格子を鉛直支持するために「一方向ラーメン」を組んだ。両者の連結部においては、斜めアーチ千本格子の短辺方向の剛性と耐力を補完すべく、トプリングとルーフガーダーを剛接合とした。

■曲げ鋼管の継手ディテール

3次元曲線を描くメインアーチの形状

は、単曲率の曲げ鋼管を複数箇所折りながら継ぐことで近似した。振り角を有するメインアーチの曲率切替え部は、確実な応力伝達のため、はさみ板を介する納まりとした。

■3次元架構の精度管理

鉄骨建方を成功させるためには、曲げ鋼管単体の製作精度が極めて重要となる。サブアーチのブラケット角度が1°ずれるだけで、他端では約150mmもの誤差が生じてしまうため、ブラケット先端の角度を異なる3点から計測し、3次的に精度を管理する手法をファブリケーターと共同で構築した。さらに架構全体での仮組みを義務付け、建方前にすべての部材が確実かつ問題なく組み上がることを確認した。



写真1 全景 大屋根リング上空より

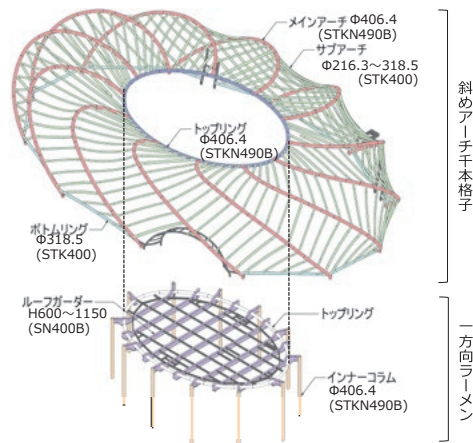


図1 架構計画図



写真2 「斜めアーチ千本格子」の鉄骨建方
(写真：木田勝久/FOTOTECA)

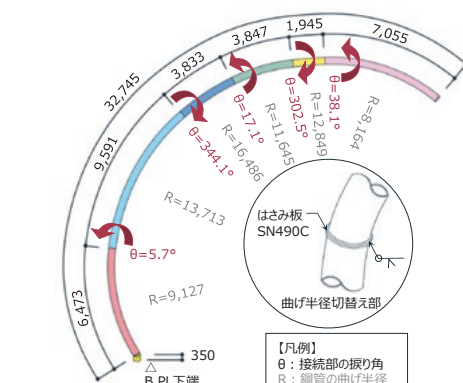


図2 メインアーチ形状の例



写真3 組立材の製作状況



写真4 全部材の仮組み



きた むら かず や
北村 和哉

生 年 月 1994年 2月大阪府生まれ
最終学歴 2018年神戸大学大学院工学
研究科建築学専攻
業務経歴 2018年 (株)大林組入社
2019年 大阪本店
構造設計部
2021年 本社設計部
2023年 大阪構造設計部
(広島駐在)
2026年 大阪構造設計部
●担当した主なプロジェクト
2019年 新大阪第2NKビル
2020年 クボタグローバル技術研究棟
台上棟
2021年 東光電気湘南営業所・社宅
2022年 太陽生命金沢営業所
2022年 笹塚駅南口東地区開発計画
2023年 KBM治験薬棟
2024年 某半導体工場改修工事
2025年 宇品寮・白島寮改修工事

■青年技術者のことば

構造設計業務に携わって七年が経過しました。構造設計は構造計算にとどまらず、意匠・設備設計との調整に加え施工条件の把握など、多角的で総合的な判断が求められる仕事だと実感しています。失敗や苦悩と向き合う時間もありましたが、「良い建築をつくりたい」という思いは今も変わりません。

私にとっての良い建築の第一条件は大地震等の外乱に対して人命を守る安全性が確保されていることです。

2024年の能登半島地震では、自身が担当した金沢の建物に大きな被害がなかったことに安堵すると同時に、構造設計者としての責任の重さと社会的な役割の大きさを改めて強く実感しました。設計後には力の流れを追ひ、外力が適切に処理されているか必ず確認することで安全性を検証する。この積み重ねこそが構造設計者としての判断力を養い「良い建築」の実現につながると考えています。

■すいせん者

福本義之
(株)大林組 設計本部
大阪構造設計部 部長

KBM治験薬棟

■計画概要

本物件は、新事業の推進を目的として設立された会社の新社屋および医薬品パイロットプラントであり、事務エリアと製造エリアで構成されている。治験薬棟という特性上、実施設計段階においても製造プロセスの変更が生じる案件であったが、要求条件を逐次正確に整理することで、合理的な設計を実現した。

外観は新企業としてのエネルギーを感じさせるファサードとし、内部は将来の設備更新やレイアウト変更に対応可能な高いフレキシビリティを確保している。

■構造概要

指定納期を実現するため柱材はJBCR385材(□-550×550)とし、生産エリアのフレキシビリティの向上を目的としてラーメン架構を採用した。BCP対策で保有水平耐力は建築基準法の1.25倍以上としている。

■生産設備のレイアウト変更対応

2階以上で防水性能が求められる床については、保護コンクリート厚を $t=150\text{mm}$ および $t=200\text{mm}$ とし、配筋はD13@200ダブルとした。一般的な保護コンクリートよりも厚みと鉄筋量を増やすことで、設備基礎を兼用している。この計画により、比較的軽量の設備機器はレイアウト変更時に新たな基礎を設置する必要がなく、保護コンクリート上で自由に設備基礎を配置できるため、将来にわたって柔軟な対応が可能となる。

■複雑なファサードの実現

サッシ開口の形状は部屋の機能や空間性に応じて計画している。開口高さが大きい部分は休憩室や執務室など、開放的な空間を実現したい箇所に配置した。一方、更衣室や便所など、プライバシーの確保を優先する部屋は開口高さを抑える計画とした。これらの要素を踏まえ、最終的な開口形状を決定している。

メインファサードの外壁にはECPの横張りを採用した。複雑な開口形状に対応するため下地鉄骨位置を細かく調整し、構造安全性の確認と不具合予防を図っている。

外壁は横連窓となっており、サッシによってECPが上下に分割されている。間柱がサッシを貫通しない洗練されたファサードを実現するため下地鉄骨と本柱を「持ち出し材」で接続する構造を提案した。これにより、面内方向の地震時応力に対して下地鉄骨の変形が本柱の変形に追従することで、サッシへの変形集中を防ぐことができる。以上の構造的工夫により意匠性と耐震性を高い次元で両立したファサードを実現している。



図1 外観

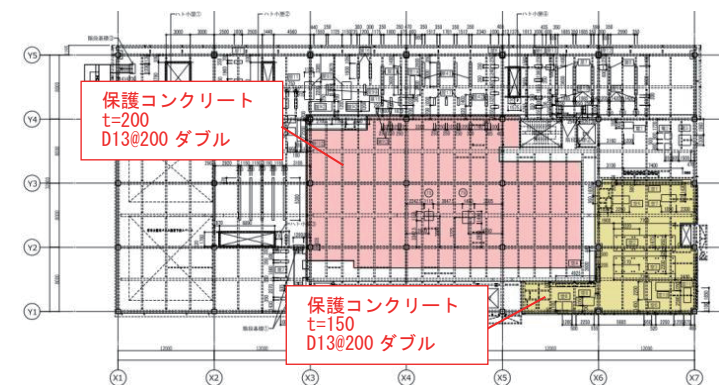


図2 設備基礎兼用保護コンクリート範囲



図3 外壁ECPの下地鉄骨



図4 持ち出し材

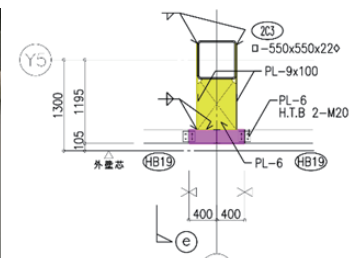


図5 持ち出し材詳細図

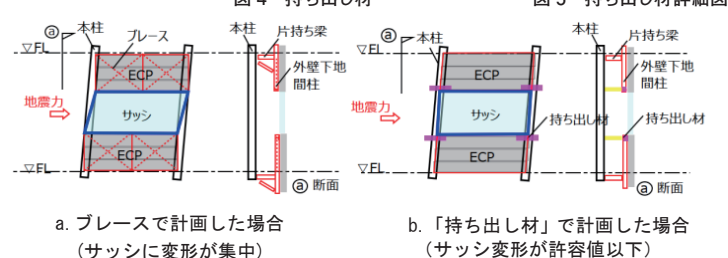


図6 ECP下地鉄骨面内変形追従の概念図



鈴木 悠矢

生年月 1991年2月愛知県生まれ
最終学歴 2015年名古屋工業大学
大学院工学研究科修了
2015年竹中工務店入社
2016年名古屋支店設計部
2017年名古屋支店作業所
2018年名古屋支店設計部
2021年本社設計本部
2023年名古屋支店設計部

●担当した主なプロジェクト
2017年 アサヒファシリテイズ
山門町社宅建替
2018年 岡谷鋼機中川配送センター
2018年 名古屋市国際展示場
新第1展示館
2023年 某本社事務所

■青年技術者のことば

大学時代にサンティアゴ・カラトラバの作品に感動し、構造が建築デザインを決めるという考え方があることを知りました。これが構造設計への興味の源となりました。ただし、地震国日本において、災害に強い建物を設計することが非常に大切だと考えています。そこで、「強・用・美」を実現する建築作りを目指し、日々設計に取り組んでいます。大学3年の時に東日本大震災が発生し、実際に被災地を訪れました。町が一瞬にして消えている光景は衝撃的でした。この経験を通じ、私たち構造設計者はあらゆる自然の力に対して対策を講じ、建物をいかに守るのか真摯に考えることの重要性を痛感しました。また、施工管理での経験から、施工者や他部署との連携を重視しています。計算で設計できても、実際に施工できなければ意味がありません。建築現場では人の手で建物が造られており、どうしたら施工しやすく、施工可能なのかを常に考えるようになりました。近年、複雑な形状の解析やデータを活用した最適化検討が増えていきます。しかし、データ活用はあくまで手段であり、その前段階の「人による構造計画」こそが、AIにも代替できない私たち構造設計者の使命だと考えております。

■すいせん者

石原清孝
（株）竹中工務店 名古屋支店
設計部 構造部門 構造部長

名古屋市国際展示場第1展示館（愛称：ポートメッセなごや）

■建築計画

本計画は、中部地区最大の展示面積を誇る「ポートメッセなごや」の中に建つ第1展示館（1973年）を建て替える計画である。縦基調の柱が連続した、波を想起させる流線的で躍動感のあるデザインは、新たなランドマークとしての外観を創出している。展示ホールは可動間仕切り壁で4つに分割でき、一体利用時には日本最大級の96m×210m（約2万㎡）の無柱空間を実現し、トラス下高さ20mを確保した。展示会をはじめ、音楽イベントにも対応するため400tの吊荷重を考慮した設計としており、さまざまな用途にフレキシブルに対応が可能な展示場である。



写真1 南西外観（波を想起させる流線形ファサード）

■構造計画

展示ホールは施工性に配慮し、内法96mスパンを、せい16.2m～7.6mのトラス梁とせい111mのトラス柱で構成される一方トラス構造を採用した。一方トラスのフレームは、桁行全長の210mを24スパンで均等分割した8.75mピッチで配置している。展示ホールの23列のトラスは、一般部トラス（20列）と可動間仕切り部トラス（3列）の2種類のみで構成している。トラスと直交する桁行方向は、トラス柱内の共用諸室、設備室を避け、座屈拘束ブレースやX型ブレースを配置し、トラス柱内を建築的に有効利用できるように計画した。これにより、利用者

にトラス柱の存在を感じさせない効率的な建築計画が実現できた。展示ホールを分割利用するための可動間仕切り壁上部に遮音壁を設置する必要があった。ボードで仕上げてしまうと遮音壁で大空間が分断され見え方が台無しになる。そこで、ガラス遮音壁として透明性を持たせることで一体感のある大空間を実現することができた。大スパントラスには大地震時に大きな上下動が発生する可能性があり、利用者の安全を確保するために吊物の落下防止は重要である。そこで、トラス梁とトラス柱の端部に方柱型のオイルダンパーを設置することで制振効果を確認する計画とした。

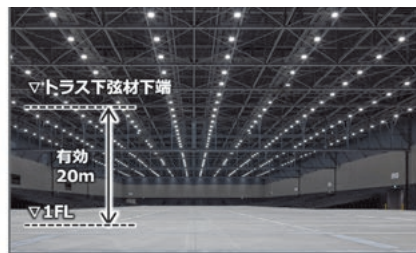


写真2 展示ホール内観（約2万㎡無柱空間）

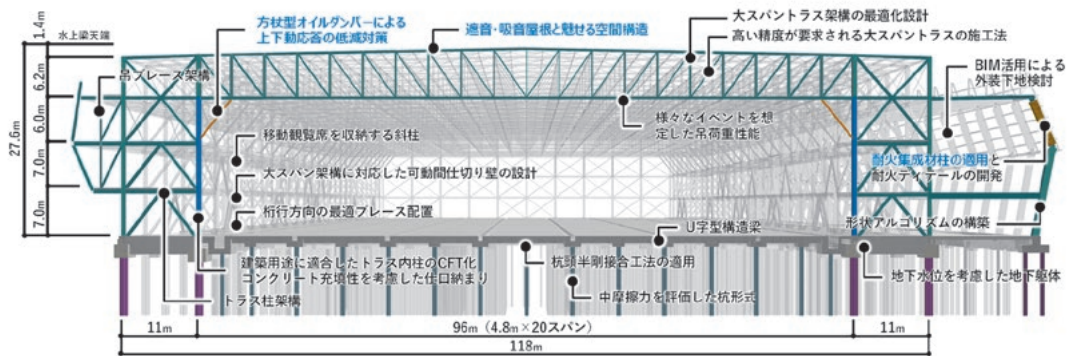


図1 構造架構バース

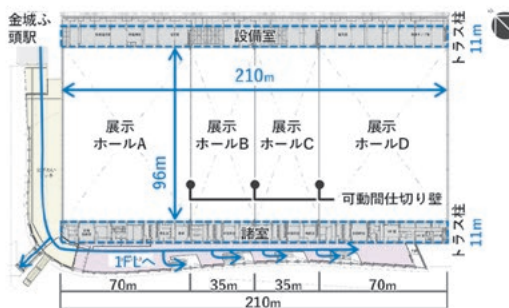


図2 2階平面図

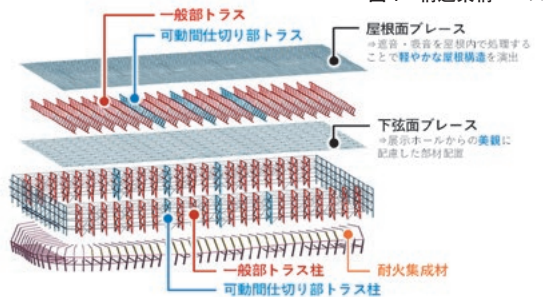


図3 構造架構計画

■強：災害に強い建築

可動間仕切り部トラスに関して、両側で計4本のオイルダンパーを使用することで、上下動変形を抑制でき、垂れ壁のガラス破損および可動間仕切り壁の損傷防止に大きな効果を発揮している。

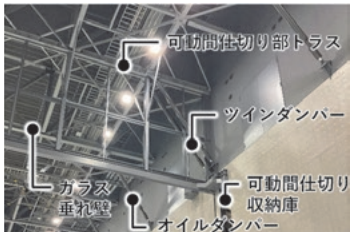


写真3 方柱型オイルダンパー設置

■用：環境負荷低減

主架構を含めて電炉材を多用し、環境負荷を低減している。コンコースには耐火鋼材の柱（150㎡）を使用することで、二酸化炭素の固定量を増やし環境負荷低減へと貢献した。



写真4 コンコース内観

■美：魅せる構造

上限面の水平ブレースが展示ホール内に露出せず、非常に美しいトラス空間を実現できた。施工面でも、無足場として鉄骨上から天井、屋根の順に施工可能で、約40%の工期短縮、人工削減を達成した。

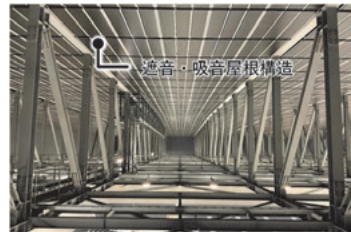


写真5 トラス内空間



の だ ゆ う き 野 田 友 輝

生 年 月 1992年12月大阪府生まれ
最終学歴 2017年神戸大学大学院

工学研究科 建築学専攻
修了

業務経歴 2017年㈱昭和設計入社
現在、構造設計部主査

●担当した主なプロジェクト

2017年 守口市立さくら小学校

2018年 大阪府立水都国際中学校・
高等学校

2019年 南国市地域交流センター

2020年 神戸市立垂水体育館

2021年 大阪公立大学看護学部学舎

2022年 越木岩センター

2023年 守口市立守口小学校

2024年 某水再生センター内煙突

■青年技術者のことば

人命と建物を守ることを前提とし、建築計画とのバランスを取りながら構造合理性や経済性を追求する「構造設計」に魅力を感じ、構造技術者となりました。

構造部材は建物が完成すると仕上げ等に隠れてしまうことが多く、利用者の目に触れることはほとんどありません。しかし「縁の下」の力持ちとして、建物利用者の日常もちろんのこと、大地震や大型台風などの自然災害から人命・建物を守るという、非常に責任の重い職能であると自負しています。日々の業務においては、力の流れ、建物の挙動をイメージした検討を行うこと、担当プロジェクトでは可能な範囲で何か新たな要素に挑戦することを心がけています。

また、建築主や意匠・設備設計者、現場の施工者といった多様な関係者の思いを汲み取り、丁寧なコミュニケーションを通じて信頼関係を築くことも大切にしています。

世の中は日々、目まぐるしく変化しています。入社10年目を迎え、これからも視野を広げて最新の技術や知識を貪欲に吸収・利用し、建築主や協働する仲間たちと共によりよい建築を実現できる技術者になれるよう、日々研鑽を続けてまいります。

■すいせん者

浅野康弘

㈱昭和設計

構造設計部 部長

■建築計画コンセプト

次世代のグローバルリーダーを育成する全国初の公設民営の中高一貫校の新校舎の計画である。国際バカロレアの教育プログラムを実践するための先進的な学習環境の充実と、生徒自らが学び、社会で生き抜く力を身に付ける多様でクリエイティブな空間構成とした。周辺の緑豊かな自然環境を取り込む中庭を中心に、生徒・教師が毎日を過ごす生活の場として居心地のよい空間の連続が、課題を自ら選択し、自ら探求する学習スタイルを実践する場として様々なアクティビティを誘発する。

■建築計画概要

校舎全体では延床面積約12,619㎡のRC造+S造+SRC造の5階建ての建築物である。中庭を囲んで普通教室棟・特別教室棟・体育館棟を配置し、回遊型の構成としている。また、普通教室棟の北側には多目的室棟を配置している。

■構造計画概要

階高・振動性状の違いおよびスラブの連続性による構造合理性を考慮し、エキスパンションジョイントにより構造的には4棟に分割した。構造種別については、耐震性・使用性・経済性などを総合的に評価し、鉄筋コンクリート造を基本とした。架構形式については、各棟の平面計画と耐震要素のバランスを適切に考慮して決定した。体育館棟アリーナ直下には柔剣道場が計画されており、無柱空間を実現すべく、プレストレストコンクリート梁を採用した。

■構造上のポイント

①体育館棟—鉄骨トラス梁—

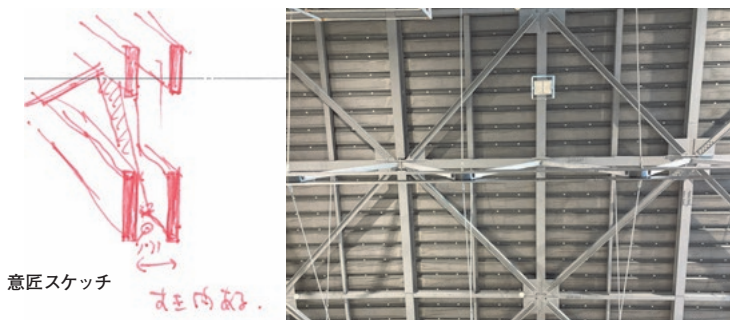
短辺方向32m×長辺方向42.5mのアリーナが配置されている。この無柱空間を実現するための鉄骨トラス梁について、設計初期段階から意匠担当者と共にデザインについて話し合った。意匠のイメージは、トラス斜材を上下弦材の間に挟むというような形状であった。そこで、上弦材は屋根面を形成する必要もあることからH形鋼、下弦材を2枚の鋼板とした。また斜材には小径の角形鋼管を用い、軽やかなトラスとなるようにした。

②普通教室棟—張り出し鉄骨—

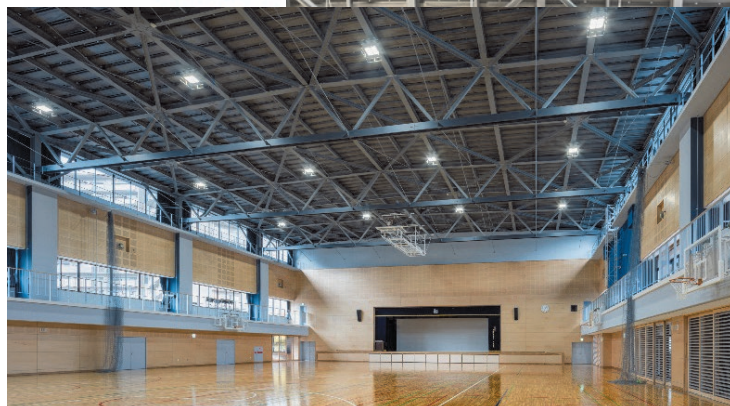
空間に多彩な変化と奥行きを与えることを意図し、普通教室棟の廊下には、中庭に面して各階で少しずつ離れながら約5m張り出したスペースが計画されている。意匠のイメージを具現化させるべく、張り出し部は鉄骨造とし、上階RC部から設けた吊り材により吊る形式とした。吊り材のみで浮かすというシンプルな架構計画としたことで、浮遊感のある軽やかな外観、空間とすることができた。



中庭から見る校舎（左：普通教室棟、中央：特別教室棟、右：体育館棟）



意匠スケッチ



①鉄骨トラス梁



②張り出し鉄骨



はま だ ゆき たか
濱田 幸 崇

生 年 月 1991年1月三重県生まれ
最終学歴 2015年大阪大学大学院
工学研究科地球総合工学
専攻修了

業務経歴 2015年(株)大林組入社
現在本社構造設計部所属

●担当した主なプロジェクト

2017年 中尊寺光勝院
2018年 旭化成株式会社
鈴鹿製造所 増築工事
2019年 N-FOREST新築工事
2019年 富士ソフト 新名古屋ビル
ミヤリサン食堂棟増設
プロジェクト
2021年 GRANODE FUNABASHI

■青年技術者のことば

今回の応募にあたり、これまでの構造設計を振り返る。

これまで超高層ビルの地震応答解析を皮切りに、寺院、事務所、病院、生産施設、共同住宅など多様な用途の構造設計に携わり、解析力と設計力を培ってきた。初期には各種指針や解析ソフトの理解に苦心しながら、動的解析・座屈解析など幅広い手法を習得した。業務をこなし、誰のために・何のため構造設計をしているのか、視野を広げること意識した。最初は社内施工部門に目線を広げ、後に意匠・設備設計、施主や建物を使う人々、建物が将来どのように使われていくか――

視点を広げながら構造設計として付加価値を提供できるように取り組んできた。

構造は完成後に目に触れにくい。けれど、建物を使う人が「ここで大丈夫」と感じられること、現場が「この納まりならつくれる」と前に進められること、発注者が「この判断なら任せられる」と思えること――そうした“誰かの安心”は、確かに構造設計の積み重ねでできている。自分はこれまで、その安心を形にする仕事に向き合ってきたのだと思う。今後もさらに視野を広げながら、誠実に構造設計と向き合っていきたい。

■すいせん者

河辺美穂
(株)大林組 設計本部
構造設計部 部長

N-FOREST新築工事 一作る人の安心を形にする一

■計画概要

日本特殊陶業株式会社小牧工場における新事務所棟N-FORESTの新築プロジェクトである。工場敷地内に分散した事務所機能を集約させ、新しい企業の顔づくりが主な課題となった。セラミック素材の「磚子」ブロックを透かし積みにしたルーバーを外装デザインに採用した(写真1)。

1階に設けたカフェは従業員と近隣住民がともに憩える空間とした。建物は事務所の機能を超えて、それぞれの利用者に配慮し、「近隣地域とつながる企業の新拠点」という思いを元に計画した。

■構造計画

構造種別は鉄骨造を採用し、18mの無柱空間を実現。構架形式は鉛直ブレースが無く、間仕切り計画の自由度の高い純ラーメンとした。基準階階高は4.2mに設定し、小梁を長手方向にかけ、天井設備配管を大梁小梁間にまとめ、一部を直天井にするシステムを提案。梁にアルミの反射板を取り付け、天井設備配管に設置した照明からの反

射光が執務室の明るさを確保した(図1、写真2)。

このシステムを実現するために、横補剛省略工法(構造性能評価取得済)を採用。床スラブの補剛効果を適切に評価することで、必要な構造性能を担保しながらも、通常の架構形式で必要となる大梁の横補剛材を大幅に削減。床には4m以上のロングスパンにも対応可能な高耐荷重剛性デッキを採用し仮設手間を省力化した。執務空間の小梁せいは大梁せいと同じ1mとし、執務室の鉛直歩行振動に対して配慮した。揺れを感じにくい安心できる執務空間を実現した。

■ファサード計画

ファサード面はこの建物の顔となるセラミック素材の「磚子」ブロックによる透かし積みルーバーとそれを支持する約2mの片持ちハーフPCaスラブで構成。ルーバーの配置は日射遮蔽と近隣住宅への視線に配慮して配置を決定した。

■施工部門との協調

特徴的なファサードを構成する片持ちスラブは施工性・精度確保のためハーフPCaとした。計画当初は仮設として建屋の鉄骨から吊る、支保工をつくるといった支持方法が検討されていたが、ルーバー施工などの後工程に影響がでる。そこでハーフPCa底と鉄骨を一体化しておき、現場にて本体鉄骨梁で支持する方法を開発。取り付け方法の簡素化・施工時の安全性の向上。後工程の工期短縮を実現した。(図2、写真4)支保工が無いPCa底の施工の実現により、軒下に支保工の痕跡がなく、RC素地仕上げの底の意匠性を向上させた(写真3)。

■プロジェクトを通して

本物件は構造技術者として、初めて建物一棟すべての設計を担当し、技術提案を考え、悩み抜いた物件である。与えられた条件に留まることなく、様々な技術的解決案を提案することで価値を提供することができ、何よりも自分のアイデアが形になることに喜びを感じた。



写真1 企業の顔となるファサード

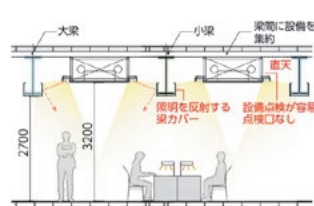


図1 執務空間断面図



写真2 明るく開放的な執務空間

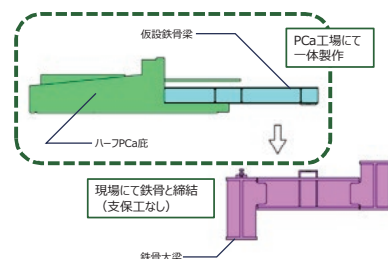


図2 ハーフPCa底支持要領

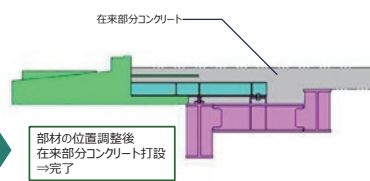


写真3 軒裏 RC素地仕上げの底



写真4 PC底施工後のルーバー取り付け状況



ふじ た なお ひろ
藤田 尚大

生 年 月 1990年 6 月宮崎県生まれ
最終学歴 2015年 京都大学大学院
工学研究科修了
業務経歴 2015年 竹中工務店入社
2016年 大阪本店設計部
2017年 京都支店作業所
2019年 大阪本店設計部
●担当した主なプロジェクト
2016年 ローレルタワー梅田ウエスト
2016年 山荘 京大和・パーク ハイ
アット 京都 (2017-施工)
2017年 ジョルノ・プラウドタワー
堺東
2017年 本願寺津村別院北御堂耐震
改修
2019年 日亜化学工業辰巳工場TN11棟
2020年 IHIインフラスクエア堺新事
務所
2020年 THE NORTH RESIDENCE
2021年 パティナ大阪
2021年 某大規模複合施設
2022年 某エネルギー施設対応

■青年技術者のことば

私の建築のルーツは少年時代、実家の新築を手伝った経験にある。建築には作り手のドラマがあり、その記憶を留めることが建築の一つの役割であるという考えは、そのころから変わらない。この思いを確かなものとしたのが入社後の二度の施工管理の経験であり、自身の設計姿勢として標榜する「開かれた構造設計」という思想の原点にもなっている。私の描く理想の構造設計者像は、専門領域に没頭するスペシャリストではなく、意匠や設備領域、施工、ひいては社会にまで動きかけ、説明を尽くすことのできる姿である。この「開かれた構造設計」という思想のもと、セオリーだけに囚われず、想像力を働かせ、知恵を絞り、周りを巻き込んで、どこかにある最良の選択肢を追求する姿勢を実践し、作り手のドラマを自らの作品に刻み続けている。そしてキャリアとしては、若手から中堅へ。土壁にまみれ、大工の手仕事を見つめていたいくつかの少年は今、建築の未来をどこまで見通せているだろうか。

■すいせん者

前田達彦
(株)竹中工務店 大阪本店設計部
構造第4部門 グループ長

古都の裾野に連なる和風建築群 ―山荘 京大和・パーク ハイアット 京都―

■建築概要

古都・京都東山の裾野に広がる歴史的な木造建築群と庭園を有する老舗料亭「山荘 京大和」の敷地に、分棟式のホテルを新築する計画である。景観に配慮して高さやボリューム感を抑えながらも、ラグジュアリーホテルの要求に合致した建築機能を備えるべく、20mを超える大深度地下にバックヤード機能の多くを沈め、地上には高さを抑えた軒の深い和風建築を分棟配置した。木造建築群や庭園と調和して上質な空間体験を生む。

■構造概要

高低差28mの敷地における計画実現の要となるのが、斜面最上部の巨大擁壁（J棟：建築用途は備蓄倉庫）である。回転圧入工法による鋼管連壁と、逆L形RC造擁壁の合成構造の開発・設計を担当し、施工時の山留め機能を兼用することで安全な掘削工事に貢献した。この擁壁は土砂災害特別警戒区域の解除にも寄与している。またラウンジ棟（C棟）の設計も担当し、地下のRC造と地上のS造で通り芯が異なる複雑な建築計画に対し、必要最低限の構造要素を精査・配置し、空間利用の最大化に貢献した。ジョブローテーションで施工管理も担当し、自らの設計を自分の手で施工し、完成に導く経験を得た。



鉄の魅力を追求した新たなオフィス ―IHIインフラスクエア堺新事務所―

■建築概要

橋梁・水門メーカーの工場敷地内に事務所ビルを新築する計画である。「明・広・快」をコンセプトとし、のこぎり形状の屋根によるハイスାଇドライトや、4つの大きな吹抜けを介して繋がるシームレスなオフィス空間が特徴である。

■構造概要

コンセプトに対する構造の答えとして、準耐火建築物であることを活かして鉄骨を露出させ、軽やかさと安心感を併せ持つ鉄骨造の魅力を中心に押し出した。ブレースを窓の少ない外周に集約し、中柱を厚肉かつ小径化することで、間仕切りのないオープンな執務空間を実現した。2、3階は大梁とスラブの天端、大梁と小梁の下端を揃え、天井高を最大化し直天空間の見上げの美しさに配慮した。屋根架構は、応力伝達に配慮して勾配屋根レベルに合わせる部材と、見上げに配慮してレベルを揃える部材を整理し、ブレースのガセットの向きや母屋の接合部までディテールに拘った。吹抜けの階段やシャフトレスEVのレール支持架構などの二次部材、手摺やサインに至るまで、一貫して軽快で洗練された鉄のデザインを追求した。





ふるた かおり
古田 馨梨

生年月 1990年6月愛知県生まれ
最終学歴 2016年名古屋大学大学院

環境学研究科都市環境学
専攻修了（工学修士）

業務経歴 2016年（株）大林組入社
2017年大阪構造設計部
2019年本社構造設計部
2021年大阪構造設計部
2023年九州支店設計部
2026年大阪構造設計部

●担当した主なプロジェクト

2017年 大阪みなと中央病院
2017年 宝塚リハビリテーション
病院（増築棟）
2018年 大阪府済生会富田林病院
2020年 品川駅開発プロジェクト
（4街区）
2020年 品川駅開発プロジェクト
（北口）
2022年 神戸長田物流センター
2022年 寺崎電気加美工場
（再編計画・D棟）
2023年 ルネサス川尻工場
2024年 三菱ケミカル株式会社
九州事業所

■青年技術者のことば

入社一年目の現場研修で触れた、職人達の誠実な仕事の積み重ね。それが私の「ものづくり」に対する姿勢の原点です。

構造設計の使命は、単に建物の安全性を担保することだけではありません。自然環境はもちろん、施工条件や経済性といったあらゆる前提条件を読み解き、建築をその土地と社会に確実に根付かせることだと考えています。

これまでの実務を通じ、設計とは「唯一の正解」を見つけることではなく、現場での制約や変更直面する中で、常に考え抜き「最善解」を探し続けるプロセスであると学びました。デジタル技術を用いた解析や最適化の手法を取り入れつつも、決して机上の計算に満足することなく、施工性や維持管理までを見据えた合理的な構造の実現を目指しています。今後も、他分野の関係者との対話を大切にしながら、一つひとつのプロジェクトに実直に向き合い、技術と信頼を地道に積み重ねていきたいと思っています。

■すいせん者

北山宏貴
（株）大林組 設計本部
大阪構造設計部 部長

■プロジェクトの概要と構造計画の挑戦

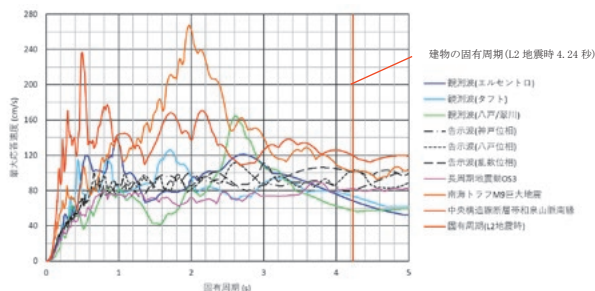
大阪府済生会富田林病院の建替計画は、構造設計に配属されて2年目の新人だった私が、免震層の設計および地震応答解析を担当した思い入れのあるプロジェクトである。

既存病院を稼働させながらの建替えという制約に加え、新築建物はL字の平面形状で、上階のセットバックや敷地の高低差による部分的な地下階を持つ複雑な構成だった。

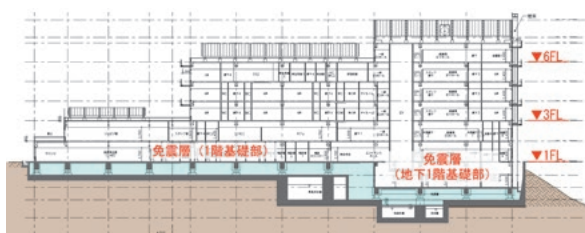
そのため、免震層が1階と地下1階の二層に分かれてしまい、これらを一体として挙動させ、偏心やねじれを抑制することが構造計画上の大きな課題となった。

使用上支障のない範囲で地下1階に耐震壁を設けて剛性を高めたり、広いリハビリ室や吹き抜けといった建築的要望に対してSRC造に適材適所でS造を組み合わせて偏心を抑えたりと、合理的な架構を模索し続けた。

構造単体としてだけでなく、建築計画や設備計画の条件を踏まえて、建築全体の中で機能する構造を成立させていく難しさを経験し、自身の判断が建物の安全性に直結する構造設計者の責任の重さを初めて強く意識した。



地震波 速度スペクトル



断面図（二層の免震層）

■詳細解析によるねじれ挙動の検証と抑制

免震層が二層一体で挙動し、性能保証変形時の偏心率を3%以下とする目標に向け、免震部材の配置検討を重ねた。変位によって剛性が変化する弾性すべり支承を重心近傍に、剛性が一定の積層ゴムを外周部に配置し、種類や台数を地道に調整した結果、すべての変形段階で偏心率を2%以下に抑えることができた。

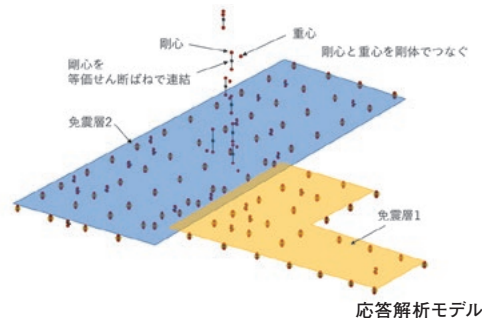
さらに、L字平面かつ二層の免震層のねじれ挙動を正確に評価するため、従来の集約型の串団子モデルではなく、免震層を平面に広げて装置を1台ずつ実配置し、上部架構の偏心も考慮したモデルでの解析を行った。結果として、免震層のL2地震時最大変形におけるねじり角は約1/8000と極めて小さく、偏心を抑えた設計がねじれのほとんど生じない挙動に結びつくことを確認できた。

上司への報告や構造計算書において、解析結果という数値的根拠をもって妥当性を説明する中で、複数の解析モデルを用いて挙動を確認し、設計判断に対する確信度を高めていくプロセスの重要性を学んだ。

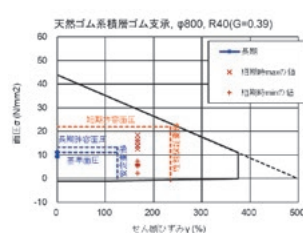
■細部の安全性追求の重要さを実感

解析結果を実際の設計に落とし込む際、まず免震クリアランスの検証を行った。建築条件から設定された離隔寸法に対し、解析上の最大応答変形に、施工誤差や建物の温度変化、擁壁のクリープ変形や残留変形などを加算した変形量が、その寸法内に収まるよう免震部材を決定する必要があった。また取り付け部の安全検証でも性能保証変形時に生じる応力が接合部や躯体の許容応力度内であることを確認し、免震装置に作用するせん断力と引張力が確実に躯体で負担できるよう計画した。さらに、オイルダンパーの負担を考慮した小梁を設けるなど、力の流れを明確にした。当時の私は免震部材の知識が乏しく、面圧-ひずみ曲線のグラフひとつ作るにも、カタログの数式とエクセル画面を睨みながら必死に積層ゴムを選定した。

この業務を通じ、施工段階や将来の管理を見据えた検証から、力が確実に伝わる接合部の設計まで、装置単体だけでなく建物として一体で安全性を検討する重要性を学んだ。この経験は、今の私の設計姿勢の確かな指針となっている。



応答解析モデル



面圧-ひずみ曲線のグラフ





ま と ば ひ ろ あ き 的 場 弘 晃

生 年 月 1990年 5月 大阪生まれ
 最終学歴 2015年神戸大学大学院工
 学研究科建築学専攻修了
 業務経歴 2015年(株)大林組入社
 現在大阪構造設計部所属
 ●担当した主なプロジェクト
 2017年 東大阪市文化創造館
 2017年 THE HIRAMATSU京都
 2019年 キラメキテラス
 2020年 シエリアタワー大阪堀江
 2022年 近畿大学おおさかメディカル
 キャンパス
 2023年 住友電気工業(株)KOYAテラス

■青年技術者のことば

この10年を振り返ると、その時々
 で様々な課題にぶつかり、苦しみ
 つつも楽しかった当時の思いが蘇
 りました。一貫して大事にしてき
 たのは、自身が納得できるまで試
 行錯誤を行い、細部まで徹底して
 拘り抜くことです。そうすること
 で新たな気づきや成長が得られる
 と考えます。役職や立場は変わっ
 ていきますが、初心を忘れずに常
 に挑戦心と向上心を持ち続けたい
 と思います。

近頃は、構造技術者としての社会
 における責務をより強く感じるよ
 うになりました。また、その役割
 をもっと社会に認知されるよう行
 動することが大事だと考えるよう
 になりました。当たり前ですが、
 プロジェクトを進めるには意匠・
 設備設計や施工部門などの協働
 が必要不可欠です。また、発注者
 との会話を通してニーズを汲み取
 り、価値ある建築を提供すること
 が我々の使命です。「人」と誠実
 に向き合い、関係性を大切にする
 ことで真によいものづくりができ
 ると考えます。外乱に対する理解
 や力学への精通など技術面の能力
 が構造設計者に求められるのは当
 然ですが、コミュニケーション能
 力（人間力）も重要と考えます。
 「この人が設計してくれるなら安
 心だ」と思ってもらえるような設
 計者を目指しています。

■すいせん者

笹元克紀
 (株)大林組 設計本部
 大阪構造設計部 部長

近畿大学おおさかメディカルキャンパス 診療棟 ー災害拠点病院の構造設計ー

■計画概要

病院・教育の機能を有する複数の棟
 を、敷地を横断するベデストリアン
 デッキの周囲に計画し、各棟間を
 EXP. Jにより構造的に分離している。
 診療棟は、医療の根幹となる諸室を内
 包する建物であり、その重要度の高
 さから免震構造を採用している。規
 模は、地上10階、塔屋1階、延床約
 61,000㎡。

■構造計画

基礎免震構造であり、上部構造は柱
 をRC造、梁をS造としたRC-S構法を採
 用。柱をRC造とすることで上部構造の
 剛性を向上させ、免震効果を最大限発
 揮させる計画である。設計工程を短縮
 し、早期の竣工を実現するため告示免
 震ルートを採用している。基礎構造は
 直基礎とし、支持層レベルや施工条件
 により浅層改良と深層改良を使い分け
 ている。

■免震層の計画

告示免震ルートではあるが、拠点病院
 としての重要性に配慮し、時刻歴応答
 解析による検証も実施した。上部構造
 の設計用層せん断力は、告示免震の計
 算値と時刻歴応答解析結果のそれぞ
 れの層せん断力を包絡するように設定
 した。免震装置は、変動軸力の影響が
 小さく安定した履歴吸収エネルギーが
 期待できる建物内部に弾性すべり支
 承を配置し、建物外周には高減衰ゴム
 を配置した。ダンパーには減衰こまを
 採用している。

■施工部門との協働

本プロジェクトにおいて、最大規模で
 ある診療棟の工期短縮が最重要課題
 であった。施工部門との調整により、
 RC-S構法の仕口鉄骨を含めてRC柱を
 サイトPCa化することで、在来と比べ
 て大幅な工期短縮を図った。
 5階外周柱をセットバックさせること
 で、6階以上の病棟階の床面積の合理
 化を図っている。このとき、RC-S構

法の仕口部の耐力式は斜め柱による応
 力状態を想定されたものではないと判
 断し、セットバック柱はRC-S構法で
 はなくSRC造を採用した。PCaの製作
 精度や施工性に配慮し、主筋を斜めに
 折り曲げずに直線で配置した長方形の
 断面形状を計画した。2本のH形鋼を
 合体させた変則H形断面の柱鉄骨を内
 蔵し、下階と上階のそれぞれで大梁と
 剛接合するディテールとしている。こ
 のSRC柱の採用により、揚場の問題で
 PCaできない一部の柱においても、鉄
 骨柱を先行して建方することことがで
 き、また、配筋が煩雑となる仕口部を
 工場PCa化することで、現場打ちの施
 工手間を最小限としている。

■プロジェクトを通して

大規模かつ複数棟の設計であり、設計
 および工事の期間が非常に短いとい
 った制約を受ける中、妥協することなく
 真摯に取り組み、拠点病院としての耐
 震安全性の確保と工期短縮の両立に貢
 献した。



写真1 プロジェクト全体外観

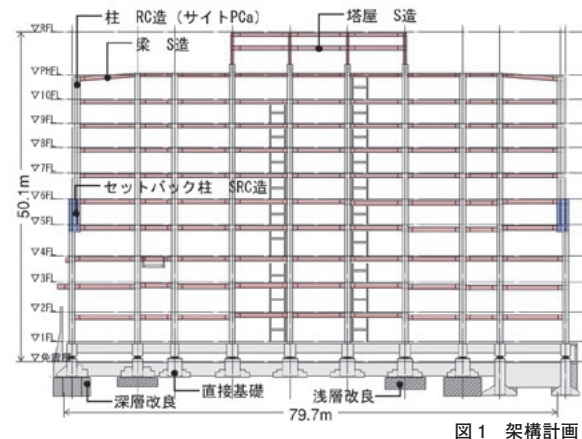


図1 架構計画

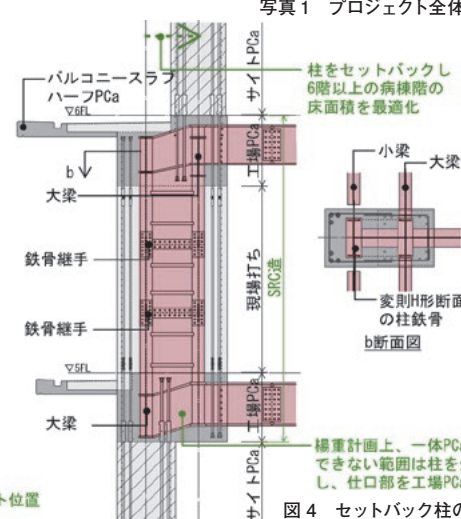


図4 セットバック柱の計画

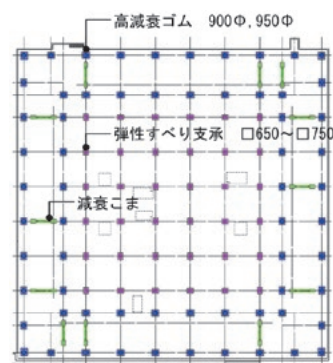


図2 免震層の計画

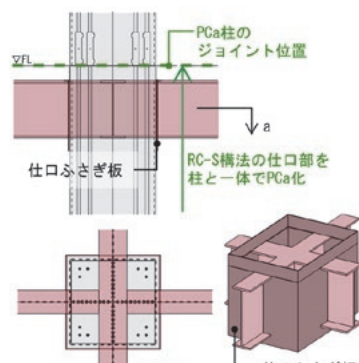


図3 RC-S工法の仕口部



写真2 建物外観



和田 拓也

生年月 1995年3月香川県生まれ
最終学歴 2019年京都大学大学院
工学研究科
建築学専攻 修了
業務経歴 2019年(株)日建設計入社
現在、エンジニアリング
部門構造エンジニアリング
グループ所属
●担当した主なプロジェクト
2019年 アズビル藤沢テクノセンター
104
2020年 淀屋橋ゲートタワー
2021年 グラングリーン大阪ゲート
ランタン
2022年 某データセンター
2023年 同志社大学今出川校地新図
書館 (建設中)

■青年技術者のことば

構造は建築の骨格として空間の自由度を左右するため、安全・安心に加え、使いやすさや美しさも両立させる視点が重要だと考えています。構造設計者として役割を果たすには、構造体を確実に成立させることを前提に、「想いを受け取る」「自らの想いにする」「想いを伝える」という3点を特に大切にしたいです。そのうえで施主や意匠・設備設計者などの関係者の意図を丁寧に汲み取りつつ、この建築をどう良くできるか、どのようなあり方が望ましいかを自問し続ける姿勢が欠かせないと感じています。

建物の竣工を迎え、完成した架構を目にするたびに、「別の解き方もあったかもしれない」「次に同様の条件が来たらこう進めたい」と振り返ることがあります。これから学びを積み重ね、限られた条件の中でも粘り強く最適解を探し、根拠ある構造提案につなげていきたいです。そして、後世に自信をもって引き継げる建築を生み出すことに貢献していきたいと考えています。

■すいせん者

岡田 健
(株)日建設計
エンジニアリング部門
構造エンジニアリンググループ部長

御堂筋の玄関口に建つオフィスの構造設計 淀屋橋ゲートタワー

■建築概要

本建物は大阪のメインストリートである御堂筋の玄関口に位置し、オフィス街の中心的立地に計画された超高層複合ビルである。計11棟あった街区を一体として建替える第一種市街地再開発事業であり、都市再生特別地区等を利用し土地の有効利用および業務機能の高度集積を図った。建物規模は、地上29階地下2階であり、ワンフロア貸室面積が1000坪を超える大阪最大規模の床面積を持つセンターコア形状の建物である。地下1階～地上2階、11階の一部を商業エリアとし、構造乗り換え階の10階を機械室、その他の階はオフィスとして計画された。

■構造計画

本建物の構造計画においては、テナントビルとして高い競争力を有する耐震性能を確保することを主眼とし、極めて稀に発生する(レベル2)地震に対して層間変形角1/125以内(せん断変形成分)とする性能目標を設定している。地上階は鉄骨造で、22階以下の柱はコンクリート充填鋼管(CFT造)、23階以上の柱は鉄骨柱とし、外周部の柱スパンは10.8m、オフィス内は最大18mスパンで計画した。

■形状制約を生かした制振計画

御堂筋に面する建物は「御堂筋デザインガイドライン」に基づいて、高さ約50mに基壇部を設け高層部をセットバックさせることが求められた。その形状により高層階と低層階でオフィスの平面的配置が異なることから、その境界である機械室階(10階)でベルトトラスを設け、柱位置を4.6m乗り換えることとした。

建物短辺方向はベルトトラスによる曲げ戻し効果もあわせて低層階のオイルダンパーの効果が高いことを確認し、「せん断変形成分が大きな低層階に粘性系ダンパーを集中配置」「コアスパン10.8m内に4台のオイルダンパーを集中配置してエネルギー吸収性能を確保」する方針をたて、経済的かつダンパーのメンテナンスが可能な配置計画を立てた。乗換えトラスは高層部からの高軸力を負担する重要構造部であるため、長期荷重およびレベル2地震動に上下動を加えた応力状態に対しても、弾性限耐力以内となるクライテリアを設定し、それらを考慮して大梁および斜材には550N/mm²級鋼材を用いた箱形断面部材を採用し、高い剛性と耐力を確保している。

一方で、柱位置の乗り換えのない長辺

方向にはベルトトラスを設けず、機械室階にオイルダンパーを集中的に配置することで階高の高さを利用した大きなエネルギー吸収を図る計画とした。

■透明感のある曲面形状の屋根架構

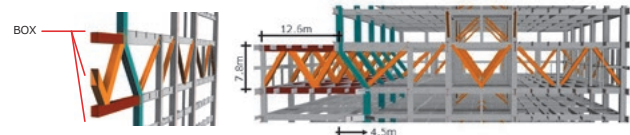
地下鉄駅からの出入口となる階段とEV上にかかる屋根架構は、透明感の高い5面ガラス張りとし、その透明感を生かすため、線材で構成したS造の架構として計画した。長手方向に向かって伸びる円弧状の偏平H梁を、2つのラーメンフレームと先端のタイロッドで支える計画とし、御堂筋に面するEVシャフトの内部までもガラス内部の透明感を感じさせられる架構を実現できた。

■プロジェクトを通じて

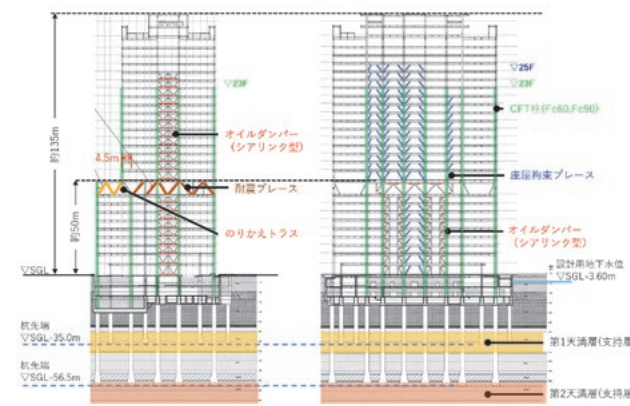
構造的に安全な架構を設計することは当然の責務としつつ、主体架構から附帯架構の細部のディテールに至るまで、設計対象のあるべき姿を考え続けたプロジェクトである。多くの案を考え続け、協議し調整し続けることでより良い建築物を実現することにつながることを実感した。



▲建物外観(撮影:伊藤 彰([アイフォト]))



▲乗り換えトラス概要



▲東西(短辺方向)断面図

▲南北(長辺方向)断面図



▲乗り換えトラス建方時



▲乗り換えトラス仕口



▲地下鉄出入口屋根架構



あお き かず あき
青木 一 晃

生 年 月 1990年12月埼玉県生まれ
最終学歴 東京理科大学大学院
理工学研究科
電気工学専攻修了
業務経歴 2015年(株)日建設計入社
現在 エンジニアリング部門
電気設備エンジニアリング
グループ
●担当した主なプロジェクト
2019年 いなべ市役所
2019年 椋山女学園大学附属
椋山こども園
2021年 市立御前崎総合病院
受変電設備更新工事
2021年 浜松いわた信用金庫
蛸塚支店
2022年 岐阜県庁舎
2023年 浜松いわた信用金庫
本部・本店
2024年 株式会社トーエネック本店
洲崎ビル
2025年 愛知大学豊橋キャンパス
新棟 Center Bldg.

■青年技術者のことば

入社以来、電気設備設計者として、「本当に使い勝手が良いものなのか?」、「安心・安全な建物になっているのか?」、「将来にわたって拡張性の高いものなのか?」これら3点を常に問いかけながら設計に取り組んできました。建築はとても長い時間を一緒に過ごすことになりますが、私たちの仕事でかかわる関係者の要望を伺い、要望を具現化するだけでなく、これからそこで過ごす人たちのことを思いながら作りこんでいくことが大切と考えています。電気設備は日々進化するスピードが速く、最近はAIも台頭をしていますが、これからはAIにはできない人の思いを込めた建築を電気設備設計者として目指して行きたいと考えています。

■すいせん者

澤村晋次
(株)日建設計
エンジニアリング部門
電気設備エンジニアリンググループ
副代表

浜松いわた信用金庫本部・本店

「省エネ」「ウェルネスオフィス」「SDGs」及び「BCP」に配慮した先導的建築・設備計画



写真1 西より外観全景

写真：鈴木文人

プロジェクト概要

地域とともに輝く、「人」が主役のSDGsオフィスをコンセプトとした、地域に根差した信用金庫の Neubau・本店棟新築計画である。設備計画は金融機関本店・本部に求められる信頼性の高い設備機器及び省エネに配慮した高効率な設備システムとした。加えて、「人」が主役のSDGsオフィスというコンセプトに対し、電気設備計画として、健康や生産性へ配慮したサーカディアン照明を導入し新世代のオフィスのひとつの答えとした。

①働きやすい場所を自由に選択できる —無理のない省エネ—

本部棟では「人」が主役のSDGsオフィスというコンセプトのもと、ペリメータ側とインテリア側で照明制御を変化させ働きやすい場所を自由に選択できるように考慮した。日照時間の長い浜松の気候特性を活かし、昼光利用のための明るさ制御、執務者のストレス低減と執務への意欲をサポートするサーカディアン照明制御、アクティビティを可視化する画像センサにより、新しいオフィスの光環境のあり方を実現することを目標とした。これにより、「ウェルネスオフィス」と同時に「省エネ」も実現した。

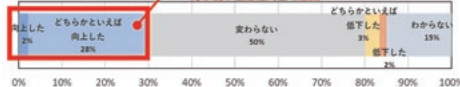
②サーカディアン照明によるウェルネス・省エネへの配慮

これからのオフィスはウェルネス効果を高めることも必要と考え、執務スペース全体でサーカディアン照明制御を行った。生産性の向上と執務者の健康維持を促進する効果が期待でき、時間帯に応じ設定照度を下げることで、省エネ効果を得ることを併せて達成することができた。結果として、基準オフィスよりも照明エネルギーとして約50%省エネを実現した。また、竣工後にアンケート調査を行い、サーカディアン照明の期待効果である、時間感覚の意識による残業時間の削減や生産性向上・健康面でよくなったと回答した割合は、いずれも約3割程度あり、一定の効果が得られたと考えられる。

サーカディアン照明により夕方・夜間であることや過労時間を意識したりするようになったことはありましたか。



サーカディアン照明により、生産性向上や健康面で以前のオフィスと比べてよくなった印象はありますか。



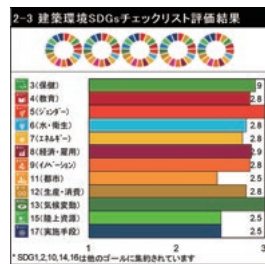
サーカディアン照明のアンケート結果

③BCP計画

金融機関本店・本部という特性上信頼性は特に重要と考えた。電力引込は信頼性の高い変電所からの2回線引込とし、非常用発電機を本部棟、本店棟のそれぞれに設置し、72時間運転可能なものとした。加えて、昨今の予想できない災害への対応が大切と考え、万一の長期間の電力途絶時にも対応できるよう、負荷制限モードを設定し、1週間以上の連続運転も可能とした。

④全体設備省エネ手法 (SDGs)

金庫が示すSDGs行動宣言「ユニバーサルバリュー宣言」の実現に対する提案として、「サーカディアン照明」「太陽光発電」「人感・明るさセンサによる点灯・調光制御」を計画した。これらは、費用対効果に優れるだけでなく、ウェルネスオフィス、SDGsへの適合性を加えた3軸で選択し、評価結果は各目標で高い数値を得、5リングの評価を得た。



SDGs チェックリスト評価結果

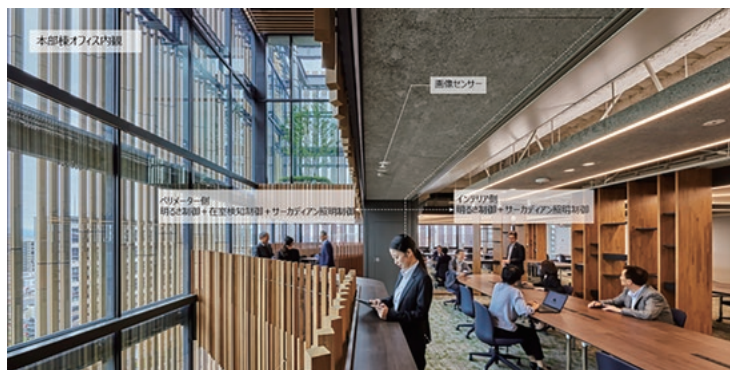
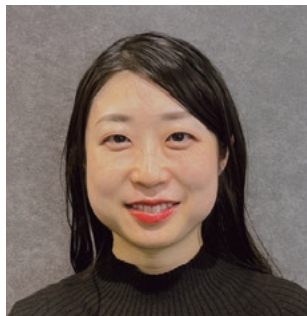


写真2 本部棟オフィス内観

写真：鈴木文人



井上 友理

生年月 1990年4月徳島県生まれ
最終学歴 早稲田大学大学院
創造理工学研究科
建築学専攻

業務経歴 2015年(株)大林組入社
2017年設計本部
本社 設備設計部

●担当した主なプロジェクト

2017年 東京農業大学
農大サイエンスポート
2019年 帝京大学板橋キャンパス
先端総合研究機構
某医薬品工場 工場棟
2022年 某製薬工場 工場棟増築
某製薬工場 工場棟
2023年 某製薬工場 工場棟

■青年技術者のことば

設備設計者としての10年弱の経験の中で、研究施設や医薬工場といった高い信頼性が求められる用途を中心に携わらせていただいた。施主・施工者など関係者との会話から、計画から運用まで一貫して、建物の品質と信頼性を支えるにはどうあるべきかを考え、不確かな点やリスクを問い直し、必要な検証を重ねる重要性を実感してきた。設計時点で将来の使い方が明確ではない場合も多いが、対話を通じてユーザーの「引出しを開ける」とともに、立場の違いにとらわれず自ら率先して関係者に働きかけながら、ともに考えて、より良い建物をつくることを大切にしている。

昨今は建物の信頼性と環境負荷低減の両立が求められているが、今後は品質を支え続けるという軸を大切にしながら、省エネルギーとの両立の余地を粘り強く考えて取り組んでいきたい。これからも広く知識を吸収し経験を積み重ねることを大切に、関係者に信頼される設備設計者として成長し、社会に貢献していきたい。

■すいせん者

鶴見進一
(株)大林組 設計本部
設備設計部 部長

某製薬工場 工場棟の設備計画 一品質確保と機能性の両立を目指して一

■概要

本プロジェクトは製薬工場のワクチン製剤棟の新築工事。既存原薬棟と接続し1つの建物として使用することで、原薬製造～製剤・充填までを一貫して行うことができる施設で、医薬工場としての品質確保と機能性の両立が求められた。今回新築する部分は、ISOクラス7の生産エリアを有する地上5階、延床面積約9,000㎡の施設である。

■安定した室圧制御

クリーンな製造環境確保のために、室圧制御により室圧序列の制御が求められる。給気側はCAVで定風量給気、排気側はPCD（室圧制御ダンパ）を設置し室圧制御を行っている。当初の外風圧対策としては、屋上に迷路構造で風向の影響の緩衝帯となる給気チャンバー（図1-1）を設け、排気側は壁面排気としていた。しかし既存棟の運用状況から、計画地は高台で気象庁データ以上に季節風が強く、風向や外風圧によっては排気風量が確保できないことが懸念された。そこで、機械室内の機器配置の再検証や、意匠構造設計・施工担当者とダクトスペースの調整を重ね、屋上の防風壁内に排気を開放できる様、ダクトルートの見直しを行った。今回の懸念に対して見直しを行ったことで、竣工後の強風時も安定した室圧で運用することができた。

■保管室の温度管理制御

原材料・製品の保管室は特に温度規定が厳しく、温度センサーを設置した任意の1か所だけでなく、保管される可能性がある全ての範囲の温度が規定範囲内を維持する必要がある。-20℃の冷凍室は、UC（ユニットクーラー）のデフロストによる発熱が室内温度分布に大きく影響するためシミュレーションを行った（図1-2）。限られた空間になるべく多く保管できる様、UC配置・部屋高さ・保管物配置・循環ファン有無等の条件を変え、様々なパターンの検討を行い、保管物配置・温度逸脱リスク範囲・コストバランスが良い案を発注者と共有して決定することができた。温度規定範囲を超える可能性のある部分を視覚的に共有し、発注者を始め、関係者全員で納得感をもって進めることができた。



写真1-1 建物外観

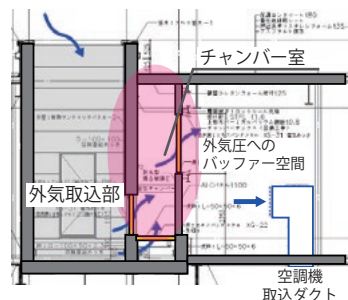


図1-1 給気側の外風圧対策

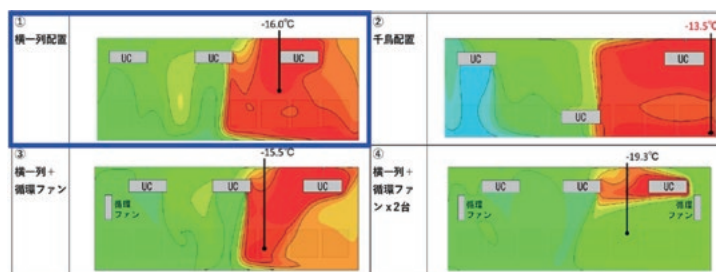


図1-2 配置別のデフロストによる温度分布シミュレーション

東京農業大学 農大サイエンスポートにおける設備計画

■概要

本プロジェクトは、キャンパス内の複数棟に分散している研究室を、学部を超えて1棟に集約するプロジェクトである。B1F～7Fまでに研究用途、8Fはラウンジの構成とした。文系・理系問わず異なる分野の研究者それぞれが研究活動を最適化し、将来の研究内容の変化に柔軟に対応できる施設を目指した。

■柔軟に局排対応した空調

特に局排装置は建物全体で、約230,000m³/h設置予定で、①様々な局所排気ニーズに対応した給気システムと②意匠性と機能が両立した納まり検討が大きな課題となった。局排用給気は1～7Fまで一体の吹抜部に分散給気し、廊下を加圧する計画としたことで（図2-2）、変動する局排給気風量の対応と、ダクトの省スペース

化を実現した。併せて既存で研究者が懸念されていた廊下への実験臭気漏れにも対応することができた。またダクト・ラック・特殊ガス等のメインルートは廊下に密集した計画となったが、廊下天井にはメッシュ金網を用いた全面取り外し可能な仕様で計画した（図2-3）。天井内の半分以上が梁を占める中で更新頻度や点検に配慮した配置検討を行ったことで、意匠性・機能性・更新性を実現した。



写真2-1 建物外観

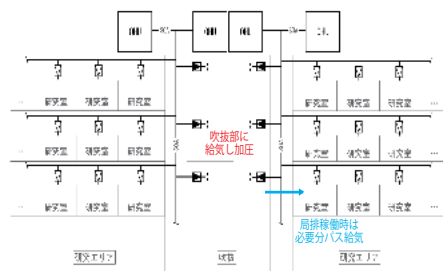


図2-2 給気フロー（各研究室への給気は吹抜に分散給気）



図2-1 断面イメージ



写真2-2 吹抜け部と廊下メッシュ天井

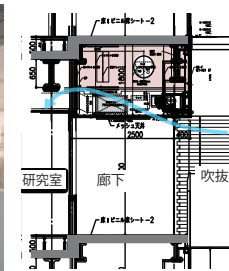


図2-3 天井内納まり(参考)



そえ はら よう へい
添 原 洋 平

生 年 月 1991年6月新潟県生まれ
最終学歴 信州大学大学院
理工学系研究科
建築学専攻修了
業務経歴 2016年(株)大林組入社
2016年名古屋支店設備工
事部
2019年名古屋支店設備部
見積課
2020年設計本部名古屋設
備設計部

●担当した主なプロジェクト
2016年 プライムツリー赤池
2018年 愛知県某工場実習棟
2020年 愛知県某病院施設新築工事
2021年 岐阜県某宗教施設改修工事
2021年 愛知県某倉庫新築工事
2022年 静岡県某工場新築工事

■青年技術者のことば

昨今、脱炭素が社会目標に掲げられる中で省エネ技術は日々進歩している。どのような技術があるのか日々の業務や生活の中で知識を習得し、設計している各プロジェクト毎に説得力のある最適な提案をしていく必要があると考えている。

また、発注者や使用者の期待以上の建物を設計するにはただ単に要求条件を建物に落とし込むだけではなく、本当に求められているものは何かを理解し、その要望に沿った最適解を意匠設計・構造設計と協働して導く必要があると考えている。

より良い建物を形にしていけるよう設備技術者として精進していきたい。

■すいせん者

内海 徹
(株)大林組 本社設計本部
名古屋設備設計部 部長

某工場新築工事への取り組み

■はじめに

総延べ面積約11万㎡の大規模工場の新築工事の設備計画を行った。短納期での設計・工事であったが、要求条件を整理し省エネ・メンテナンス・将来への拡張性に配慮した計画とすることができた。

■短納期への対応

総延べ面積11万㎡の工場を、総設計期間12カ月で計画。PJ着手当初から鉄骨ロール発注・基本設計～実施設計完了までに、短納期によるリスクの洗い出しと合意形成、納期・設計スケジュールの管理を実行した。

また合理的な計画となるよう時間の許

す限り、本当に必要なスペックは何か諸元を突き詰めていった。発注者が提示する条件に対して疑問を投げかけるとともに検討時間を含めた設計工程の管理と発注者への期限の共有を徹底することで清浄度要求の見直しや、要求温度の緩和につながり設備スペックの低減、省エネルギー化に結びつけることができた。

設計開始から3.5か月の鉄骨ロール発注までに階高を決定する必要があった。限られた時間の中ではあったが余裕を見込んだ設計ではなく、コスト意識を持ち納まりの最も厳しい代表断面を切り出して計画時点での最低階高を検証した。

またスタンは外構の意匠計画・

構造の鉄骨発注にも影響し、早期にスタンプンルート・サイズ・荷重を決定する必要があった。発注者と将来更新性の確認と生産装置諸元の確認を早期に行い、精度の高いインフラルート・インフラ容量の確定を行った。これにより、無駄の無いスタンプンサイズの決定と更新性の高い（将来工場分の拡張性含む）スタンプン計画を行った。

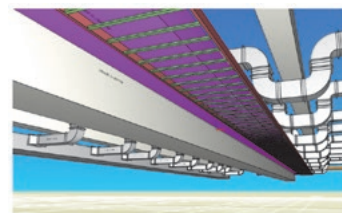


図2 必要階高の検討



図3 スタンプン検討



図1 設計スケジュール

■省エネルギーへの配慮

異物混入を防止するため、工程室の陽圧管理が求められた。室圧の設定値に対する要求はなく製造条件下で隣室間の気流方向が逆転せず常に一定であることが求められた。同じくコンタミ防止が求められる建物用途である医薬製品の製造施設では室圧管理のためPCDによる室圧制御が一般的に採用されるが、今回の建屋では製造過程においての給排気風量のバランスが変動しないという条件であり、かつ厳格な室圧管理は要求されなかった。

また本施設ではドライ環境が求められたが除湿空気の製造には多大なエネルギーを必要とするため極力加圧風量を抑えたいという要求があった。VAV+微差圧ダンパー (BD) により気流方向を制御することで最低限の加圧風量での室間気流方向の制御を行うこととした。これにより発注者の要求条件を満たし、かつ省エネルギーに配慮したシステムを構築することができた。エアフローの概念を右図に示す。

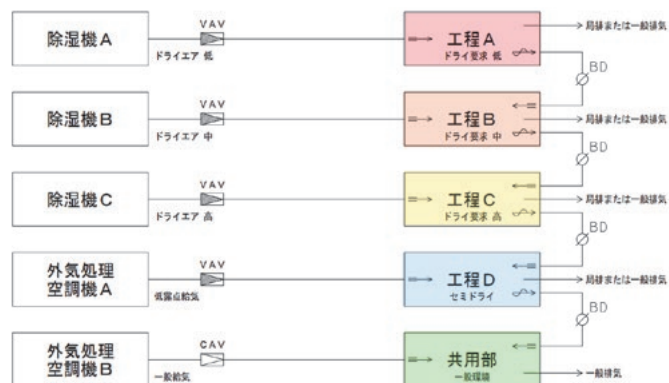


図4 エアフロー概念図

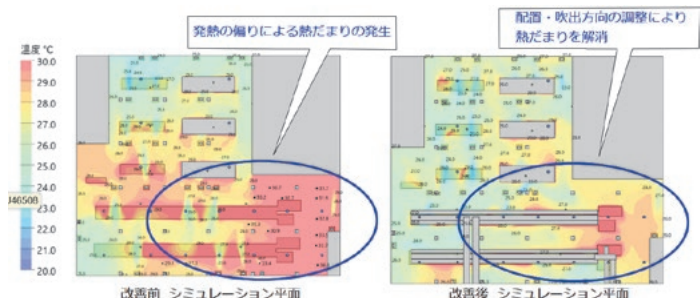


図5 空調機配置シミュレーション

■室内温度環境を実現するための空調機配置検討

広大な工場であったことからダクトによる搬送動力を低減するため床置き空調機で工程室内を温調することとした。発熱機器に対して最適な空調機配置・吹き出し方向となるようプロット調整・シミュレーションを実施し検討を行った。

■天井内設備メンテナンス

階高が高いため天井内設備のメンテナンスがし易いように天井内に点検歩廊を設け、天井内の全ての設備へのアクセスができるような計画を行った。歩行動線はフィルター交換のため、台車通行可能な動線を確保した。また歩廊上部で配管等をまたぐ必要がある部分にはステップを設けて安全に通行できるようにした。

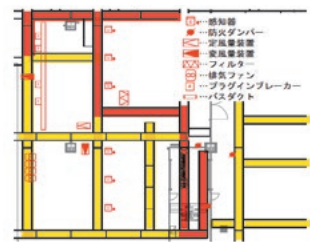


図6 天井内メンテMAP



た な か けん すけ
田 中 健 資

生 年 月 1990年10月福岡県生まれ
最終学歴 関西大学

システム理工学部
電気電子情報工学科卒業
2013年(株)大林組入社
現在本社設備設計部所属

●担当した主なプロジェクト

2013年 獨協医科大学病院
2015年 横浜歯科技術専門学校
2016年 東京女子医科大学耐震改修
2017年 獨協埼玉医療センター改修
2020年 筑波大学附属病院病棟B
免震レトロフィット改修
2022年 浦和ガーデンビル
2023年 両国国技館基幹設備等改修

■青年技術者のことば

建物内で人々に「安らぎ/快適」を与える様々な設備の原動力であり、更に「安全/安心」の提供をも担う重要インフラの一つである「電気設備」の計画を行う設備設計者には、「確かな技術力」の習得が大きな責務の一つであると考えている。

昨今、環境変化や災害対応、社会情勢の変化等により、信頼性の高いBCP計画の立案や最適な省エネ制御による環境負荷の低減、様多様性に配慮した室空間の提供等、設備設計者に課せられた使命は多い。

また、電気設備と密接な関係にあるAI/ICT分野の急激な成長/進歩により、新たな技術や可能性も次々に誕生している。

日々新たな情報を収集し、学習し、自身の設計に踏襲し、都度振り返り、反省点があればそれを改善し、継続したチャレンジを繰り返すことで、多くの人々に「安らぎ/快適」を提供することのできる、一流の設備設計者（技術者の高み）を目指し、日々の業務に尽力していきたい。

■すいせん者

河野哉穂
(株)大林組 設計本部
設備設計部 部長

病院機能を継続しながらの大規模改修 ～筑波大学附属病院病棟B免震レトロフィット他設備全面改修～

■概要

筑波大学附属病院は茨城県内唯一の特定機能病院として高度な医療を提供し、地域の中核を担う重要な施設である。当該建物は増改築を繰り返し、複数の棟が入り組んだ構成となっている。病院の中心部に配置される「病棟B」は竣工後約40年という長い期間に渡り地域の医療を支えてきたが、建物老朽化が進んでおり、①耐震性能向上、②経年劣化した設備機器の更新、③入院患者や執務スタッフの室内居住環境改善、等が求められる状況であった。

そこで、既存病院の稼働を継続しながら免震装置を組み込む「免震レトロフィット改修」と「建屋内の内装および設備の全面更新」、改修工事エリア内の機能継続を意図した「けやきアネックス棟増築による移転先確保」等を実施することで、様々な課題の解決を目指した。



建物配置



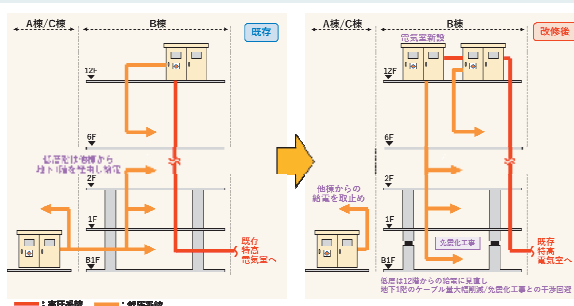
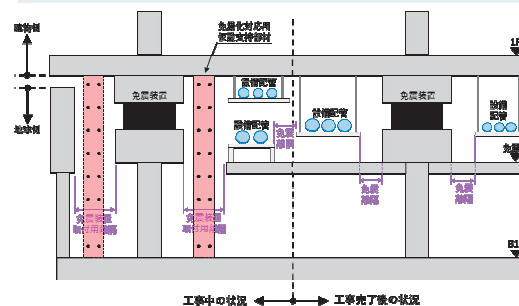
外観 (病棟B)



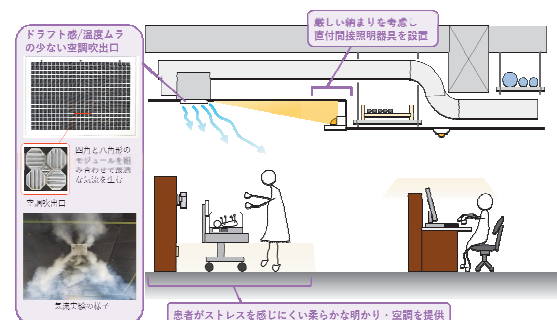
外観 (けやきアネックス棟)

■機能継続と良質空間の提供

「病院」は患者の命を預かる施設である。建物内の設備機能停止は患者の生命維持活動停止に直結する。改修工事に伴う設備インフラの停止を最小限とすべく、十分に配慮した改修計画を立案するとともに、患者/スタッフ双方に配慮した良質空間提供のために、様々な創意工夫を凝らした。その中の一例を以下に示す。



免震化工事ステップおよび免震層内設備配置イメージ/電源系統の見直し



患者/スタッフ双方に配慮したNICU・GCU設備計画



改修後院内状況 (病室/トイレ/院内レストラン等)



た ら し ひろ
多 良 俊 宏

生 年 月 1991年11月大阪生まれ
最終学歴 大阪大学大学院
工学研究科
地球総合工学専攻修了
業務経歴 2017年(株)日建設計入社
現在 エンジニアリング
部門 機械設備エンジニア
リンググループ
●担当した主なプロジェクト
Kurita Innovation Hub
神保町SF I
芝浦1丁目プラント
中央区清掃工場余熱利用設備
東京都内地域熱供給プラント5件

■青年技術者のことば

機械設備設計者にとって重要なことは、エンジニアとしての確かな技術力と、設計者としてのバランス感覚の両立だと考えています。負荷計算や機器選定、配管・ダクトの圧損検討、制御ロジック、法規や防災との整合など、設備には数値と根拠に基づく判断が不可欠です。一方で、設備だけが正しくても建築として成立するとは限りません。意匠計画や構造計画、電気・防災計画、施工性、維持管理性、そしてコストや工期といった現実の制約の中で、どこを守り、どこを譲り、どこで工夫するかを見極める力が求められます。私はその調整を、関係者の意図を読み解きながら最適解を探る設計行為そのものだと思っています。今回の受賞を励みに、これからも研鑽を重ねて、エンジニアとしての技術力と、設計者としてのバランス感覚を磨いていきたいと思います。

■すいせん者

田中宏昌
(株)日建設計
エンジニアリング部門
機械設備エンジニアリンググループ
部長

Kurita Innovation Hub 既存の研究所にとらわれない空間構成と確実な安全性の両立

プロジェクト概要

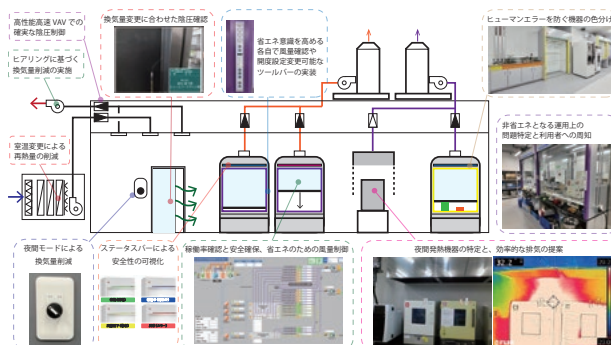
Kurita Innovation Hub (KIH) は産業向け水処理を手掛ける栗田工業株式会社の研究開発の新しい拠点である。研究所やトレーニングセンターの機能に加え、主力となる半導体、工場向け（水処理技術）の技術をアピールする機能や協業メーカーと共同で研究を行う機能を集約して再編し、より効率的で効果的な研究開発が可能な施設を目指した。

建築空間・施設の特性に併せた適切な空調設計

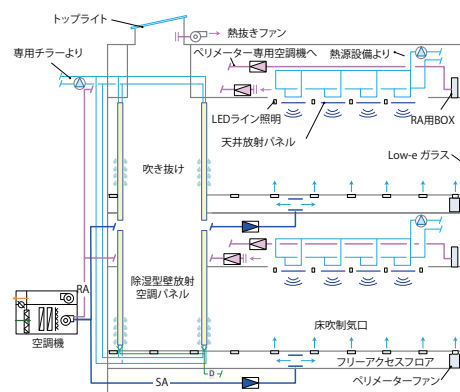
KIHの執務空間はフリーアドレスを採用することにより、実験以外の執務作業時は働く場所を自由に選択できる空間となっている。大規模な吹き抜け空間とスキップフロアにより、緩やかに階層同士が繋がりを持った空間として構成され、各階実験エリアに研究開発空間を隣接させることで、研究者が実験エリアに籠らずに隣接空間に移動することを促し、コミュニケーションを誘発させるプランになっている。このような建築計画と、研究者として働く女性が多い施設であるという特徴を考慮し、適切な空調方式を検討した。

高天井空間が多数分散されているため、床吹き出し空調によって外気導入を行うことで、居住域での良好な空気質が確保できるように計画した。加えて、天井放射空調及び除湿型壁放射空調を採用することで、気流感の少ない快適な執務環境が実現できるよう計画している。天井放射空調はアルミパネルに水配管ユニットを接着させる冷温水式の放射空調であり、吹き抜けの無いオフィスエリアを中心に計画した。除湿型壁放射空調は他の空調と系統を分け、より低い温度の冷水をルーバー状のフィンに流すことで除湿が可能な空調方式である。吹き抜け空間の周囲に配置することで天井面が無くとも効率的に熱負荷を処理できる計画とした。また、ルーバーの形状を利用して、エリア間を仕切りつつも、空間的なつながりを持たせた計画としている。

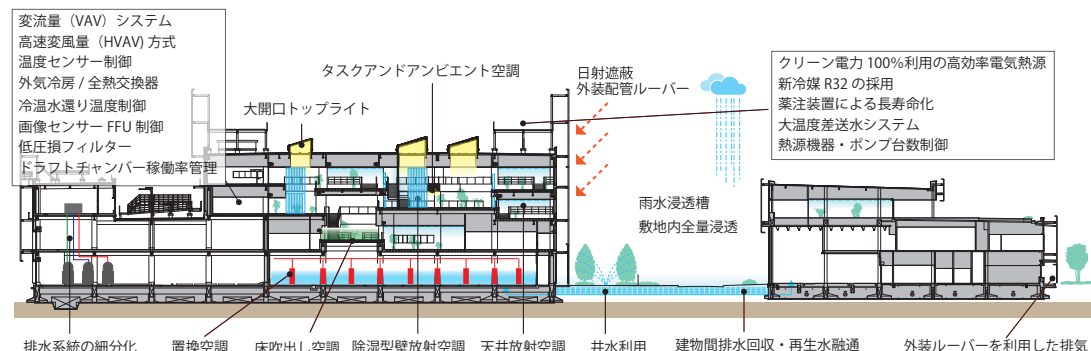
設計時は、スキップフロアによる非常に複雑な平面プラン、構造計画に対し、空調として必要なスペースを過不足無く伝えることに苦労した。通り芯ごとに詳細な断面図を作成し、意匠・構造・電気設計者と密にコミュニケーションを取り、設備設計の思想を共有化することの重要性を学ぶことができた。



■実験室の取り組み



■空調概念図



■省エネルギーのための取り組み



外観



はら 原 かい 平

生 年 月 1991年11月静岡県生まれ
最終学歴 明治大学

電気電子生命学科卒業
業務経歴 2014年 (株)大林組入社
現在 東京本店
建築事業部設備部

●担当した主なプロジェクト

【設計】

2014年 京都市某自動車整備工場
2014年 大阪市某銀行
2015年 大阪市某病院

【施工】

2015年 堂島地下街 改修
2017年 淀川キリスト教病院 改修
2018年 ホワイティうめだ 改修
2020年 同志社大学継志寮 新築
2021年 ミズノ新研究開発拠点 新築

【設計】

2022年 日本国際博覧会パナソニックグループ「ノモの国」
2022年 大阪市某リゾート施設
2023年 大阪市某工場
2024年 大阪市某ホテル

■青年技術者のことば

～設備設計者として

大切な「視点・始点」～
「良い建物」を造るための第一歩は、チームの共通目標を設定し、そこに向かう意識のベクトルを合わせることで、そのベクトルを軸に様々な視点から「何か」をはじめてみることでと考えている。
わたしは、建築設備のプロフェッショナルとして、事業主及び関係者の要求を対話の中で引き出し、建築設備の技術を軸にどう実現していくか、様々な視点・始点を持って、プロジェクトチーム全体に、固定概念にとらわれることのない柔軟な発想を生み出したいと考えている。

社会の環境に対する意識向上に伴い、設備設計者が担う役割も大きくなっている。時代の流れとともに変化する価値観を、設備設計者として具現化し、「意匠・構造・設備の調和」及び「設計者・施工者の協働」による良い建物造りのために、常に新鮮な発想を生み出せる設備設計者でありたい。

■すいせん者

井守紀昭
(株)大林組 設計本部設備設計部部長

2025年日本国際博覧会パビリオン パナソニックグループ「ノモの国」～ 正解のないパビリオン建築 ～



写真1 ファサード(夜景)

■計画概要

パビリオンのコンセプトは「解き放て。こことからだとしぶんとせかい。」。パナソニックが培ってきた「人の理解」の研究に基づく分析や、光・音・風など空間で五感を刺激する技術により、子どもたちの感性を刺激し想像する力を解き放つ体験型パビリオンとして計画した。

■ファサード演出

ファサード全体をLEDフルカラー投光器にて内部から照射することで「夜空に浮かび上がるシャボン玉」のように繊細でダイナミックな空間を創出した。日中は海風になびくオーガンジーと自然光で演出されるファサードを、夜には照明演出にて、その魅力を最大限引き出す計画とした。(図1・写真1) さらに、IoTを駆使してパビリオン周囲のセンシングデータを収集し、環境に合わせたミスト噴霧の自動制御を行った。パビリオンの外観を彩る「光と音とミスト」の演出を最適な状態に保つとともに日中の暑さ対策も実現した。(図2・写真2)

■地球環境問題の解決へ

「物と心が共に豊かな理想の社会」の実現を目指し、地球環境問題の解決への取組みとして「循環で生まれるパビリオン」をテーマに掲げた。次世代のクリーンエネルギー源として期待される水素エネルギーの社会普及のため、製造拠点から需要家までを結ぶ水素サプライチェーンモデルを実装した。NTTパビリオン内に設置された地産地消の太陽光発電をはじめとするゼロカーボン電力由来の水素が地中パイプラインを通じて供給され、純水素型燃料電池で発電を行い、夜間のファサードライトアップに必要な電力補填を実現した。(図3・写真3)

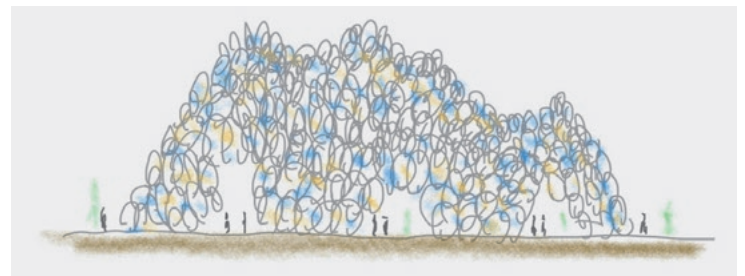


図1 永山氏が描いたファーストスケッチ (画像提供: 永山祐子建築設計)



図2 WELCS place連携図



写真2 演出制御(ミスト)



写真3 純水素型燃料電池

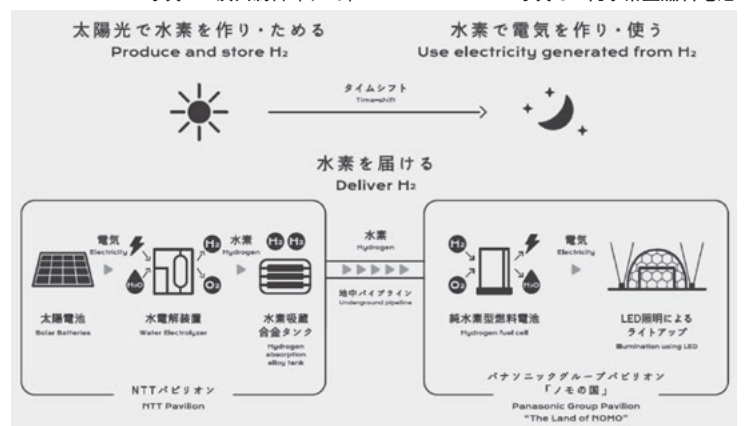


図3 水素サプライチェーンモデル (画像提供: パナソニック)



三原 裕貴

生年月 1990年7月 福井県生まれ
最終学歴 東京都市大学大学院

総合理工学研究科
共同原子力専攻 修了
業務経歴 2015年(株)竹中工務店入社
2016年京都支店設備G
2020年四国支店設備G
現在 大阪支店設備部
チーフエンジニア

●担当した主なプロジェクト

2016年 中井工業本社ビル新築
2016年 京都文教中高6号館新築
2018年 日清食品新滋賀工場新築
2020年 日亜化学工業TS7棟
4階生産室実装工事
2021年 日亜化学工業本社K2棟
1階実装工事
2022年 日亜化学工業本社K10棟
各階実装工事
2022年 日亜化学工業本社
薬液設備新築
2023年 日亜化学工業本社K5棟新築
2026年～大阪IR夢洲ブロックB

■青年技術者のことば

建築主に寄り添い、技術で想いを形にすること。これは建築設備の技術者として私が常に意識している課題です。建築主にとって建物を新築・改修することには大きな投資であり、そこには必ずそのプロジェクトで成し遂げたい想いが込められています。

私は工場案件に多く携わってきたために、設備に対して建築主が期待する想いを強く感じてきました。工場などの生産施設において、建築設備が果たす役割は非常に大きく、とりわけ生産活動に直結するような設備は、工場の安定稼働に関わる重要なものとなります。そのため建築主にとって最適解は何かを一緒に追求してきました。私は建築主のそういった想いを建築設備という形で現実化し、建築主に喜ばれる仕事をしたいと思っています。今後も一層の自己研鑽を図り、設備技術者としてのエンジニアリング力を磨くことで社会に貢献していけるよう努力を続けていく所存です。

■すいせん者

川原主貴
(株)竹中工務店四国支店
設備施工管理G グループ長

スケルトンで竣工する工場新築における将来実装を見据えた設備計画の立案

■はじめに

工場などの生産施設において建築設備の果たす役割は大きい。とりわけ、生産活動に直結するような設備（熱源設備やユーティリティ設備など）は工場の安定稼働にかかわる重要なものである。

新築時において、これらの設備を適切に計画することは極めて重要である。また工場特有の製造ラインの増設や変更などを繰り返しながら使用していく側面もあるため、将来における増設や改修を前提とした計画とすることが必要である。将来実装を見越した新築工事における設備計画や作り込みで特に注力した検討内容について以下に述べる。

■解決すべき課題と対策



写真1 建屋外観

工事概要 用途：工場
延床面積：30,241.96㎡
建築面積：4,094.43㎡
構造：S造 階数：F10階、P1階
工期：2023.12～2025.10
工事の特性として、ほとんどのフロアがスケルトン状態で引き渡しとなる。当初想定していた実装予定はあるが、建物引き渡し時点でどうなるかは未定となっている。これに対し建築主ニーズは、将来実装の想定と必要な設備スペースの確保、生産機器レイアウトの拡張性が上げられた。建築主ニーズに応えるためには将来の実装をどう想定するかが重要となる。そこで、過去の類似案件の生産ラインに対応できるよう、将来の実装を想定した検討を行った。

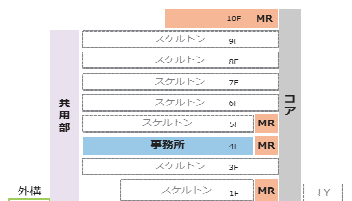


図1 フloor詳細



写真2 スケルトン状態

主に実施した5項目

- ①将来実装における負荷の想定と熱源機器のスペース・主管サイズの検討
- ②増設を前提とした屋上配置検討
- ③想定されるユーティリティの整理と設備スペースの確保
- ④フレキシブルなレイアウトに対応可能な鉄骨スリーブ検討
- ⑤拡張性を有した熱源制御方式への変更

■対策実施内容

①将来実装における負荷の想定と熱源機器のスペース・主管サイズの検討

1) 熱量の想定と熱源機器・主管サイズの検討

将来時における負荷の想定には、実装が予想される生産ラインごとの負荷把握がポイントとなるが、生産ラインごとに空調負荷や給排気風量、装置冷却に必要な冷水量などは大きく異なる。そのため過去の実績値を元にして、建築主と協議しながら各階における想定負荷の算出を行った。



図2 想定負荷と熱源機器・主管サイズ検討

2) 想定外に対する対策

～他棟からの熱融通～
想定を超える熱量が必要になった場合の検討を行った。屋上設備機器置き場の余剰スペースには限りがあり、主管サイズ、構内配管スペースも決まっているため別のアプローチが必要となる。そこで他棟から熱融通する案を考えた。同じ工場敷地内の隣接棟では、熱源設備の容量に余裕があり、COPの高い熱源設備のため、運用面でも優れていることからこの案が採用された。新築時はイニシャルコストを抑えるために、既存隣接棟からの配管ルートの検討、配管スリーブの対応のみとし、最小限のコストで将来に対する拡張性を確保した。

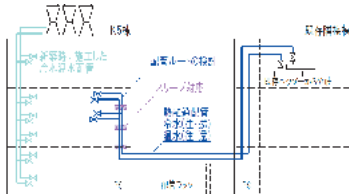


図3 他棟からの熱融通計画

②増設を前提とした屋上配置検討

本棟の周囲は河川や道路幅の関係で揚重機を据えられる場所が限られている。そのため屋上の設備機器の配置を調整し屋上における搬入導線と将来拡張エリアの整理を行った。ハト小屋の追加、搬入通路の変更、室外機置場を整理し将来拡張エリアを集約、将来拡張エリアの見直しなど、これらの配置検討により拡張性を向上させた。

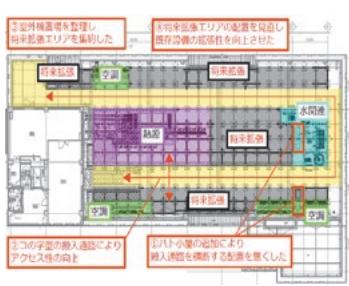


図4 検討後のレイアウト

③想定されるユーティリティの整理と設備スペースの確保

本棟の設備計画では、生産用の排気・薬液配管・生産排水などのユーティリティ設備を、3か所の外部DSを通す計画となっている。新築時はほとんどが未実装であるため、将来実装されるユーティリティ設備の想定が重要なポイントとなった。着工後、建築主の計画変更を受けて再整理が必要となり、建築主と協議のうえ、製造ラインごとに必要なユーティリティの洗い出しと必要量の想定を実施した。その結果をもとに総合ユーティリティ系統図・外部DS納まり検討図を作成し、建築主との合意形成に活用した。

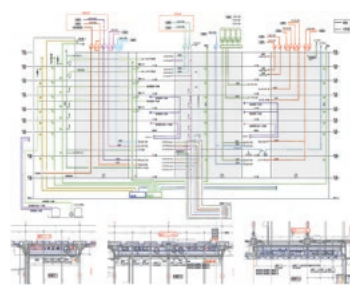


図5 総合UT系統図と外部DS検討図

④フレキシブルなレイアウトに対応可能な鉄骨スリーブ検討

本棟は階によって階高が異なる。生産室など天井内設備が多く必要な階と事務所など不要な階が混在しているため。しかし、これは将来計画に制約をもたらす。そこで低い階高の梁には適切な鉄骨スリーブを計画し、天井内を有効活用して拡張性を確保した。スリーブ増加はコスト増加の要因となるため、階高に応じてスリーブ方針を整理し、最小限のスリーブで拡張性の高い構造体を実現した。

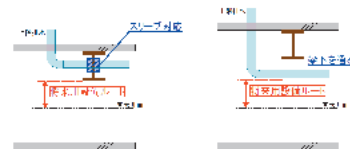


図6 階高に応じた鉄骨スリーブの考え方

⑤拡張性を有した熱源制御方式への変更

将来どのような実装となるか未定の状況の中、メーカー標準のコントローラでは変更項目、可変幅が限定的であるため、PLCを用いた熱源制御に変更することを提案し採用された。これによりグループ単位の増減段制御やバックアップ起動運転など、省エネ性・信頼性が高く、将来対応時の自由度の高いシステムを構築した。

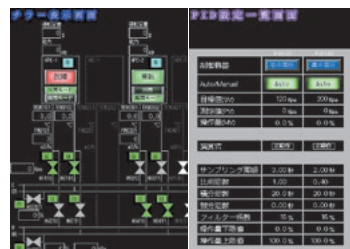


図7 熱源制御画面のサンプル



むら かみ な こ
村上 奈々子

生 年 月 1991年1月兵庫県生まれ
最終学歴 兵庫県立大学大学院
環境人間学専攻 終了
業務経歴 2015年(株)竹中工務店入社
2016年大阪本店設計部
2018年大阪本店設備部
2020年大阪本店設計部
●担当した主なプロジェクト
2016年 ニチアス王寺工場新1号棟
2018年 深江竹友寮
2020年 甲南医療センター
2020年 大阪警察病院
2024年 神戸学院大学有瀬1号館

■青年技術者のことは

建築は、時代の変遷とともに社会のニーズに応え続けることで価値が高まるものであり、都市を形成し、人々の感情や行動、生活に多大な影響を与える。建築が時代を映す存在だと捉えたと建築に携わることの社会的使命の大きさ、やりがいと誇りをより強く感じる。一方で、2050年のカーボンニュートラル達成に向けた社会情勢の動きや、建設に関わるCO₂排出量が全体の多くを占めている現状がある。中でも運用段階におけるCO₂排出量は最も多く、運用において設備設計が果たす役割は非常に大きい。地球環境への負担を低減するため、設備設計者である私が主体的に環境配慮と実運用の両立に取り組んでいくという意気込みで日々業務を遂行している。これまでとは異なる視点や発想による革新的な技術を用い、シンプルかつ効果的な手法の導入を模索し実現することで、運用のしやすい省エネルギー技術のシステムを創出していく。

人の記憶や体験に残る建築の創造をめざし、意匠性の良さに加えて、使う人が快適に過ごせる空間づくりを重要視している。私はこれからの建築をリードする一員として、温熱環境や光環境等を設備設計が主導し、建築・設備ともに一体となって創り上げる意識を持って設計に臨むこと常大切にしながら今後も精進していく。

■すいせん者

上田真也
(株)竹中工務店 大阪本店
設計部 設備設計部長

大阪けいさつ病院における設備計画

はじめに

大阪けいさつ病院は、医療法人大阪国際メディカル&サイエンスセンターが、老朽化した大阪警察病院と第二大阪警察病院の機能を統合した新病院の再編計画として2020年にコンペが実施され開始した事業計画である（写真1）。本稿では設備計画を紹介する。

社会のニーズに対応した安心・安全な計画

・感染陰圧室・パンデミック対応

コロナ禍を経て感染対策を強化し、病棟5階の一部をパンデミック対策として感染陰圧室を段階的に拡張できる設計とした（図1）。3Dプリンター製の簡易エアフロー装置を開発・実装し、従来比約80%のコスト削減を実現。陰圧切替時の赤ランプ点灯による周知も可能（写真2, 図2）。建築・設備計画を融合した感染対策を達成した。本件は特許出願済。感染陰圧室の気流性状や換気効率を気流シミュレーションで検証し、空調換気計画に反映した。建物完成後には実測調査も実施し、設計時の妥当性、空気齢やフィルターによる集塵効果も確認できた。本件は2023年度空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会で発表し奨励賞を受賞。

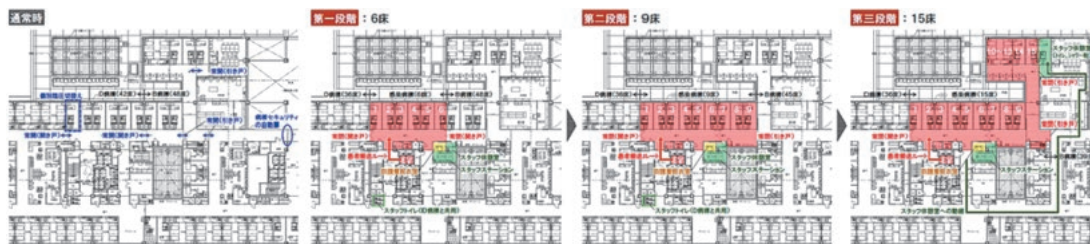


図1 パンデミック時の感染陰圧室の段階的拡張

環境性に配慮した省エネルギー計画

・熱源選定と最適な運転パターン

空調熱源は空冷モジュールチラー、ガス吸収式冷温水発生機、ジェネリンクを採用し、電気・ガス併用によるリスク分散を図っている。換気は外気処理空調機を使用し、手術室等では電極式蒸気加湿を設置。顕熱処理は基本的にFCUで行い、漏水リスクのある部屋は空冷PACを採用。病室は高効率ルームエアコンで個性性と省エネルギーを両立させた（図3）。

・病棟換気の夜間換気モード

病棟の夜間は活動量とスタッフ数が減少する特性を活かし、換気量の低減を図るシステムを導入した。室用途に応じて3パターンの運転を中央監視盤で夜間モードに自動切替する仕組みとした（図4）。病棟が常に陽圧を保てる風量バランスを維持し、機能性と省エネルギー性を両立させた。

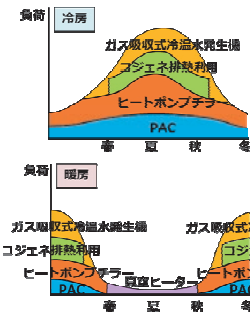


図3 年間の空調負荷パターン

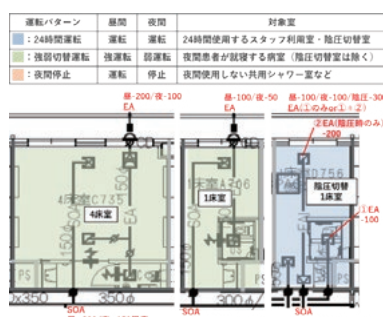


図4 病室の強弱切替時の風量設定

・外調機の結露防止運転の新システム立案と実装

外調機のシングルコイル系統において、冬期の凍結防止運転時に室内が過度に加熱され、熱源負荷も増大するという課題に対し、新たな2段階式凍結防止運転システムを開発・導入した。温水使用を最小限に抑え、室温の過度な上昇を防止するとともに、熱源の省エネルギー効果も実現した（図5）。本件は特許出願済。

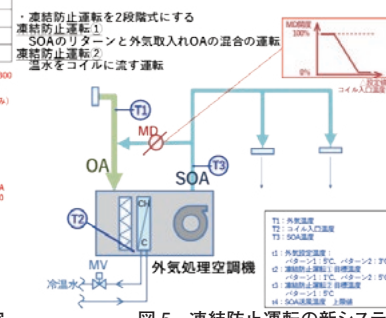


図5 凍結防止運転の新システム

患者・スタッフに優しい快適性を追求した計画

産科病棟の照明計画の照明計画において、色調の柔らかない壁紙で落ち着いた空間づくりを計画し、環境に鋭敏な新生児の生体リズムの構築を妨げない光環境や、妊婦の陣痛時の不安を低減するリラックス向上に寄与する照明制御を取り入れ、建築・設備計画を融合した取り組みを実施した（写真3, 4, 図6, 7）。将来の安全・安心な医療施設づくりの計画・設計に役立てることができ満足度の高い光環境を提供するための手法の確立を目的に、既存病院と新病院との光環境を実測し、比較検証に取り組んだ。本件は2025年度の電気設備学会にて発表し優秀発表賞を受賞。



写真3 新生児室



写真4 LDR室

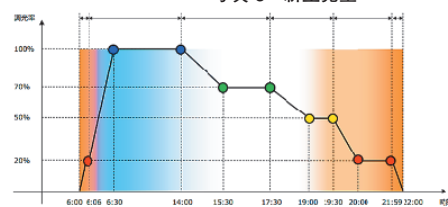


図6 新生児室の簡易サーカディアン制御



図7 LDRに採用したブルー照明



やす い ひろ き
安井 洋之

生年月 1991年2月京都府生まれ
最終学歴 京都大学大学院 工学研究科 建築学専攻 修士
業務経歴 2015年 (株)大林組入社
2015年 東京本店 設備工事部
2016年 本社設備設計部
2018年 東京本店 建築事業部設備部
2022年 本社設備設計部
2024年 大阪設備設計部 (広島駐在)

●担当した主なプロジェクト
2015年 セブンパークアリオ柏
2016年 大手町プレイスイーストタワー
2022年 パークウェルステイト西麻布
nonowa国立SOUTH
2024年 某工場改修計画

■青年技術者のことば

建築は多くの関係者によって形づけられる。立場の異なる人々が協働し、分野を横断して知識や経験が掛け合わさった先に良い建築(ベストアンサー)は生まれる。私が目指しているのはそういった「共創による全体最適」を導き出せる技術者である。その実現のため、次の2点を心掛けている。

1点目は互いの思いを理解することである。意見の食い違いが生じた際は、まず相手(私の場合は意匠や構造設計者、建築主、施工者等)の思いを聴くようにしている。その上で自分も思いを伝える。互いの意識の中に各々が何を大事にしているかがインプットされれば、建設的な議論のもと優先順位を決め、意思決定を下すことができる。

2点目は分野を横断して知識を蓄えることである。他分野の意見を理解するためには当然知識が必要である。話題の建築作品、建築技術、施工納まり等、共創する相手側の分野も越境して学ぶことで相手分野へのリスペクトを示し、議論を円滑に進めるのである。「思いやり」と「知識」、これらは共創のために不可欠である。このマインドを忘れず、今後もより良い建築をつくっていききたい。

■すいせん者

榎本 賢
(株)大林組 設計本部
大阪設備設計部 部長

nonowa国立SOUTH ～共創によるものづくりの実践～

■はじめに

本物件はJR中央線国立駅直結の木造商業ビルである。構造は柱を木造、梁を鉄骨造としたハイブリッド木造を採用しており、鉄骨梁の耐火被覆に「耐火木質ハイブリッド集成材」を組み合わせることで、純木造のような木架構を実現している。木架構はそのままデザインにも昇華され、外観や内部空間に豊かさを与えている。本物件では設備設計者として、各部門との共創を意識して業務を行った。

■設計者間の共創

この建築は木架構(フレーム)をいかに美しく魅せるかが肝であった。建築内部の大半はスケルトン天井のため、天井設備計画がコンセプト実現の鍵であった。そこでまずBIMモデルを作成し、設備情報を落とし込むことで天井設備の物量を設計者内で共有した。意匠設計者と共に設備配置やルートを試行錯誤し、木架構を魅せる上で最適な設備配置を検証した。

また、本BIMモデルを活用して納まり検討を行い、全ての配管、ダクト類を梁下に納めた上でも所定の仮想天井高さが確保できることを確認した。これにより梁スリーブが不要となり、梁せいの圧縮を実現した。また、梁スリーブを設けないということは、木架構に余計なノイズが出ないということでもある。意匠設計者が目指すコンセプトの実現にも繋がった。

■施工部門との共創

本物件の実施設計の時期は、現場の人手不足が本格的に認識され始めた時期であった。また、今までの現場や工事監理での経験上、現場の設備協力会社は日々の業務に奔走し、施工検討に十分な時間を割けてないと感じていた。



外観(南東より)



内観(1階共用部)



南面ファサード

この問題への対応として、設計段階でBIMモデルを活用し、先行で納まり検討を行った。天井や屋上設備置場について納まり問題を解消した上で現場に引き継いだ。また、BIMモデルは着工後に現場と共有し、そのまま施工図に転用できるようにした。これにより、施工時の納まり検討に費やす労力を大きく削減できたと考えている。

■建築主との共創

本物件は商業ビルである。リーシングの柔軟性がテナント誘致に直結する。実施設計中、建築主から1フロアのテ

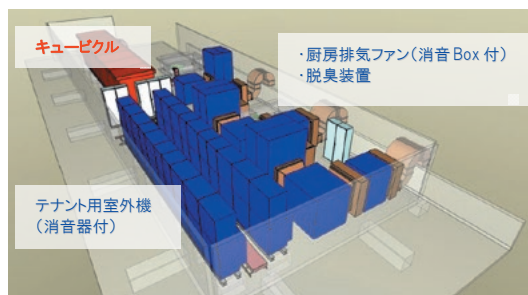
ナント区画の分割可能数を増やしたいという要望があり、その検討を行った。ダクトや配管の分岐を増やす必要があり、天井納まりが厳しいことが予想されたが、給排気の取出し位置を再検討することで、仮想天井高さを変えず設備の変更対応が可能であることを示した。これにより、リーシングの柔軟性向上に貢献することができた。リーシングにあたっての内装設計指針は設計者も作成に関与し、建築主・テナント両者にとって分かりやすい貸方ルールとなるよう配慮した。



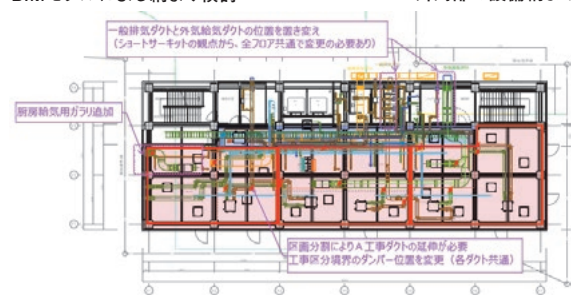
BIMモデルによる納まり検討



外周部の設備納まり



屋上設備置場の納まり検討(3D検討)



テナントエリア 分割数変更検討資料(3,4階)



やま がた み さと
山形 弥里

生年月 1992年9月山口県生まれ
最終学歴 早稲田大学大学院
基幹理工学研究科
電子物理システム学専攻
修了

業務経歴 2017年
清水建設㈱入社
設計本部 設備設計部
2023年
関西支店 設備設計部

●担当した主なプロジェクト
2021年 岡山大学共創コモンズ
2022年 福岡大学病院本館新築工事
2023年 2025年大阪・関西万博
大屋根リング
2023年 飯田グループ×大阪公立
大学共同出展館

■青年技術者のことば

昨今、地球温暖化対策として「カーボンニュートラル」の実現が世界的な課題となっており、国内においても環境配慮型建築の推進が強く求められている。企業や社会全体にとって果たすべき「社会的責任」として認識されているが、これらの高い環境目標を達成するためのアプローチの中には、居住者や利用者に過度な省エネ行動や生活様式の制約を強いる設計や運用が見受けられることも事実である。私は持続可能な社会とは、環境負荷の低減と人々の豊かな生活が両立するものであるべきだと考え、いかに少ないエネルギーで快適に暮らせるための環境改善提案を行うことが今後の技術者に求められるスキルだと感じている。

まずは、快適で満足度の高い環境配慮を実現するために幅広い設計技術力を向上して、データや理論に基づいた確かな設計を実践することで、安全性・機能性・快適性といった多角的な視点から最適な解決策を導き出し、持続可能かつ快適な環境を実現する技術者となることを目指していきたい。

■すいせん者

高橋満博
清水建設㈱ 設計本部
設備設計部3部 部長

2025年大阪・関西万博 大屋根リングにおける照明計画

■はじめに

本建物は2025年大阪・関西万博のシンボルとなっている世界最大の木造建築物として建設された。

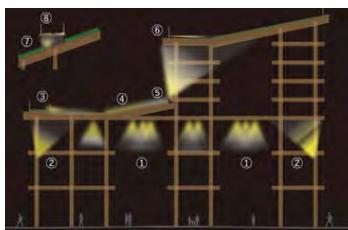


大屋根リング 全景写真

■照明設備概要

大屋根リングは、8つの照明要素を組み合わせてライトアップすることで、木架構の構造美を最大限に引き出している。空間全体のスケール感と明るさのバランスを保ちつつ、空への光漏れの抑制と歩行者の視線の自然な誘導を両立させている。

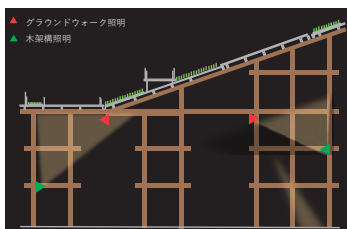
私が特に注力したのは、トラム通路用のグラウンドウォークとスロープ手摺のライティング計画である。光害とならないよう、照明器具の取付位置や光源の向きに細心の注意を払い検討を進めた。まず机上でのシミュレーションにより検討案を精査し、施工者と協力し最終的に現地確認で微調整を行うことで、最適な照明計画を実現できた。



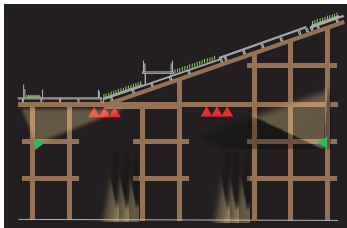
照明取付位置

■グラウンドウォーク

大屋根リングは3社で工事エリアを分担し、1つの建屋を作り上げている。清水建設工区のグラウンドウォークは一般来場者の立ち入りが制限され、トラム専用通路となっている。省エネの観点から、一般来場者歩行通路で求められる床面平均100Lxに対し、トラム通路は床面平均10Lxと照度を低く設定している。しかし、リング外周から見た際の他工区との照明計画の統一感を維持するという課題があった。計画当初、他工区の通路照明にはスポットライトが3台計画されていたのに対し清水建設工区では1台と、照度確保の観点から台数設定が少なかった。設定照度が低く、設置台数も限られる中で、他工区通路と同様に周囲とのデザイン的な調和を図る必要があった。他工区の照明設置位置を参考に単純に台数を減らすだけでは、リング架構下部が暗くなる懸念が生じた。

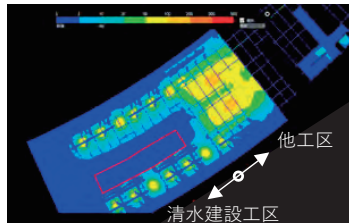


清水建設工区 取付位置(床面平均10Lx程度)



他工区 取付位置(床面平均100Lx程度)

この課題に対し、解決策としてスポットライトの配光を狭角型とすることで補填できるのではないかと考えた。広角型器具が広範囲を均一に照らすのに対し、狭角型器具は狙ったエリアへ光を集中して照射できるため、限られた台数でも必要な場所に集中して明るさを確保した。さらに、スポットライトの取付位置をリング周囲側へ設定し、器具角度を外周部へ傾けることで、外周部の明るさ向上を図れるのではないかと考え、最適な取付位置と角度の検討を行った。照度シミュレーションおよび現地での点灯確認をし客先・デザイナーと照明計画の合意を得た。



シミュレーション結果



現地照明 取付状況



竣工時 点灯状況

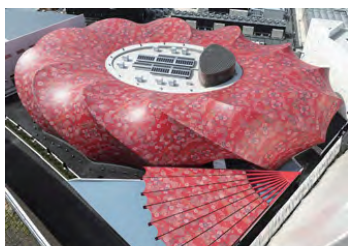
飯田グループ×大阪公立大学共同出展館の照明計画

■はじめに

本建物は2025年大阪・関西万博の民間パビリオンであり、世界最大の西陣織建築として建設された。

■照明設備概要

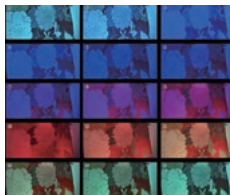
特徴的な構造形状の建物に周囲から均質な光を当てることで、光を受けた建築の形状が陰影を創り出しその輪郭が浮かび上がることを目指した。足元からの光で膜構造を浮か立たせ、外周のポール照明で建物の形状に陰影をつけている。光害に配慮し均質な光環境を実現するため、3Dシミュレーションを用いて照明の適切な配置と角度を決定した。



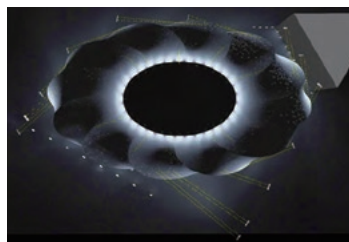
飯田グループ×大高公立大学共同出展館 全景写真

■西陣織膜の「色」「柄」にフォーカスした照明計画

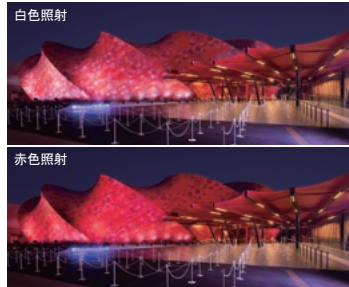
流れるような建築の三次元曲面フォルム、西陣織膜の「色」「柄」にフォーカスした照明効果によって日中とは異なる表情を魅せる演出を目指した。赤を基調とした西陣織膜に対し、最も効果的な光の色を事前にモックアップを用いて模索した。白色の光を照射することで、西陣織膜を美しく照らし出し、あらゆる柄の色に調和する白色光を生成し、そこにわずかに赤色光を加えることで、赤色の西陣織膜がより鮮やかに際立つような白色光を創出した。また、彩度を下げた青色の光を照射することで、模様が浮かび上がり、これまでにない雰囲気演出できる色で演出を行った。



西陣織膜 各色照射の見え方



照明照射角度シミュレーション



竣工時 点灯状況



おか もと たい ち
岡 本 大 地

生 年 月 1991年9月京都府生まれ
最終学歴 2014年大阪工業大学

工学部建築学科卒業
業務経歴 2014年鹿島建設㈱入社
同年東京建築支店
2016年関東支店
2020年関西支店

●担当した主なプロジェクト

2014年 浦安市新庁舎
建設工事
2016年 千曲市新庁舎等
建設工事
2019年 中外ライフサイエンス
パーク横浜建設工事
2020年 サンスターコミュニケーション
パーク新築工事
2020年 日本製鉄(株)広畑鉄源
構造対策土木建築工事
2021年 JCRファーマ(株)神戸
サイエンスパーク新築工事
2022年 大阪公立大学中百舌鳥
工学系学舎整備事業
2023年 龍谷大学京都深草
施設整備事業

■青年技術者のことば

建設業界は長年、熟練技術者の豊富な経験と判断力によって支えられてきたが、近年は働き方改革やDXの進展により環境が大きく変化している。働きやすさや生産性は向上した一方で、青年技術者の技術習得・継承には新たな課題が生じている。

建築現場では教科書通りにいかない場面が多く、状況に応じた柔軟な判断が求められる。建築は、まるで生き物のように正直で、管理を誤れば不具合を示し、気温や湿度の変化だけでも簡単に機嫌を損ねる。マニュアル通りの対応だけでなく、建築と向き合い対話する姿勢が求められる。それら熟練技術者のナレッジは継承が難しく、今後の担い手不足を踏まえると早急な対策が必要である。

一方で、DXの進展により技術の記録・共有が容易となり、学びの形は変わりつつある。この変化を好機と捉え、青年技術者としての成長と後進の支援の両面から、建設現場の技術力向上に寄与し、熟練技術者への道を前向きに、着実に歩んでいきたい。

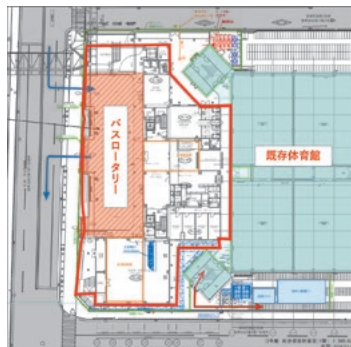
■すいせん者

東 博史
鹿島建設㈱関西支店 建築部
建築工事管理グループ担当部長

狹隘敷地におけるSRC造躯体と天然木外装仕上げの施工計画

■概要

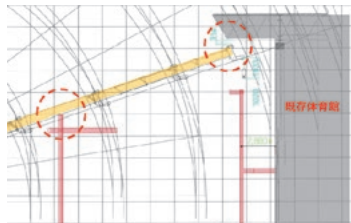
本プロジェクトは、稼働中の大学キャンパス内で既存棟4棟の解体工事の後、新棟3棟他、工作物を新築する工事である。騒音・振動や学生の動線などに特別な配慮をした工事計画が求められた。大阪関西万博と工事期間が重なっていた上に、同現場内で各棟工程がラップしており技能者が不足していたが、日々の調整と早期の労務確保により無事竣工することができた。以下、特に難関であった内容と成果について記載する。



総合仮設計画図

■SRC鉄骨工事計画

鉄骨工事では、非常に狭い施工ヤードの中でSRC特有の梁用足場を地組するスペースを確保しながら建て逃げる必要があった。クレーンが設置できる範囲が非常に限定されている中で、既存体育館の底の下での建て方もあり、緻密な揚重計画が不可欠であった。建方工区ごとに揚重機配置やブーム角度、吊り代を図面上で徹底的に検証しながら計画図を作成した。作業前には必ず計画図通りクレーンを設置してブームと鉄骨の離隔を確認、計画の妥当性を検証し、建て方を開始する流れで進めた。学生や近隣への支障とならないよう、歩道や道路上での作業を極力無くし、建て方順序の工夫により建て逃げ最後の鉄骨仕舞いも敷地内から行うことができた。



揚重機シミュレーション



シミュレーション実機確認状況

■狹隘敷地の施工計画

計画地は三方が接道しているが、車両乗入れは北面にしかなく、東西面からの車両搬入は不可。さらに敷地いっぱいには建物が計画されているため、施工ヤードとなる余裕敷地がほとんどない。パスロータリーとなる半外部スペースの1階ピロティの使い方が施工計画の肝となった。計画的に動線やインフラをフェーズごとに切り替えながらやりくりし、学生の動線や近隣住民の生活に大きな支障をきたさず進めることができた。



パスロータリー竣工時

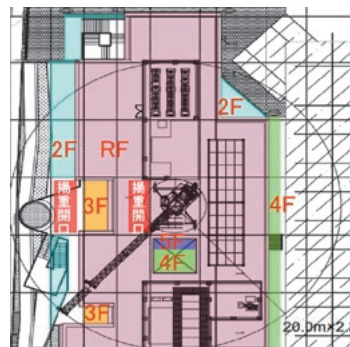
■コンクリート打ち放し

躯体はSRC造とS造の混構造であり、1階の外壁は大半がRC打ち放し仕上げの壁であった。純RC造と比べ型枠内に鉄骨が入ることでコンクリートの充填性が悪い上に、1階の階高は5300mmと高いため、打ち放し部分の打設計画、管理には非常に苦労した。コンクリート打設においては、筒先の位置をあらかじめ決めておき、それぞれの位置について打設予定時刻を設定し、打ち重ね時間の管理を徹底した。また、トレミーホースによる打設や中段に打設口を設置することで落下高さを抑え、打設中のコンクリートヘッド高さは場所ごとにスケールで実測しながら打設管理を行った。結果、大きな不具合なく美しい打ち放し壁を構築することができた。



打ち放しコンクリート出来形

仮設計画においては、セットバックが複雑な建物形状かつ、コンクリート打ち放しの軒が多いため、タイムリーな足場・支保工計画が重要となった。ほぼすべての足場、支保工について自身で組立図を作図しながら進めた。資材搬入計画においては、荷取エリアが限定されていたため揚重開口を設け、各階のセットバック部分を活用した揚重計画とした。揚重開口閉塞後は外部にパズルのようにひな壇状ステージを計画して仕上工事の搬入出に対応した。



屋上ジブクレーン揚重計画図

■天然木外装仕上げ

1階からの主要な外装仕上げは天然木の羽目板張り仕上げであった。デュアルウォールという工法でALC壁の外部側にアングルで下地を組み、その下地に厚さ15mmのカラマツの羽目板をビス止めする納まりであった。劣化による木材の落下や、雨水による腐朽、地震時のALCのロッキングによる仕上げ材同士の干渉など様々な懸念があったが、本社とも連携してひとつひとつを丁寧に検証しながら詳細納まりを検討した。

下地がSUSで非常に硬く、木工事の際は、通常使用するビスとは勝手が違うドリルビスを使用したため、思うように進捗せず調整に苦労したが、大工と金物工との連携を提案して実現し、工期内に美しく完工させることができた。



カラマツ仕上げ出来形



竣工時全景



かなだ しげあき
金田 成晃

生年月 1991年6月愛知県生まれ
最終学歴 2014年中部大学
工学部 建築学科修了
業務経歴 2014年清水建設(株)入社
同年 名古屋支店
2017年東京支店
2023年関西支店
●担当した主なプロジェクト
2014年 アサヒ三ヶ日総合研修センター建替工事
2015年 ニッセイ静岡ビル新築工事
2018年 小金井市緑町5丁目計画新築工事
2019年 東京国際展示場(28)増築工事
多摩ホールディングス株式会社本社建替工事
2020年 目黒清掃工場建替工事
2021年 レクサス昭和の森・レクサスCPO昭和の森新築工事
青梅市立総合病院新病院建設工事
2023年 京都市新北庁舎新築工事
2025年 同志社大学今出川校地新図書館建設工事

■青年技術者のことば
「四方よし」の精神で挑む、ものづくりの原点回帰と新たな技術への挑戦
私は三つのことを特に大切にしている。一つ目は「現場をきれいに保つこと」。これは品質、安全、生産性の向上に直結し、完成した建物は勿論のこと「つくる過程」も重要であると考えている。二つ目は「自分が施工している建物を本当に買いたいと思えるか」という視点で、常に施主の立場で最善の選択をすること。三つ目は「職人さんが無事に家に帰れる喜び」を守るため、安全な現場環境を築くこと。入社以来、小規模から大規模、新築、改修、解体工事と多岐にわたるプロジェクトを経験した。予期せぬ課題にも真摯に向き合い、解決することで技術者としての知識とスキルを向上させ、資格取得にも積極的に取り組んできた。将来にわたり、施主、設計者、施工者、協力業者の「四方よし」を実現することを目指し、質の高いものづくりを追求し続ける。また、建築業界が直面する働き方改革や労働力不足といった課題に対し、建設現場のデジタル化を推進することで、生産性向上、コスト削減、情報共有の迅速化を図り、その効果を全てのステークホルダーに還元できると確信している。「現状維持は退化」を胸に、新しい技術や手法に挑戦し、日々学び続けたい。

■すいせん者
大谷謙治
清水建設(株) 関西支店 工事長

同志社大学今出川校地新図書館建設工事における挑戦と成果

■概要と問題点

同志社創立150周年(大学建設事業)の新図書館建設は、RC造とS造の複合多棟構造で、複雑な接続と大屋根トラ

ス鉄骨の高さと勾配の制限が課題だった。そのため、各棟の順序計画、施工ステップ、大屋根のたわみやムクリ

の詳細検討にBIM活用が不可欠であり、高い精度での実現が求められた。

①複雑なフィニアル塔のコンクリート打設計画

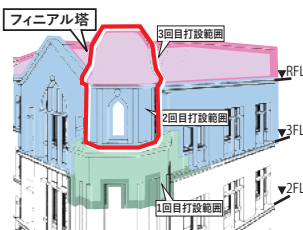
フィニアル塔は平面・立面ともに曲面が連続する特殊形状で、型枠の剛性確保や鉄筋密集部のコンクリート充填が困難であった。また、高所・狭隘な作業環境での安全・工程・品質確保も課題であった。

そのため、打設を3回に分割し、打設範囲と順序をBIMにより見える化し、関係者間で共有した。各回の打設高さと打込み量を適正化し、締固め・充填確認時間を確保した。また、型枠補強と周囲足場整備により、変形抑制と作

業性も両立させた。結果、回り込み不良が懸念される曲面部でもジャンカのない密実な躯体を実現した。



【新図書館全体】



【打設計画】



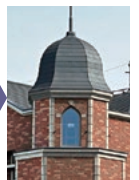
型枠建込状況-1



型枠建込状況-2



コンクリート出来形



【完成写真】

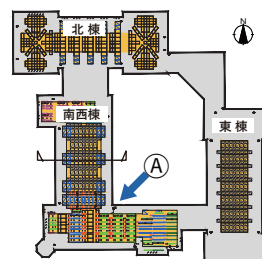
【施工ステップ】

②RC造勾配屋根コンクリート打設計画

勾配屋根のコンクリート打設では、内部打放しコンクリートの品質確保、材料分離、打ち継ぎ不良、表面不陸抑制が課題である。また、足場設置では、梁配筋と型枠設置の工程調整、資材配置や型枠の転用計画、作業スペース制限、床端部での墜落事故リスク等

が問題であった。まず、施工手順を整理し、スラブ型枠と作業床を明確に区分した。作業足場をスラブレベルより一段高く設置し、墜落リスクを大幅に低減した。また、足場を作業ステージとして活用し、配筋資材の仮置場を確保し、配筋作業の効率化を図った。勾

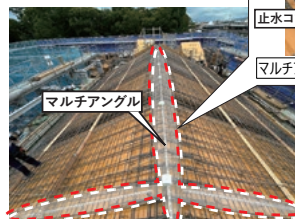
配屋根のコンクリート打設は二段階に分け、止水コン・全ネジボルト・マルチアングルでスラブ厚と精度を確保、スラブを15cmに変更し流動性も抑制した。



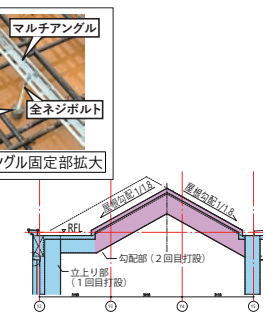
【足場計画 配置図】



【矢視方向④】



【ステンレス製マルチアングル設置】



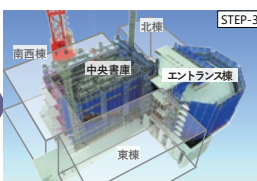
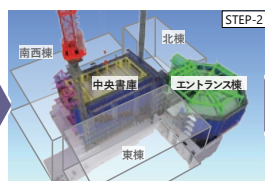
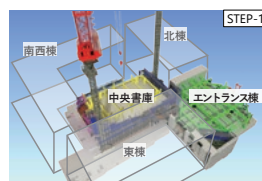
【南西棟 屋根断面図】

③ゴシック様式の建物と複雑な鉄骨建方計画

工用地の制約、RC造とS造の複合構造、各棟の足場計画と躯体工程の調整が複雑であった。特に、八角形のエントランス棟の支保工計画や、RC造躯体と取り合う鉄骨階段の納まりが複雑な

ため、外周足場との干渉が課題であった。そこで「4Dステップ図」を作成し、各棟の施工手順を可視化した施工シミュレーションにより、潜在リスクを事前に排除した。

鉄骨階段は支保工足場と先行設置した外部足場を調整し、建方から躯体工事まで一連の作業手順を明確化することで、安全と精度を確保した。



【鉄骨建方4Dステップ図】



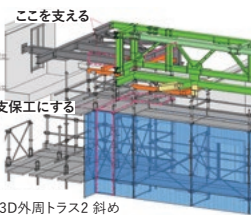
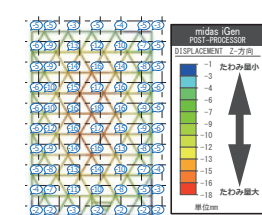
【エントランス棟 鉄骨建方状況】

④大屋根トラス鉄骨建方計画

大屋根トラス鉄骨は、建物全体の高さ制限とトラス下端の高さ制限がある中、22mスパンによるたわみを考慮しつつ、3/100の屋根勾配を確保し、屋根面の漏水リスクを回避する課題があった。

また、敷地の制約上、トラス部にタワークレーン2機を配置しており、このタワークレーン解体が工程上のクリティカルパスとなっていた。社内技術スタッフによる施工時たわみ解析を実

施し、むくり(キャンバー)の設置や支保工解体手順の策定により、工程の遅延もなく、屋根勾配と高さ制限をクリアした。



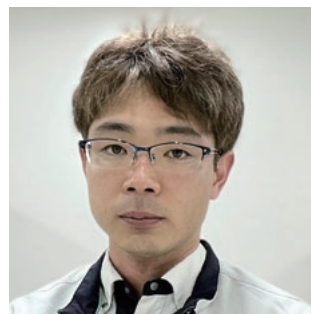
【外周トラス支保工 3D検討】



【中央書庫トラス鉄骨建方完了】



【トラス鉄骨地組状況】



品川 翔一朗

しな がわ しょういち ろう
 品川 翔一朗
 生年月 1991年2月愛知県生まれ
 最終学歴 2015年京都大学大学院
 工学研究科建築学専攻
 業務経歴 2015年大成建設㈱入社
 2015年横浜支店建築部
 2019年九州支店建築部
 2022年関西支店建築部
 ●担当した主なプロジェクト
 2020年 (仮称)コストコホールセー
 ル熊本御船倉庫店新築工事
 2021年 (仮称)五島PJ鑑瀬ホテル計
 画新築工事
 2022年 (仮称)森永乳業株式会社神
 戸工場製造棟増築工事
 2024年 手柄山スポーツ施設整備運
 営事業

■青年技術者のことば

建設現場には、様々な職種の技術者がいる。その大多数は「職人」として、職種に応じた道具とスキル＝技術を使って建物自体を作り上げていく。世間の人から見れば、これこそ「建物をつくる仕事」である。私も建設現場に立つひとりの技術者であるが、私は直接的に建物を作るための道具と、それを扱う技術は持っていない。私が使う道具は「紙と鉛筆」であり、使う技術は「言葉」である。これら3つを使って、職人さんはもちろん、つくる建物に関係する様々な立場の人たちや、建設資材、お金を動かし、施工管理技術者として建物をつくっている。年々、様々な技術革新により「紙と鉛筆」自体を使うことは少なくなり、直接顔を合わせないリモートでの会話も一般的になっている。しかし、私の仕事は、何らかの媒体に想いを描きこみ、その想いを描いたものと共に言葉で伝えることであることは変わらない。私は今日も、「紙と鉛筆」と「言葉」を意識して、建設現場に立っている。

■すいせん者

大野 慎也
 大成建設㈱関西支店
 建築部長

複合スポーツ施設におけるアリーナ大空間の構築

●はじめに

兵庫県姫路市の手柄山平和公園内に計画された複合スポーツ施設新築のプロジェクトである。バレーボールコート3面の広さのメインアリーナ、日本水泳連盟公認の屋内50mと25mプール、サブアリーナ、武道場、弓道場と屋外附属プールを備え、各種競技大会の開催と市民利用を両立させた複合スポーツ施設である。前面道路に並走するJR

山陽本線に新設された手柄山平和公園駅と直結する。敷地内に広い駐車場等は無く、建屋背面は手柄山平和公園の急峻な丘陵地となっており、建屋周囲に十分なヤードが確保できない施工条件から、建屋の一部を後施工とし躯体工事を進めた。メインアリーナ、50mプール屋根鉄骨は共にトラス構造であり、約55mの大スパントラスを一体で地組し架設した。

●施工計画時の課題と方策

大空間の鉄骨建方のため、広範囲の躯体を後施工とする必要があった。後施工範囲の躯体構築計画と後施工範囲を含む大空間の内装構築期間の短縮が工程上重要な課題となった。

・課題1の方策

メインアリーナ及びサブアリーナの鉄骨建方は、建屋外周に施工ヤードを取れない条件から、躯体の後施工範囲を設定し、350tクローラークレーンを建屋内部まで入れ、建て逃げる計画であった。後施工範囲は基礎躯体から後施工としていた。工程上メインアリーナ後施工躯体構築とサブアリーナ鉄骨建方を同時に行う必要があり、限られたヤードと動線で実現できるよう工事計画を行った。

サブアリーナ大空間を支持するロングスパン梁は、一般スパンで長さ32.9

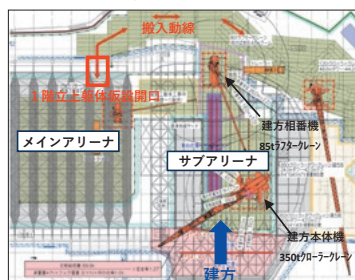


図3 サブアリーナ鉄骨建方計画(建方ステップ)と、メインアリーナ搬入動線計画図

・課題2の方策

後施工範囲上部の仕上工事も工程計画を詳細に検討する必要があった。その中でも、後施工範囲を含むサブアリーナ3階に配置された武道場の大空間は、内装仕上期間の短縮が重要な課題となった。武道場上部の架構は梁成2.2mのロングスパン梁で構成されており、天井のふとところが大きいので武道場全面にブドウ棚鉄骨が計画されていた。さらに、武道場の床は鋼製二重床の上にフローリングを敷き込む仕上のため、床躯体は床仕上げレベルから600mm下がっており、天井仕上げ面まで5.1mの高さがあり、一般的な簡易組立足場では作業が不可能であった。

これらの条件のもと、以下の工事計画を検討・立案し武道場大空間を構築した。

①建方と同時にブドウ棚の主材を取付け、内部鉄骨取付に要する時間を削減する。

②大型移動式足場を計画し天井仕上工事に要する時間を削減する。

①：ロングスパン梁地組時にブドウ棚取付用の足場も組付ける計画とし、建

課題1：メインアリーナ後施工躯体とサブアリーナ地上躯体・後施工躯体の同時構築計画

課題2：後施工範囲を含む3階武道場大空間の内装仕上期間の短縮計画

m、重量が42tあり、建方期間を短縮するため、この梁を地組して揚重する建方計画とした。ロングスパン梁を構成する1ピースの重量が10tを超えるものがあり、建方相番機で地組するには、大型のクレーンを使用するか地組ヤードを広くとる必要があったため、地組を建方本体機で行い建方ヤードを極力小さくする計画とした。サブアリーナの軸組形状、部材の取り合いが複雑であったため、1日毎の建方工区割と搬入ピース数を3Dモデル上で検討し、メインアリーナ後施工躯体工事

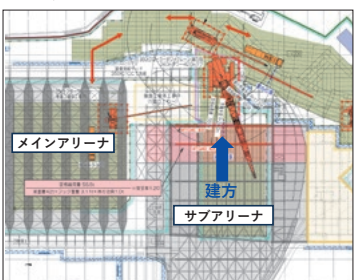


図4 3Dモデルでの建方工区割検討

方中にブドウ棚主材の取付けを行った。ロングスパン梁の架設後に、組付けた足場から水平ネットを先行で張り、ブドウ棚主材、小梁の順で取付ける手順とした。この手順としたことで、墜落災害のリスクを低減しつつ、クレーンでの取付のため短時間で取付が可能であり、建方中に大半のブドウ棚を取付けることができた。

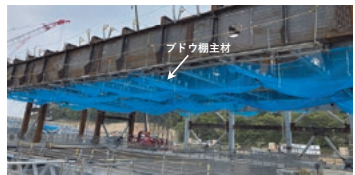


図6 ロングスパン梁架設時状況

②：約11m×33mの大型移動式足場を計画し、ブドウ棚の根太材取付及びそれ以降の天井仕上工事を移動式足場で行うことで、高所作業車での作業工程を減らし歩掛の向上を図った。移動式足場の重量は約11tあり、通常のローリング足場用の車輪では移動が困難になるため、アングル材のレール上



図1 現場全景(2026年5月末)

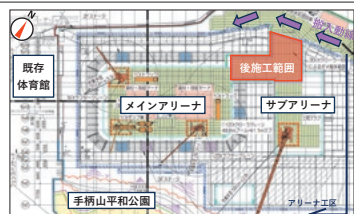


図2 アリーナ工区地上躯体総合仮設計画図

の動線を確保できる建方ヤードとなるよう配置計画を行った。サブアリーナ建方完了後も、同じ動線計画で、サブアリーナ後施工躯体の構築を常に進めながら、先行建方範囲の躯体、内外装工事を同時に行った。

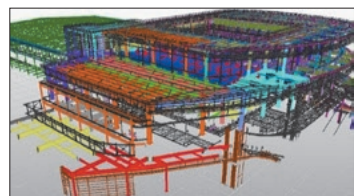


図4 3Dモデルでの建方工区割検討



図5 サブアリーナ建方時現場状況

を移動する鋼製車輪を取付けた。足場を大型化したことで、足場の移動から足場上での各作業工程をタクト工程化して管理ができた。



図7 移動式足場で天井仕上工事状況

●まとめ

当プロジェクトは大スパントラス架設の精度管理等、技術的に高度な工種が多々あったが、密に関係部門と連携して、事前の計画通り工事を進めることができた。特に、敷地条件から後施工範囲を設けざるを得ず、更に搬入動線が限られる中で工事であったが、記載した課題の他にも多くの検討と工夫をし、2026年7月31日のお引渡しに向け工事を進めている。



瀬下 颯史

生年月 1992年3月山口県生まれ
最終学歴 2015年鹿児島大学
工学部建築学科卒業
業務経歴 2015年(株)竹中工務店入社
2016年大阪本店作業所
2026年大阪本店技術部

●担当した主なプロジェクト
2016年 GLP吹田倉庫
2017年 GLP寝屋川物流センター
2018年 日経大阪放出印刷工場
2019年 三井不動産加島物流センター
2020年 アクティオ大阪南港物流センター
2021年 神慈秀明会玉手山支部
2022年 大阪某プロジェクト
2026年 大阪本店技術部

■青年技術者のことば

私はどこまでも追及することが出来る建築・建設業が大好きだ。徹底的につくり込むことで、自分の計画がかたちとなり、工事がスムーズに進捗する成果として現れ、最良の作品として竣工した時の達成感は言葉に出来ないものである。現在の建設業界は人手不足や作業員の高齢化、長時間労働といった多くの課題に直面しているが、今後の将来を担う我々がこれらの課題解決に積極的に取り組み、発信することで、魅力ある建設業の実現に繋がると考えている。今後も変化していく社会環境に適応する為の強い意志を持って挑戦し続け、自身の研鑽と後進の育成だけでなく、社会に貢献できる技術者となるように努めていく所存である。

■すいせん者

中島正人
(株)竹中工務店 大阪本店
技術部長

サイトPCa化工法による生産性向上の実現・点群モデルを活用した新たな施工管理手法の実践

●はじめに

2024年4月から建設業界も時間外労働の上限規制が適用され、建設業を取り巻く社会環境は様々な制約に縛られる中で、これまで以上に厳格な工事が求められるという厳しい状況であり、まさに転換期を迎えている。
特にデジタル技術の活用による施工管理業務の効率化・合理化は必要不可欠であり、若手主体の組織ではボトムアップに繋がると考える。また、技能労働者不足による技術力の低下や若手人材育成の遅れが予想されるため、我々施工管理者はこれまで以上に生産性を向上させる施工法の構築や分かりやすい施工計画の早期立案が強く求められると考える。
建築は一品生産のものづくりとなる為、「現地・現物・現時」の確認が必須となるが、従来の無駄を削減する為のデジタルコンストラクション技術の推進により、変化していく社会環境に適応し、社会のニーズに応え、新たな価値を生み出すことこそ、私が目指す新しい建築生産のかたちであると共に技術者としての責務だと考える。
このような環境下の中、建築の最前線となる作業所施工管理の立場として私が実践した取り組みを以下に示す。

●施工計画及び実施工での取り組み

(1) 狭隘かつ傾斜敷地でのサイトPCa化工法による生産性向上の実現

本プロジェクト(写真-1)は、教会建築として建物の内外外部において、直線・曲線を組み合わせたデザイン性の高い建物である。また、住宅街に囲まれた狭隘かつ傾斜面の敷地であり、敷地内の高低差は6m以上と、複雑な地形条件下での工事が必須であった。(図-1・写真-2)
プロジェクトの課題として、複雑なデザイン形状の施工品質を確保する為、躯体工事を短縮し、仕上工事期間の確保が必要であることや、特殊な敷地条件により、一般的な在来工法では施工が困難となり得る工事が点在し、施工性の改善が必要であることが挙げられた。そこで、サイトPCa化工法を戦略的に取り入れ、本課題の解決に取り組んだ。



写真1 完成写真

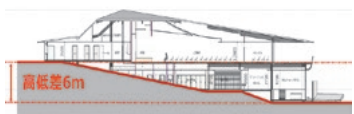


図1 断面図

(2) 点群モデル(lmerso)を活用した新たな施工管理手法の実践

本プロジェクトは運用中の敷地内で、複数棟の解体工事・新築工事・改修工事を行う特殊性を有している。(写真-4)
プロジェクトの課題として、若手主体の少数精鋭組織での現場運営が想定され、特に品質確保と工程管理の両立が重要な課題であった。また、労働時間の制約や人手不足の状況の中で、これまでの管理手法では対応に限界があり、新しい施工管理手法の確立が必要と考えた。従来の時間がかかる業務プロセスを簡略化(表-1)することで、若手担当者・協力会社共にメリットが生まれるモデル的な取り組みを行い、以下の目標達成に取り組んだ。



写真4 完成写真

【達成すべき目標水準】
①WLB実現の為、平均時間外労働を60時間/月以内とする
②図面と現状の誤差を明確にし、改修工事のトラブルをゼロとする

【課題解決のための取組み】

- ①点群モデルと作業所モデルの重ね合わせを行い、色別管理を行う
- ②3次元点群改修モデルを構築し、早期に方針を決定する

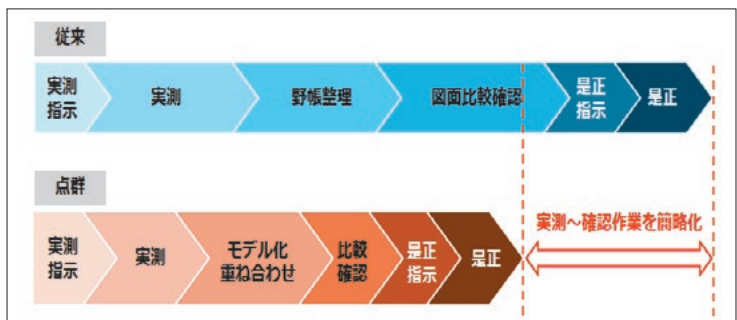


表1 比較図



写真2 敷地航空写真

狭隘かつ傾斜敷地条件でも目的の違う部材を徹底的にPCa化(写真-3)することで、従来工法では解決困難な施工課題を克服することができた。工事初期段階から、関係者と協議を重ねることで、詳細計画を入念に行い、PCa施工図の作図期間を確保した。本取り組みは建設業における生産性向上と施工品質向上の両立を示す好事例であり、今後の業界発展に貢献する知見となるものである。



写真3 各種PCa化部材

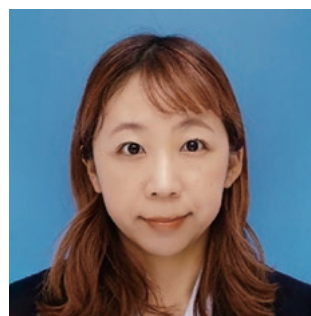


図2 色別管理モデル



図3 点群改修モデル

上記課題に対する方策として、点群モデル(lmerso)を採用した。色別管理で情報を可視化することで、現場の間違いを直感的に認識でき、是正・手直しの迅速化を実現した。(図-2)また、点群改修モデルを作成することで、「誰でも・いつでも・何度でも」モデル確認が可能となり、必要な情報漏れのリスクが低減され、結果改修工事のトラブルの排除を実現した。(図-3)本取り組みで、若手主体の少数精鋭組織でも大型現場の品質確保と工程管理の両立を実証することが出来た。3次元デジタル技術の導入により、限られた人員での高度な施工管理を可能とした本手法は、建設業界の生産性向上に対するロールモデルの1つと考える。



にし お もえ
西尾 萌

生 年 月 1991年1月広島県生まれ
最終学歴 2011年呉高専建築学科
業務経歴 2011年鹿島クレス(株)入社
2024年鹿島建設(株)入社

●担当した主なプロジェクト
2011年 (仮称)新千北町第三団
住宅建築工事
2012年 新順心病院新築工事
2012年 MRI実験棟(仮称)建築工事
2013年 (仮称)がくさい病院
移転新築
2013年 世界救世教(仮称)
春秋庵別館新築工事
2014年 京都大学(中央)
国際科学イノベーション棟
新築その他工事
2015年 京都女子大学図書館
新築工事
2017年 関西支店建築部
建築工事管理グループ
Wプロジェクト新築工事
2018年 (株)住友倉庫(仮称)神戸港
ポートアイランドL6
新倉庫建設工事
2021年 関西支店建築部生産推進
サポートグループ
IIM-1建設工事
2024年 OsakaSakurajimaResort
プロジェクト
2025年

■青年技術者のことば

幼い頃から建物が好きだった私は、その思いから建築学科へ進学した。学ぶ中で人の心を動かす空間を創りたいと考えるようになり、現在の職を選んだ。現場で働き始めて、建物が多くの人と時間によって支えられていることを知り、建築への思いは一層強くなった。今ではこの仕事に誇りを感じている。

ICTツールは有効な手段だが、使うだけでは成長にはつながらない。自分なりの工夫を加え、技術として活かすことが重要だと考えている。また、私たちは人と仕事をしていることを忘れて、思いやりを持つことも大切にしていきたい。先人の積み重ねをもとに新たな価値を生み出すことが、ICTを扱う私たちの使命である。これからも先を見据え、挑戦を続けていきたい。

■すいせん者

川瀬剛史
鹿島建設(株)関西支店
建築部建築工事管理グループ長

業務効率化とICTツール導入への挑戦

●概要

鹿島建設では2018年11月に2024年から施行される労働時間の時間外上限規制に向けて業務効率化、そして担い手不足を解消するために「鹿島スマート生産ビジョン」が策定された。この「鹿島スマート生産ビジョン」の現場への展開を目的として関西支店に建築部生産推進サポートグループ(以下S3グループ)が発足した。S3グループは現場の業務効率化を目標に現場からの問い合わせに応えるだけでなく、積極的に多くの業務効率化ツール・技術を探求し、現場へ先導して展開する部署である。その部署での活動を報告する。

●現場の業務効率化についての課題解決

現場の業務効率化について、まずは今まで当たり前に行っていた業務が本当に必要なかを見直すことにした。今までの業務量を減らすことが最も重要で、その後に業務の効率化、アウトソーシングの順で進め、サイクルとして回すことで、効率化をスパイラルアップした。

関西支店内の書類削減WGに参加し、は法規制上本当に必要な現場の書類だけを残し、書類の削減と簡素化を実施した。合わせて社内提出書類であるパトロール用紙の改定や毎日の繰り返し業務を簡素化するため、労働基準監督署に問合せしながら方針を固めた。また現場書類のペーパーレス化を推進するツールとしてRPA(robotic process automation)を採用し、作業間連絡調整記録の配信や議事録の文字起こしなど機械的にできる作業はなるべく人の手から離れた。

アウトソーシングについては、建築の専門性が高い業務を現場社員が十分に時間を当てる事が出来る様に、業務の洗い出しを行い、アウトソーシング先の組織体制を構築し、育成・フォー

ローを丁寧に行った。

業務効率化にICTツールは有効であるが、現場で働く社員からしてみるとどのようなICTツールがあるか分からず、また調べる時間も無いという課題がある。似たようなツールも多くあり、現場業務と両立して比較する事は難しい。そこで、「鹿島スマート生産ビジョン」の3つのスマート生産項目に合わせて、ICTツール一覧表(図-2)を作成し、現場に展開することとした。このICTツール一覧表は、スマート生産項目に合わせたジャンルはもちろん、特徴やコスト(費用対効果)も含めて作成した。(図-1)

●業務削減キックオフの開催

現場の業務効率化についての検討や方法を固めたが、実際に業務を削減するのは現場社員であり、今までの働き方ではダメだという意識改革も必要であると感じた。そこで、新規着工現場に対し、「業務削減キックオフ会議」を立ち上げた。会議では、時間外労働の上限規制に向けた業務の見直し・アウトソーシング・ICTツールを具体的に説明し、現場で働く社員に寄り添った。現場社員がイメージしやすい内容を多く紹介し、導入支援も実施することで現場の負担を減らすことに注力した。

会議の最後には、必要な業務・必要ない業務・繰り返し行っている業務などの意見交換を行った。現場との意見交換の内容は支店関係部署と共有し、業務標準の見直しやRPAのシナリオ作成、新規アウトソーシング業務に活かし、現場の生の声を聞いているからこそ、活動展開も実効性が目に見えて進んだ。(写真-1)

●現場業務効率化の展開

・QRKAZASの開発

現場での高所作業車の鍵の貸し出し管理に時間と労力がかかっているため、効率化出来ないかということで鍵の代

わりになるアプリとQRコードリーダーを開発した。QRコードリーダーは既存の高所作業車に後付け可能なため、いつでも導入可能。アプリは始業前点検実施後、QRが発行される仕組みとなっており、オフライン環境でも使用可能である。(図-2)

・音声ガイダンスシステムの活用

大阪・関西万博GW工区の建設工事で業務削減キックオフを行った際に、現場社員より着工当時の万博へのネガティブなイメージを払拭し、現場で働く技能者の方が万博の工事で働いていることを誇れるようにしたいという意見があり、株式会社Otonoのおもたびというサービスを通勤する技能者・社員に活用出来ないかということで試行し、導入した。GPSで位置を把握し、場所毎にスポット登録して竣工後にどんなパビリオンやゲートが出来るのか工事中から万博を楽しむことが出来るため、技能者・社員から好評だった。(図-3、4)

・技能者の褒賞制度

2024年度からの残業時間上限規制が建設業にも適用されることにより、現場の週休2日制度が進むと現場で働く作業員の賃金減少が懸念されるが、ゼネコンから作業員に直接インセンティブの付与ができない。また、現場を今まで以上に効率良く運営しなければならない。そこでWeb3.0プラットフォームを提供する株式会社UPBONDの「GOヘイ!」というシステムを活用し、技能者へ向けての褒賞制度を試行した。現場の職長・技能者にインタビューを行い、効率良く運営するためには現場全体のコミュニケーションを活性化させる必要があることが分かった。そこで、所属会社を問わず現場全体で相手にイイね!を送りあうことで仲間を尊重しあい、互いの仕事に自信と誇りを持って現場の活性化を図るシステムを構築した。(写真-2)

No.	キーワード・概要	システム/機能名	得意先/用途	特徴	写真画像	参考情報	メーカー
1	鍵の管理	QRKAZAS	高所作業車	高所作業車の鍵の貸し出し管理を効率化し、作業時間の短縮と鍵の紛失防止を実現。		高所作業車の鍵の貸し出し管理を効率化し、作業時間の短縮と鍵の紛失防止を実現。	株式会社Otono
2	現場の案内	現場案内アプリ	現場	現場の案内を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		現場の案内を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
3	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
4	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
5	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
6	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
7	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
8	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
9	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono
10	作業時間の管理	作業時間管理アプリ	現場	作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。		作業時間の管理を効率化し、作業時間の短縮と作業員の安全確保を実現。	株式会社Otono

図-1 ICTツール一覧表



図-3 システム画面

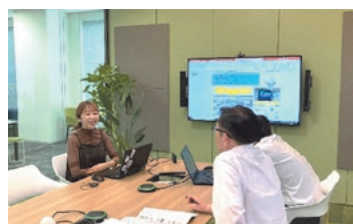


写真-1 業務削減キックオフ状況



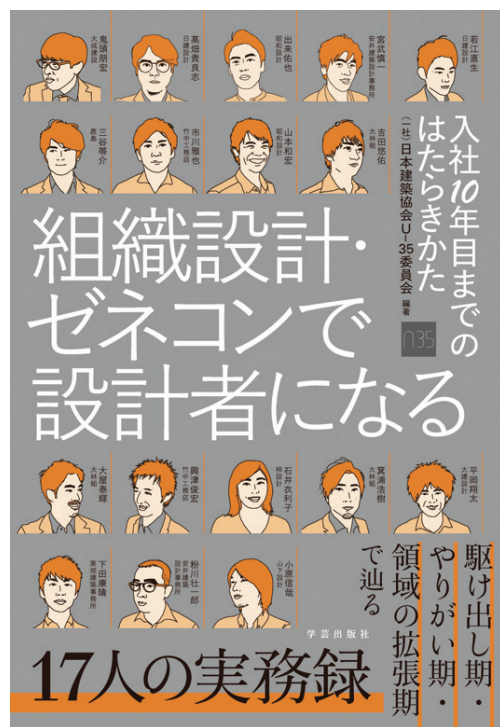
図-2 QRKAZASコードリーダー



写真-2 システム導入

『組織設計・ゼネコンで設計者になる』

販売中



組織設計事務所やゼネコン設計部で働く社会人1～10年目の若手設計者たちは、日々の仕事にどんなやりがいを感じ、どんな壁にぶつかって成長していくのか。建築・都市プロジェクトの最前線で働いてきた経験や学びを共有し、所属組織を超えて互いに切磋琢磨する日本建築協会 U-35 委員会のメンバーが、リアルな実体験を持ち寄る。

組織設計・ゼネコンで設計者になる
入社10年目まではたらきかた

（一社）日本建築協会 U-35 委員会 編著
四六判・224頁・2200円＋税・学芸出版社

会員特別割引販売

購入ご希望の方は hensyu@aaaj.or.jp へご連絡ください

1章 無我夢中の駆け出し期 (1～3年目)

- ・建築は無数の対話でできている
- ・だれよりも早く手を動かす
- ・「20年先」を提案する設計者になる
- ・施主のイメージから可能性を広げる力
- ・コンセプトを見える化してコラボレーションする

座談会① 自分の無知を思い知らされる駆け出し期
社会を見つめ、「建築」の領域を拡張する
社外活動コラムⅠ 学生と一緒に次世代の空間を構想する

2章 難局こそやりがい期 (4～7年目)

- ・先入観を乗り越える楽しさ
- ・ベテランに支えられつつプロジェクトの舵を取る
- ・ミリ単位の調整でアイデアを実現する
- ・一歩踏み込んだデザインをチームで実現する
- ・工業デザインの精度でゼロから寸法を問い直す
- ・ニーズをシーンに変換するユーザーヒアリング

座談会② 自信を掴みつつ、葛藤も生まれるやりがい期
社外活動コラムⅡ まちに飛び出てフィールドワークを行う

3章 デザイン領域の拡張期 (8～10年目)

- ・前例のないディテールを編み出す
- ・計画に潜在する公共性をデザインコードにする
- ・積層型大規模木造のロールモデルをつくる
- ・組織のチームプレーを見つめ直す
- ・チームを導くトータルディレクション
- ・事業性を満たしつつ一歩先の価値を提案する

座談会③ 自らの責任のもと、多角的な視野で動ける拡張期
社外活動コラムⅢ 時代のニーズを探り、自らまちを楽しむ
社外活動コラムⅣ 建築の外側で、業種を超えて社会を考える
時代の変化と建築、設計者

（一社）日本建築協会 U-35 委員会



日本建築協会内の若手設計者を
中心に、主に組織に属する概ね
35歳以下の設計者で構成され
る。関西を拠点に、建築におけ
る多様な価値の発信を目的とし
て組織を超えたプラットフォーム
づくりや都市のフィールド
ワークなどを行う。

U-35 委員会 HP
(書籍詳細はこちら)



カーボンニュートラルを表現した構造計画 ～岩谷産業神戸研修所～

株式会社大林組構造設計部 藁科 誠

■はじめに

近年、建築分野においても脱炭素化への対応が求められ、構造設計においても材料選択や架構計画を通じた環境負荷低減が重要な課題となっている。

本計画は、水素利活用を通じ脱炭素社会の実現を目指す岩谷産業の研修拠点である。海を望む立地特性を活かしつつカーボンニュートラルを目指し、研修機能に加えて企業価値を発信する拠点として計画された。

構造的には、研修エリアを鉄骨造、客室エリアを木造とするハイブリッド構造とし、建築表現と環境配慮を両立している。エネルギー面では水素、カーボンオフセットLPガス、太陽光発電を活用し、将来的なカーボンフリー化を目指している。

■CFTと木造の平面ハイブリッド構造

カーボンニュートラルを目指す姿勢を構造に反映するため、CO₂排出量の削減と炭素固定に貢献できる木造を採用した。ただし、耐火木造はコストアップにつながるため、木造の採用範囲は限定する必要がある。そこで、大空間が求められる低層の研修エリアは鉄骨造とし、1時間耐火の性能が必要な上層階の客室エリアにはハイブリッド構造を採用した。

平面計画では、木造梁は梁貫通が難しいため、外周部に木造の梁を配置した。また、木造のスパンは基準スパン11.2mの半分である5.6mとし、断面が過大にならないよう計画した。

外周部に木造を採用することで、外観から木造の構造体が感じられるだけでなく、内部空間では木のぬくもりを体感できる設えを実現した。

■開放性と耐震性能の両立

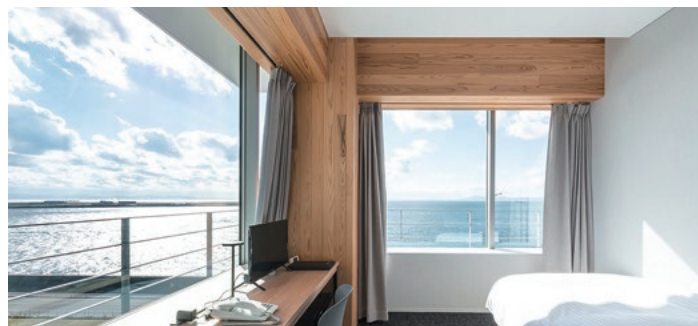
木造部材の断面は接合部の設計に依存し、耐震要素として用いる場合には断面を大きくする必要がある。そこで、開放性の高い木造架構を実現するため、木造は長期荷重のみを負担し、地震力は中央コアの鉄骨造で負担する合理的な構造計画とした。

この構造計画を実現するため、木梁端部はピン接合とし、柱梁には国産カラマツを用いた大断面集成材を採用した。柱は540mm角、梁せいは700mmとし、強度と意匠性を両立させている。

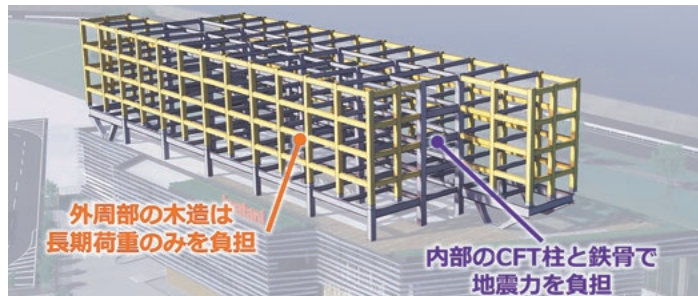
さらに、高い耐震性能が求められる鉄骨フレームの柱には800mm角の角形鋼管に設計基準強度Fc48のコンクリートを充填したCFT柱を採用し、限られた本数で高い剛性を確保している。CFT柱の採用と架構計画の工夫により、木架構をピン接合としながらも自由度の高い平面プランと優れた耐震性能の両立を実現した。



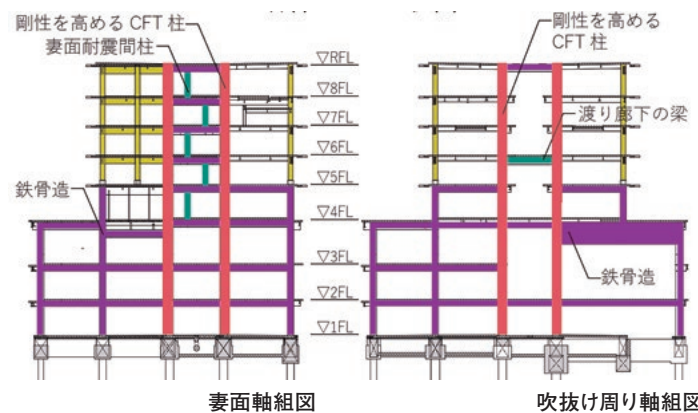
木造の構造体を見せる外観（本誌2026年2月号参照）



木のぬくもりを体感できる客室



上層客室エリアの構造ダイアグラム



妻面軸組図

吹抜け周り軸組図



わらしな・まこと

1983年生まれ、京都大学大学院修了
2008年株式会社大林組入社

弥栄会館から帝国ホテルへ ～祇園町南側のまちなみの継承～

(株)大林組 設計本部 糸嶺円路

■計画概要

本計画は、1936年に劇場として建設された弥栄会館をラグジュアリーホテルへと用途転換し、保存活用を図るものである。弥栄会館は2001年に国の登録有形文化財に登録されているが、耐震性能の不足や老朽化により今回増改築されるまでは一部利用に限られていた。



増改築後 南側全景



増改築前 南西側全景



増改築前 北側全景

●まちの成り立ち・地域の概要

弥栄会館が立地する祇園町南側は、洗練された京町家が連なる京都最大の花街であり、美観地区として地域主体の景観保全が行われている。本敷地は祇園甲部歌舞練場の一角に位置し、明治期に創設された「都をどり」の上演拠点として発展してきた。歌舞練場は地域文化の中核を担う施設であり、弥栄会館もその一部として重要な役割を果たしてきた。



祇園町南側 花見小路風景

●祇園甲部歌舞練場全体の計画概要

祇園町南側では、1871年の京都博覧会に際し産業振興を目指して考案された「都をどり」の開催場所として、1873年に花見小路西側の清住院が改装され歌舞練場が開場した。本敷地は歌舞練場移転のため現在の「八坂女紅場学園」により1911年に購入され、1916年には歌舞練場本館など5棟が竣工した。



歌舞練場 本館

●弥栄会館の解体前状況と史的価値

弥栄会館は祇園甲部歌舞練場の施設の一つとして、新たな大衆娯楽に対応するため1936年に竣工した。RC造地上5階地下1階、延床6,594㎡、オケピットと映写室を備え、予備席を含め1,200席を有する劇場であった。武庫川女子大学の石田潤一郎教授により、「設計は劇場の名手と云われた大林組木村得三郎。箱型の骨格に日本建築らしさを纏わせる為、低層部では深い軒を重ね、高層部では大ぶりの3つの塔屋に宝珠を載せている。薄い庇やヴォリュームの分節はライトの手法に近いが、先斗町歌舞練場ほど直写的でなく、日本の伝統的な形態に

近い。ページュの二丁掛タイルは面を取って厚みを見せ、軒線を強調する効果も生む。戦前はニュース専用映画館、戦中は風船爆弾の工場、戦後の接収解除後はボクシングやコンサートの興行、夏にはお化け屋敷が催され、屋上はビアガーデンとして賑わい、その記憶は今も生き続けている。」とされている。

●景観としての地域への寄与

弥栄会館は、祇園甲部歌舞練場の建築群のひとつとして「国土の歴史的景観に寄与しているもの」とし2001年に登録有形文化財に登録された。劇場としての機能を終えた後も花見小路からは正門と共に敷地を示すアイコンとして、遠景では重層的な銅板瓦葺き屋根が町家の屋根や庇と連なり、特徴的な外観意匠によって祇園町南側地区のスカイラインを形成し、地域景観に寄与し続けてきた。



増改築前 西側全景（手前正門）

この建築の姿を継承することは祇園町の町並みの記憶を継承することであり、外観意匠の保存は文化的・社会的意義が大きいものと言える。

●弥栄会館の増築による再生計画コンセプト

2014年の耐震診断で安全性不足が判明し、さらに2018年の台風被害で屋根損傷や漏水が発生するなど、建物の維持は困難な状況にあった。一方で、歌舞練場を含む建築群の継承は地域の長年の願いでもあった。本計画では弥栄会館を保存活用して収益を生み、その一部を歌舞練場の耐震改修に充てる仕組みを構築し、双方の再生を実現した。観光都市京都では、来訪者に開かれたホテル活用が持続的運営の観点から最適と考えられた。

■再生計画を実行するために適用した法令関係

●一団地認定

劇場をホテルへ用途変更するにあたり、建築基準法上同一敷地内に用途の異なる建築物（劇場と宿泊施設）を併存させることができないため、敷地を分割する必要がある。一方、京都市建築基準条例第16条に基づき、劇場である歌舞練場の主出入口と道路との間に幅員6m以上の空地を確保し、同条例第17条により幅員6m以上の道路に16m以上接道する必要がある。また、登録有形文化財である正門を分断しない計画とする必要から、元の敷地を敷地Ⅰ（弥栄会館）と敷地Ⅱ



条例等に基づく空地・避難計画

(歌舞練場)に分割する計画とした。

このため、両敷地を建築基準法第86条に基づく一体的な建築計画として整理し、維持管理計画および防火・避難誘導計画を定めることで、一体的な整備・運用を行うこととした。

●高度地区内における特例許可と景観地区内における認定

本計画地は、建物高さ12m以下の高度地区区域内に位置しているが、弥栄会館は既存建物として高さ31.5mを有している。通常、新築や大規模な増改築を行う場合には当該高さ制限が適用されるが、ホテルとしての事業性を確保するためには、現状の高さを維持したまま建築する必要があった。

そこで、京都市の都市計画（京都国際文化観光都市建設計画）により規定された特例許可手続条例に基づき特例許可を取得することとし、京都市景観審査会で審査された。審査では、建物外形シルエットの継承、主要な南西外壁および既存構造体の保存を条件に、形態・意匠に優れ、土地利用、建築物の位置、規模、各部高さ等に総合的配慮がなされた計画であると確認され、地域および都市全体の景観向上に資すると判断された。

また、本計画地は歴史遺産型美観地区である祇園町南側地区に位置し、増改築では伝統的な町並み景観との調和を重視し、高さを抑えた中低層建築物による町並み形成が求められている。そのため、京町家等の歴史的町並みとの連続性を確保する観点から、京町家等の建築様式を継承する必要があった。

一方、弥栄会館の既存形状をそのまま保存することは、京町家の建築様式の継承とは整合しないため、美観風致審議会にて審議が行われた。その結果、祇園町南側の景観の一部を形成してきた弥栄会館の外形を継承するとともに、新築される北棟に



京町家の建築様式を継承した北棟

京町家の建築様式を取入れる計画とすることで、認定を取得することが可能となった。

なお、これらの審査会に先立ち、京都市優良デザイン促進制度を活用し、建築計画の早期段階から景観アドバイザーの助言を受けることで、審査会手続きを円滑かつ有意義に進めることができた。

●登録有形文化財の継続

弥栄会館は、歌舞練場を含む敷地内の他建築物と併せて登録有形文化財として登録されていた。本計画では、増改築により外観の四分の一を超える改変が生じるため、関係法令に基づく届出が必要となった。

そこで、京都市文化財保護課および景観政策課と歩調を合わせて文化庁と協議を行った。その結果、西側外壁、南側一スパンの躯体、一

部外装材、風除室内装等を利用する計画とし、登録有形文化財の名称を変更することで、文化財を継続することとなった。

■弥栄会館再生計画の保存内容

●外装

南面外壁は弥栄会館の特徴的意匠を象徴するため、可能な限り元の姿を留めることを念頭に、保存、復原、変更、付加の在り方を模索した。劇場の窓のない外壁部にはホテル客室のための新たな開口を設け、玄関部はホテルに相応しい構えを付加した。劣化した銅瓦屋根は全数取り換え、外壁においては既存タイルやテラコッタを可能な限り再利用し、失われた煙突屋根、撤去された西面装飾バルコニー等は忠実に復原し、創建時の姿を取り戻した。



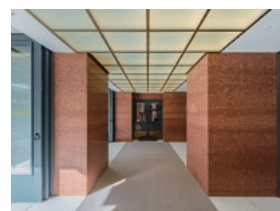
祇園南町の景観の一部を形成してきた弥栄会館の外形を継承



再利用した外壁の既存タイルやテラコッタ

●内装

内装は、文化財としての価値や既存躯体の制約を踏まえつつ、既設の特徴を活かしながら、新素材研究所の提案をもとに計画を組み立てた。特に風除室では、登録有形文化財としての価値を継承するため、壁の仕上材に当時と同じ石種を用いて復原している。また、天井の梅花文様のエッチングガラスは、新たな強化ガラスと合わせて可能な限り再利用し、再利用できない部分は同柄のガラスを新製して意匠の連続性を確保した。



可能な限り復原した風除室

以上のように本計画は、歴史的建築の価値を保存しながら新たな用途を与え、文化と経済の両立を図った再生事例である。約8年にわたる取り組みを経て、弥栄会館は地域の記憶を継承しつつ、新たな光を灯す存在へ再生した。



いとみね・えんじ

1971年 兵庫県生まれ
1998年 神戸大学自然科学研究科建設学修了
同年 新井組入社
2008年 大林組入社
現在 同社設計本部エキスパート

大林組設計部 プレモダンの群像

武庫川女子大学 教授 石田潤一郎

4月号では1920年代から30年代にかけての建築界を概観し、その中で地歩を築いてきた大林組設計部の歩みを整理し、主立った部員とその作品を紹介した。

この時期、理想とする建築像は全世界的に揺れ動いていた。試みに近代建築史の年表を開いてみよう。『図説 近代建築の系譜』（彰国社、1997年）に掲載される年表（作成は川島勝氏）の1924年の項には、「チリ・ハウス」と「シュレーダー邸」、「シカゴ・トリビューン・タワー」が並び、日本では「山邑邸」が挙がる。表現主義、構成主義、歴史主義…理念も手法もまったく異なる提案が、「建築はかくあるべし」と呼ばわって登場する。そのような時代であった。

こうしたなか、設計部員たちの志向もさまざまだった。今月号では最も旺盛に活動した3人に焦点を当て、彼らが、混沌とした時代にあって、どう模索し、どのようにおのおのの作風を作り上げていったかを眺めてみたい。

■木村得三郎（1890～1958）の場合

木村得三郎は明治42年（1909）4月に東京美術学校図案科に入学し、5年の修学期間を経て大正3年（1914）3月に卒業した。

「図案」は今日でいう「デザイン」を意味する。図案科は伝統工芸の意匠を近代化するデザイナーを育てるべく、明治29年に設置された。学校当局は当初から建築装飾を独立させたかったが、文部省の意向もあって実習内容を分けるかたちで実質的に建築専修の課程を営んできた。建築課程選択者の就職先で目立つのは百貨店などでの店舗設計、あるいは古建築の細部装飾の知識を生かした文化財修理分野だった。建設会社への就職は明治42年になって寺尾熙一が清水組に入社するのが初めてである。木村が出た大正3年で建築課程を選んだのは8名中2名だけだったが、一人は木村で、もう一人の安藤喜八郎は清水組に長く勤めることになる。

木村は卒業制作「公会堂設計画案」において、地上3階、地下1階

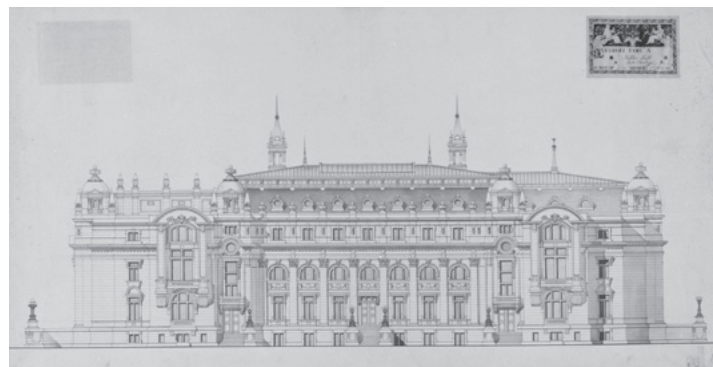


図1 木村卒業制作
（東京藝術大学所蔵）

の建築を設計し、平面図2枚、立面図3枚、断面図2枚を描いている。こうした大建築は前年の瀧川一則「劇場建築図案」が初例で、木村がこれに続いた。ちなみに瀧川は川島織物の重鎮となり、氷川丸の内装を手がける。

木村の卒業設計の内容は今のところ立面図1面しか確認できていないが、ネオ・バロックの華麗な意匠を巧みにまとめていることは見てとれる（図1）。その濃厚な装飾の布置はエコール・デ・ボザール流という意味での「アカデミック」なデザインである。それは裏を返せば、大正初年に社会現象的に流行していたゼツェッションの影響がまったく見られないということである。木村が教授として仰いだ大沢三之助でさえ、明治44年の大阪市中央公会堂の設計競技案では直線的な細部に新しい潮流をうかがわせているのに、弟子は古典の世界に没入していた。その姿勢は、やはりあえて時代に逆らっていたと見るべきだろう。

木村得三郎の令名を高めたのは大正12年（1923）1月竣工の大阪松竹座である。道頓堀にかかる戎橋のたもとという視線を集める場所に立地するため、そのファサードはランドマークたるべく設計された。前面間口のほとんど半分の幅を有する半円アーチを架け、その両側にはイオニア式の円柱、その上には飾り壺を配する。大ぶりの要素を集めた立面構成は、まさに心齋橋筋に向かって大見得を切るものだった（図2）。

この立面は米国の建築家ルイス・サリヴァンに倣ったといわれることもあるが、サリヴァン・アーチがロマネスク的なものに対して、松竹座のアーチは古典様式のディオクレティアヌス・ウィンドウであって、対応関係はない。半円をマリオンで3分割するこのアーチは、中之島の大阪市中央公会堂をはじめ、正面性を強調する手法として広く採用



図2 松竹座正面全景（『近代建築画譜』
（協力 松竹株）

されてきた。米国の劇場・映画館にも汎用されており、木村は手の内に入った「近世復興式」の手法の一つとして、アイストップ効果を生かせるこの場所でその特質を最大限発揮させたと見るべきだろう。

ただ、劇場内部の意匠は、サリヴァンの出世作のオーディトリウム・ビルを想起させる（図3）。当時、旭日昇天の勢いであった松竹資本の牙城にふさわしい濃密華麗な内観としてシカゴのオペラハウスが召喚されたと想像される。

関東大震災からの復興を急ぐ東京で木村が手がけたのが東京劇場（1930年）である（図4）。今の地名でいえば東銀座、歌舞伎座の斜め向かいに所在した。東京劇場にはエントランス・ロビーと呼べるような広間が存在しない。正面に並ぶ入り口の段階で一階席と二・三階席を振り分けたようである。しかもその正面扉は斜行する隅切り部分に開いているのだが、扉の奥の階段は向かって左手の街路に平行に付けられている。つまり、扉を入った途端に斜めに階段を上ることになる（図5）。入場者は一瞬、身体がねじれる感覚に襲われただろう。ファサードはほぼ完全な左右対称形で、ホール内の意匠も実に華麗である。その豪華版においてこのせせこましさというのは、よくよく条件が厳しかったことが想像される。

東京劇場では木村はいわゆる「スパニッシュ」様式を採用した。すなわち北米の西海岸を占めたスペイン植民地に建てられたスペイン・バロックの手法である。1920年前後にリヴァイヴァルし、カリフォルニア州あたりでは今日に到るまで用いられる。木村は、この様式特有の反転曲線の多い装飾をエントランス周りや軒にちりばめ、さらにはピナクルを連ねた八角の塔をそびえさせる。しかしその一方で立面を基壇層と主階層とに分節する古典様式の常道を避け、また軒のコーニスも排している。窓の多くは矩形のポツ窓であり、これらの結果、建築の骨格は単純な「箱」として知覚され、先述の装飾はその表層にまつわりつく断片として映る。ここでついに木村は組構造を擬態することをやめている。敷地の狭さがそうさせたのであろう。そのことは

取りも直さず歴史様式としての完結性を捨てることでもあった。

骨格と表層とがそれぞれ独立して、きわどく互いを支え合う。京都・祇園の地でその操作を究めるのが弥栄会館（1937年）である。しかし、ここではその巧緻さを分析する紙幅を持たない。木村が「尊敬する仁」と語った平松英彦についても見ていかねばならないからである。

■平松英彦（1895～1928）の場合

平松英彦は若くして亡くなった。そのため級友や同窓生が多くの追悼文や回想を記している。そこに見えてくるのは、森見登美彦描く京大生にも通ずるような、ややタガが外れた建築学生像である。以下は西山卯三が鈴木義孝による人物スケッチの抜粋として記すところである——「武田教授に天才的と折り紙を付けられていた学生・平松、…理学部数学科にて二年の年季を入れ、建築に変わっては進級がややくなって選科に移った」。数学科とあるのは東京帝国大学数学科である。そこを中退して新設された京大建築学科に入学してきた。「天才」が落第したのは、東大数学科に籍を置いていたにもかかわらず、代数学の単位を二年つづけて落としたせいである。

その作風については『新建築』誌に、選科で同期だった岡田孝男が委曲を尽くして述べている。長くなるが引用してみよう。

平松氏は学生時代から、南欧の建築に特に深い愛好を持っていた。例えばフロレンスのルネッサンス建築、サラセンの建築、イタリアンヴィラ、スペインの建築、ミッションの建築への憧れ、引いてはこの系統を引いたロマネスクのスタンフォード大学の建築等にも深い興味を持ち、その芸術的才能を養っていたらしい。…この南欧建築への愛好は、一に恩師武田博士の指導によるものである。ロマネスクや、桑港（サンフランシスコ）博覧会から持ち帰られたスパニッシュルネッサンスやミッション等の写真は京大建築教室の壁にその当時掲げられて、若い学生を魅したも



図3 大阪松竹座内観

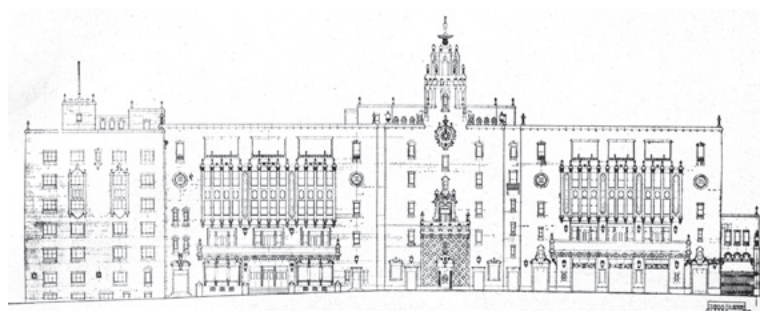


図4 東京劇場立面図（『東京横浜復興建築図集』（1931年））

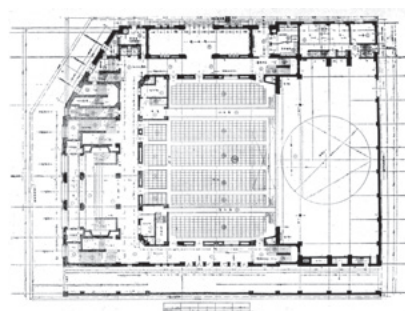


図5 東京劇場1階平面図（『東京横浜復興建築図集』（1931年））

（図3～5 協力 松竹株）

のであった。…これに最も敏感に応じたのが平松氏である。この点で氏は当時の武田博士の意匠を継いだ最も優秀な学生であった。

岡田はさらに言葉を継いで「南欧の建築…への愛好は平松氏の天分を培ったのであるが、これが某氏邸〔御影の邸宅〕戒橋となり大林組本社社屋となって表れたのである。現在大林組設計部の一部にある、南欧建築への憧憬の傾向は、実に平松氏によって起こされたもので、ひいては、関西に起こった南欧民家計建築傾向への重要なリーダーを務めたわけだ」とその影響までも指摘する。

『新建築』に掲載された平松の卒業設計「京都帝大本館改造案」(1923) (図6) は、スパニッシュのスタンフォード大学の校舎群を深く参照したロマネスク調の細部が表現主義的な曲面を備えた骨格と融合して、見たことのない粘っこい表情を生んでいる。しかしその平面図を見ると、坦々たるラーメン構造で、立面の量塊感は表層だけのことで知らされてしまう。実は京大建築学科は鉄筋コンクリート構造の導入者である日比忠彦を擁し、武田五一もまたいち早くこの新技術を採用した建築家だった(明治43年竣工の京都市商品陳列所)。軸組構造とロマネスク様式は、師弟にとっては不協和音なく共存できるものだったのだ。

大林組本社屋(1926)では、窓の形状を揃え、抱きを小さくして単純さを際立たせる(図7)。見る者は多層階ビルの現代性をまず印象づけられるだろう。こうして整えた舞台に、平松は中世的ではあるが実は様式性を持たない装飾を案出し、ちりばめていったのである。

装飾の新しさと、直方体の表層での布置的確さとに平松の天才は捧げられた。武田五一門下の他の作品——たとえば生駒時計店(1930)にも同じ志向がうかがえる(図8)。大倉三郎(京大建築一期)と脇坂一雄(同3期)の設計になるこの建築は、堺筋と平野町通りという両目抜き通りに向かって背筋を伸ばすように直立する。その骨太の輪郭に対して、ロマネスク的でもあり。オランダ的でもあり、北ドイツ的でもありつつ、そのどれでもない装飾が密度高く展開していく。これらの作品にはたしかに若い建築家の表現意欲が存分に花開いている。

平松は大正15年に大林組東京支店の設計主任として転勤する。実は、大正7年に早稲田大学を卒業した村野藤吾は大林組東京支店の社員として就職するはずだった。最終的に渡辺節の事務所に行くのだが、もしそのまま村野が大林組に入社していたら、平松の席には村野藤吾がいたはずである。早稲田時代から渡辺事務所入所後2、3年目くらいまでの村野は歴史様式を敵視し、生命の発露たる自由な建築造形を目指していた。そのために実務で求められる様式的な意匠設計に苦しみつづける。その苦しみは、しかし、平松ら武田スクールには無縁のものだったといわなければならない。そして、平松英彦は歴史様式の命脈が尽きるより前に自らが世を去ったのである。

■小田島兵吉(1899~1976)の場合

小田島兵吉は平松英彦より年齢は4才若い、大学の卒業と大林組への入社之年次は1年早い。小田島は大正11年(1922)に東京帝国大学建築学科を卒業した。分離派建築会より2学年後、同級生には岸田日出刀、田辺平学、土浦亀城、竹中工務店の石川純一郎、司法省の蒲原重雄、逓信省の上浪朗と、のちにモダニストとして活躍する人物が多い。

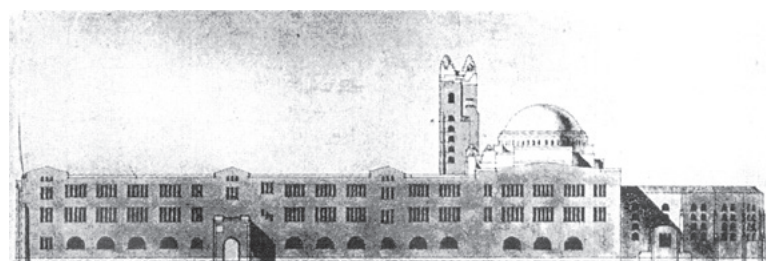


図6a 平松卒業設計「京都帝国大学本館」立面図

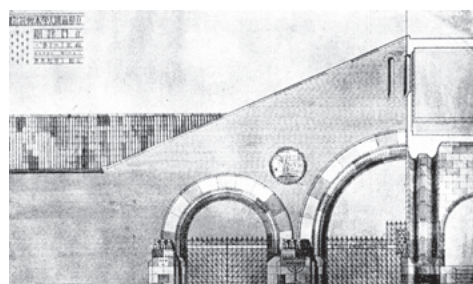


図6b 同正門詳細図

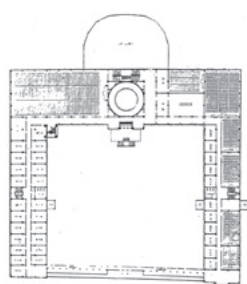


図6c 同1階平面図

(出典:『新建築』5(3), 1929年、不二出版「新建築(復刻版)」)



図7 旧大林組本社ビルファサード



図8 生駒時計店全景

彼の卒業設計は「民衆天文台計画（原文ドイツ語）」である（図9）。これは装飾を排除している点で、石川純一郎の穀物倉庫と双壁をなす。アーチの架構があり、ドームを構えていて歴史様式性が皆無ではないが、小田島の眼目が抽象形態の組み合わせにあることは明白である。こうした造形の背景にあるにはドイツ工作連盟から初期バウハウスに至るザッハリッヒカイト（即物性）への志向にほかならない。東京はさすがに欧州の最先端の情報を受信し、即座に咀嚼していたのである。

入社してすぐに手がけた甲子園球場（1924年）でも抽象化志向は徹底している（図10）。外周に沿って半円アーチが連続するのだが、アーチ型の開口には通常めぐらされる^{せりみち}迫縁をかたどった見切りがない。そのため半円形に壁を切り抜いたとしか見えない。これは確信的な操作だったにちがいない。

その後に設計を手がける大軌ビルディング（1926年）（図11）、熊本市公会堂（1930年）（図12）、大阪歌舞伎座（1932年）（図13）でも、抽象形態の組み合わせという骨格は変わっていない。いずれも角に主玄関を開くという難問を解決するために大きなヴォリュームの操

作を駆使するのである。

半円アーチの連続がセットバックしながら重層するという大軌ビルのファサードは、ハンス・ベルツィヒのザルツブルク音楽堂案に触発されたことが想像される。しかしベルツィヒの量塊性・有機性をみごとに脱色して、円弧面の組み合わせとしてむしろ軽快な表情を見せる。

大阪歌舞伎座は、45度で交わる平面の入り隅を凹曲面を緩衝帯として処理するというアイデアが独創的である。劇場内観では正方形の格子と細い縞のモチーフで「和」を演出しようとしている（図14）。『日本的なるもの』の追求は昭和初期の建築界で大きなテーマとなっていたが、障子や着物の柄の形象をこのスケールで展開して見せたのは初めてではなかったか。大阪歌舞伎座の「様式」は「自由式」と発表されている（大軌は「近世式」）。この命名には、小田島が自らのめざすところを存分に展開できたという自負がうかがえる。

小田島兵吉はその出発点から歴史様式の枠組みに煩わされなかった。抽象形態の自律性を確信して、そのまま戦後建築の世界へ大股で踏み込んでいった。

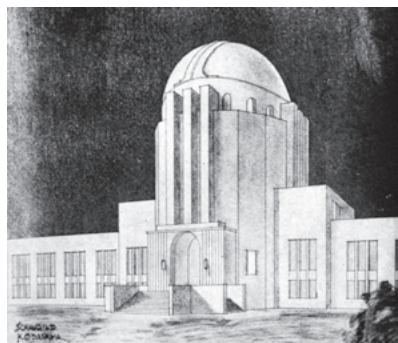


図9 小田島兵吉卒業設計
「民衆天文台計画」
（出典：『東京帝国大学工学部建築学科
卒業計画図集』（1928年））



図10 甲子園大運動場正面



図11 大軌ビルディング（『近代建築画譜』）



図12 熊本市公会堂（『大林組70年略史』）



図13 大阪歌舞伎座外観（『近代建築画譜』）



図14 大阪歌舞伎座内観
（『近代建築画譜』）

「おおばやしむら」と大林組本店ビル西館

武庫川女子大学 教授 石田潤一郎（企画構成 大林組 勝田知親）

■ おおばやしむらの誕生

大林組が三代目の本店社屋を天神橋南詰に建てた1919年から後に建てられる大阪大林ビルディング（五代目本店）に移る1973年までの間は、大阪の街自体が大きく発展した時代であった。それは世の建物が高層化するに伴い、さまざまな建築材が工業化する技術発展の時代でもある。

大林組はやがて訪れる超高層時代に向けて先進的な技術を確立すべく、この天神橋界隈で自社ビル建設を通じて様々な模索をしていた。今回、取り上げる『四代目本店ビル（現ルポンドシエルビル）』の西に増築された『本店ビル西館』がその一例である。

本店ビル西館（現オーク北浜東ビル）は、今でこそ何の変哲もないビルとして街に埋もれているが、建設時はまだ珍しかったアルミカーテンウォールやALC版、PC部材を随所に使用して、その可能性や是非を試していたことが伺われる。そこで培った技術は、やがて9年後にその向かいの敷地に建つ、大阪初の超高層ビルである五代目本店ビル『大阪大林ビルディング（現北浜ネクスビル）』として結実する。

そして、この天神橋界隈に、『本店ビル』『本店ビル西館』『大阪大林ビルディング』からなる“おおばやしむら”が誕生したのである。

「おおばやしむら」の構成図



■ 超高層建築の夜明け前

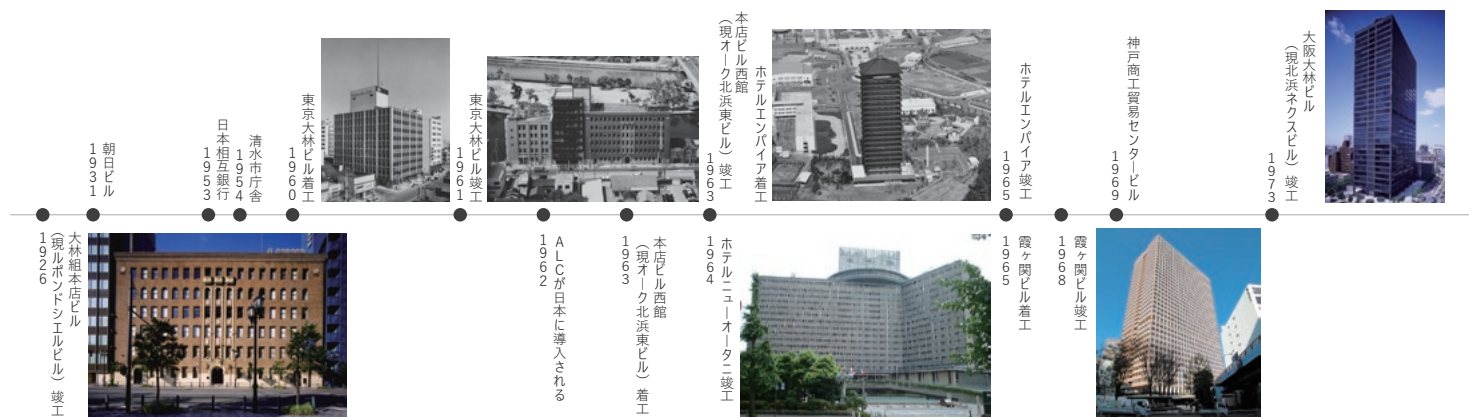
1957年、経済活動が中央に集中し、東京支店の役割が従来に増して重要になってきたため、千代田区神田司町にビルを新築することになり、『東京大林ビル』が1960年に着工し、1961年9月に竣工した。構造は鉄骨鉄筋コンクリートの9階建てであった。

この頃より大阪本店も増築の要望が日ごとに増し、1963年8月に『本店ビル西館』が着工する。この時期は、旧建築基準法の高さ（31m=100尺）制限があり、またこれを超える高さに対応できる建築技術が確立していなかった。

本店ビル西館が竣工した1964年の4月に、横浜にて日本初の超高層建築である『ホテルエンパイア』が大林組の設計施工により着工され、翌1965年に竣工する。建物高さ77.7m、21階建て、「日本でなければいけないというホテル」との発注者要望を請け、外観は我が国の伝統的な建物である五重塔のイメージを取り入れ、客室内装も安土桃山時代の様式を取り入れたものであった。一方東京では、1964年にアルミカーテンウォールを用いた17階建ての『ホテルニューオータニ』が東京千代田区に竣工し、日本における超高層ビルの先駆けである『霞ヶ関ビル』は翌1965年に着工され、1968年に竣工する。世の中が超高層化に向けて動き始める、まさにその大きな変革の時期でもあった。

■ 実験場としての西館

1963年8月に着工された『本店ビル西館』の構造形式は鉄骨造で、外壁に「アルミカーテンウォール」と「ALC版（シボレックスカーテンウォール）」を用いて超高層建築の基本型を成し、翌1964年3月に竣工する。既に旧建築基準法の高さ制限（31m）は1963年7月に撤廃されていたが、旧制限31m9階建てとして計画され、超高層建築に必要な各種のテストが行われた。建設省建築研究所の「中川恭士博士」に依頼して、大振幅の振動実験を行ってカーテンウォールの層のたわみなどを確認したが、実物大のカーテンウォールを用いて、このような動的实验を行ったのは「世界で最初」といわれている。



■大林組本店ビル（現ルポンドシエルビル）

第1に関東大震災後、鉄筋コンクリート構造の技法が規定され（1924年）、従来の技術を修正・検証する時期であった。当建築の場合、軟弱地盤が予想される川岸の敷地で、南北方向の奥行きが浅いプロポーションであることから、いかなる技法がもっとも堅牢であるかを確認する役割を担っていた。

第2にRC造にふさわしい意匠の模索である。前身建物はレンガ造であり、ゼツェッションの影響もあって、組積造の量塊性が残る造形であった。これに対して、意匠設計を担当した平松英彦は前作の伊吹合名社屋（1924）で窓面を外壁に寄せて抱きの浅い窓として壁体の薄さを演出する試みをおこなっていた。旧本社ビルでも窓を浅くし、窓台・まぐさの突出を避けて平滑さを強調している。これは壁体が荷重を負担しないRC構造の特質を表すための手法とみられる。

第3に、そうした平滑な直方体の立面に適切な装飾細部の探求である。従来、企業社屋の様式として一般的だったのが「近世復興式」、すなわちルネサンス様式の細部を現代的に操作した意匠だった。しかしそのことは「近世復興式」に対して旧弊な印象を与えるようになっていたし、また古典系様式の格調は一種のよそよそしさを感じさせる嫌いがあった。

これに対して大正後半に注目を集めていたのはロマネスク、ゴシックといった中世系様式であった。直接的にはシューマッハーら北ドイツの作品、あるいはストックホルム市庁舎（エストベリ、1923年）の影響であり、大阪ビルヂング（渡辺節、1926年）、大隈講堂（佐藤功一、1927年）が典型的作品である。

旧本館ではエントランスの迫縁の太い半円アーチや上階のバルコニーに生かされている。一方、フランク・ロイド・ライトの作風が帝国ホテルによって一躍人気を博していた。スクラッチ・タイルや水平線の強調、幾何学的な装飾が首相官邸を筆頭に流行する。旧館の細部はこうした時代の好尚をすくいにとって壁面にちりばめている。道行く人の目に近い低層部と遠望した際のアクセントとなる軒回りなどに布置を集中することで平滑な壁体の輪郭をあいまいにすることを避ける配慮がうかがえる。



大林組本店ビル（三代目）

■本店ビル西館（現オーク北浜東ビル）

「カーテンウォール」という言葉は辞書的には外壁が構造材としての役割を持たない、軸組構造での壁体をいうが、一般的には、壁面が側柱よりも前面に配されているものをいう。こうした構造材がファサードに現れない造形は萌芽的にはファグス靴工場（1912）で現れ、パウハウス・デッサウ校舎で全面的に実現する。日本では窓面が柱に分断されない水平連続窓は白木屋百貨店（1927）で出現し、1931年の朝日ビルではフルハイトの連続窓が採用された。ファサード前面をカーテンウォールで構成する試みは戦後になって活発化し、日本相互銀行本店（1953）は押し出し成形のアルミ・パネルを全面的に採用した。また同年の法政大学53年館はスチールサッシとガラス面でファサードを構成した。ただそれらの壁体、ガラス面はスラブ、あるいはスパンドレルによって支承されてきた。



以前のカーテンウォール形式
（床スラブの上下で固定）



西館のカーテンウォール形式
（床スラブの先端で固定）

躯体によって区画されない一体的なカーテンウォールの登場は、遅く、当建築はその最も早い例の一つとみられる。外壁面の軽量化・工業化が一方で模索されており、先の日本相互銀行の軽量コンクリート、新朝日ビル（1957）のアルミ・パネルが早い例である。百尺制限の撤廃による高層建築でのカーテンウォールを実現するためには、この課題の解決が重要なポイントに浮上してくるのである。



大林組本店ビル（四代目）
と西館

本店ビル西館で試された新時代の 建築部材と工法

今では汎用となった以下の部材・工法も、まだ世間では新しかった当時は一般施工に先立って自社ビルを試金石とし、様々な材料の特質や性能、長所短所、改良面を模索していた。

■カーテンウォール

来るべき超高層時代に欠かせない軽量の外壁として、アルミサッシと一体となったカーテンウォールを計画し、建物の顔となる土佐堀通りと土佐堀川に面する南北立面に採用して、取付け方を試していると思われる写真が残されている。



当時のアルミカーテンウォール取付作業

そしてその施工に先立っては実物を試作し、当時世界でも珍しい実物の動的実験を行っていた。実験は何度も行い、最終的には破壊するまで行われた。



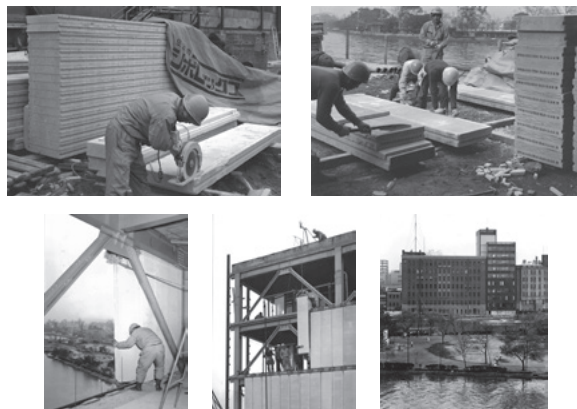
当時の実物実験報告書抜粋（振動による動的実験の目的と結果の考察）



鉄骨建方工事（南面）

■ALC版

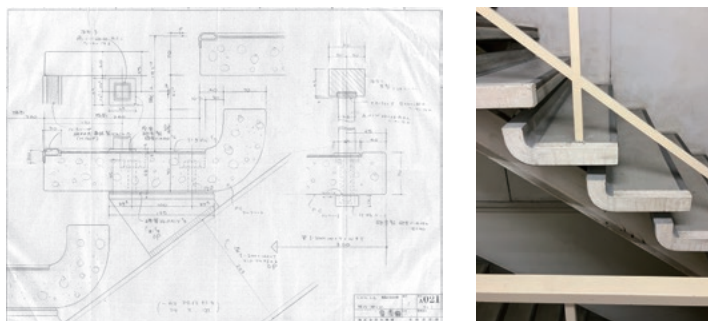
隣接する建物に隠れる東西面は、前年の1962年にスウェーデンから技術導入されたばかりの初期の日本製ALCを積極的に取り入れて翌年の1963年に施工、その汎用性や将来性を確かめていたと考えられる。



当時のALC取付作業

■PC部材

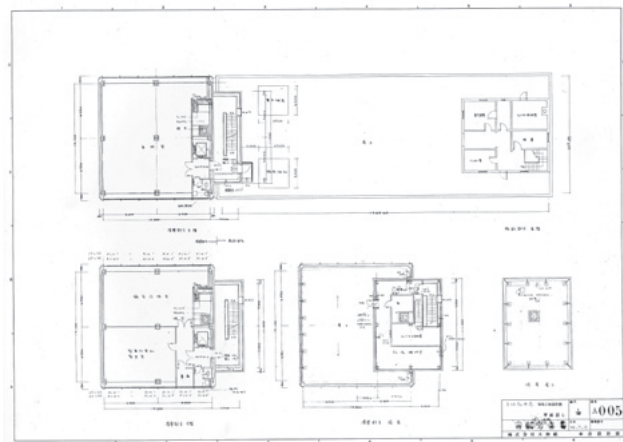
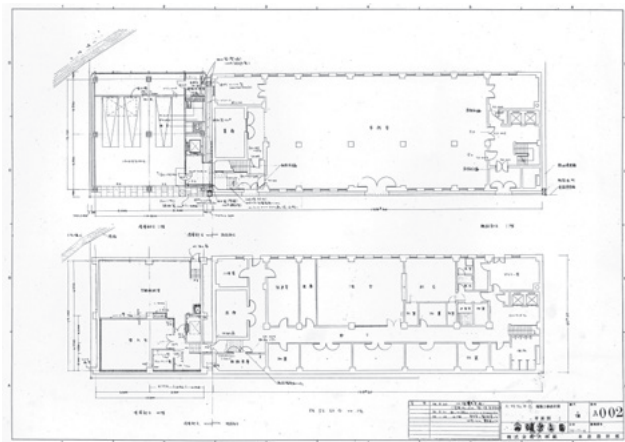
将来の建築部材の工業化を見越し、現在では珍しくなくなったPC材を製作するべくショックベトン社を興し、独自の締固め工法による高品位なプレファブリケーションの建築部材（写真はPC階段）を製作し、通常利用の少ないペントハウスの上層階の階段に実施施工してその性能を確かめていたのではないかと考えられる。



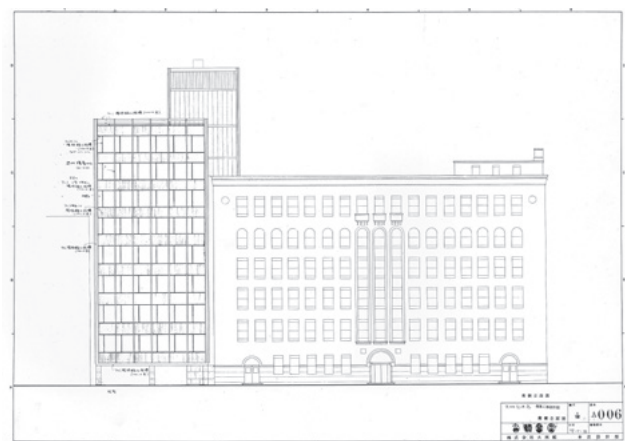
当時の施工図および現状（2025年）写真



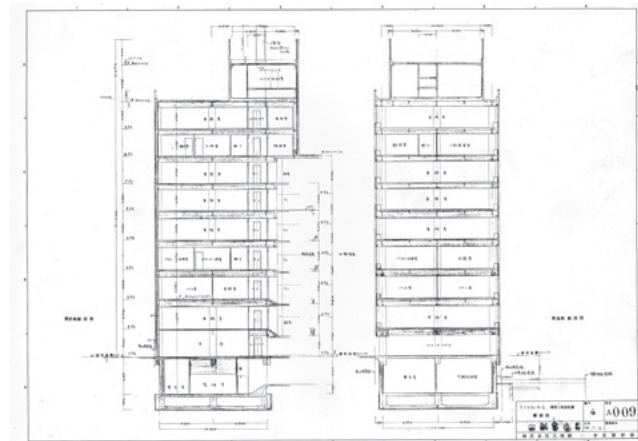
塔屋外壁工事（南面）



平面図（本店ビルの西（左）に西館を増築した際の図面）



立面図



断面図（増築部である西館）



竣工時南東面鳥瞰



竣工時北面



竣工時南西面鳥瞰

まちとまちなみの公共性一眺めながら考える

早稲田大学 教授 佐々木葉

■ まちなみってなんだろう

建築と社会。社会と関わらない建築はなく、建築がない社会も存在しない。どこからどのように考えればよいか。難しいが、景観や風景を考えている身として、建築と社会がそのまま形に現れているともいえる、まちなみを入り口とすることとした。しかし、まちなみとはなにか、これもまた難しい。時代とともにその言葉の指すものも異なり、そこに何を求めるかも変化していると感じる。あなたの思うまちなみとは、どのようなことだろうか。そこにひととき思いを巡らせてから、以下の私の考えるまちなみの話を読んでみていただければ幸いである。

■ 郡上八幡の3時点まちなみ絵巻

まず、郡上八幡の話から始めたい。知多半島にある日本福祉大学に勤めていたころ、学生たちとフィールドサーベイをしてみようと、知人の紹介で岐阜県の郡上八幡を訪れた。1996年6月のことだと思う。ここで出会った八幡町の役場職員の方に後日お声がけいただき、橋のデザインやら街なみ環境整備事業やらと、あれこれに関わることとなった。学生たちも卒論や修論をこのまちで書くこともでき、縁は早稲田に行ってからでも途切れることなく、これもまた縁を得て2022年4月から町屋を一軒お借りして研究室のサテライトとして使っている。名前はsaoco lab.という。そのお披露目の際に作ったのが3時点まちなみ絵巻である。これは私の手元にあった1999年、2010年、2020年に撮影したまちなかの建物のファサードの写真約600軒分から通りごと、時点ごとに横に繋いで連続立面写真としたものである。とてもアナログな仕事だ。なぜこんな写真データがあったかというのと、まず1999年に市民ワークショップでまちなみルールを作っていくための基礎データとして撮影した。まだフィルムカメラであった。その後早稲田に移ったのだが、このデータがあるなら事後調査をしたら良いのでは、と学生に言われ、2010年と2020年に同じ場所を撮影していたのである。この死蔵されていた写真データを絵巻と一軒ごとのアルバムにしてsaoco lab.のオープンに合わせて披露した。

前置きが長くなったが、まちなみとは何か、これを改めて考えたのは、このsaoco lab.という町屋の拠点に身を置く経験と、3時点まちなみ絵巻を眺めたまちの人たちの語りが契機となっている。

■ まちなみ絵巻の眺め方

まちなみ、といえば、まず横並びに立つ建物がある程度揃っていることをよしとするのが暗黙の了解であろう。日本の街並み論の古

典、芦原義信の「街並みの美学」は、西洋と日本では建築や空間認識が違うことを踏まえつつも、街並みとしては西洋都市に学ぶべきというスタンスに立つ。つまり高さ、壁面線、意匠、色、二次輪郭線を構成する附属物類などの調和やバランスが、まちなみの論点となる。ついで時間軸でどう変化するかについては、ガラッと変わってしまうよりは保存されたり、何らかの記憶が継承されたりしていることが基本的にはよしとされるだろう。絵巻で言えば前者が横方向のつながり具合となり、後者が同じ建物を縦に3時点で比較する見方となる。八幡のまちなかでは町屋というビルディングタイプを基本とした建物が連たんし、この四半世紀でガラッと変わってしまうような開発は起きていない。なお郡上八幡には通称北町と呼ばれる吉田川右岸に2012年に重伝建地区に指定されたエリアがあるが、まちなみ絵巻はこうした保存の網がかかっていないところを対象としている。というのも1999年にまちなみ保存の活動があったエリアは写真撮影から除外しており、過去のデータがないのである。商店の並ぶ賑やかな通りやほぼ全て住宅で空き家も増えているような、普通の生活の場の通りが対象となっている。

さてさてまたしても前置きが長くなったが、3時点まちなみ絵巻をsaoco lab.に貼っておくとまちの皆さんが興味深く眺め、あれこれと語りだす。ここは何だったという場所として建物を同定し、そこで私は何をした、ここはどんなふうだった、という呼び覚まされた記憶が口をついて出てくる。いまは閉店しているかつてのスーパーが初めて一人でお使いにいったところだった。釣竿つくりの名人がいたこの家では気難しい幸太郎さんにいつも怒られた。横方向に家々を目でたどっていくと、こうした記憶がふっと顔をだす。「あ、そうそう、そうだった。」と。絵巻によって期せずして得られたこうした感覚は、なぜだか温かい。そしてまた、今のみを知る人が、「へえ、ここ、昔こんなだったんだ。」と縦に絵巻を遡る。おしゃれになった店がかつては地元向けの地味な店であったり、いまは空き家のように静まり返る建物がかつては賑やかなパン屋だったり。その履歴を体験として持つ人と持たない人が、絵巻を前にして記憶と想像という眼差しを一つの建物に注ぎ、そこに流れていた時間の存在と一緒に受け止める。

あるいは思いもよらなかった話として、1999年のこの家の建具を2010年のこっちの家に使ったんだとか、ここで店をやっていた人がこっちのここに移ったんだとかを聞く。こことここは親戚だ、とか。まさに「へえ。そうなんですわー」と、別々に見えている建物群のなかに生活の軌跡が書き込まれ、一つの生態のようにつながっているのだなあと思えてくる。さらには、ファサード写真からは読



郡上八幡の地勢



郡上八幡の日常のまちなみ



3時点まちなみ絵巻（部分）

み取れないその建物の奥にもかって、ここは行商の人たちが泊まっていたとか、土間が通りぬけられたといった情報が伝えられると、仮想的にその家に入り込み、表からは見えない様子や人々のざわめきを重ね描く。絵巻はヨコ、タテ、ナナメ、オクに読み解かれるのだ。そんな風にダイナミックに眺め、ひとしきり絵巻の上に目線を走らせたのちに、このまちに嫁いできて、その時はどんな風で、あんなこんなことがあって、私の人生ってこうだったのか、と目線を宙に泳がせながら呟く人もいる。

こうした様子を経験していくうちに、まちなみとは、眺めとしての整序、美しさ以上に、なんらか深い意味をもつ存在なのではないかと思えてきた。

■軒下ブック

町屋形式の建物には、軒下という中間領域がある。開口の形や大きさ、内部の見通しや用途は様々だが、地面から鉛直に立ち上がる壁一枚で内外が区切られることはない。道との境界あたりには、植木鉢、腰掛け、商品、プロパンガスボンベ、エアコン室外機、掃除道具などが置かれ、軒下からは提灯、バケツなどがぶら下がる。さらに水路があるところではその水を使うためのせぎ板（水路に差し込んで一時的にダムアップするための板）や柄杓なども置かれている。こうした軒下空間に「何が」見られるか、またそれらを「どう設えるか」が実に様々である。それを興味深く思った学生が研究対象とするとともに、『郡上八幡の軒下を観る』という冊子にまとめてくれた。「町屋には軒がある。その軒の下には、何かを置いたり、吊るしたり、引っ掛けたりしている。その一つ一つをよく観ると、その人らしさが見て取れる。見過ごしてしまいそうなそのふりまは、郡上八幡が郡上八幡であるために必要なのである」。冊子表紙に配されたメッセージである。145ページ290枚の写真は、軒下を観る6つの視点と設えるための4つの技術と工夫によって編集し、saoco lab.の軒下生活の様子も加えた。滞在中私は軒下に椅子を出して朝ごはんを食べ、本を読む。夏の夜は道にはみ出してみんなで晩御飯を食べたり、月見をする。深夜一人静かにビールを飲んだりする。家の前を流れる水路と小さな川の水音が常に心地よい。こうした表に現れ出る振る舞いは、まちの人にちょっと奇妙に見えるかもしれないが、きっと何人かは楽しそうだねと思っていると思う。

郡上八幡の軒下については、いろいろと調査もした。そのなかで

まちに住む人々へのアンケートから、軒下空間への態度にはおおまかに三通りある様子が見えてきた。まずは自身の家でも駐車場やものを置くという単なる機能としては使っているがそれ以上に何かすることはなく、他の人の軒下にも無関心という人たち。次いでそれとは真逆で植木鉢をはじめとする様々な設えをおき、その置き方にも工夫を凝らし、気を使う積極的な人たち。水路掃除や打ち水の頻度も高く、自身の行為がまちなみの価値を高めることを意識しており、観光客を含む他者との対話も楽しんでいる。そしてこれら両者の中間的な人たちもいて、植木鉢や設えを置き、手入れもする。プロパンガスボンベのなどには目隠しをして、他者との立ち話をし、近くの人々の軒下も気にしている。しかしそこには自己表現、自身の楽しみの発露というよりも、まちに住むものとしてちゃんとしておかないと、という意識が通底している感がある。この中間的な人の意識はあまり考えたことがなかったので、調査結果を得てから軒下の見え方が少し変わった。

こうして軒下の観察、見方の解像度をあげていくと、直接そこに住まう、営む人と会ってはいないけれども、その人となりや暮らし方を感じ取ることができ、まちのリアリティが高まる。訪れる度に、あそこどうしてるかな、という思いで通りすがりに点検的眼差しを注ぎ、安堵したり、ちょっと不安になったりする。それは私以外の他者が今日もこのまちで暮らしているという感覚を支えてくれる。



郡上八幡の軒下の様子



まちなみ絵巻の展示の様子



「郡上八幡の軒下を観る」（通称軒下ブック）



saoco lab.の軒下でのふるまい

なお、軒下に多様なふるまいが現れることを可能にしているのは、間口が狭く奥行きが長い敷地に高密度に住まうための知恵がまつまった町屋というビルディングタイプであり、軒裏をあらわしにしておけるという防火規定からの自由であり、細々とした造作を担う工務店や建具店の存在である。さらには自主的な消防活動の充実などを理由に建蔽率80パーセントとして大幅なセットバックを強いなかったための地元発意の都市計画決定である。そうした社会制度に支えられたまちなみが、絵巻からの豊かな語りのような意味解読と、軒下の振る舞いの自由を直覚させる風景となっている。その一方で、近年急速に増えているゲストハウスが物理的には形態を保ちながら、軒下には提灯を吊るしながらも、顔の見えない、いってみればオクがみえない立面となり、まちに小さなブラックホールのような異質性をもたらし、なんとなくの不安がまちにひろがっている。

■ まちなみとまち

関わり始めて四半世紀、拠点を構えて丸4年、郡上八幡というまちでのさまざまな経験から、まちとまちなみのことを改めて考えるようになった。いまさらであるが、私自身は土木分野にいますが、その中では極めてマイナーな景観や風景を軸足にしたまちづくりやインフラのデザインを考えている。実務では橋や水辺、オープンスペースのデザインや、景観法にもとづく景観計画の策定などに携わる。郡上八幡でもまちなみルールをつくる仕事にも関わり、その成果は「郡上八幡市街地まちなみづくり町民協定」として37町内で参照されるルールとなっている。基本理念は全町内共通で、(1)水の恵みを活かすまち、(2)お城や山並みとともにあるまち、(3)今あるものを活かすまち、(4)歩行者中心の人にやさしいまち、(5)人をもてなす気持ちを大切にしたいまち、(6)生き生きとした賑わいのあるまち、(7)まちのみんなで話し合い個性を大切にしたいまち、としている。それを受けて建物高さ、壁面位置、建物意匠、色彩、看板、設備機器類、敷地管理について定性、定量的に示している。2002年に合意されたこの協定を振り返ると、当時もまちなみを視覚的秩序のみで捉えてはいなかったな、と思う。つまり郡上八幡という幸いにも個性豊かなまちが、そのまちらしくあり続けるためのまちなみへの共通認識を明文化したのであった。

それから20年をへて、まちなみ絵巻や軒下カタログを通してまちのひとの問はず語りの言葉や意識に触れることで、まちという社会のなかで生きていく、あるいは生きてきた私を支える存在としてのまちなみ、という側面に思い至った。なぞらえるならば、ハンナ・アレントのいう公共性の二つの次元をまちなみは備えている、と。まちを構成する一軒一軒の建物との関わりをなかで代替不可能な私の生がある。つまり私の生は建物を「現われの空間」として存在する。その建物たちは、少しずつ変化しながらも連なってまちに存在し、タテ、ヨコ、ナナメ、オクに読み解かれ、だれにでも眺められるまちなみという「共通世界」として存在する。共通世界としてのまちなみがあることによって、私の現れの空間は孤立した記憶に埋没せず、まちの私たちの共通世界となる。現れは操作性が高い軒下という中間領域によってきめ細かく表現され、あまりにバラバラで

はないビルディングタイプが共通感覚を担保する。このように郡上八幡は公共性を育むに適したまちとまちなみの条件を有しているのだが、それは城下町起源の空間構造と、それを継承するための努力がなされてきたためである。道路や橋の建設によって空間構造が大きく壊れる危機もあったが、回避された。用途地域の種別がもつめる平均的な基準である建蔽率や防火性能要求をまちの特性に合わせることで、町屋というビルディングタイプの継承を可能とした。伝建地区の指定を受けていない都市計画区域においてもこのように整えられた社会条件を舞台として、個々の建築にきめ細かい造作をなす建設技術があり、使いこなすまちの人がいる。軒下ブックの表紙に記されたメッセージのように、軒下に現れる見過ごしてしまいそうなふるまいがこのまちをこのまちたらしめており、建築と社会の相即不離な関係を風景にしている。

とはいえ、郡上八幡のまちなかの人口はこの40年で3割以上減少し、過疎地域指定を受けている。現在進行形のチャレンジは、空き家空き地もさることながら、建物や設えの形を継承しながらも使い手がまちに「現れず」、共通世界としてのまちに無関心という、人の側の変化への対応である。ゲストハウス関係者、あるいはゲスト的な移住者、まちを使わない子どもたちが、どのように、どのような共通世界としてのまちなみを継承していつてくれるのか。そのための言葉をさがしている。

■ まちを俯瞰する

舞台をがらりと変えよう。新宿は大久保に建つ16階の私の研究室からの眺めに。1967年に竣工した早稲田大学51号館は18階建て、翌年霞ヶ関ビルができるまでは日本一、いや東洋一の高さを誇っていた、とは我々がこのビルを説明する際の常套句だ。その16階北側に部屋をあてがわれたことは私の人生をかなり幸せにしている。南側の部屋は日光を遮るためほぼ終日ブラインドを下ろしていないといけませんが、北側からは朝昼晩、存分に窓の外を眺められる。直近には戸山公園、その先に低層の街区、超高層はかなり遠いところまで立ち上がらない。日によってはさいたま新都心のギザギザなシルエットや、日光の男体山が見える。マジックアワーには実に美しい色に空と雲とビルが染まる。雨雲が彼方からやってくるのも見える。流石に全開はできなくなったがわずかに引き戸のサッシをあけて風を入れることができ、しっかり幅のあるグリッド部材にはガラスが佇んだりする。ツルツルなビルとは大違いである。この名建築から好きなだけまちを俯瞰できることはなんと幸せなことだろう。

視点場としての建築のあり方もさることながら、さまざまな位置からまちを眺める機会があるのは都市にいる醍醐味であり、都市をまちと感じる身近な体験となる。16階からは、人の活動は自ずとは目にはいらない。雨が降っているかを確かめるために眼下の人が傘をさしているか否かを覗き込む程度である。よって直接的に人の姿を認めるというよりは、あのビルにもこの屋根の下にも人が暮らしているんだなあ、という人の営みの集合体としてのまちの存在を思い、夜景はその感が強調される。より高い超高層ビルからの俯瞰となればその集合体が大きくなり、営々と都市を築き営んでいる人間



16階の研究室からの眺め

の欲望の果てしなさと健気さに圧倒される。ただ、このような眺め方は東日本大震災以降に生じた。それ以前は、なんでこんなにバラバラなんだろう、なんであんなふうなビルの色彩なんだろうと、雑多なあり様にうんざりばかりしていた。しかし津波によって根こそぎまちが破壊された状況を高台から俯瞰したのちには、とにかくまちがちゃんとあり、人々がそこで日常を生き続けられているならそれで十分ありがたい、と心から思えた。まちを俯瞰する眼差しが明らかに変わった。同時に人が人のつくったまちを破壊することは決して許されないと。地震や津波自体は止められないが、爆弾は落とさなければ、作らなければ、まちを破壊することはない。

■まちに現れる人の姿

16階から降り、地上に近づきながらも数階程度の高さからまちを眺めることも日常的な体験だ。高架を移動する車中から、あるいは様々な窓から。顔の識別はできないが動作や雰囲気が見てとれる距離での人の姿がふと目に入ってくる眺めが好きだ。屋外階段やテラスに佇む人、屋内照明に照らされてちらりと見える人影。視線は合わない、あるいは儀礼的無関心を装って視線を合わせないようにしつつも、そこに誰かがいる、現れている様は都市をもっとも都市らしくする。賑わいの景などではなく、ふとそこに立ち現れた誰かのふるまいの断片。それが見えたということは、先方からこちらも見ることではできるということになる。こうした無数の相互視線のベクトルがランダムに都市の中空をタテ、ヨコ、ナナメ、オクへと四六時中錯綜している。それは、その時々に一瞬立ち現れる共通世界としての都市風景のシーケンスなのだと思う。

2025年は建築雑誌の『新建築』の月評をなぜか担当することになり、毎号苦労したのだが、その中で2月号の集合住宅特集では、不動産経営の極みのごとく容積率を使い切りながら巧まれる空間個性の読み解きを楽しんだ。なかでもテラスやバルコニーは住み手がまちをみる視点場となり、同時にその人がまちに現れる場となることで見る見られる関係を生み出し、都市的な集住の感覚を支える。住み手は日々の暮らしのなかでふとまちを眺め、まちからは住み手の暮らしが垣間見える。そうした都市風景体験を可能とする機会として掲載作品を読み解いた。共用部となる廊下や階段が外に現れる空間構成をもつ集合住宅は減ってはいるが、そこに工夫を凝らした建築は魅力的だ。3次元に展開する中間領域の視線による接続は、都市ならではのまちなみといえよう。コーポラティブハウスのように集まって住む人々にフォーカスして共有の現れの空間をデザインする例も多々ある。ただ私としては、その敷地の前を一度かぎり通り過ぎる人に対しても、「あ、こ



ふと目のとまるまちの眺め



見知らぬ人たちの現れる眺め

のまちのここに人が暮らしているんだな」という感覚を与えてくれるような仕事に惹かれる。人の姿、あるいは気配の滲み出しがやはり都市のまちなみの魅力の要に思える。

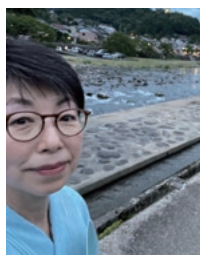
■まちにひらく

人の姿、人の景は、賑わいやパブリックライフにつながり、当該建築の利用を特定しない「まちにひらく」というキーフレーズにつながる。これは多くの建築、というか不動産開発においても重視されているが、誰に対してどのようになんのためにひらくのか。その議論はなかなか難しく、新建築の月評でもしばしば頭を悩ませた。敷地の一部や低層部を公共に開放することで容積の上乗せを可能とするという開発制度の歴史はすでに半世紀に及び、ただの通路や空地として寂しく放置される状態から、居場所となる低層空間へと実績は進化してきた。地上からは視野に入らない超高層ビルとは無縁に、グランド付近には豊かな半公共空間や賑わいが、あるいは貴重な都市の緑が創出されるタイプの開発に私たちはもはや慣れている。そこは、景観やまちづくりに興味のある学生たちがやりたい仕事の典型的イメージにもなっている。マクロに言えば都市におけるプライベートとパブリックの中間領域において、実態としてのデザインは洗練性と多様性を高め、そこにテーマ型コミュニティも生まれている。一方でそこには目に見えない強い管理性もあり、ホームレスが夜中のひとときを過ごすことは難しく、日中の人の振る舞いも空間がアフォードする範囲にうまくおさまっている気がする。それはそれで心地よく、そこで振る舞い、現れる自分も悪くないだろう。あとは、都市の中間領域を使いこなす多くの人々が、このまちという共通世界を得ていければ、都市のまちなみは公共性を獲得できるだろう。しかしそれは物理的な建築やオープンスペースのかたちだけでは決まらず、まちで生きる人の感覚によるところが大きい。その感覚とは、他者がいるまちへの信頼にやどり、他者と自身を相対化する間主観性に基づく。私が私をまちにひらけるかどうか、なのだ。こうした極めてベーシックなまちへの態度を育むような建築の原体験、まちの原体験はどこでどのように可能であるのか。視覚的な美しさや個性という観点からではなく、郡上八幡であれこれ考えてきた公共性としてのまちなみ、その構成要素となる建築、その建築のあり方を規定する社会制度は、いまだここにあるのか。それを探し、育てていくにはどうすればよいか。こうした文脈にまちなみという言葉を置いてみると、建築と社会を分けずに考えていくこともできる様な気がする。

参考文献

- 芦原義信「街並みの美学」岩波書店同時代ライブラリー, 1990
佐々木葉「まちにいる・まちにひらく 郡上八幡saco lab.の120日」土木学会, 景観・デザイン研究講演集No.18, pp.350-357, 2022.12
佐々木葉「風景体験の楽しみとレッスン」土木学会, 景観・デザイン研究講演集No.19, pp.283-288, 2023.12
佐々木葉・猪俣誠野・武藤隆晴・太田恭平・中山由子「郡上八幡におけるまちなみの公共性を育む軒下空間のデザイン」住総研, 研究論文・実践研究報告集, No.52, pp.83-93, 2025
saoco lab.の活動はInstagramアカウント「saocolab」にて発信
ハンナ・アレント「人間の条件」ちくま学芸文庫, 1994
斎藤純一「公共性」岩波書店, 2000

ささき・よう



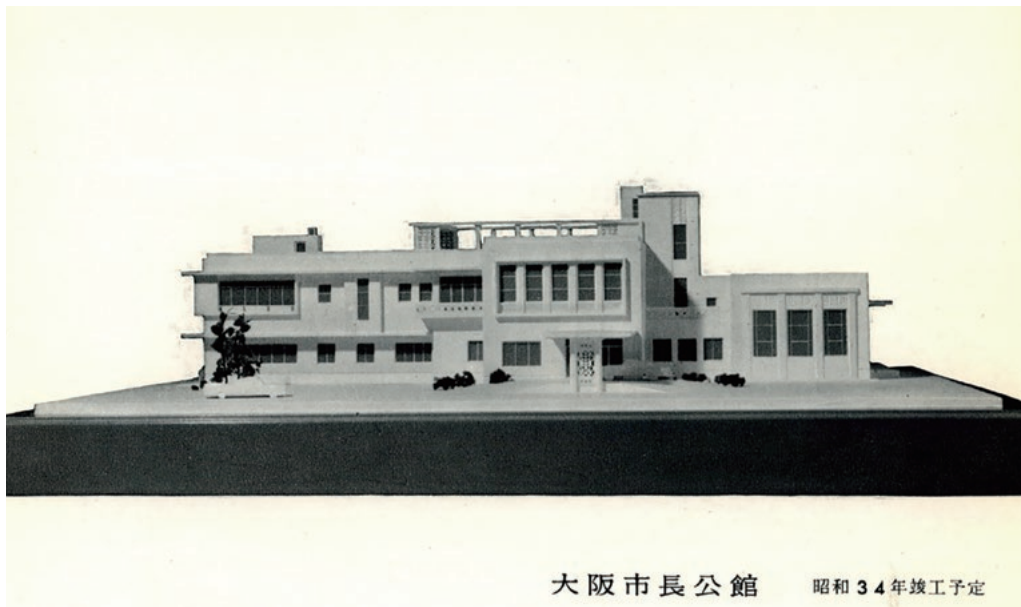
早稲田大学建築学科卒業、東京工業大学社会開発工学専攻修了。博士（工学）。東京大学助手、名古屋大学助手、日本福祉大学助教授などを経て2003年より現職。専門は景観論・まちづくり・土木デザイン。土木学会第112代会長。NPO法人郡上八幡水の学校副理事長。共著に「土木デザイナーひと・まち・自然をつなぐ仕事」、「風景とローカルガバナンス」など。デザインアドバイスに天龍橋大橋（土木学会デザイン賞、田中賞）、霞橋（土木学会田中賞）、石巻市街地における旧北上川の復興かわまちづくり（土木学会デザイン賞）、石巻南浜津波復興祈念公園など。

79 大阪市長公館 (現 ザ・ガーデンオリエンタル・大阪)

所在地：大阪市都島区網島町35
建築年：1959年
設計者：双星社竹腰建築事務所
施工者：大林組

山形政昭
大阪芸術大学名誉教授

(1959年1月号)



大阪市長公館 昭和34年竣工予定

写真1 竣工前の建築模型(本誌1959年1月号掲載)

■はじめに

日本建築協会が事務所を置く大阪マーチャンダイズ・マートビルより東へ歩み、寝屋川橋を渡ると都島区(旧北区)網島町に入る。大川の東岸に位置し桜宮公園に至るこの辺りは、明治期より多岐にわたる事業を興し藤田財閥を築いた藤田伝三郎による大規模な和風邸宅が営まれていた所で、かつては藤田家本邸を中心にして、東に次男徳次郎の邸宅があり、西には長男平太郎の邸宅が並び建っていたと伝わる。

本邸の過半そして西邸は戦火で焼失したが、本邸跡地は残された土蔵の建物などを継いで1954年に藤田美術館が開かれている。1959年には戦火を免れて残った東邸は藤田グループにより太閤園と改まり、歴史をもつ宴会施設として受け継がれ、1980年には新館も増築され近年まで存続していた。

残された西邸跡地は大阪市が所有し、1958年に至り市の迎賓施設として大阪市長公館の建築が計画され翌年竣工した。大阪市長公館の敷



写真2 竣工頃の正面外観*



写真3 竣工頃の北東面外観*



写真4 北面外観 庇、バルコニーが形を整えている**

地は4000坪ほどあり広大で、東は土堀を境にして旧藤田家本邸跡の庭園に、敷地北側は瓢箪池をもつ藤田庭園を介して大川縁へとつづく潤いある景観を有し、華やかな公的行事の場とされてきた。2007年に大阪市公館と改称された後、2014年には迎賓館としての役目を終えるとともに、民間事業者により「水辺の魅力拠点」として施設の拡充が行われ、現在はザ・ガーデンオリエンタル・大阪としてウエディング、パーティー会場等の施設として活用されている。

また東に並ぶ藤田庭園と藤田美術館では2022年に真新しい美術館に建替わり、筋向かいにある旧河崎家住宅（1936年）も近年登録有形文化財となり新たな活用がなされるなど、歴史ある網島町の一角は憩いと文化的地域として新時代を迎えている。

■旧市長公館と竹腰健造

本建築の設計は双星社竹腰建築事務所で1958年11月に着工され翌年

10月に竣工している。

竹腰健造（1888～1981）については、1917年（大正6）に住友本店営繕部に入所し、1935年（昭和10）よりは長谷部竹腰建築事務所での9年間の仕事など知られるところであるが、戦後の1947年に住友傘下を離れた後に自ら設立したのが双星社で、1950年代には再び創作力を発揮し、聖心女子大学マリアンホール、大阪能楽会館（1992年消失）、大阪市立中央図書館（1996年建て替えのため消失）、そして本建築などを産み出している。つづく1960年代には小林聖心女子学院礼拝堂、そして1962年に竣工した日建設計による新住友ビルディングの計画では顧問として設計指導に当たるなど注力したと伝わる。

また氏は日本建築協会にあって、1946年春に初代会長片岡安が長逝した後を継ぎ、1958年まで二代目会長として協会事業を指導したことが知られている。そして1959年1月の協会誌『建築と社会』誌面において竣工近い大阪市長公館の建築模型写真（写真1）が聖心女子学



写真5 竣工頃のラウンジ*



写真6 竣工頃のレセプションホール*



写真7 ザ・ボールルーム、元レセプションホールで天井など改まる**



写真8 ザ・テラスルーム、元応接室で天井は改まる**

院など双星社の諸作品とともに紹介されている。

晩年の1977年に自選による作品集『懐旧譜』を刊行しており、そこでこうした時期の作品がカラー写真で収められており、竣工頃の大阪市長公館（写真2など）が伝えられている。

本建物は一部に地階を有する2階建てで、屋上にはパーゴラを付したルーフガーデン、塔屋をもつ。南を正面とし芝生の前庭にむけて車寄せポーチを張り出している。庭に面する北面側には池に張出す広いテラスを設けている。建物主要部は、正面ほぼ中央に開く玄関、階段を設けた吹き抜け空間につづく広間、そして庭園に面して待合の場となるラウンジへとつづく。その東にはステージを備えるレセプションホール、西に食堂など置かれていた。2階には市長室、応接室、会議室のほか、大小の和室があり、室内意匠として注目すべきところになっていた。

鉄筋コンクリート造によるモダニズムの造形表現をとるが、外壁は

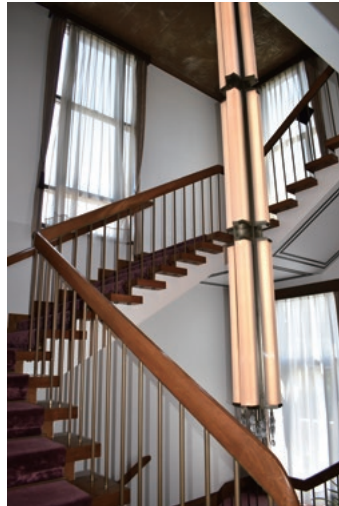


写真9 主階段、手摺り段板はチーク材**

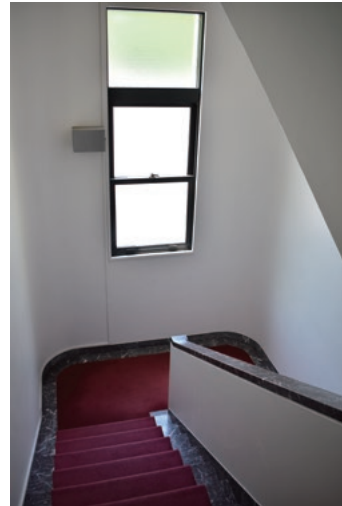


写真10 西階段、手摺り等は大理石**

アイボリーのポードータイル張りで艶があり滋味ある壁面である一方、基部周りは赤褐色の小松石切石張り、要所にはレリーフテラコッタ、人造石小叩きの透かし装飾を加えるなど凝らされている。

室内仕上げは檜フローリングブロック床、錬り付け合板など壁面は概ね木の仕上げで、要所は大理石張りとしていた。そして諸室に配されたアール・デコ・スタイルの家具、照明灯具、天井に組み込まれる照明など意匠表現に目が留まる。広いラウンジ、レセプションホールなど庭に面して大きく開口部が取られ、白塗りのスチール・サッシが入るところ、2階の新味ある和室表現など、堅実でモダンなデザインが織り込まれており、総じて簡明かつ優雅な迎賓施設であった。

その後、本建築は建築後30年を経た1989年頃に外部タイルの張替え及びサッシの入れ替えがおこなわれてきたが、外観および内部の家具調度を含めてよく維持されていた。

また樟の大樹、枝を広げるイロハモミジが彩る広大な庭園には本館とともに当初より設けられた東庭と1970年頃に増設された西庭があり、前者に茶室二水亭（1959年）があり、後者に中門及び四阿（1971年）がある。二水亭は裏千家に繋がる千アト・スタジオの設計による。瓦屋根に檜皮葺き庇を付した数寄屋造り、立礼席と八畳広間、水屋を備え多用途に対応する整った茶室で、明るいガラス障子、栗ナグリ材の豪快な梁組が工夫されている。茶室の脇には、藤田庭園に通じる小門が開き、そこに奈良時代の東大寺ゆかりの礎石や石塔が据えられており藤田庭園の歴史を随所に感じさせている。

■ザ・ガーデンオリエンタル・大阪への整備

本施設は2014年、民間事業者により本館の改修、園内施設の拡充が



写真11 茶室二水亭、1959年10月竣工**



写真12 茶室二水亭 内部**



写真13 西庭内に建つチャペル（2017年）など**

なされている。

改修は華やかな宴会、種々のパーティーに応じるため、諸室の天井構成、照明などが所々改まり、2階和室は廃されて用途が転じている。加えてホール壁面の縞柄オニキス石張り、ヴォールト天井を飾る村城良胤氏の天井画など新たな表現もあり注目される。

増築された新たな建物には本館脇に待合施設、東庭奥にチャペル、西庭内には坂倉建築研究所の設計でパーラールーム、チャペル及び待合室が増築されている。庭園環境に溶け込み、かつ新機軸を見せつつ伝統に留意されたもので、夫々に見所が多く、本施設の活用の幅を広げている。

1950年代における都市建築は、意外なほどに残りが少なくなっている。そうしたなかで本建築は建築家竹腰の残した珠玉の建築遺産であるとともにリノベーションによって積極的活用がなされる優れた近代建築として注目されよう。

謝辞：建物の見学、写真撮影では本施設を運営する株式会社Plan・Do・Seeにご配慮賜りました。また資料については株式会社大林組の井上雅祐氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

参考資料・文献

- ・「大阪府の近代化遺産 大阪府近代化遺産（建造物等）総合調査報告書（大阪府教育委員会、2007年3月）
- ・「建築工事概要」（大林組、1959年9月1日）
- ・「竹腰健造特集号」『建築と社会』（1959年1月号）
- ・竹腰健造『懐旧譜』（竹腰健造、1977年10月10日）

写真出所：*竹腰健造『懐旧譜』より、**筆者撮影



写真14 写真3 中央の北面の小窓、飾り格子は「人造石透明及浮影ブロック小叩き」仕上げ**



写真15 竹腰健造『懐旧譜』（筆者蔵）**

やまがた・まさあき



CCCフォーラム主催 第12回青年技術者交流会レポート

日時 2026年5月22日（金） 18:30~20:30

会場 Open Innovation Biotope “bee”（株式会社オカムラ 関西支社内）

司会 井上沙紀（オカムラ）・木全瑛二（竹中工務店）

発表者 今枝龍哉（梓設計）・五明遼平（日建設計）・吉村純哉（竹中工務店）・福永貴大（竹中工務店）

CCCフォーラムが主催する、青年技術者交流会は今回で12回目の開催となる。発表者は、第72回 青年技術者顕彰者である、今枝龍哉氏（梓設計）、五明遼平氏（日建設計）、吉村純哉氏（竹中工務店）、福永貴大氏（竹中工務店）が務め、各自の発表のあと意見交換を通じた交流会をおこなった。今回は設計・計画部門から1名、構造部門から1名、設備部門から2名の設計者による会となり、活発な議論が交わされた。



今枝氏からは、設計担当されたテクノ・ラボ大阪の中で、執務室を単に並べるだけのオフィスの空間ではなく、執務室間の共用部に余白を設けて、自然なコミュニケーションが生まれる場を提案されていた。それらの多様な空間づくりの中で、様々な現場打ちコンクリートならではの仕上げの実現へ挑むと共に、今枝氏が興味のある空間である「奥を感じる空間」は重層型の連続する空間と、参道型のようにうねるような空間の二つを定義されていた。テクノ・ラボ大阪ではこの二つの空間構成を設計の中へ混ぜ込んだ上で、長く連続する空間を操りながらコンクリートの変化を楽しめる空間を実現されていた。自らが素晴らしいと考える空間構成を体系的に分析し、設計に落とし込む姿勢は、良質な空間を探究する上で肝要な点として注目すると共に、実際の奥行と認知上の距離にずれを生む空間に更なる魅力を感じた。

五明氏からは、設計担当された大阪大学医学部附属病院ではNICU（新生児集中治療室）という特殊な環境で新しい空調設備の改善が求められ、新生児へ配慮した放射空調を提案された。その中でアルミ押出成形の放射パネルを開発し、より室内環境に配慮した新しい設備設計を実現されていた。また日建設計大阪オフィスのワークプレイス移転プロジェクトでは、積極的にABW（アクティビティベースドワーキング）を導入し、フロア毎に特徴を持たせる設えとしていた。設備的には改修した窓の利用を促すかという視点で、室内環境状態をランブ色で知らせる仕掛けを提案された。床フローリングに設置された吹出口では、最良な気流を供給するために床フローリングの孔をV字型に開けるディテールを実現しようと挑戦されていた。おしくも細部の孔の向

きは実現には至らなかったが、設備設計者として良質な環境実現のために細部にまで至るこだわりには感銘を受けた。

吉村氏からは、設計活動の中で構造の工夫がどのように建築や空間、使い方につながるかを意識しながら、無理のない美しいデザインが大切と考えられていた。コニカミノルタ高槻サイトでは建築コンセプトを表現したみせる架構ということで、初めて設備のことも含めて網羅的に考えながら、空間がどうなるかを咀嚼しながら進めることができるようになったとのこと。サントリー天然水北アルプス信濃の森工場では、環境との共生を物語として組立て、小さな森という建築をつくる思想から構造設計者として採用する材料を提案された。おにクルでは構造としては誰もが快適に利用できるデザインを目指し、免震構造を前提として安心感を内包するRC造のフラットスラブを提案された。そうした中でも使い手の幸せにつながることを目指し続けてきたが、実際は建築や構造が、誰のためのどのような幸せにつながっているのかを改めて考えるようになったとのこと。最後に設計者として坪井先生の有名な言葉にある「真の美は、構造的合理性の近傍にある」の「近傍」を、今後はしっかりと掴んでいきたいと話があった時、改めて設計者として大切なことを見極める視点を定義しながらも深掘する大切さを再認識させていただいた。

福永氏は、社内ジョブローテーションを通じて、設計と施工の経験を積み、設備設計業務にとどまらず、現場を含めた幅広い経験と資格を取得されてきた。設備設計者としては、機械・電気の両刀設計者として、長崎スタジアムシティの設備設計にも携わった。限定した範囲で避難を促す多段階鳴動方式を導入するとともに環境配慮にも取り組まれた。また時が経つにつれて建築を取り巻く環境は大きく変化している中で、設備設計者として時代の変化に対応できるよう、学び続ける姿勢を大切にされているように感じた。さらに、長く社会に残る作品づくりをしていきたいという考え方には、強い使命感とものづくりへの真摯な姿勢が感じられた。

後半の交流会では、意匠・構造・設備と異なる立場の設計者間で活発な対話がおこなわれた。意匠設計者からの問いであった設備設計の醍醐味や熱量を注ぐポイントについては、五明氏はディテール、福永氏はシステムとそれぞれ異なる視点から魅力を語り、設計者ごとの個性が感じられる内容であった。加えて意匠設計者から設備設計者へ「建築そのものを好きでいてほしい」「意匠性に優れた設備提案をしてほしい」といった期待が込められた。また働き方や共働り子育てに関する不安も交えた質問もあがったが、本田事業委員長からの温かい激励の言葉により参加者一同が安堵した様子であった。



今回、発表いただいた方々は意匠・構造・設備の中でも設計事務所やゼネコンなど、それぞれ異なる立場であるが、よりよい建築をつくりたいという想いや日々抱える悩みには共通する部分が多いことが感じられる会となった。また会場は輪を囲む形式で構成されており、より一体感のある素晴らしい交流会となった。

[片岡政規/安井建築設計事務所]

五明遼平（いつあき りょうへい）株式会社日健設計/設備部門



交流会でのプレゼンテーションは、各発表者のこれまでのキャリアを振り返った業績に留まらず、プライベートで訪れた建物の印象や自邸の設計段階、土地の選び方など、多彩なエピソードも交えた内容で、どれも興味深く聞かせていただきました。どの参加者も仕事で割り切るのではなく、ON/OFFの両面を通して「建築を楽しむ」姿勢が、自然とトークから滲み出ているように感じました。私自身も設備が関わるディテールに焦点を当てた発表で当初は若干不安があったものの、座談会では参加者の皆様に話題として発展させていただき、面白い切り口として受け止めていただけたようで大変満足しています。また、同じ設備職の福永さんは、機械設備・電気設備の二刀流で活躍されているなど、大変刺激を受けました。入社1年目の方からの質問などを通して、10年に満たないキャリアではありますが、あらためて自身の成長を振り返る機会となりました。さらには、育児と仕事の両立などライフステージの変化に関する話題にも広がり、分野や立場を越えた率直な交流ができました。貴重な機会をいただき、関係者の皆様に感謝申し上げます。

吉村純哉（よしむら じゅんや）株式会社 竹中工務店/構造部門

私の発表テーマは「プロジェクトを通して考えたこと」とし、これまで一貫して目指してきた姿勢や思考について紹介しました。魅せる構造やストーリー、個に寄り添うことや多様性の包摂といったテーマをプロジェクトごとに設定しつつ、無理のない美しい構造が建築や空



間、使われ方に好影響を与える可能性を探ってきた事例をまとめました。本発表は、自身の取り組みを振り返り整理するとともに、今後さらに深めていくべき視点を再認識する機会となりました。建築は人の営みに関わるものであり、仕事と生活は完全には切り離せないとの思いから、今回はプライベートも交えてお話ししました。自邸の設計に対する想いや仕事と育児の両立に向けた工夫にも触れたところ、温かいご意見をいただきました。主催者の方々の様々な工夫により、同年代の設計者とも闊達な議論を通じて貴重な交流ができ、有意義な時間となりました。ありがとうございました。

福永貴大（ふくなが たかひろ）株式会社竹中工務店/設備部門



「設備技術者としての過去と未来」というテーマで発表させていただきました。青年技術者顕彰の応募に続き、自身の12年間の取り組みを振り返る貴重な機会となりました。長崎スタジアムシティでは、全館避難安全検証、多段階鳴動方式、コージェネレーションシステムの導入、雨水・厨房除害排水の雑用水利用など、安全性と環境配慮を両立させた取り組みについて説明させていただきました。

入社から12年間、省エネ法、BIM、脱炭素化など社会における大きな変化を経験しましたが、これからも加速度的に変化するため、設備技術者として常に学び続ける必要があります。

同時に、建物は50年、100年と使い続けられることを意識し、未来を見据えたプロジェクト推進に取り組んでいきたいと考えております。

今回の交流会を通じて、同世代の技術者との対話から、建築業を通じてより良い社会を実現したいという思いが一層強くなりました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



奥左から鈴木氏、井上委員、片岡副委員長、鎌田委員、木全副委員長、本田委員、滝澤委員長
前左から岡崎委員、屋氏、五明氏、吉村氏、今枝氏、福永氏、本田事業委員長

「建築と社会」アーカイブの検索機能が使いやすくなりました！

(検索方法は以下の手順になります)

※アーカイブ保存用のPDFはカラーです。

1. 協会トップページから「ログインボタン」を押下します



2. 会員ID、パスワードを入力しログインします

(ご自身のID、PWが分からない場合は事務局までお問い合わせください)



3. 会員ページ中ほどの「検索ボックス」に検索キーワードを入力し、発行の「新しい順」か「古い順」を選択し検索ボタンを押下します



4. 検索結果一覧の中から、閲覧したい記事の「表示ボタン」を押下します



5. 検索結果が表示されます(スクロールして閲覧できます)



◆便利機能

「CTL+F」キーを同時に押下し、検索ワードを入れると当該ワードがハンティングし表示されます



◆検索結果がうまく表示されない場合

ページナンバーカラムへ検索ページ番号を直接入力し結果を表示することができます



暑中お見舞申し上げます

令和8年盛夏

大 松 敦

日 建 設 計
代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区瓦町3-6-5 TEL (06) 6203-2361

勝 山 太 郎

日 建 設 計
取締役常務執行役員
大阪オフィス代表

〒541-8528 大阪市中央区瓦町3-6-5 TEL (06) 6203-2361

木 村 博 規

西松建設 株式会社 西日本支社
常務執行役員支社長

〒540-8515 大阪市中央区平野町4-2-3 TEL (06) 6942-1173

栗 原 祥 浩

栗原工業 株式会社
代表取締役社長

〒530-0054 大阪市北区南森町1-4-24 TEL (06) 4709-2300

近 藤 康 之

不二熱学工業 株式会社
代表取締役社長

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1 TEL (06) 6261-4321

指 田 孝太郎

日 建 設 計
顧問

〒541-8528 大阪市中央区瓦町3-6-5 TEL (06) 6203-2361

佐 野 吉 彦

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長 CEO

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL (06) 6943-1371代

鳥 居 久 人

株式会社 昭和設計
代表取締役社長

〒531-0072 大阪市北区豊崎4-12-10 TEL (06) 7174-8787

永 嶋 元 博

東リ 株式会社
代表取締役社長

〒664-8610 兵庫県伊丹市東有岡5-125 TEL (06) 6492-1331

山 中 康 宏

ダイゲン株式会社
代表取締役社長

〒550-8520 大阪市西区江戸堀1-9-25 TEL (06) 6447-8000

米 井 寛

株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長

〒541-0043 大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL (06) 6202-0391

鷲 田 勇 二

株式会社 きんでん
経営執行役員常務 技術本部長

〒531-8550 大阪市北区本庄東2-3-41 TEL (06) 6375-6229

暑中お見舞申し上げます

令和8年盛夏

設計事務所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所

相談役 森口雅文

代表取締役社長 小田義彦

常務取締役 富田昌志

本社・名古屋事務所・エルイー創造研究室

〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 (桜通ビル) TEL (052) 222-8611

東京事務所

〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12 (聖公会神田ビル) TEL (03) 5294-6211

東畑建築事務所

TOHATA ARCHITECTS & ENGINEERS, INC.

代表取締役社長

米井 寛

大阪府中央区高麗橋2-6-10 TEL (06)6202-0391

東京 / 大阪 / 名古屋 / 九州

<https://www.tohata.co.jp>

NIKKEN

EXPERIENCE, INTEGRATED

日建設計

代表取締役社長 大松 敦

東京都千代田区飯田橋2-18-3

Tel. 03-5226-3030

大阪府中央区瓦町3-6-5

Tel. 06-6203-2361

<https://www.nikken.jp>

YASUI
ARCHITECTS

人やまちを元気にする

安井建築設計事務所

代表取締役社長 CEO 佐野吉彦



MAKE BEYOND つくるを拓く

株式会社 大林組

代表取締役社長 兼 CEO 佐藤 俊美

本社 東京都港区港南 2-15-2 TEL 03 (5769) 1111

専務執行役員 竹中 秀文

大阪本店長

大阪本店 大阪市中央区北浜 3-5-29 TEL 06 (7632) 8700

子どもたちに誇れるしごとを。



清水建設株式会社

取締役社長 新村 達也

常務執行役員関西支店長 坂尾 彰信

本社 〒104-8370 東京都中央区京橋二丁目16番1号 Tel. 03 (3561) 1111

関西支店 〒541-8520 大阪市中央区本町三丁目5番7号 御堂筋本町ビル Tel. 06 (6263) 2800

地図に残る仕事。®



大成建設株式会社

For a Lively World

代表取締役社長 相川 善郎

常務執行役員関西支店長 足立 憲治

本社 東京都新宿区西新宿 1-25-1

電話 03-3348-1111

関西支店 大阪市中央区南船場 1-14-10

電話 06-6265-4504

<https://www.taisei.co.jp/>



高松建設

TakaMatsu

代表取締役社長 高松 孝年

本社・大阪本店 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1丁目2番3号 TEL 06-6307-8101

東京本店 〒108-0014 東京都港区芝4丁目8番2号 TEL 03-3455-8101

想いをかたちに 未来へつなぐ



TAKENAKA

竹中工務店 取締役社長 丁野成人

〒541-0053 大阪市中央区本町 4-1-13 tel: 06-6252-1201

〒136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 tel: 03-6810-5000



戸田建設株式会社

代表取締役社長 大谷 清介 執行役員大阪支店長 砥石 彰

本社 〒104-0031 東京都中央区京橋1-7-1

TEL 東京03(3535)1354

大阪支店 〒530-0004 大阪市北区堂島浜1-1-27

TEL 大阪06(6676)8232

暑中お見舞申し上げます

令和8年盛夏

建材・学校・団体有志



夢のレンガを積みあげよう

都窯業株式会社

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-8-1 大江ビル
Tel (06)6367-0389 Fax (06)6367-5567
工房 三重県伊賀市西山上垣内 2913-1 伊州窯 伊州観白樓
<http://www.miyakoyogyo.com> E-mail: info@miyakoyogyo.com



大阪工業技術専門学校

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

Ⅱ部建築学科(夜間) ※講義科目はオンライン・登校選択制授業

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目8番24号 ☎ 0120-0910-19 🌐 <https://www.oct.ac.jp/> Tel. 06-6352-0091



一般社団法人 日本建築材料協会

会 長 松 本 将

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋ビル4階 TEL(06)6443-0345 FAX(06)6443-0348
<https://www.kenzai.or.jp/>





一般社団法人 日本建築協会

会 長 米 井 寛

〒540-6591 大阪府中央区大手前1-7-31 TEL (06) 6946-6981



一般社団法人 日本建築協会京都支部

支 部 長 矢 ヶ 崎 善 太 郎

〒603-8158 京都市北区紫野宮西町18 ライトビル2F-ND (メールアドレス) nk.kyokai.kyoto@gmail.com



一般社団法人 日本建築協会中国支部

支 部 長 川 上 善 嗣

〒732-0805 広島市中区十日市町1-1-9 (相生通り鷹匠ビル4階山陽工業(株)内) TEL (082) 232-6471



一般社団法人 日本建築協会東海支部

支 部 長 塩 田 哲 也

〒460-0008 名古屋市中区栄2-10-19 (名古屋商工会議所ビル9階) TEL (052) 990-6410



個人会員の皆さまへ

ご応募お待ちしております。招待券プレゼント！

応募フォームは協会ホームページの会員専用ページ内にあります。

応募期限は毎月20日、厳正に抽選して当選者を決定します。(初回申込者を優先いたします。)

① 版画家レンブラント 5組 挑戦、継承、インパクト

レンブラントのエッチングにおける挑戦



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《百グルデン版画》1649年頃
エッチング、ドライポイント、ビュラン／和紙 国立西洋美術館

本展では、レンブラント・ハウス美術館と国立西洋美術館の2つのコレクションを組み合わせ、国内の美術館、大学図書館及び海外の個人コレクターから拝借した作品や書籍も加え、レンブラントのエッチングと、それが同時代及び続く時代に与えた影響を見ていく。

「油彩以上に色彩豊か」(詩人・批評家テオフィル・ゴーティエ)とも言わしめた、レンブラント版画の魅力をたっぷり紹介。版画表現の可能性を拓いたレンブラントの「挑戦」、ゴヤ、ホイッスラー、ルドン、マティス、ピカソ…レンブラントに憧れた巨匠たちの作品も紹介。版画史におけるレンブラントの「インパクト」にも注目した大規模展覧会は国内初。

期 間 7月7日(火)～9月23日(水・祝)

9:30～17:30 ※金・土曜日は20:00まで

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、7/21(火)

※7/20(月・祝)、8/10、9/21(月・祝)は開館

観 覧 料 一般2,200円、大学生1,300円、高校生1,000円

*大学生・高校生は、入館の際に学生証を提示

*中学生以下、障害者手帳所持の方とその付添者1名は無料

*入館の際に学生証等の年齢の確認できるもの、障害者手帳等を提示

対象となる手帳：身体障害者手帳・療育手帳・

精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳

会 場 国立西洋美術館 企画展示室

東京都台東区上野公園7-7

TEL.050-5541-8600 (ハローダイヤル)



② フォンタネージ 5組 ーイタリアの光・心の風景

日本イタリア国交樹立160周年記念・フォンタネージ来日150周年記念



アントニオ・フォンタネージ《朝》1855-1858年
トリノ市立近現代美術館 画像提供：トリノ博物館財団

ジュネーヴの都市風景を巧みに表した石版画家。パリのサロンに作品を発表し、当地でミレーやコローを研究するモダンな画家。ロンドンに滞在して版画を制作しつつ、ターナーやコンスタブルを吸収する旅人。フィレンツェの若手画家たちに信頼されるペテラン。南仏の田舎道を友人と歩く風景画家。トリノでも東京でも教え子から慕われる教育者。これらはすべて、「アントニオ・フォンタネージ」というひとりの人間の側面だ。

何度も同じ主題を取り上げつつ、理想の風景を絵画にしようとする姿勢、都市の忙しさや農村の労働に対する真摯な眼差し、そして何よりも、光と自然に対する貪欲な関心——フォンタネージを全く知らない人にとってはもちろん、名前を聞いたことがある人にとっても新しい。そんな風景画の旅が、いま、幕を開ける。

期 間 7月18日(土)～10月4日(日)

10:00～18:00 ※金曜日は20:00まで

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、7/21(火)、9/24(木)

※7/20(月・祝)、9/21(月・祝)は開館

観 覧 料 一般2,000円、大学生1,300円

*高校生以下・18歳未満は無料

*障害者手帳所持の方とその付添者1名は無料

*ひとり親家庭の世帯員の方は無料

*入館時、学生証、年齢の確認ができるもの、

障害者手帳等の提示が必要

会 場 京都国立近代美術館

京都市左京区岡崎円勝寺町26-1

TEL.075-761-4111



会員IDやパスワードがご不明な場合は、日本建築協会総務課
(soumu@aaj.or.jp) までお問合せください。
招待券は当協会より郵送でお届けいたします。
当選発表は招待券の発送をもってかえさせていただきます。

information

③ ジブリパーク展 2組

来てみなけりゃ、わからない。



ハク竜のイメージ（『千と千尋の神隠し』より）
© 2001 Hayao Miyazaki/Studio Ghibli, NDDTM

スタジオジブリ作品の世界を表現した公園施設「ジブリパーク」。
その楽しさをぎゅっと凝縮した展覧会が、「ジブリパーク展」だ。

ジブリパークを訪れたことがある方も、これからの楽しみにと
っておきたい方も。スタジオジブリの世界に迷い込み、遊びつ
くすなかで得られる心に残る“あなただけのワクワク”を、ぜひ会
場で見つけて、受け取っていただきたい。

大人も子どもも楽しめる仕掛けがいっぱい詰まった「小さなジ
ブリパーク」に加え、ジブリパークの「ジブリの大倉庫」で好評
を博した2つの企画展示、『『食べるを描く。』増補改訂版』と「ジ
ブリのなりきり名場面展」。さらに、本展覧会で初公開となる『千
と千尋の神隠し』のハク竜の立体造型物も登場。大阪の夏はこの
展覧会でお楽しみください。

期 間 7月18日(土)～9月26日(土) ※会期中無休
9:00～17:00 ※入場は閉場の30分前まで
観 覧 料 一般1,900円、中学生・高校生1,600円、4歳～小学生
1,000円、3歳以下無料（付き添い者が必要）
*日時指定制。チケットの事前購入が必要。
*会場でのチケット販売なし。
*中学生・高校生料金適用には学生証提示が必要
*各種障がい者手帳を有する方1名に対して「介助
者1名に限り一般料金の半額」で入場可。
障がい者本人は、通常の入場券が必要。
*「介助者割引」で入場の方は、会場入場時に、障が
い者本人の「身体障がい者手帳」「療育手帳」「精
神障がい者保健福祉手帳」のいずれか原本または
ミライID提示が必要。

会 場 大阪南港ATCギャラリー
大阪市住之江区南港北2-1-10

TEL.06-6136-5766



#ジブリパーク#スタジオジブリ#思い出のマーニー#紅の豚

④ 特別展「ゴールドマンコレクション 河鍋暁斎の世界」 2組

踊れ、遊べ、さあ、宴の始まりじゃ。



河鍋暁斎《動物の曲芸》明治4～22（1871-89）年 紙本着彩
イスラエル・ゴールドマン・コレクション Photo: Ken Adlard

幕末・明治期に活躍し、今なお国内外で高い人気を誇る絵師・
河鍋暁斎（1831-89）。手がけた画題は神仏画から戯画、動物画、
妖怪画にいたるまで、多岐に渡り、そのいずれの作品にも卓越し
た画技と機知に富んだ発想が見られる。

本展では、世界屈指の暁斎コレクターである、イギリス在住の
イスラエル・ゴールドマン氏の所蔵作品から約110点を厳選し、コ
レクションを代表する肉筆画と版画の名品、および国内の展覧会
で初公開となる優品の数々を紹介する。

期 間 7月11日(土)～9月23日(水・祝)
前期展示 7/11(土)～8/16(日)
後期展示 8/18(土)～9/23(水・祝)
9:30～17:30 ※金・土曜日は20時まで
※入場は閉館の30分前まで
休 館 日 月曜日、7/21(火)
※7/20(祝)、9/21(祝)は開館
観 覧 料 一般2,000円、大学生1,000円
*高校生以下無料
*大学生および高校生以下の方は、学生証・生徒手帳
等の提示が必要
*神戸市在住で満65歳以上の方は、博物館券売窓口
にて証明書の提示で当日一般料金が半額
*障害のある方は障害者手帳等の提示で無料

会 場 神戸市立博物館
神戸市中央区京町24番地

TEL.078-391-0035



#河鍋暁斎#神仏画・戯画・動物画・妖怪画#初出品・初公開

常任理事会

第2回常任理事会

5月25日(月) 17:30~19:50

協会会議室&WEB

出席者 指田会長ほか11名

議事 (1)~(4) 総会資料案
(5) 本部の委員会予算
(6) 役員の改選状況
(7) 理事の所掌について
(8) 「建築と社会」寄贈先の選別について
(9) 新入会員ガイダンスについて
(10) 「建築と社会を考える」執筆者候補について

編集企画委員会

第2回編集企画委員会

5月12日(火) 18:00~19:00

WEB

出席者 三宗委員長ほか10名

議事 (1) 6月号 片岡安賞・状況報告
(2) 7月号 青年技術者・状況報告
(3) 8月号 建築デザイン分科会・状況報告
(4) 9月号 法令分科会・状況報告
(5) その他 新入会員ガイダンス、万博記事のまとめについて

第2回建築デザイン分科会

5月14日(木) 18:00~19:00

WEB

出席者 杉江幹事ほか7名

議事 (1) 8月号特集企画について
(2) その他

第1回空間デザイン分科会

5月18日(月) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 黒柳幹事ほか8名

議事 (1) 委員の交代について
(2) 当分科会活動について
(3) その他

第2回構造分科会

5月20日(水) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 吉村幹事ほか7名

議事 (1) 新委員挨拶
(2) 構造の頁について
(3) 新入会員ガイダンスのスライドについて
(4) 11月号特集について

第2回施工材料分科会

5月21日(木) 16:00~18:00

協会会議室&WEB

出席者 藤丸幹事ほか6名

議事 (1) 編集企画委員会の報告
(2) 10月号特集について
(3) 編集企画委員会出席について

第2回法令分科会

5月11日(月) 16:00~17:00

協会会議室&WEB

出席者 時見幹事ほか6名

議事 (1) 9月号について
(2) 新入会員ガイダンス資料について
(3) 法令コーナーについて

第2回ひと・まち・建築小委員会

5月28日(木) 19:00~20:00

協会会議室&WEB

出席者 澤田小委員長ほか7名

議事 (1) projectの掲載状況、予定
(2) gallery掲載報告、予定
(3) その他 2月号特集タイトルについて

事業委員会

第2回情報見学小委員会

5月14日(木) 18:00~19:00

協会会議室&WEB

出席者 本田事業委員長、奥村小委員長ほか16名

議事 (1) 本年度の事業について
(2) 茶室見学会
(3) その他

第2回CCCフォーラム

5月18日(月) 19:00~20:00

WEB

出席者 本田事業委員長、滝澤小委員長ほか6名

議事 (1) 第12回青年技術者交流会(5月22日)に向けた準備
(2) CCCフォーラム ロゴデザインの決定
(3) その他

出版委員会

第2回出版委員会

5月26日(火) 17:00~18:20

協会会議室&WEB

出席者 中尾委員長ほか5名

議事 (1) 既刊書籍経過報告
(2) 制作進行中の書籍
(3) セミナー等について
(4) 出版に関する座談会について
(5) 総会用資料案について
(6) 新入会員ガイダンスについて
(7) 新規出版企画について

未来創生プロジェクト

第2回建築次世代委員会

5月22日(金) 18:30~19:30

協会会議室&WEB

出席者 菅原小委員長ほか3名

議事 (1) リアル見学会
(2) 学生交流・広報企画
(3) その他

第2回2040委員会

5月25日(月) 19:30~21:00

協会会議室&WEB

出席者 吉田リーダーほか9名

議事 (1) 活動報告の掲載について
(2) 今後の活動について
(3) その他

第2回U-35委員会

5月12日(火) 19:30~22:00

協会会議室&WEB

出席者 三井リーダーほか11名

議事 (1) 新メンバー紹介
(2) 今後の活動について
(3) その他

審査会

第73回青年技術者顕彰選考委員会

5月13日(水) 18:00~20:00

協会会議室

出席者 三宗委員長ほか10名

議事 (1) 第73回青年技術者・選考
(2) 入選者発表・審査講評について
(3) 選考結果の通知
(4) 表彰式、懇親会について

見学会

第12回学生のための現場見学会(建築次世代委員会主催)

大阪・関西万博のバビリオン解体工事、日本館見学会

5月25日(月)

A班9:00~12:00、B班13:30~16:30

見学先: 大阪・関西万博開催跡地

講師: 河地建設所長/清水建設(大屋根リング)、及川工事長/清水建設(日本館)

参加者: 83名(A班41名、B班42名)

出席者: 指田会長、中村未来創生委員長ほか4名

講演会

第12回 青年技術者交流会(CCCフォーラム主催)

5月22日(金) 18:30~20:30

会場: Open Innovation Biotope“bee”オカムラ 関西支社内&WEB

発表者: 今枝龍哉(梓設計)、吉村純哉(竹中工務店)、五明達平(日建設計)、福永貴大(竹中工務店)

参加者: 本田事業委員長、滝澤小委員長ほか14名(会場14名、WEB2名)

司会: CCCフォーラム(正)井上委員、(副)木全副委員長

内容: 会場とWEBにて発表者のプレゼンと質疑応答、参加青年技術者による交流懇親会終了後 懇親会実施 参加者13名

編集企画委員会(2026年5月31日現在)

副会長(編集担当) 〈環境分科会〉

川合 智明 △橋本 直樹

理事(編集担当) 大橋 巧

木場 将雄 北野 勝也

佐藤 榮一 寺井 千佳

中尾 勝悦 仲村 憲一

中原 岳夫 浜本 誠治

西 博康 梶井 貴廣

橋寺 知子 齋藤 悠輔

松島 茂樹 持留 崇志

◎三宗 知之 松本 健

吉村 英祐 〈施工材料分科会〉

△藤丸 啓一

今井 信之

桑原 悠樹 上原 秀介

古谷 隆洋 門野 陽

河合 智寛

能瀬 直樹

南野 貴洋

森田 健

吉田 正友

〈法令分科会〉

△時見 正人

日下部美嘉

河野 学

吉田 悠起

渡邊 優人

■ひとまち建築小委員会

▲澤田 純一

浅田 翔大

上田 寛彬

江原信一郎

加嶋 章博

片岡 政規

貴志 泰正

佐伯 先史

榎野 淳司

豊田 充広

平野 尉仁

増田 敬彦

山本 和宏

(順不同)

◎委員長

▲小委員会委員長

△幹事・小委員会

副委員長

△黒柳 亮

東 実千代

西濱 由美

藤枝 大樹

古賀 涼花

佐々木琉偉

清水 香澄

宗田 菜々

△吉村 純哉

古島 正博

榊原 啓太

瀧野 敦夫

西田 哲朗

多田 全希

萩原 学

水島 靖典

薮田 智裕

山下 真輝

山本 佳明

印刷 2026年6月24日

発行 2026年7月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 榊中島弘文堂印刷所

定価 1390円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

協会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。
1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 中内・井筒

TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 E-mail：koukoku@aj.or.jp

◆ 大林組

つくるを、
つくり変えろ。

MAKE
BEYOND
つくるを拓く